

勇者エリちゃん(憑依)  
勇者の旅へ出ます。

小指の爪手入れ師

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

エリちゃんが若干ヘタレになったり清姫と仲が良すぎるだけのお話。

憑依が苦手だったり、ありのままのエリちゃんが好きな人はブラウザバックを推奨いたします。

※皆様のご要望も有り短編から連載にシフト致しました。特に変わることもありませんが今後どうぞ宜しくお願いいたします。

# 目次

最初からクライマックス	1
切実に帰りたい！	15
我が名はエリザベート・バートリー！！	29
転生者はモテる、はっきりわかんだね	44
脱ぐなって言ってるんだろ（血涙）	57
やればいいんでしょ!?	71
失念していた！	85
励まされたが嵌められた！	99
勇者の必須スキルはトラブル体質であ	
る。	112
愛ドル♡ドラゴンズ	125
諦めは時に試合開始になる	139
ジョブチェンジは必要だろうか？	153
反英雄、半英雄、大英雄	168
常識をかなぐり捨てて勇者になれ（レッツフリーダム）！	182
他力本願は勇者に有るまじき行為だろうか？	197
胸と胸と胸と筋肉	211
不遇な少女達を保護せよ！	223
これは確実にポジションを間違えてい	

る。 236

私は勇者であって主人公では無い——で  
ある筈なのだ。 249

ギャグ時空が世界の理を見敵必殺（さ—  
ちあんどですとろい） 263

地元民に愛される勇者がはにかむ姿を見  
て尊死する狂愛士の構図を斜めから傍観  
する同士諸君の図 280

メカエリ軍団始動 293

私は私らしく世界を救う 306

ドラシスのデビュー曲は『鋼鉄の鮮血姫』  
319

ドリルを回せ 歌響かせ 敵を殲滅せよ

333

神王（ファラオ）に会って一番欲するもの  
は何？ ——ただし自分がブレエリちゃ

んだとする！ 375

勇者は騎士じゃないよ!! 389

もしも運転は必要だけど、殺るべきだと  
思った時は既に轢いてるものだ！

403

大丈夫（でえじょうぶ）だエリクサーがあ  
る！ いざって時はかぼちゃ聖杯で生き  
けえられる！ 417

# 最初からクライマックス

? 館と言うか、お城と言うか、とにかく悪趣味な場所に私は居る。アレだ、転生だ。三次元から二次元へ、目眩く大冒険、チーレムよろしく神様転生だよ。

? 好きでしょ? そういうの…

?

? 私? 私はね—

—クソくらえだ!!

? いきなり、「You いいネ! 転生しちゃおうYo!!」って言われて返事もなくこの謎空間に叩き込まれたんだぜ? 私はただ種火周回に没頭してただけなのに…

? 極めつけはこの手に持った紙切れだ。内容は—

『You中々のイケ魂じゃん!? 最っ高にcoolな展開期待してっから転生しちゃいなYo! 大丈夫大丈夫、君が没頭してたFGOだからネ。問題ないし! ああYouのbodyはspecialだから(以下略)』

? 私は思わず紙切れをビリビリに破り暖炉に投げ捨てた。焦げた匂いが漂い少しスツキリした。そして、無常にも紙切れはテープを巻き戻したかのように紙吹雪に、紙吹雪から元の紙切れへと戻っていく。

「力の無駄使いか!？」

? 紙切れ一つに巻き戻しまで使うか? 馬鹿じゃないの!?! そして私の声なんか甲高いんだけど!?!

? 情報量の多さに思わず目を回す。通常な思考は徐々に輪郭を失いつつコミのキレだけを上昇させる。思考回路はショート寸前、叩き込まれた情報の整理以外作業が出来ない。

? 予期もしない出来事に体勢を崩した。近くのドレッサーに手を付き持ち直しつつ顔色はどうかと鏡を見る。

「え?」

? 私はマヌケな声が出たなと思った。だがそれも仕方ないだろう…

? 私の姿は以前とは異なっていた。その姿は、何度も出てきて恥ずかしくないの? でお馴染みエリザベート・バートリーだった。それもセイバークラス、所謂勇者エリちゃんである。



て呼び出さないでよね！」

？ ベッドから引きずり下ろされ床に這いつくばるエリちゃんの図、コアなファンは喜ぶと思うが私は嬉しくない。床を削りながら後方に謎引力で引っ張られ私ピンチ!!

「頑張れエリザ！ファイトだエリザ!! 私ならいけるこの召喚を乗り切れれば勝てるんだから。ああ、もう…ダメ——」

？ 嗚呼、勇者エリザよ吸い込まれてしまうとは情けない。



？ 眩い光へ変換された後、私は洋風建築並ぶ広場にて現界した。どうやら私は為す術もなく召喚されてしまった様だ。

「それで、私の様な不運なサーヴァントを引き当てた。これまた不運なマスターは誰かしら?？」

？ 周りを見回しても居ない…まあ当然だ。FGOにおいて足元に雪花の盾がない召喚なんて野良だと相場が決まっている。もしそれでマスターがいた場合は味方である賢王か敵キャラたちに扱き使われる事になる。

？ だが、幸か不幸かマスターとの繋がりはなく魔力だけが流れ込んでくるのが分



かる。

「ならぐだ男かぐだ子に聖杯回収を任せて私は隠れる。私ったら天才ね！そうと決まったら町を出て—」

「あら、似た匂いを感じたのですが、やっぱり同じサーヴァントでしたのね。…痴女？」  
？ 振り返ればこの風景に溶け込めていない和服を着込んだ美少女（13歳）がいた。どう見ても清姫です本当にありがとうございます。そして帰ってください！こんなことをしているうちに主人公勢が来たら私の計画が狂うわ！

「痴女とは随分な言い様じゃない」

「…ご自身の装いをよく見たらどうですか？」

「んっ」

？ 私は自分の衣服を見た。いや正しくは服なんて着ていなかった。まるで八十年代に回帰したかのような鎧、俗に言うビキニアーマー。着ているのではなく着いている、しかも胸はパカパカと緩くなる始末。これで羞恥心を感じるなどという方が不可能である。

？ 私は蹲り、白いマントで身体を隠そうと躍起になる。これは恥ずかしい。かなり恥ずかしい。

「何この格好!? デザイナーは何を考えているのよ！ モラルがなってない、そもそもこん

なにユルユルで一体何を守るっていうのよ!? 何も守ってないじゃない!!!」

「ええ……で、ではそれは貴女が進んで着てい……着いているわけでは無いとそういう事でいいんですか?」

「当然じゃない!? こんなもの着たが……着けたがるのは本当の痴女だけよ!」

「まあ嘘はついてないと誰が見ても分かりますね」

? 当然だ! 私はこの装備に不満を漏らさない程奇抜な発想をしていない。私の霊基でさえ軽く身震いするほどだ。いやこの身震いの意味は私でもよく分らないが……

「まあいいわ。霊体化すれば人の目に晒される訳では無いから。第一目標を普通の衣服の製作として今はここを離れないと……それじゃあね和服の人」

? 私は早急にこの場を後にするべく歩き出す。この嘘絶対殺すウーマンに関わっていたら色々手遅れになりかねない。

? 町を出るため門を潜った辺りで背後に気配を感じた。振り返ってみれば目の前に顔があった。

「ホラーかッ!?!」

「あら酷い。私はただ後ろを付いて来ただけなのに」

? いやそれ普通にストーカーなんじゃ……

「いやなぜ?」

「自己紹介」

「はい？」

「ですから自己紹介です。ここであつたのも何かの縁ですし……私は清姫と言います。貴女のお名前は？」

「自己紹介、自己紹介ねえ？ 私は一体誰なのか最早わからない。過去の私は既に此処に存在しないし現在私が名乗る名前と言えは……」

「エリザベート・バートリーよ。よろしくね清姫……それじゃあね」

「そうエリザベート安珍と言うのですね……嗚呼やっぱり」

「……この意味を理解したくない悪寒から逃れるべく私は走り出す。」

「やっぱり結ばれる運命でしたのね。嗚呼安珍様ア！」

「？ 残念エリザは回り込まれてしまった。狂った音程で声を発し乱れる清姫。押しではいけないスイッチを押すだけに留まらず貫いてしまった様だ。どう見ても狂化EXが仕事をしてしまつている。」

「安珍様安珍様エリザベート安珍様安珍様アア！」

「ルビが可笑しい！ 止めて止めなさいってば！」

「？ 清姫はチロチロと舌を鳴らし時々火花を零している。そしてその白魚の様に綺麗な手を私の頬へ。」

「ちよっ!? 待て待てえ、本当に待って。私は安珍じゃないから!!」

? 逃げようと身を振るが腰をガツチリホールドされてしまった。服が無い分清姫の体温が直で感じられる。熱い、とても熱い。吐き出す吐息もまた熱い。

「ええ、ええ分かかっておりますとも清姫にお任せ下さい」

? そう言つて更に顔を近付けてくる。駄目だこいつ…早くなんとかしないと…

「落ち着いて…」

? 悲痛な声が木霊する。だが清姫の耳には届かない。盲目的に安珍を求めたからではない、轟音に掻き消されたからだ。

「新しいサーヴァントが召喚されたから私直々に始末にと思つて来て見れば。何? 仲間割れエ? なんて愚かで無様なのかしら!」

? 声は真上から、周りは素手に爆炎と共に瓦礫へと姿を変えていた。上に顔を向ければ竜を駆る魔女の姿があつた。その名はジャンヌ・ダルク、その反転<sup>オルタ</sup>。青髭のダンナの欲ぼ…理想を詰め込んだ聖処女である。

? そしてこの特異点の渦の中心と思いきや違う系ボスだ。

「(イ)……………絶対に……………」

? 清姫は何やらポツポツと言葉を零している。先程から悪寒が止まらない。寒い格好なのに更に寒くなる。逆に、今も尚燃え続ける炎が今はずっと尊く感じる。

「え？何そこの白いの。何か言いたげじゃない？死に際の恨み言くらい聞いてあげても良くてよ」

「ではお言葉に甘えまして…」

？清姫は朗らかな笑顔で、光の消失した瞳を邪ンヌへ向け、底冷えする様な声で、大胆に言い放った。

「私たちの秘め事を邪魔した事、万死に値します。潔くこの世から去ね、この匹婦」

？徐々に清姫の角が根元から黒く染まっていく。それに呼応したように服をも染まっていく。

「…そう、なら死になさい」

？邪ンヌはその手に持った旗を振り下ろす。そうすれば何処からともなくワイパーンが大群をなして召喚された。

「私、まだ何も言つて無いんだけど!？」

？そうよ、私まだ声の一つも挙げてないわ

「大丈夫ですわ。私が私たちの往く道を切り開きます」

？あらやだ惚れそう…つて言ってる場合じゃない!？」

？私はすぐさま名剣エイティーンと名盾レトロニアを取り出し構える。この様な動作は情報の一握りにあつた上、実戦が伴っていないものにも関わらずまるで身体が覚えて

いるとでも言うように対応出来ていた。

? 清姫は既にワイバーンへと炎弾を放っていた。ワイバーンに炎が直撃する度に墜ちていく。

「とお!!」

?

? 剣を近寄って来たワイバーンに切りつけなければ熱したナイフをバターに入れた様にワイバーンの首が胴体から泣き別れした。

「弱ッ!」

? どうやら無意識のうちに魔力放出（勇氣）と何故か使える魔力放出（かぼちや）を使用していたようだ。私器用すぎ!?

? 斬って斬って斬って斬る。そらそら牙を落とせワイバーン共! 使い道知らないけどね!!

「チツ、思った以上に足掻くじゃない。フツツ、なら一瞬で消し炭にしてあげるわ! 行きなさいファヴニール!!」

? 巨龍は咆哮を上げ、口に魔力の渦を閉じ込め発火する。

「いきなりブレス!」

? 開幕チャージMAXは悪い文明。逃げるつきやないわ!

「清姫撤退！二人じゃ無理よ」

？ 私は清姫を引き寄せ横抱きに、そしてファヴニールの正面から逸れるように全力疾走。

「これが、愛の逃避行!!」

「まだ暴走中なの!?!」

？ そもそもこの立ち位置はぐだーズの物だろうに。と思考がドツボにハマリそうになった時、途轍もない熱が真後ろを通過した。

「ひい!?何よアレ、勝てるわけじゃないじゃない。竜特攻持ってきなさい竜特攻!!」

？ 怖すぎ。あんなのに関わりたくないから隠れようとしていたのに、物語の進行はどこまで行っているのよ！強力なサーヴァント連れて来てんでしようね!!

——— 帰りたいよお……

「パク」

「あ…なんでこの状況で耳を甘噛みしてんのよ、馬鹿なのこのへビ女！こっちは必死に避けてるっていうのに!!」

「そこに耳があつたから。キリッ」

「私の耳は山か!?!」

「山ならここだと」

「ズラすなあ!!!」

? 後ろから熱を感じた。くぐもった咆哮を聞いた。黒い聖女の怒りが怒髪天を衝いた。

「乳繰り合ってんじゃないわよ!!」

「間に合わー」

? 受けるしかない。死ぬかもしれない…アレ? 死んだら座に帰れるんじゃないや…

? 傍らの清姫を見る。険しい顔で巨龍を見ていた。宝具の使用でも検討しているのかもしれない。だがファヴニールの方が格が高い。

? 守らなきゃ! 清姫だっとうちのカルデアで育ててた娘なんだから。死んだって大丈夫、座に帰るだけ。さあエリザ、盾を構えなさい! 女の子を守るのも勇者の本懐よ…知らんけど。

「ハアアアアア!!」

? 名盾レトロニアはブレスを受けるには小さ過ぎる。だから魔力放出で面積を広げ強化する。私が魔力を注ぐ度にかぼちやの妖精さんが仕事をしてくれている。かぼちやの要素が何処にあるとかは聞いてはいけない。

? ブレスが直撃、盾に損傷は見られず。だが徐々に後方へと追いやられる。内に流れる魔力も筋力へと回し、地に足先を掛ける。



「エリザベート……せめて私も……筋力はからつきしですが……」

「清姫アンタ、早く逃げなさいよ！私が抑えてるから」

「想い人を置いて逃げる乙女がおりまして？」

？清姫が私の身体を支える。

「さつき会ったばかりじゃない……バカね」

「女は好きな方の為ならば何処までもバカに成れる生き物ですことよ……」

？自虐だろうか。彼女は笑っていた。なんだろうこの最初からクライマックス状態は……

？そして弾けた。襲う浮遊感。そしてとても熱……くは案外無かった。言ってしまうば少し高めなお風呂程度でピリピリする感じに似てる。

？ああ、なんていうか――

?

——  
ぐだぐだが過ぎるわ

# 切実に帰りたいたい！

？頭に鈍い痛み。痛みによる覚醒。覚醒に次ぐ感覚の機敏化。鼻に甘い香りが流れ込み歪んだ視界を開けさせる。

「清……姫？一体何が、私はどうして背負われて……」

「起きましたか？なんと申しませうか……ええまあそうですね。見事に大敗しまして、その後はこの通りエリザベートの、いえこの際エリザと呼びませうか。エリザを背負いながらなんとか逃げ延びました。貴女の体重が軽かったことは幸運でしたね……役得役得」

？そう言つて上品に笑う彼女は何とも弱々しい。背負われている状態では分かりにくい。清姫の歩みは軸がよくブレる。明らかに限界が近い事を示唆しているだろう。

「下ろして、もう大丈夫だから。私思つたよりも丈夫みたいだし、気絶していたのもきつと頭でも強く打つたんだらうし。取り敢えずもう大丈夫だから」

？支えである手が緩められた。着地をしようと足を伸ばすが、地に足はつかなかった。清姫が前へと倒れ込んだからだ。どうにか清姫を潰さないように身を振る。清姫の横に倒れ込むように避け、直ぐに彼女を抱き抱えた。

「清姫!?ちよつとアンタ大丈夫!」

「ええ、ちよつと疲労が溜まっただけで…流石に長時間の変化は無理がありました。どうぞ、私など此処に捨て置いてください。放っておいたらきつと起きられるでしょう」  
「きつと魔力を著しく消費したのだろう、衰弱している。直ぐに対処しなければ間もなく消滅すると理解した。どんなに強がってもこの結果は覆らない。」

「このまま消滅しても彼女は文句の一つも漏らさないだろう。彼女がやりたいように行動した結果だから。彼女はその行いを否定する事はない。」

「けれど—」

「勝手に無茶して勝手に助けて、そして最後にはスッキリした顔してステージから退場?ふざけないでよ!私はあの時、貴女を守ろうと思つて助けたいつて思つて…捨て置いてなんて言わないでよ…:短い付き合いかしてはいけないけれど、私たち友達でしょ?」

「私としては友達以上恋人以上妻くらいが好ましいんですが」

「それは勘弁して!?!:もう、こういう時も茶化して。取り敢えず私はどんな手を使つたつて助けるからね!なんたつて私、勇者だから!!」

「?そう言つて私は清姫の唇に自分の唇を重ねた。別にやましい理由があつてじゃない、唾液に含まれた魔力を譲渡する為だ。私は時々呼吸のタイミングを挟んで彼女に粘膜を摂取させた。顔を離せば顔色は大分いい、と言うよりも紅潮しているあたり色々

元気みたいだった。

「ええつとこういう時は…やつぱりご飯？」

？ひとまずは清姫を木を背凭れにし腰つかせた。「もつと、もつと下さいまし」などと言ふ戯言をよそに、私は不思議魔術でそこはかとなく緩い判定のハロウィーン系オブジェクトを召喚した。

？かぼちややニンジン、鍋に適当に、そこはかとなないハロウィーンっぽい調味料一式を準備しつつパンプキンシチューを作るため竈を作る。

？こう言つては不謹慎だが、普通の冒険つぼくて少し楽しかったりした。作る際に名盾レトロニアをまな板、名剣エイティーンを包丁代わりにしたが別に気にすることではないだろう。

？想像以上にいい感じに仕上がった、思わず嬉しくて清姫をチラチラと数度見てしまったほどだ、彼女はそんな私を見て鼻を押さえていたが死にかねないのでやめて欲しい。

？そして次の瞬間に私は衝撃の光景を目にする。刹那的だった。瞬き一つで色が変わった。シチューはかぼちやをベースにしているのでそれらしい色をしていた。だが、私が目にしたのは赤だった。私は思わず声が漏れた。

「ふえ…エエエエ!!?真っ赤、真っ赤なんでええええ!!?!!」

? 暴力的な見た目とは裏腹に匂いは甘い物だった。味見もしてみたが不味くはないし毒でもない。ただ、目には余りよろしくない色合いだった。

? 一体何処に赤色の要素があったのか理解出来ない。いやそもそも瞬き一つの間で変色したところからして可笑しい。

「折角私の為に貴女が作ったのだから食べましょう。私も味、気になりますわ」

? 清姫の言葉に努力が報われる感覚がした。

「まあ味は保証するから存分に味わいなさい。そして寝て、起きたら移動しましょう! あの聖女に一発かましてやらなきや気が済まないものね!」

「ええ、そうですね!今度こそ灼きますす!」

? お互いがリベンジに燃え、夜の帳が降りていった。

? 私は霊体化して周辺警戒する事と、霊体化して睡眠を取ることを提案した。もちろん、前者は私、後者は清姫で、という事だ。だが、その提案は彼女に焼き捨てられてしまった。

「嫌です」

? この一言で…

「いや、なんでよっ!」

「横に居てください。手を上に重ねるだけでもいいのです、貴女を感じたまま眠りにつ

きたい。…私の我儘を、どうか聞き入れて貰えませんか？」

？清姫は私のマンツの端をちよこつと摘みながら問い掛けてくる。私は首肯することと肯定した。ぶつちやけこんな事されて断れる人いる？

？私たちは巨木に背を預け、コウモリやかぼちや、キャンデイのイラストが入ったタオルケットを膝に掛けて目を閉じる。私は寝る訳では無いので閉じるだけ。

？清姫の手が私の手に触れたのが分かった。そつと上から重ね、包み込んだ。見なくても彼女が嬉しがつてるのが分かる…ちよつと息が荒い気がするけれど、きつと深呼吸だと割り切つて周辺にだけ気を配る。

？気配のするエネミーは例外無くお化けかぼちやを頭上にプレゼントしておいた。

？彼女の頭が私の肩に寄り掛かり寝る体勢に入った。

？私はその場の勢いで歌が歌いたくなつた。何故かはよく分からないけど歌いたかつた。子守唄でも歌おうか…

？ふと顔を上に向けた。木と木の間から覗くあまねく星を見た。

——そうだキラキラ星でも歌おうか！

？私は彼女の為に歌つた。自画自賛になるが上手いんじゃないだろうか？

？じきに、彼女の寝息が耳に届いた。

——アレ? 音痴設定どこ逝った!!?



? 変化は突然だった。昨晚まで星を眺めることの出来た木の狭間は今では木漏れ日が降り注ぐ。だが時々大きな羽音と共に影が落ちる。

「これは…」

? 影の頻度が高い。明らかに異常だ。私は寄りかかる清姫を起こし木の上に飛び出る。

「なっ!?!」

? そこには大郡を成したワイバーンの軍団があつた。同じ方向に脇目を振らず飛び



進んでいる竜種に私は圧倒された。

? 進んでいく先は予想できる。あの聖女の所だろう…

? だが、それが意味する所は—

「もう最終決戦!?!」

?

「どうしましょう?」

? 清姫はそう単純な質問をしてくる。答えなど昨日の夕飯前に話しただろうに…

「行くわよ、オルレアンに!!」

「旦那様の行く所、私在意りですわ」

? 清姫は柔和な笑みを持って私に手を差し出して来る。私はソレを取り横抱きにして地面へと降り立ち、オルレアンへと走り出した。

?

? 取り敢えずワイバーンの群れを追う形でオルレアンに向かう事になった。清姫の敏捷値に合わせて走るため早い訳では無いがその分寄ってくるワイバーンを焼いて走っている。私も火を吐けるがちよつと気持ち悪い。オエツという声が吐いた後自然と溢れる程だ。

? ちよつと清姫、その熱っぽい視線止めて!?! 変な扉をこじ開けようとしなくて本当に

!!十分濃いよアンタ。13歳、ヤンデレ（安珍限定）、バイ（安珍限定）。そこにDSを入れるの？

?何それ死ぬる…

?そんな事を考えている内に巨大で強大な竜の姿が見えた。近くに黒い聖女の姿もある。一度も会ってなかったが主人公組も居る。この世界ではぐだ子か…

?だが、私が目を奪われたのは邪ンヌでもファヴニールでも無かった。

?カーミラだ。私では無い私。エリザベート・バートルの未来。罪の完成系。

?身体の奥底から湧き立つ。これは怒りか憎悪か、それとも悲哀なのか…私は否定してはいけない私を、私は私ではないがそう感じる。私は私の歩んだ道を進んでいない。知っているだけだ。実感の伴わないボンヤリとした使命感は膨れ上がるだけ膨れる。

?その後は想像に難くないだろう。膨れ続ける風船はいずれ暴発する。私は脳で考えるより先に動いていたのだ。

「カーミリア!!」

「ツ!!死に損ないの私じゃない。聞いたわよ、ファヴニールに炭にされたって…存外元気じゃないの。あの聖女崩れはこういう所で詰めが甘い」

?私の奇襲はカーミラの杖で受け流された。距離を取り様子を見れば杖を振り光弾

を飛ばしてくる。

「随分と辛気臭い顔してんじゃないカーミラ！今すぐその顔に重い一発をあげるからそこに棒立ちしてなさい」

「ふん、過去の私が完成系たる私に勝てるわけがないでしょう？」

「それを決めるのはアンタじゃない！悔しいけど、私エリザベートの未来は紛れもなくアンタなんでしょうよ。でも私は違う!!」

？カーミラは仮面の奥の瞳を細めた。

「私はエリザベート・バートリー」「ブレイブ」！領民を苦しめる鮮血嬢なんかじゃない！そもそも私の属性、混沌・善だから!!過去とか未来とか私は関係ないの。私は勇者ヒーロー！アンタは敵ライバルよ！」

？言葉が纏まらない。伝えたい事を一言で言ってしまう方がいいのに無駄に伝えたい事が多くて混乱する。でもそう、私はカーミラにこう言いたい。

「つまり正義ミチが勝つ！これが当然の帰結よ!!」

「フツ、アハハハハ!!何を言うのかと思えばそういう…本っ当にくだらない。何それ罪悪感を抱いてるの貴女？生前はその行為がイケナイ事だと知りもせず血を浴びていたのに……」

？ぶつちやけそう言われても私は困る。私はイラつく神が原因でエリザベートに

なっただけの一般人だ。知識や身体はあっても中身が違うなら全てチグハグな事になる。今もそうだが、勢い余って最前線まで来てしまった。最初の目標は主人公に丸投げだったのにな。

「まあ所詮は小娘。過去の過ちを死後清算生産だなんて甘い考えしか思い浮かばない! 甘やかされた結果つてやっぱり無様ね。ありがとう私、改めて実感できたわ」

「ああもううるさい黙れ年増!!」

「……へえ」

? 私は悪くない…悪くない…悪くない! 何かイラついたからやった。後悔も反省もしない。揚げ足を取り続けられれば流石に怒りを覚えるでしょう? だから私は悪くない!

「それを貴女が言うのね! 余っ程死にたいらしい……」

? 背後に金属音が響いた。ガコンと重い音がした頃には既に遅かった。アイアンメイデンは受け入れる体勢だ!

『幻想の鉄処女』ツ!!  
ファントム・メイデン

「アサシンのチャージは3ターン…吸血持ち!?! 抜かった! 最短2ターンで打ってくる事を考慮すべきだった!!」

? 時既に遅し、女性特攻で死ぬ!!



きや……」

?

? 帰りたい。元の場所に帰りたい!今の清姫なら人類悪に匹敵するんじゃないかなろうか?はつきり言つて今の清姫は死んでも死ななそうだ。

「嘘ヲ、吐キマシタカ?」

「ヒツ、矛先がこつちに!?!吐いてない吐いてない!エリザ、嘘、吐かない!」

「本当ニゴザルカー?」

? 違う日本系サーヴァントが清姫に現界しかかつてる。速く何とかしないと!

? 此処で私の閃きはワームホールを通つて降つてきた!!

「カーミラー・カーミラー!!私たちが生前嘘なんて吐かずにピュアに生きていたわよね!!清純系アイドルをやつてもボロが出ないくらい正直者よね!?!」

? 私は硬直したカーミラーに半ば絶叫染みた問い掛けをした。生き残る為に未来の自分さえ利用する私は間違っているだろうか?いやもう知らん、私はカーミラーを墓地に送りライフを回復する!!

「…そうじゃない?」

? カーミラーは嘘が絶望的に下手だった。此処で「Yes」と答えがちだが、清姫にとつてそれはタブーだ。人間一回くらい嘘を吐く、そんな見え透いた嘘に反応しない彼女で

はない。逆に此処で「NO」と答えれば問答無用に焦げ肉。ここでの正しい切り返しは「覚えていない」だ。

「ダウトオオオオオオオオ!!!」

「クッ」

? 清姫は変態軌道を描きながらカーミラの攻撃を避け、カーミラの頭上まで辿り着く。そして清姫は蛇にも似た竜へと姿を変える。

? カーミラも抵抗として光弾を放つが、その攻撃は清姫の鱗を砕くに至らず、清姫の身体は自由落下する。カーミラはどうかそれ避けるも器用に動く清姫に翻弄されていった。そして最後には蜷局の中心に閉じ込められる。

『転身火生三昧』ツ!!!」

? カーミラはこうして犠牲になった。私は黙祷しながら未来の自分に対して親指を立てた。そして私は清姫に嘘を吐く結果を心に刻んだのだ。

?

? ? ?



# 我が名はエリザベート・バートリー!!

?あの後、私は黒聖女を殴る事は出来なかつた。正直熱が冷めたのでどうでも良かったりする。道程が波乱万丈過ぎて目の辺りが湿りそうだ。

?いや泣いてませんよ!?ただ目が潤いすぎているつてだけだもん!!女の子は常に瞳がウルウルしてるつて聞いたことあるもの、嘘じゃないわ!!

?ふう…:

「あの黒聖女帰っちゃつたし…私も帰ろつかな」

「図太いエリザも決して嫌いではありませんし、出来るならばこのまま私たちの愛の巢に手でも繋ぎながら帰りたいのですが…その様な空気では無さそうですよ?」

?周りを見れば視線が痛いなのなの。奇異的な目が突き刺さつてもう…帰りたくなあ!それはそうでしょうね。この防御0、精神マイナス—突つ切つて狂化した様な服装だものね。

「私帰るのぉ!視線が怖いよぉ!私好きでこんな恰好してる訳じゃないのに」

?私はマントを抱き寄せプルプルと震える。なんて情けない、なんて見つともないのエリザベート・バートリー!

? 羞恥で顔が熱い。こんな鎧よく今まで着れたわね私!? もう座に返して! ドレッサーあつたもの、きつとクローゼットもあるに違いない! 今の恰好が解消されるならばゴスロリ、あまロリ、何でもござれ! 布面積をおくれ!!

「えつとく、あのお、そのお」

? 視線を上へとスライドすれば橙の髪を揺らす主人公の姿があつた。藤丸立香(女)、つまりはぐだ子。逸般人ではない本当の一般人だ。そもそも献血して何の因果か世界を救うとか運がいいのか悪いのかよく分からない。

? それはともかくその主人公様は私に何の用だろうか…出来れば考えたくない。

「何よ子ジカ! 私に何か用? 見ての通り傷心中だから放つといて欲しんですけど!? アイドルにも休憩は必要よ! 勇者にも有給があつてもいいじゃない!」

「うえ!? えつと、そうです、ね?」

「ちよつ、先輩。そこで挫折しないでください! ファイトです!!」

「でも気まずいよ!」

? 一体なんだというのだろうか? 私に用があるならさつきと言つて欲しいものだ。これ以上の辱めをこの身に受けよとそういう事だろうか…くっ殺!!

「何? 同情なの! こんな恰好を余儀なくされている私に対して同情しているって言うの!? 同情するなら服をくれ! ど・う・じょ・うするなら布をくれ!!」

「え、いやそんなつもりは無いんだけど…」

「じゃあ笑いに来たの？尚タチが悪いわねこの鬼め！」

「ええ……」

？

？速く青髭の旦那をコロコロして来てよ。私は帰りたいのよ、元々カーミラに引つ張られて召喚されただらうし…もう一人（清姫が）倒したんだから良いじゃない！

「マスター、此処は私が。大丈夫ですよ。兵を奮起させるのは専門分野です」

？足音が聞こえてくる。次は誰かと思えばオリジナルジャンヌだった。何故心の傷に塩を塗ろうとするのだろうか。

「私はジャンヌ・ダルク。貴女の名前は何と申すのですか？」

「…エリザベート・バートリー。職業勇者やっています」

「勇者ですか？なるほど、貴女もまた誰かを救う為に戦ったのですね」

？さつきから要領を得ない。この聖女やぐだ子は私に何を求めているんだ？私のような役立たずでは兵力にはならないと思うし、何だったら置いて逃げた黒聖女を追った方が生産的だと言うのに。

「私は竜の魔女を打倒し、問わなければならない。その為には貴女の力も必要なのです。まだ魔女の戦力を完全に削いだ訳では有りません。ですが味方のサーヴァントが一人

増えることで大きく戦況が好転すると私は考えています。勇者エリザベート・バートリー、貴女だからこそ必要なのです。どうか私の御旗のもとで戦っては貰えませんか？」

「…見返りは？」

「？ ジャンヌは胸を張って言いました。たゆんと揺れる胸を見てイマイチ集中出来なかったが、キチンと聞き取れた。」

「―服を」と

「？ 私は不敵に笑った。何としてもまともな服を得なければならぬ。私は立ち上がった。速く帰るために青髭の旦那をコロコロしなければと。私は剣を取り掲げた。返事を返すために。」

「我が名はエリザベート・バートリー・「ブレイブ」ツ!!私が居ないとなんにも出来ない子ジカが哀れでならないから協力する者なり!!」

「ちよろインエリザが可愛くて辛い!…送信と」

『え?今までの交渉とか前口上とか関係無くないかい!?見返りに服だけあげたら落ちる軽いイベントだったよね?』

「ドクター、余計な事を言わないで下さい!エリザベートさんの機嫌を損ねたら面倒くさ……大変です」

「マシユもアウトだから!」

私は深夜テンションにも似た狂化状態のおかげで思考を放棄した。もう服が手に入られるならば聖杯回収も吝かではない!この恥辱を耐えたら私ちゃんと服着るんだ!!

「急がば回れ!?そんなものは知らん、善は急げ!!全速前進だ!!」  
?

道中のワイバーンを消し飛ばしつつ逃げた黒聖女を追う。私たちが通った後には爪はおろか、骨さえ残らない。邪竜百年戦争だかジルジルCOOOOL!!パーリーだか知らないけれど、こんな茶番はカップラーメン数十個分で終わらせてあげるわ!!

「此処があの子のハウスね…」

「いやあすごいダイボウケンだったネ!お土産もたくさんだよ」

「先輩そんな素材を抱えては動けないかと…」

「でもウチにはお腹を空かせる子供達サブジェクトがいるのよ!」

「びつくりするほどふりーだむ!緊張感はおろかシリアス展開も無いですね…パーサーカーの私が一番マトモなのでは!」

『カオス過ぎて介入出来ない!?こういう時どうすれば…助けてマジ☆マリツ!!』

目の前には重厚な扉があり、何者も通さんと言ってるようだった。だが我が勇者一行

にはそんなもの無いにも等しい。私は剣を眼前に存在する扉に押し当てる。

そして魔力放出で吹き飛ばし、声を張った。

「ダイナミックお邪魔しまーす!」

声は超振動の如く内部空間を震わせ、所々で何かが倒れ落ちる音がした。それはワイバーンだったが、穴という穴から赤黒いドロリとしたものが滴り落ちていた。

清姫を除く勇者一行は唇を突き出し「嘘やん!」と薄く呟いていたそう。

奥に行けば行くほど群がる筈だったワイバーンの遺骸があり、素材だけが増える。歩いて行けば奥が見え始める。そこは玉座の間、まさしくラスボスと相見えるのに最適なシチュエーションとなっただろう。

だが、そこは既にクライマックスを迎えていた。

「ジャンヌウーリーツ!? 一体どうしたというのです! 何故貴女は今倒れ伏しているのですか!? ああ、ジャンヌ、ジャンヌ・ダルク! 我が麗しの聖女よ。一体誰がこんな事を…あの心臓が止まり、そのまま逆流してしまいたい程の美声が聞こえてから……………もう一度あの美声を聞かせることが出来たならばもしや!」

「ジル、ダメ……………も……………それ以上は!」

「アンコールです。アンコールを求めます! ジャンヌはまだ倒れるべきでは無いのですから!」

どうやら私の声をこそ望らしかった。ファンからのアンコールには答えなければアイドル勇者としては恥ずべきものだろう。

——ならば聞かせよう、地獄に届くまでな!!

「ええ、心臓の悪い方、気分の悪い方、妊婦、何らかの過敏症……もう面倒臭いわ。精神的健全者の方は耳栓を付け、耳を手で覆い、私から五十メートル以上離れる事を推奨いたします」

さあ準備はOK?

「作詞作曲私！即興だけど聴いていきなさい。曲名『触手でたこ焼きパーティー』!! ミュージックスタート!!!」

私はライブ会場を召喚し、スピーカーを全開にしマイクのチェックも終了させ、そして全力全開で声を吐き出した。

「——ッ!!!」

言葉は不定形に歪み、大気は震え、叫ばれる悲鳴も覆い隠した。建物は倒壊し塵に変わる。声に魔力を載せれば眼前の風景は一変して殺風景となる。一度耳に声を入れたならば呪詛の様に永遠の時間身体を駆け巡る感覚を与え、体内を食い破らんと振動する。徐々に大気は色付き、鮮血と闇を生んでいく。産み落とされる声一つ一つに意思があるように駆け巡る。精神は侵され、自身の在り方さえ見失いそうになる。そして——

## —爆ぜた

何がどうなって爆発が起きたかは私も分からないが、既に曲は終わり、歌いきった余韻に浸っている。残りは締め言葉だけだった。

「聴いてくれた皆ア！ありがとう————ッ!!」

その一声で舞っていた砂埃は晴れ、ビクンビクンと痙攣する竜の魔女が居た。近くにジル・ド・レエは居なかった。だが塵が妙に膨らんだ箇所があるのできつと吹っ飛ばされたのだろう。

『やったあ！やつと回線が復帰したぞ！立香ちゃん、マシユ、状況を教えてくれるかな？映像はまだ砂嵐状態なんだ。竜の魔女は？聖杯は？』

「え、ええ……ドクター落ち着いて聞いてください。竜の魔女ジャンヌ・ダルク、青髭男爵ジル・ド・レエ両名はエリザベートさんの攻撃、否声撃により行動不能となりました……」その後マシユはロマニに掻い摘んで事のあらましを伝えていた。

私はそれをボーッとしながら見ていたが、ふと足元にコツンと軽い衝撃を感じた。そ



れは煌びやかな杯だった。丁度いい、喉が乾いていた所だったんだ。

私は水差しを召喚し注ごうと傾けた。だが、すかさず清姫が水差しを取り上げ、何何でも注ぐと言わんばかりに微笑む。私はタジタジになりながらも杯を傾けた。

コポコポと注がれる水。注がれる度に薄く光る杯。何とも面白い杯だなとは思いつつ満たされるのを待った。

「おっとつと。もういいわこれ以上は零れそう」

「それではグイツと一気に」

お酒じゃないんだからと苦笑しつつ口に杯の淵を導く。

◆◆

『そうかあ、そんな凄いことが……』

「流石に令呪を三画を使う事になるなんて思わなかったよ」

「私も宝具をあんな長時間フル稼働させることがあるだなんて思いもしませんでした。いえ、あくまでも体感時間でしたので長時間だったのかも分かりませんが……」

『それで聖杯は？それらしい反応はあるんだけど』

「聖杯は——エリザベートさん!!!」

◆◆

喉を鳴らしながら水を飲む。こういう風に飲むと身体に染み渡る感覚が味わえる、気

がする。それにしても水が美味しい。こんなにこの水が味わい深い物だとは知らなかった。

「エリザベートさん?!?!」

私は思わず吹いた。吹きかかる先には勿論注いでくれた清姫がいる訳で、もう避ける事は叶わない訳です。

清姫は顔を濡らした。前髪からピチャピチャと水滴は零れ顔を洗った後のようだが、勿論その水は私が吹き出してしまったもので…

「あら、あらあら…フフフ。エリザはそういうのが好きなのですね?」

勿論清姫は暴走するわけだ。

「ええええ、勿論引きませんとも!私はどのような行動であれ嘘偽りの無い愛が籠ってさえいれば、いついかなる時、場所でも貴女を受け入れます。さあ、続きはこちらで…」

「やめ、ちょっと引つ張らないでよ。誤解、誤解だから!」

杯は私の手から離れ、マシユの方へと転がる。私はマシユに助けを求めた。マシユは杯を手に取り、微妙な顔を向けた後、私を見て頭を下げた。違う!そうじゃない!私はそう言おうとしたが恐怖清姫がにじり寄ってくるせいにか口がパクパクとしか動かない。

「——ッ!!!」

声にならない悲鳴が出た。



塵の向こう側に連行されてからは散々だった。腕を異常な力で固定されてから、やれまた「水を吹きかけろ」やら、やれ「口移ししろ」やら…拳句の果てに「指の先に伝う水滴を飲め」とまで言い放つてくるのだ。

清姫は私の心が分からない…と言うよりも聞きやしない。やっぱり完璧美少女なんて幻やっつたんよ。

「ヒツ!?もう止めて!聞きたくない、もう聞きたくない!あんなおぞましい声、焼かれた方が何倍も楽よ!!」

地獄清姫から逃れてきたら怯えられてる件について。え、清姫?おねんねしてるよ。

「それ以上近寄らないで!来るな…来るなあ!!」

「ええ…」

どうしようかと悩んでいれば邪ンヌが透け始め光に還元されていく。いや、サーヴァ

ントは皆そうなっているようで、私も光が零れていく。

「やっそこ帰れる…」

「エリちゃん！」

子ジカが話しかけてくる。退去中の為急いで声を掛けたのだろう事が声色から察せられる。

「今回はありがとう。色々手伝って貰って本当にありがとう！」

腰を90°に曲げる彼女は主人公らしく素直で底抜けのお人好しなのだろう。思わず笑顔で返事を返してしまう。

「良いのよ別に、そういう気分だったただけだし」

「それでもだよ」

光がより一層輝くと引つ張られる感覚を覚える。座で感じたものに似通っている所からきつと時間が迫っているんだらう。

「じゃあもう会わないことを願ってるわ。じゃあね…あと服を—」

「—またね！」



「視界が晴れた。見覚えのある部屋が懐かしく感じる。と言つてもこの来たのは二度目なのだが……」

「ああ……ああああ……服貫つてないじゃない！タダ働き？ボランテニア？割に合わないわよ〜」

壁に凭れ、顔を覆う。息を吸い、大きく吐いた。

取り敢えず寝たかった。狙い通りクローゼットがあつたので開いて中を見る。これまた予想通り少女趣味というか乙女っぽい服が大量に掛かつてる。取り敢えずパジャマを取り出して置く。

下着一式、上下を選びとり椅子に一緒くたに置いておく。

え？ブラを着ける程大きくないだろ？補正ブラとか着けとくと大きくなったり、形が保たれるから良いんだよ！まあサーヴァントに意味があるか知らんし、そもそも他に脂肪もないから大きくなる気はしないけれどね。まあ未来カミユラがあれだからなあ……

ビキニアーマーに手をかけ外していく。元々サイズが大きいのでアツサリ外されていく。次にシャワーだが……別に問題無いだろう。どうせ汚れもリセットされてるんだろうし。下着は取り敢えずピンクの縞を選んでおいた。パジャマは血で染まった様に赤いものを着た。

「寝よ……もう何もかも忘れ泥のように寝ようそうしよう」

「ではご一緒は……」

思わず肩が跳ね、尻尾もピーンと天を突いた。聞き覚えのある声だ。つい最近聞いた声だ。私は振り向いた――

――いつもの微笑みを湛えた清姫がベッドに腰掛けていた。

「ストーキング……まさかここまで……」

「言いませんでしたか？」

「逃がさない、と」

## 転生者はモテる、はっきりわかんだね

転生したらモテる。それが最早テンプレである。男女は問わず、とにかく人を誑し込む。だが転生者に惹かれる存在は兎に角濃い、普通に見えて濃いキャラ、濃いキャラに見えてかなり濃いキャラ。これは必定であり覆すことの出来ない現象だ。所で――

「お帰りなさいませ、<sup>私</sup>ご飯ですか？お風呂ですか？そ・れ・と・も、私でしようか？」

私が自身の領域である座に帰ってきた後、扉を開けたら三つ指立てをした清姫が居た。ここ最近はずっとコレだ。今ではエスカレートして裸エプロン…清姫はどこに向かっていくんだろうか？エリちゃんはとっても心配です。

「ごめん清姫。どれ選んでも私になってるんだけど…それぞれ選んだらどうなるのか聞いてもいい？」

清姫は「はい」と笑顔で応える。

「ご飯は私を食べてもらいます」

「Wow、いきなりハードね」

「お風呂は私がこう丁寧に優しく、KENZENな精神で身体中を洗うのです」

「身の危険しか感じないわ…」



「最後のほう強引に床に押し倒して頂ければ…キャツ」  
「知ってた……」

清姫はズズイッと身体を前へ前へと押し出してくる。心做しか息が荒い、その上赤く光る火花が散っている。

「さあお選びください。アナタが選びたいモノを嘘をつかず。さあ、さあさあさあ!!」

清姫は私を壁際へと追いやる。縦に細く避けた瞳は私の目を逸らさず見つめ続ける。座に時間の概念が存在するか私は知らないが、この様なやり取りは多くやった。故に解決法もあるにはある。

私はソレを実行するにあたり清姫の耳元に唇を近づける。

私は貴女を愛しています。  
「I LOVE YOU」

「とうわ!!」

清姫は直立不動となった。顔を赤く、瞳は色味が帰る。口は声にならない声を零すばかりでパクパクとさせている。

後は放置するだけ。清姫は自然と回復しているはずだ。直立不動の裸エプロン少女…これは事案だな黒ひげを訴えよう。

……余談だがこの裸エプロンはメル友からの入れ知恵だとか何とか。

肘掛の幅が広い椅子にドカリと座った。横に備え付けられた小さな丸テーブルにこ

の部屋に合わないビール缶を出す。これが無ければ英霊などやってられない。プルトップをこじ開けるとプシュツと缶内の圧迫されていた二酸化炭素が吹く。そして一つ大きく煽る。

「はあ…ああもうずつと此処で引き籠つてもいい気がしてきたわ」

最初は性別変わつてる上に服装に難があった。けれど性別が変わつても特に気苦労は無い上、服も今ではビキニアーマーでは無くドレスだ。唯一の難点は英霊召喚で煩いことだ。何が哀しくて応えなければならぬ？

一つまた大きく煽る。喉の奥から温まり、全身へと広がる。

「もう寝ましようか…」

「では私も一緒に!!」

清姫は既に yes 枕を見えやすく胸に抱き完全復活を遂げていた。私は清姫の手を掴み広い面積を持つベッドに行く。謎魔術で着替えベッドに横たわる。私は清姫の手を

「私の上で寝るの止めてくれないかしら？息が当たって落ち着かないから」

「当てるんですよ」

微妙に使い方が違うセリフに苦笑しつつ、私は清姫の背に手を回し、顔を自分の肩に預けさせる。小さく声を漏らす清姫を抱き枕に私は目を閉じる。

『一呼び声に応えよ』

今更だが私は決して清姫が嫌いでは無い。家事全般をこなせるし、気立てもいい。過度なヤンデレさえなかったら完璧美少女なのである。まあそのヤンデレもどうにか制御しているのでどうという事は無いが。

『—勇者よ、応えるのだ』

いい感じに眠りにつけそうだ。身体の力が抜け、徐々に瞼が下がってくる。清姫が私の服の中をまさぐっている気がしないでも無いが、最早気にならない所まで意識を落としている。

『—勇者よ。我が声を聞き入れるのだ』

先程から声がするがもうどうでもいい。セールスなぞ間に合っている。疾く失せるがいいさ。

『—そうか。ならばこちらにも考えがある。勇者としての使命を心に刻むといいよ』

何が勇者の使命だか。混沌・善の勇者など居てたまるものですか。私は勇者に勝手に仕立てあげられた只の超絶可愛いアイドル系美少女なんですよつと。眠りの邪魔だからさつさと消えてくださいな。

『—three』

カウントに嫌な予感がした。冷や汗が出てくる。あ、清姫、そこダメ…

『—two』

直ぐにベッドから遠ざかろうと上に居る清姫に手を掛ける。だがその手は清姫に逆に掴まれ頭の上に押さえ付けられる。

『One』

身を振り、身体だけでもベッドから外に投げ出そうとするが、この低身長ではベッドから出るには至らない。清姫は私の寝間着をはだけさせ下腹部を円を描くように触れる。思わず腰を浮かした。だがそれがイケナかつたのだろう。清姫は腰とベッドの間に手を差し込む。その先には尻尾があり、その付け根には――

『Good luck.』

突如襲う浮遊感。風を背中に感じる。そう今、私は空を飛んでいる。いや――

――空を落ちている！

「馬鹿なあああアアアアアア!!?!」

目の前に広がるのは、青い空、白い雲、どこまでも続く地平線の彼方、そして、嬉しそうな清姫。

「まあ、なんて素敵ハネムーンな新婚旅行！私に対してサプライズだなんて、なんて命知らず。私、

全く気付きませんでしたわ！嗚呼、でもそこがまた、ス・テ・キ」

どうやら盛大な勘違いをしているようだ。そもそもの話、私達は結婚してないし、サーヴァントにそんなのあるわけないでしょうが！あくもう、もうこんな事考えてる場合じゃないのよ！

「ダーレーかー！ヘルプミー!!」

迫る地面。抱きつく清姫。涙出そうな私。だが、誰も私を助けてくれる人は居ない。ワンチャンゲームオーバー！

「死ぬるかあこのバカアー！」

エリザは魔力放出（勇氣）を発動。身体能力向上、防御アップ。

エリザは魔力放出（かぼちや）を発動準備。

地面到達までカウント開始。

— t h r e e

— t w o

— o n e

「生まれー！ー！！」

地面到達直前、魔力放出による衝撃波を地面に叩き付ける。叩き付けられた地面は、草が禿げ、陥没し、吹き飛んだ。だが、地面の犠牲の甲斐あって私達は緩やかに落下し

た。

相変わらず清姫はニコニコとしていたが、私はきつと真つ青だろう。いきなり空中ス  
タートは即アボンの危険性が高い。一体何を考えているんだ召喚主は。

「岩の中の方が何倍もマシだったわまったく!!」

苛立ちを隠せず地面を蹴り上げる。轟音響かせながら消し飛んだがどうでもいい。  
こんな歓迎をしてくれた召喚主は何処だ。

「居ないじゃない!」

「前回と同じでしょうか?」

野良サーヴァントだと? 前回はあるな声はしなかったはずなんだが…

改めて周りを見れば、隊列が組まれた兵士が衝突していた。紅と黄金の装飾からして  
ローマ軍だと察することが出来る。となればあの女性指揮官が第5代ローマ皇帝ネロ・  
クラウディウスか。アルトリア顔だ…:これも全てセイバーを増やす神のせいなんだ。

「助けますか? 助けませんか? 私はどちらでも構いませんよ…嘘を吐かなければ、どち  
らでもなんなりと」

清姫の顔に闇が広がる。目の前に居るのは嘘を嫌う竜だ。故に嘘を言つてはイケナ  
い。

「助けるわよ清姫。だって私、アイドル系勇者だから!」

「勿論お供しますよエリザ」

ローマ軍に目掛け走り出す。そして都合よく襲い掛かってくるエネミーはかつ飛ばしていく。だが既に戦況はネロ軍に傾いていた。よくよく見ればサーヴァントがいるのに気づいた。

「エリちゃん!?!」

成程、主人公は合流していたのか…アレレ、私いらぬ子? いやそんな訳無いわね。だって私勇者だし? アイドルだし? 何より可愛いし?

「エリザベートさん! 来てくれたんですね? 良かった。早速ですが恐縮ですが参戦をお願いします!」

「あ、うん」

ヒーローは遅れてやって来るものだど心に刻みながら、私は清姫を率いて敵の中心へと躍りでる。

基本的にサーヴァントの相手はサーヴァントか逸般人でないと務まらない。敵ローマ軍、つまり連合軍大隊がサーヴァントを組み込んでいない現状では戦闘機に生身の人間で挑んでいるのと変わらない。よってマッシュと言う一体の未熟なサーヴァントだけで手を拱いていた連合軍大隊は私と清姫と言う兵器が参入したその時に壊滅した。具体的には焼かれ、灼かれ、焚かれた。

「戦闘終了です。良き采配だったと思いますよ先輩」

「ありがとうマシユ」

立香はマシユとハイタッチをし互いに褒めあっていた。横にいつの間にか居た清姫はウズウズとしたようなモノ欲しげな顔を浮かべていた。

「お疲れ清姫。いい感じに焼けたわね」

私が肩の上辺りまで掌を出せば、清姫はペアつと晴れたように笑い、タッチしてくる。「ウム、大儀であったぞリツカにマシユ。余はそなた等に頼つてばかりだな、この戦場から脱した後で見合う役職を与えようぞ。総督などどうだ？」

「総督…なんかかつこいいかも！」

「先輩ならキチンと務まると思えますよ」

「えへへ、そつかなあ〜」

私が周辺を警戒をしていれば主人公勢はキャツキャツしていた。戦場でそんな呑気なことの良いのかと疑問に思うが、しょうがないのだろう。皇帝もいるしね。

「して、リツカよ。先程から見慣れぬ者が居るが知り合いか？」

「うん。勇者エリザベートさんと清姫だよ」

「ほお勇者とな。ほおほお、ほおほおほお」

ネロは私に視線を向ければ品定めをするかのように見つめてくる。美少女に見られ



るのは些か恥ずかしいな……清姫？あの娘はノーカンでお願い。

「ほお、成程……好みだ」

「は？」

思わずインテリな私に似合わないアホっぽい声が漏れる。今このローマ皇帝は何を言った？好み？いやそんな馬鹿な事ある訳が。

「は？では無い。好みだと言ったのだ。光栄に思うが良い。ローマ皇帝たる余がこの様な純粹な賛辞を述べるのも認めるのも珍しい事ぞ？」

「それはつまり……」

「ウム、所謂一目惚れ、というやつだな。ハツハツハツ！」

「デスよね……こんのアホ毛皇帝が!?清姫の横で何を口走っているんだ！見てみる隣の清姫を、目に光がなくなっているじゃないか!？」

「どうだ余のものとならんか？然すればこの世の栄佳を余の傍らで楽しむ事も出来るぞ？」

「お断りします！」

「ムウ、謙虚よなそなたは。もつと強欲であつても罰は当たらないであろうよ。だが良いぞ！余は第5代ローマ皇帝ネロ・クラウディウス。手に入らなければ、手に入れるまで腕を伸ばすまでの事よ。見た目よし、声よし、心根もよしと来たらどれ程の財を持て

ば良いのやら想像もつかんな…」

皇帝陛下は人の心が分からない。見てくれ横の清姫を、まるで清姫サンみたいじゃないか！

「エリザは渡しませんよ…」

清姫は私の腕を掴むとそうネロに言い放つ。ギリギリと締め付けられる腕は引き抜こうにもびくともしないのだからタチが悪い。

「む？ほお、そなたも中々……もう良い」

「あら、思ったより早く引きましたわね」

「——もう二人とも余のものとなれば良い！」

「——」

これには清姫も絶句。パーサーカーを置いてきぼりにするローマ皇帝(ナマモ)。駄目だこいつ……早くなんとかしないと……

それにしてもこの皇帝押しが強い。流石に暴君と謳われただけはがあると納得してしまおう。

「グヌヌ、何故余(なにゆえ)を受け入れないのか。そのような身形をしておるのだ。ボディタッチくらい許して然るべきだろう。ほれ、我が前へ来ることを許すぞ」

原作エリちゃんとは大分扱いが違う。私も慇懃無礼には違いないと思うんだけど

ね。でも好感度が高くて悪い事は無いだろうし現状維持かなあ。それにしても、本当に執拗いなこの皇帝。酔っ払った上司の絡み酒かよ……ん？ちよつと待てよ。この皇帝さつき聞き捨てならないことを言っていたような……身形？

「ドウエツセイ!!？」

私は気付かなかった。いやもしかしたら気付きたくなかったのかもかもしれない。だつてヤツは私のトラウマだから。今まで見て見ぬ振りをしていたヤツの姿を私は見る。直後、私は崩れ落ちた。何故、何故だ。何故ヤツがいる？

——八十年代思想起ビキニアーマーがよお!!?

「みえ、見えそ、う」

「先輩最低です……」

「ん？急にどうしたのだエリザとやら。いきなり四つん這いになぞなつて。アレか？誘つておるのか？フフフ、愛いやつめ。良しそうと決まればローマへと帰還するぞ！待つておれ、直ぐに館へと案内しよう」

兵士達の気合の入った声が耳に伝わる。だが、脳にまでは届かない。私は結局マシユに背負われて、ローマへと連行されたのである。

ローマに行ったら私、服を着るんだ。

## 脱ぐなつて言つてんだろ（血涙）

マシユにドナドナされていた所までは覚えていた。でも、でもよ、何故私は――

「――なんで縛られてるわけ?!」

そう現在私、勇者エリザベートは――

――テルマエに入っている。

いや、お風呂は良い。気持ちがいいし、ローマ朝のお風呂は圧巻だ。しかし、手首を縛られているのはなんだ？ 私にそんな趣味は無いわよ！ いや縛るのは最早本能的に得意だけでも!!

「むう、そう叫ぶでないわ。此処ではそなたの声は良く響く」

湯煙の奥から来たのはネロだ。やったなお前ら！ 風呂回だ!!

私は勿論目を背けます。そりやそうでしょ！ 私に心まで女になった訳じゃ無いんだからね！

「ウム、思った通り美しい身体をしている。やはり美少女は良いな！ 実に良い！ 控えめに言つて最高だな！」

そう言いながら私の身体をペタペタと触ってくる全裸皇帝：AUOキャストオフ

……う、頭が痛い。

理由の分からない頭痛に襲われる私。念入りに身体に触れてくるネロ。もう分かるねえなコレ……

現実逃避を止め、改めて自身に置かれた現状を見る。縛られている。具体的には柱に着けられた金具に引っ掛けられており、そこから伸びるソレに拘束されている。太もも辺りまで湯に浸かっているためそれ程肌寒い訳では無いが、勿論私もZENRAである。

「このロリコン！ 離しなさいよ。手を縛ってこんな事するなんて最低よ！」

「ん？ 流石に意識が無い状態で湯に浸かるのは死ぬぞ？」

「あら、お気遣い痛み入るわ、ありがとう」

そうかあ、ただの親切心。気遣いだったかあ……悪い事しちゃったわね。

「ウム、素直は美德ぞ。ささ、身体をしつかり清めるとしようか！」

そう言っただけの拘束を取らない。何故だ!?

「不服か？ ローマ皇帝たる余が奴隷の真似後をしていると言うのに……」

ネロは目をギラギラと輝かせている。

「余が嫌いな事の一つは節制よ。その証明に見よこのテルマエを！ 贅を凝らした物だろう？ 薔薇を散りばめたこの湯は余のお気に入り。この場に連れてこられたこと、誇って

も良いのだぞ？良いのだぞ！」

裸でそう言われてもイマイチ格好付いていないが、それでいいのだろうかこの皇帝。

「それで、だ。この様に馳走が目の前にある状況下…余が自制するとも？」

「いや、この戦時中にそれは…」

「なに、余にもこの様な息抜きは必要だろうか？ローマは余と共にある。余はローマ皇帝ゆえな」

このネロは生前、故にピーストである。さて、どうしたものかな。魔力放出を使えばこの拘束を振り切ることは可能だ。だがしかし、それをすると此処が吹き飛ぶ。それは流石にマズイ、野宿を進んでする程マゾではないから。

「案ずるな、直ぐに具合も良くなる」

ヌルヌルとした動きで迫ってくるネロに私は足をバタつかせる事しか出来ない。ネロはそれを愉快そうに眺め口元を歪ませる。完全に状況を愉しんでいるネロはゆつくり私の脇部分を撫で回していく。

「くすぐったッ!?!」

「良い反応をするなエリザは…」

少年が悪戯に成功したかのような顔を浮かべるネロはどうにもやめる気がないらしい。

私は最期の手段に出るしかないのかと下唇を噛み締める。本当は使いたくなかった。でも貞操を奪われるくらいだったら――

「……けて……め」

「ん？何か言ったか？」

私は加減はしつとも声を張る。

「――助けて、清姫エーッツ!!!」

辺りの湯気が消え去る。ネロも私の声に吹き飛ばされかける、だが私の尻尾を掴んで耐えた。……尻尾オ!?

身体が硬直する。ピリピリとした感覚とチカチカとする視界に酔いそうだ。そして自然と涙が流れるのが分かった。

――ト ト ト ト ト

何処からか聞こえる轟音。湯から来る熱気とは違う熱が何処からか来ている。そして薄く聞こえていた声は鮮明化した。

「エリザを泣かせた愚か者は何処ですかア!!」

最早、育ちの良さを感じさせる甘い声はなく、ただそこには愛おしい人を思う人間の咆哮があつた。彼女もまた竜、肺活量が違った。道が開かれたように湯気が飛び去る。

「安珍様エリザ大丈夫です。私が来ました!」



「清姫エ！」

「え？余が悪者!？」

？清姫は私を見つけたと同時に正義のヒーローの様にセリフを言い放つ。そして急加速、清姫の影がブレたと思つたらネロと私の間に立っていた。顔には慈愛の笑があつたが、それ以上に口から時折漏れる発火音が異様だった。

「よくも、よくもやってくれましたね……」

「そ、そうよ清姫。このアホ毛皇帝に一言言つてやつて!!」

？私はネロがしようとしていた事を思い出し、羞恥に駆られながらも清姫を煽った。鏡を見たら目にグルグルがある事だろう。

「正妻はネロでは無く、この清姫デスツ!!」

「ナヌウ!？」

「違うでしょ!？」

？頓珍漢な発言をバーサーカーした清姫はネロにサマーソルトキックを繰り出す。ネロは咄嗟に身を仰げ反らせるが、顎に決まってしまった。ネロは宙空に投げ出される。

「まだまだア！」

？清姫サンはこのままでは終わらないと着地した後跳躍。宙に浮いたネロの腹にド

ロップキック。顎を蹴られスタン状態のネロは勿論避けられない。くの字に折れるネロはテルマエ中心地へと吹き飛ばされる。

「チエストオ！」

？なんと清姫サンのバトルフェイズは終了しない。最早何がどうなっているのかわからないが、清姫サンは破裂音と共に宙を駆けた。そしてトドメとばかりにネロの背に踵を振り下ろし、テルマエへと叩き落としたのだ。

？湯はネロが落とされた所から波が発生し、私を飲み込んだ。

「わっぷ!？」

？抜け出そうとしたが手元がカチャカチャするだけで抜け出せない。呼吸を忘れて清姫サンを見ていた私の意識は遠のく。

？最後に見た光景は――

――元気に清姫サンから逃走するZENRA皇帝の姿だった。

？あの人本当に生身かよ…

？私の意識は暗転した。



? 耳鳴りがしてる、何処からか聞こえる喧騒が煩わしい。心做しか下腹部が圧迫されている気がする。ちよつとだけ心地良いと思つてしまった私は変態の素質があるのかと若干落ち込んだ。

? ゆつくり臉を上げると―

「知らない天井だわ…」

? 定番のセリフを吐いた後、圧迫されていた下腹部を覗けば掛けられていた布が丸いシルエツトを映していた。布を取り去ると舌をチロチロさせる清姫変態が居た。

「きいいいええあああ!!?」

? 何故彼女を変態と称したのか、それは至極真つ当な事だ。この清姫、ZENRAである。

「なんで服着てないのよこのド田舎子ジカ!!?」

「意味は無い!と言いたいところですが、強いて言うなら…:対抗心?」

? こんな事に対抗心を燃やさないで欲しい。これも全て赤いセイバー顔の皇帝が悪いんだ!

? そして奥の扉が音を立てて開いた。

「大丈夫かエリザ!」

? 来たのはネロ。そしてその皇帝も…もう何も言うまい。

「服着ないなら寄越しなさいよー」



？あの後私は服を着た。そして私の聖杯探索は終わりを告げた。皆、今までありがとう！勇者エリちゃんの次回作ご期待ください。

？え？ダメですか？アツハイ……

「ガリア遠征？」

「ああ、いつまでも此処でふんぞり返っているわけにもいかないだろう？余が出れば兵の士気も上がる、余もこの舞台を華麗に舞いたいしな！」

？後者が本音だとこの短い間で察する事は出来た。いつの間に霊地へと行っていたリツカたちも若干苦笑しているように見える。

？だが、私が行くとは言っていない。そもそも行く必要ははつきり言っただろう。もとより私という存在はイレギュラーなのだから。

「私は遠慮するわ。気を付けて行ってらっしゃい」

? 本音は「服手に入れたからニートでいいや」であったりする。

「余はストリップショーが見たいなあ」

「行きます！行かせてくださいお願いします!!」

「エリちゃんエ…」

? 止めて！そんな目で見ないで！しようがないじゃないの。私はもうビキニアーマーなんて嫌なの！お金積まれても嫌なの!!

? こうして遠征が余儀なくされた。

? 道中も色々あったものだ。連合軍をイライラして焼いたり、連合軍をむしゃくしゃして内部破裂させたり、服を着るつて素晴らしいと再実感したりと色々だ。

? そして清姫とネロの正妻問答を冷たい目で眺めていたらキャンプ地が見えてきた。あとネロの「余がルールだ」は流石に暴論過ぎやしないだろうか？

? ネロがキャンプ地に着いた途端歓声上がる。流石に地元固定ファンが多い、私の勇者系アイドルの本能が注目されると囁いているが少々分が悪いと言える。

? そんなネロも笑顔で応えている、時折私の方にチラチラ視線をよこすがピッと顔を逸らすことで突っぱねた。横目でネロの様子を覗き見れば、とつてもいい笑顔をしていた。

「ヒエッ…」

？アレは獲物を見る目だ。どの様に喰い殺そうかと夢想し、その時の愉悅を疑似体験しているのだ。私は彼女の暴君の片鱗を見た。味方が敵で敵も敵。逃げ場には既に宙そらに続く壁を形成してしまっていた

「やあやあ来たね」

？気安い口調の女性の声がした。声のした方向見れば赤毛のお姉さんと――

――  
マッスル  
筋肉が居た。

「うわあ…」

？

？思わず声が出た。貼り付けたような不気味な笑顔を見せる金髪モリモリマツチョマン。見事にいじめ抜かれた強靱な、いや狂人な肉体は脈動する度に筋繊維の漲る音が聞こえてきそうだ。私はそれを筋肉マッスル・オーケストラ楽団と呼称しよう。

「ネロ皇帝陛下…ちよつとネロ。アンタ凄い顔してるよ」

「ん？そ、そうか？」

？

? 黒い笑顔に赤毛のお姉さんこと、ブーティカもドン引き。引き攣った表情をしている。そして、ブーティカはネロの視線の先をなぞる。筋肉も何故か貼り付けたような不気味な笑顔のまま見る。全く、アイドルもびつくりな表情筋だぜ。

「な、何よ…」

「いや、ネロが入れ込む子が気になつてね。でもそうかあ、確かに可愛い子だね。面食いのネロが入れ込むわけだ」

「当然ですネ。エリザは最高ですから!」

「清姫、ややこしくなるからそういうの止めて」

? 清姫は落ち込み、ブーティカは撫でてくる。髪型が崩れないように撫でてくる当たり、熟れているのか…いや子持ちだったなこの人。

「子供扱いしないで、よ!」

「うんうん、そういう事言っている間は子供かな」

? クツ、悔しい!でも、心地良い!!

? ブーティカが私の頭から手を退ける。頭から温もりが去っていく感覚がある。私はテンプレの様に「あつ…」と声を漏らした。

? ブーティカはそれに気付いたのか片膝立ちになり、私に目線を合わせニッコリ笑う。

「また後で、ね？」

「落ちそう……」

「ポンポンと私の頭を叩けばリツカ達の方へ行ってしまった。」

「？そして、筋肉マッスルはまだ私を見ている。ジーっと見ている。もしやファン？と思ったらズシズシと協奏曲を奏でながらやって来た。普通に不審者である。半裸だし、パンイチも変わらない恰好だし。」

「君は圧制者か？」

「ふえ？」

「？」

「？疑問の声が上がるとブーティカたちもこちらを見ている。彼女の顔はギョツとしているのは仕方が無いだろう。だが、筋肉マッスルの質問はそれだけだと言わんばかりに黙っている。」

「いや、圧制者じゃないけど。勇者だし、寧ろ立ち向かう側？」

「？」

「そうか！叛逆の勇者！素晴らしいな。ならば我が前に口上と証明を示すのだ」

「エ、エリザベート・バートリー。職業勇者兼アイドルやります…で、証明ってなに？」

「見よこの身体、これぞ叛逆の証！さあ叛逆の勇者！！」



? 筋肉<sup>マッスル</sup>は見せつける様にモストマスキュラー。目で私に促してくる。筋肉が盛り上がり軋む。そんなものを見せつけられた私は――

「いや……ちよつとそういうのはマネージャーを通して欲しいんだけど」

――ドン引きである！

? だが、筋肉は無言の圧力を持って私に強制する。と言うかグイグイ来る。

? 怯んだ私は見様見真似でお腹辺りで手を組む。

「勇者よ。肉体を晒すのだ！ 証を、示せ」

? 詰まるところこの筋肉<sup>マッスル</sup>、脱げと言っている。筋肉モリモリマツチヨマンの変態って

本当に居たんだ……

? 私<sup>マッスル</sup>が遠い目をしていると、空かさず筋肉はサイドチェスト。

?

「いや、そんな出来るわけ――」

? 拒否をしようと声を上げれば、首にガチャリと無骨なブロードソードが添えられた。  
た。

「ちよちよちよ、おいおいスパルタクス！ その子は味方だつて!! それにそろそろ止めないと……あの二人に切り刻まれた後で灼かれるよ?」

? ブーティカは筋肉<sup>マッスル</sup>を諫めるが頑として私の首に添えられた凶器は動かない。彼の

笑顔が私の精神を侵していく。

「私、脱ぎます…脱ぐから。ソレ退けて…」

? そう言えば凶器は退かされた。ネロから着せられた露出の多いドレスを布音とともにシユルリと脱いだ。

? 私はされるがままにヒクツとしゃくり上げながらサイドトライセプスをする事になった。

? 終始笑顔を絶やささない筋肉マッスルに対する恐怖はきつと私は忘れない……

?

やればいいんでしょ!?

? 私は現在服を抱き締めながら簡易テントの端で体育座りをしている。通る人は気を使つてか近付かないし、直ぐに退出する。だから私は一人だ。詰め込もうと思えば二十人は入るテントに一人…それも端つこで体育座り。孤独だ。圧倒的な孤独。でも丁度いいのだ。私が望んだ事だもの。

? 此処に籠っているのも全ては例の事件が原因だ。あの事件、エリちゃんボディビルデビュー事件…アレは可愛くない。筋肉系アイドルなんて私は求めていないのだ。やっぱりゴリゴリの私よりもキャピキャピの私だと思うの。

? まあそれはいい。あの事件で辱めを受けた私ではあるが、引き籠もつた理由は周りの人間の目が生暖かいとか、あれ以降、子ジカこと立香のスキンシップが激しいとかそういうのじゃない。

? あの子ジカは何故あそこまで下心丸出しで言い寄れるのか…ある意味素直という事なのか、欲望に忠実とも言えるけど。

? また脱線したが、私の引き籠もつた理由は—

—服を着れないからだっ!!

? 理由は簡単。着たら筋肉マッスルに即攻撃される。彼曰く、「シンボル者たるもの証を掲げ、同志を煽るべし」との事だ。もうわけがわからないよ!?

「これも全てあの金髪アロハシャツの胡散臭い神のせいなんだ! 私がエリちゃんになったのも、勇者になったのも、こうして戦場に立っているのも、清姫がヤンデレなのも、スパルタクスが筋肉マッスルなのも……!」

? 私にだって家族が居たし、やり残した事もある。だが、神などという身勝手な奴によつて引き離され、スマホさえ触れることが叶わない! まだ育成の終わらないサーヴァントを残した無念さが、悔しさが、今になって渦巻く。

? 悔しい、悲しい、寂しい、恋しい……

? 負の感情は収まらない。

? 怒涛の日々を誰かしらと過ごした為か、その騒がしきで忘れていたんだろう。

—忘れていたかった—

? キツカケが新たなトラウマで一人になった結果とは、なんとも私らしい。

—構ってもらいたい—

? ああ、情けないな私。可愛くないな私。格好悪いな私。

—アイドルなのに—

「勇者なのに……」

? うじうじしていても何も生まないのに、何をセンチメンタルになっ  
てているんだエリザ!

? 私は綺麗に畳んだドレスを強く握りしめる。シワになるだなんて気にしなかつた。ただ、そうする以外にこの気持ちの捌け口が見つからない。さつきから空回りして、矛盾している。

? 思考の海に沈んでいく中、頭の上に重みを感じた。こうムニユツとした感触。そして、女性特有の甘い匂いが鼻腔をくすぐった。ピクツと私の身体が震える。このつい堕ちてしまいそうになる包容力の持ち主を私は知っていた。だが、意地になっているのか素直に甘えたくない。

「何?」

? 私の声も心做しか震えている。

「んー? 何でもないよ。私が人肌寂しいから抱きついてるだけだし」

「何それ。空気読めないの? 私、今、傷心中。放っておく空気、OK?」

「うんうんOK OK。だけどお姉さん我儘だから無視するね」

? ブーティカは私の頭をゆっくり撫でていく。頭頂部から暖かい何かが伝わってくる。優しく愛おしい。

「ほらほら、折角の可愛いお顔が全く見えないじゃん!」

「放つといてよ!!」

? 私は優しくするブーティカに苛立ってつい声を荒らげてしまった。私は後悔した。優しくしてくれた人物を傷付けたかもしれない。そう思うと申し訳なきで一杯になる。

「放つて置かないよ。放つて置けない。エリザベートは一人にして置けない」

? ブーティカは私の声がなんだと言わんばかりに強く抱き締め、意思のある声でそう囁きかけてくる。私はそこに言い知れぬ感動を覚えた。スツと私の中に溶け込んでくる。

「エリザベートは子供なんだから、お姉さんに甘えておきなさいって」

? 私は何も言わず。子供じゃないと否定の言葉も言えずに、言わずにブーティカを抱き締め返した。そしてか細い声で精一杯嘆く。

「スパルタクス怖いよオオオオオ!!」

「服が着たいよオオオオオ!!!」



？一通りブーティカに愚痴った私は彼女の胸に埋もれる。これが求めた温もりだと思つた。色々と言つてしまつた。勇者にならざるを得なくなつて辛いこと。清姫が清姫サンになつて怖いこと。ネロが裸族何じやないかと不安なこと e t c. :

？ブーティカは時折相槌をうつては撫でてくれた。それで脳が溶けてしまひそうになるくらい心地よくて、愛おしい。そしてこう言つてくれるのだ――

「――大丈夫だよ。皆が君を助けてくれる。だから安心していいんだよ」と。

？ああ、安心した……。

？服はまだ着れないけれど、この負の感情はあらかた払拭出来た。服は着れないけれど、どうにか進めそうだ。服は着れないけれど……服は着れないけれど……

「ありがとう、ブーティカ。私もう大丈夫！アイドルらしく輝ける!!元々アイドルも勇者も民衆の期待の視線を集める物だもの。自分に自信が無くっちゃやつてられないわ！」

「ハハハ、大丈夫だよ気にしないで。思つた方向とは違うけれど、助けになれたんなら私としても嬉しい限りさ」

？彼女は本当に優しく英霊だつた。私の唯一無二の癒しだつた。だから今出来る最高の笑顔で伝えるんだ。

「――大好きッ」

「…。本つ当に罪な勇者様だねエリザベートは」

「? ブーティカは天幕しか見えない空を仰ぎそんなことを言うのであった。私は求めた反応が得られて満足した。」

?

「? ブーティカが言うにはそろそろ戦場に出向くらしい。サーヴァントらしき司令塔も確認出来たとかなんとか。」

「? 早速ブリーフィングで詳しい話を聞いた。作戦会議モドキも並行して行った結果、「取り敢えず暴れたら良いんじゃない?」、との結論だった。本当に大丈夫なんだろうか? 不安材料が増えるばかりで頭痛持ちに―いやエリちゃんは頭痛持ちだったけど―なりそうだ。」



「? 荒野、幾度の戦、幾人の血が流れた大地。一步一步踏みしめると、そこからは染み込んだ流血の代わりに砂埃が乱舞する。」

「見てみる叛逆の勇者。これぞ圧制者に拐かされ、叛逆の機会を生涯得ることの出来なかつた者の末路!」



「あ……うん。楽しそうだなによりよスパさん」

「楽しい？ いやこれはそれを超える歓喜だ！ 全てがここにある。圧制の徒が跋扈するこの場この時、今こそ真の叛逆を示す時！ さあ勇者、凱歌の時だ！ 我らの未来への咆哮こそ勝利の先触れとしようではないか！ ハッハッハッ！！」

？

？ そう言つてスパルタクスは私の華奢な体を肩に乗せる。

「ブーティカ……助け—— いやああああ!!？」

？ ズンツと重重しい重低音が響けば景色が移り変わる。スパルタクスが疾走しているのだ。後ろからはスパルタクスを静止する声が聞こえるが、彼は絶賛叛逆モードな為一切見向きしない。

「戦え戦え戦え！ 手に、脚に、全身に力を漲らせよ！ 死を恐れるな。剣で圧制者の首を断て！ 死すその時まで盾を手放すな否、死した後にも手放すな！ 叛逆の誉れを戦場で行動にて雄弁に語れ!!」

？ スパルタクスは私に敵を斬り捨てながらも息を乱すことなく饒舌に語る。見えるのは敵が流す鮮血のみ。それは私にとっての鎮痛剤であり、劇薬だ。

？ スパルタクスは周りに囲んだ敵を屠った後、今まで以上の声量で私を鼓舞し、敵本陣に投げ込んだ！ 追い付いたブーティカはそれに吃驚する。

「戦え勇者ッ!!!」

? ビキニアーマー、角、尻尾、盾に剣を持つ私が戦場の宙に舞う。それも敵地の中心。有象無象の顔が私を見つめ、剣を掲げ剣山を作る。もう後退できない、しちや行けない!

——スパルタクスに殺されるからッ!!

「消し飛ばす圧制者ア!」

? 私はエイティーンを両手で掲げる。そして、二つの魔力放出を並列起動。吹き荒れる魔力の渦。装飾の無いエイティーンは圧制者にはきつと空を覆い隠す超巨大剣に見える。えている事だろう。自由落下し、剣の間合いに入ったその時、私は無慈悲を振り下ろした。

? 地面が悲鳴を上げクレーターを形成する。暴風吹き荒れ砂が舞う。聞こえる有象無象の悲鳴が嬌声に聞こえてくる。鮮血が空を舞い、クレーターに降り注いでは染み込み、死の影だけを移す。

? 私にも鮮血は注がれる。浄化される心地だ、コレは快樂などという枠に当て嵌らない。刹那的な部分であれば似ているが本質が異なるのだ。そうコレは、安らぎだ—コレが戦場、コレが闘争、コレが叛逆!

? この一瞬だけは染まろう。今だけは叛逆勇者系アイドルだ!!

「ニューシングルでも出せそうな程のハイテンション。たまらない止まらない！冷血冷酷残忍の三拍子を持ってして豚共を絶望の快樂地獄に落としてあげるわ！」

「まあ…エリザつたらいつにも増して激しい！嫉妬、してしまいそうですわ」

「え？」

「リアル無双ゲームを体感していたらネットリとした視線と熱い吐息を感じた。もう言わないでも分かるだろうけれどあの人だよ。」

「一人、二人、三人」

「彼女は目玉焼きを調理する手軽さで妬いていく焚いていく焼いていく。例外なく炭と化す。血も肉も例外無く蒸発する。」

「…」

「？私は萎えた身体で敵を処理して行く。アレをしていたらお母さんに見つかったぐらいの萎え方だ。」

「？気付いたら周りに敵が居なくなっていた。あるのは山になった焼死体の数々、呻き声さえ聞こえない山の中心には美少女二人というスプラッターホラーもドン引きな始末。」

「さて、次は誰を焼きますか？誰でも良いのですよ？お選びください。誰を、何処で、いつ、どのようにして焼き殺すのかを」

「え? うん。ごめんなさい…」

「私は怒っていませんし、謝る必要もありませんよ? 聞いてるだけじゃあないですか? 誰を燃やすんですか?」

? 怒ってないなんて嘘だ。半清姫サン状態に突入している。怒る理由も身に覚えがありすぎて困る。具体的には私のせいでは無いが…

「て、敵将を倒そつか…ごめんなさいごめんなさい、何でもするから許して、もう約束破らないから!」

? 清姫サンのプレッシャーで思わず平謝り。危うく死体の中心で日本最高の謝罪姿勢、DOGGEZAを披露するところだった。

「<sup>オーダー</sup>作戦、確かに承りました。…何でもするなら」

? 清姫はDOGGEZAを阻止しようと中腰を維持している私に近寄り、か細い声で囁きかけてくる。

「…もつと私を見てください…」

? 私は目を見開いて清姫を目で捉えようとするが、既に走り出しており、その影は妙に小さく感じた。

? 私は清姫を追う形でまた敵を斬っては千切るを繰り返した。

? そして、デブが居た…

？見た目にそぐわない俊敏な剣捌き。盾のサーヴァントであるマシユは防御しか出来ないでいる。清姫も合流するが、彼女の攻撃方法ではマシユさえ焼きかねない、故に動けないでいる。マシユを失う事で戦線が崩壊する事は明白なのだ。

？英霊ではないネロは火力不足？な為攻めあぐねている。だが、私にはまだ気付いていない。要するに勝てばよかるうなので、一撃必殺はできなくとも、大部分の体力を攫ってしまおう。

？しかし、相手はデブってもセイバー。近接戦闘ではアサシンクラスでも無い限り接近する前にでも感知されると予想できる。だから、今こそ原理不明のおもしろビツクリ魔術で全力攻撃を仕掛ける。名将として有名なカエサルの事だ、意外性を持って攻めなければならぬ。

「私の魔術はイマジネーションで全て形作られる。イメージするのは最高にキュートな私ーじやなくて最強の自分ツ！さあ、勝利への方程式を組み上げるのよエリザ。『召喚<sup>サモン</sup>／恐怖呼ぶお化けカボチャ<sup>ジャック・オ・ランタン</sup>!!』」

？カエサルの頭上に直径五メートル程の火が灯っていないジャック・オ・ランタンを召喚する。タイミングもマシユのカウンターをバックステップで飛んだ時、周りにも誰も居ない。

「離れなさいイイイイ——!!」

? 私はカエサル目掛け目一杯叫んだ。三半規管を刺激されたカエサルは蹠跟めき動けない。マシユたちも私の警告を受け、耳を塞ぎながらも後退した。離れた場所に居たマスターである子ジカの活躍もあつたのかもしれない。

「ぬぐお!」

? 私はカボチャを両手で支えたカエサルにゆつたりとした足取りで近付く。その際もカボチャへの負荷を掛けていく。

「ま、まだサーヴァントの伏兵がいたとはな…だが、うん。私に対して奇襲は良いアイディアだな!」

「でもまだ耐えるのね? だったらダメ押しにもう一個。召喚!!」

? 避けられる訳もなく、カエサルのカボチャはまた増える。同じく負荷を掛けつつ声を掛ける。

「耐えるのね? 耐えちゃうのね?」

「どうにかな…はあ、そろそろカロリーが足りなくなりそうだ。ジャンク品などこう、ガツガツ食べたいものだな!」

「あら? 終わりのつもり?」

「ん? 終わりだろうさ、終わりだとも。ランタンならば火が灯って燃るべきだろう? それにやけに重い—魔術の使用を考慮してもな。これだけ負荷を掛けられると運が良く

ない限り避け切れない。武器も足元だと言う事もあつてな…」

「この後、手足がプルプルになるまで原作通り語ってもらつた。ネロはポカンとしていたが…チラチラとこちらを見られてもどうしようもない。

「では、そろそろ限界だ。名残惜しいが御暇するとしよう。ではな第五代皇帝ネロ・クラウディウス!!」

「? タイミング良く私はカボチャに火を灯す。直後大爆発。時折甲高い音が鳴るのはカボチャの中身が花火だからだ。

? 黄金の光が霞と消えた。

「ネロ、これがサーヴァントの死だよ。この世界から消滅したんだ」

? 立香はネロにそう説明した。

「そ、そうか…だが、これで皇帝一人を倒したという事だな? ウム、御苦労だったな皆の者!」

? ネロは一瞬暗い顔したと思えば、直ぐにニツコリと笑つた。

? 私は胸をキュツと締め付けられる。本当に傍迷惑な皇帝だ。

?

?





## 失念していた！

？ガリア遠征は私たちの活躍もあつて安定した。敵司令官を落としたのでしばらく進行しては来ないだろう。ただの兵であればあの二騎で十分だ。

「と言うことで船に乗るぞ！操舵は余に任せよ。フッフ、久々に腕が鳴る」

「という事つてどういう事？」

「噂を確かめるためだと思えますよ先輩。確か古き神が出たとか何とかで」

「神？ドクターがサーヴァントとして神様は召喚は出来ないつて…まさかの嘘情報!」

『人間きが悪いな立香ちゃん!』

？カルデア組は神霊の考察をしている。私はと言うと…

「神？絶対会つても碌な事に、事実どうでも良い試練をするだけなのに…：：：寄らなくても良いんじゃない？」

「そうは言いますが、あの皇帝はやる気満々のようですよ？」

？ネロは既に船に兵を乗せ始め、自身はウキウキしながら舵を握る。鼻歌交じりでステップまで踏んでいる彼女に行かない旨を話せばどうなるか、想像に難くない。

「言いつらい…」

? こうして乗船以外の選択肢を封印され、神が顕現されたと言う島へと向かうのだった—

—だがしかし!!

? 事はそれだけで済まされ無い!!

—何故ならば?!

「見るがいい! これぞ余のドライビングテクニク!!」

「急上昇、急降下、急旋回!?! 訳が分かりません…これ船ですよ!?! 船ですよね!?!」

「ちよつ落ちる! シートベルト!! シートベルトは何処いすこに?」

「先輩、しっかりとしてください! 先輩、先輩ツ—!!」

? 明らかなスピード違反—舟が出て良いスピードではない—に激しい動き—舟がしていい動きではない—をしている。これでは安全装置無しのジェットコースターに乗っているのと同じである。

? そんな無茶苦茶な運転を続ける皇帝はと言うと…

「この先の五連続ヘアピンで決めるぞ! どおりやああ!!」

?

「ヘアピンって、まず海上にコーナーなんて無いわよ!?! バカバカバカア!! こうのアホ皇帝エ!!…ウツプ」

？完全にグロッキー状態の私。マストにロープを括りつけて身体を固定しても右へ左へ上へ下へと引つ張られ揺れに揺れる。更に容赦なく海水が降りかかる。髪が痛まないか不安だ。あ、私英霊だった：

？清姫はと言うと、コレが好機かと言わんばかりの正面から抱き着いてくる。ロープに捕まれと言つても「安心感が違います」と訳の分からない供述しており、この先おかしな行動をしないか警戒しなければならぬだろう。

「ほれほれ次は溝に――」

「海だつて言つてんだろ!!」

◆◆

？口の中が酸っぱい。プールから上がったような脱力感に時折聞こえる呻き声が鬱陶しい。

？ズサアつと砂浜を割く音が聞こえ、ネロが声を上げる。

「到着ツ！ウム、良き航海だったな。機会があつたらまた乗り回すとしよう」

――やめてくださいいしんどします。

？幽鬼のようにユラユラと立ち上がる兵士達は各々目に光が無く、恐らく忠誠心だけで立っている。私は彼等の生き様に涙を流しそうだ。いや、流さないけどネ！

？身体を起こし、辺りを見渡せば、まあ十中八九島がある。

『わわっ、本当にサーヴァントが居るぞ!』

「既に連合に取り込まれていたか…」

「いえ、まだそうと決まったわけではありません」

「? どうやら女神様がエンカウントしたようだ。正直私は会いたくないし、出来れば帰りたい。」

「あら、お客さんなんて珍しいわ。ようこそ私の島へ、歓迎するわ。サーヴァントが混ぜてるみたいだけれど…まあ瑣末なことよね?」

「えっと、貴方が古き神、と言うことでよろしいでしょうか?」

「古き、なんて言っただけは無いのだけれど。貴方達からしたらそうでしょうね」

「? 話は途中から聞いていない。関わってもどうせ碌な事にならない。よって、私は砂浜で城を作る作業に没頭している。砂に水を混ぜて強度を上げるのだが、ボロボロにならない様にするのが難しい。時折火で炙って見るのだが、どうにも綺麗に出来ない。」

「貴女…」

「? 何か近くに気配を感じるが、まあ清姫だろう…いや、清姫は目の前で穴を開けてる。」

「貴女よ貴女…」

「え、私?」

「そう貴女」

？振り返れば女神がいた。比喩ではなくそのままの意味で、美を集結した偶像がそこにはある。昔の男達は揃ってロリコンなのかと見紛う美幼女だが、纏う神気は本物でプレッシャーもキッチンと感じる。

？女神ステンは私の瞳を覗く行為を止めない。そこにどんな理由が介在しているのかは凡そ察することが出来るが、やはり碌な事にならないので視線を砂の城に移そうとする。

「本来女神の姿を覗き見る行為自体万死に値するのに、それに加えて私の許可無しで目を逸らすだなんて、とんだ無礼者ね貴女」

「はい？そつちから話し掛けといて一言も発さないのが悪いんでしょ!？」

「神は得てしてそういう者よ。それで、話し掛けた理由のだけど…まずは、名前を教えて下さる?」

？本当にこの女神は良い性格をしている。サラッと全て流して自分の意見を突き通してくる。妹さんをもっとリスパクトするべきだと思う。

「エリザベート・バートリーよ」

？私が素直に答えると意味有り気に「ふうん」と声を漏らし、立香たちに向き直って試験と言ってから洞窟へと進ませた。

？私も行くこうとしたが、面倒だと思い、結局同行はしなかった。もちろん清姫は私か

ら離れない。

「清姫、こここの部分をもっと……こんな感じに」

「んう……こう、でしょうか？」

「そう、そんな感じ。だけでもっと優しくして、壊れちゃう」

「楽しそうね」

？横目でステテンノを見れば、傍らで屈んでいる。スカートに砂が付くか付かないかが気になる……

「さつきから何？言いたい事があるならハッキリ言いなさいよ……」

「――貴女は誰？」

？ゾクリと背筋に怖気が走った。この女神は名前を尋ねているんじや無いことが私には分かる。何処までも見透かした様な視線は、私のガワを見ていないのでは？魂を覗き見ているのでは？そう、何処までも感じさせる。

「わ、私はエリザベート――」

「違うでしょ？」

？私はステテンノの顔を見た、逸らせなかった。今、私の中で確信に変わった。この女神はエリザベート・バートリーを知っている。だから私がエリザベート・バートリー本人ではないと否定できるのだ。

「もうそろそろじゃないかしら…」

「え？」

？ 足音が聞こえる。軽い足音が二人分。誰だなんて疑問は無い。きつと身近な存在だ。きつと私は会った瞬間逃げ出したくなる存在だ。きつと…きつと—

—それは私だ。

「ん？どんな美少女が居るかと思ったら、なんだ…アタシじゃない」

？ 金属音が鳴っているんじゃないのかと思う程首の回り具合が悪い。瞼は閉じる事を忘れ、口の中は干上がっている。汗腺は緊張からガバガバ、止めどなく汗は噴き出し、作った砂の城に滴り落ちる。

？ 体感時間が程良く引き延びに引き延ばされた辺りで漸く声の主を突き止めた。そこにはエリザベート・バートリーが居た。

？ ついでにタマモキヤットも居たがニンジン投げたので既に居ない。投げたのは私で、具体的にはピ○ミンを投げる様に投げた。恐らく彼女は途中、自分が何故ニンジンを追い掛けたのかさえ忘れて帰ってくる事だろう。

？

?さて、シリアスに戻そうか…ニンジンのくだりで既にシリアルになった様な気がしないでも無いが、まだセーフだと信じておくこととしよう。

「同じサーヴアントが同じ場所に居るなんて思わなかったわ。やつぱりアレよね、人気アイドルだから引つ張りだこつてことよね? いやあ困るわあ、売れっ子アイドルつて大変だわあ!」

?あるえ?もしかして、このドラ娘、私の事に気付いてない…マジで?

——ああ、エリちゃん私つてアホの子だったわ…

?最終的に何事も無く—メンタルに多大な影響を及ぼしては居るが—無事に乗り越えた。

「思ったよりつままない演し物だったわね…」

?ステンは貼り付けたような笑顔を取り払い、退屈そうに顔を伏せる。本当に残念そうだ。私の身バレを期待した様だが…



？残念だったわね、エリちゃん私にはアホの子なのよ！

？アレ？目からお水が漏れそうだわ：

「ん？エリザが二人…」

？清姫は徐に立ち上がるとおかしな行動を始めた。深呼吸は良いとして、何故高速で首を動かしているのだろうか。あと、手をワキワキさせるのは止めてほしい。

「匂い、フォルム、呼吸リズム、瞬きの間隔、肌の予想弾力まで同じ。相違点は体温と服装と安珍様の有無。偽っている？つまり嘘？嘘は…いえ、安珍様は私に嘘を吐かない！」

「は？何この娘…アタシの熱烈なファン？」

「味もみてみないと分からない？味の比較もしてみませんか、イケナイノデハ？」

「イケナイのはアンタの思考回路よ!!」

？私は目にグルグルを召喚し始めた清姫に魔術で出したハリセンを叩き付ける。こぎみの良い音が周囲を包む。そして、清姫はコレをキツカケに嵌ってはいけない歯車を噛み合わせてしまった。

「問おう、貴女が私の安珍か？」

？何聞いてんだこの狂戦士!!?  
バースァーカー

「は？人違いよソレ」

?言うに事欠いてその返答オ!?

「フフフ、フフフフ…」

?口から火花を散らす少女は想起したのだろう。愛する男を何処までも追いかけて、漸くその眼に愛おしい人物を映し込んだその時を、その問いかけを、その答えを、その憎悪を。

?真ん丸だった瞳孔は縦割れ、白く美しい柔肌は音と共に剥がれ鱗を覗かせる。綺麗な桃色をした唇から漏れる声は最早声として機能せず、音と形容した方が適切だろう。正しくソレは警戒音だった。彼女の口内を激しく蠢く舌は徐々に細く、徐々に長く成っていく。

?思い込みだけで竜に転身した少女は今―

?勘違いで竜に成ろうとしている……

?幾ら何でもフリーダム過ぎるでしょうがアツ!?

?だが、この場にはまだ黙っている者が居ることを失念してはならなかった。それは何処までも美しく、何処までも冷酷で、何処までも残酷で理不尽な女神。

「ハイハイそこまで。此処は私の島なのだから好き勝手は止めておきなさい。蛇は好きだけど嫌いよ。そも話、ソレは嘘は吐いてないわ。だって知らない事だもの」

「アンタ人のことソレ呼ばわりしたわね!？」

「そう、でしたか。確かに無知では嘘の吐きようがありませんね」

「スルーすんなア!!」

「? 回り回って私の方までダメーじが通るお話は早々に切り上げ、私たちを置いてきばりにこの二人は勝手に話をねじ込む。」

「アレとソレは別人よ。外見はともかく中身はそう言い切れる。醸し出す色彩が全く違うもの」

「つまり安珍様の有無は確かに有ると、そういう事ですな。ああ安珍様、それ程までに私に会いたがっていただなんて! 清姫照れてしまいます」

「まあ概ねそんな所よ」

「ちよつとアタシもなんか言ってやりなさいよ!」

「私に振らないでよ!? 清姫のクラスパーサーカードだからね?」

「ウツソオー」

「何言つてんだこの私<sup>エリちゃん</sup>」

「? 清姫が嘘何か吐く訳無いでしょう。それとさつきからスルーしてたけど…私の事モロバレじゃない? プライバシーもデリカシーもあつたもんじゃないわ!」

「ニンジン採ったどオ!!」

?

? またカオス要員が参戦した。敵、狂戦士キヤットです!

「ニンジンは貰った。ならば此処は既にキヤットの独壇場! さあ今こそタマモナインが一角、タマモキヤットの家事スキルを披露する時だワン!!」

? タマモキヤットがピクピ〇ニンジンを持って帰って来た。その後、辺りを見渡せば気付くだろう。そう、此処には戦場キッチンは無いのだと!

「何と!? 独壇場はともかく、立つ壇さえ無いと? グヌヌ、これでは…」

? 尻尾は垂れ下がり、持っていた数本の包丁は何処かに仕舞われた。私は何とも言えない気持ちになった。よってちよつとだけ助けようと思う。いや、子ジカ帰ってくるまで暇だからネ!

「調理場位は出せるわよ…」

? そう言うのと再度包丁を取り出し走り寄ってくる。包丁が私の髪の毛を数本持っていった。あ、コイツ確かにバーサーカーだわ…

?

「それは本当カ!? ではシステムキッチンをだな!」

「竈で妥協しろ!」

「任せろ! 此処に酒池肉林を築いて見せよう—だワン!」

「ニンジンだけで出来るかア!」

「ニンジンフルコースをお見せしようーだワン!!」

「語尾忘れるくらいなら止めなさいよ…」

「だワン?」

「何故疑問形イイ!!?」

「ハツハツハ、面白いヤツだ。殺すのはオリジナルの後にしてやろう」

? 会話がしたい。お願いだから会話をしてくれ。何故コイツらキヤッチボールしないの? 何故豪速球投げてくんの? あ、バーサーカーだからカ!?

「ネロオオオー…ツツ!!」

「会話しろって言ってるオ!!」

? 野太い声がした方向へ魔力放出×2を全力開放。勢いに任せて拳を振えば数十回水を跳ねる音がし、遠い所で着水する音が聞こえた。

「アレ? アタシってあんなこと出来たっけ?」

? タマモキヤットはせつせと料理に勤しみ、清姫とステンは談笑。エリちゃんズ 私たちは仲良くお互いを見て硬直。この光景はカリギュラ再出現まで変わることは無かったという…

?

? ?

励まされたが嵌められた！

墓穴を掘るとはこのような事なのだろう。

私は『ニンジンたつぷりポトフ（キャット風）』を口に運びながら自身の失態に辟易する。現在では真エリちゃんの興味は帰ってきた子ジカに移っている為、私に噛み付いてはこない。だが、彼女の内心を察するに、いきなり自分の同位体が現れたと思ったら別人だった訳だ：ハッキリ言って何するか分からない。

私もエリザベート・バートリーに違いないのだからソレをなぞれば良いと思うだろうが、ソレが絶対正しい訳では無いし、実際なぞってみても結果は分からないと出るだろう。

「エリザ、ほらあゝんしてください。口移しも可ですよ。寧ろ推奨しましょう！」

「アンタは平常運転ね。仮にも私が好きならこう、気になってソワソワするもんじゃ無いの？」

清姫は私に食べさせようとしたニンジン自身を自身の口に運び、咀嚼をしながら思考する。そして呑み込んだと同時に私の目を見てことも無さげに言った。

「気になりません」

「気にならねえのかよ!」とは口には出さないが思わずには居られない。日頃から好き好き言っている彼女なら、秘密があつた事に何かしらのアクションや感情を見せるはずと思つていたからだ。

ハッキリ言つて拍子抜けだった。

「ですが—」

アレ? 雲行きが怪しいような:

「—あとでゆつくり、ですよ?」

全身の鱗が逆立つのを感じた。お蔭で尻尾が直立してしまつてる。スカートを持ち上げてしまうので直ぐに戻したが、慣れてしまったものだど強ばつた笑みを浮かべてしまつている事だろう。

「ぶつちやけると偽物を決めるとなれば、私がそうだと思うのよ。嫌じゃない? そういう存在を好きなるのチームグツ!」

この際聞けることをトコトン聞いてみようと思ひ、濁流の様に言い流していったが、口に『キャロットのonステーキinハンバーガーパティ(キャット命名)』が差し込まれた。予備動作なく、歯にも当てず、唇が開いている状態と言う針に糸を通す精密さを見せたのももちろん清姫なわけだが、正直心臓に悪いので一言欲しい。

「美味しいですか?」



「美味しい…」

美味しい。美味しいのだが、普通に食べたい。

「私が愛しているのは貴女です」

私は飲もうと思ったスープを取り落としそうになる。勿論無事に確保したが、話の高低差に耳鳴りがしそうだ。

「私にとって貴女が偽物であろうと、そうでなかりうと、さして問題では無いのです。貴女が偽物だと言っても言われても、私の愛は偽物ではないんですよ？私にとってその真実さえ有れば、貴女が居て頂けるならば、それ以上の幸福は有り得ませんから」

彼女は最後に「旦那様の行く所、清姫あります」と締め括った。私は言葉が見つからなかった。何と言ったら良いのか見当もつかない。

ヤンデレはマトモなものでは!?!と絆されかけている私。

「はあ…見てるだけでも肌がツヤツヤになりそうだわ。こういう時どう言うのが正解だったかしら…?ご馳走様?」

ステンはニヤニヤしながらガン見していた。いや、と言うか…:…全員こっち見てる!?!

「ふう…尊いな」

子ジカは浄化されている。

「べ、勉強になります!」

マシユは何を学んだのかメモを取り始めている。

「ヌ?余のポジションは何処だ!」

無い。

「良妻ポジを攫って行ったナ!?あ、おかわりも頂いておけ!!」

キャットは相も変わらずキャットだ。

「アワアワアワ——ッ?!」

やはり処女…私力?気にしたら首が飛んじやうゾ。

『録画班!録画班!!撮れた?撮れたのかい!?!え、そもそも録画班なんていない!』

「黙れ!幸せにしてやろうか!!」

『え?あ…うんごめんなさい?』

おっと、つい本音が出てしまった。

こうして、僅かな日常は過ぎていく。いやこれは日常なのか?



私は置いて行かれた。皇帝御一行様は帰還すべく帰った。私は置いてきぼり。清姫

は近くに居るが、問題はそこではない。問題は何故――

――私が清姫に拘束されているかだ!!?

何で毎度毎度恒例のように私を縛るの？

それと何で脱がしたんだ!?

脱がす必要も縛る必要も無いでしょ!

「包み隠さず全て言ってもらおう為です。それに気になっているのは私だけでは無いようです。見応えもあります」

「最後のが本音でしょうアンタ!」

「そうですか?」

「開き直んなア!」

清姫は口元を扇子で隠し、目をギラギラさせている。蛇に睨まれた蛙の様に動けない。物理的に!

「アタシは自分に拷問するまでとち狂って無いから。早く言う事言いなさいよ」

ここまで来て話さないでは恐らく許して貰えないだろう。

言うしかないのよエリザ! どうせ死んでも座に戻るだけ!! 死ぬなんて嫌だけど…本当に嫌だけど!!

「クツ! 『かくかくしかじか』よ……」

「は?」

「なるほど『エリちゃん可愛い』でしたか…」

「分かつちやうのアンタ!?!」

正直話するのは避けたかった。捉え方によっては清姫に嘘を吐いているのと同じだから。彼女が起こす炎は必ず私を焼くだろうから。

「事情はよく分かりました。ですが、私のやる事は変わりません」

「アタシは分かつてないんだけど!?!ねえ、ねえねえ!!」

「清姫…私はアンタに嘘を吐いていたのよ?」

「私がソレを嘘だと思っていない。それでいいじゃないですか?それとも、焼かれないのですか?」

最早押し黙るしかない。そして、感謝するしかない。

清姫に掛ける言葉は謝罪では無いだろう。

「ありがとう清姫」

「友人として、恋人として、妻として当然の事をしたままです」

「結局アタシは何もわかんないけどね!!」

そうと決まれば此処に縛られている必要も理由も無い、いや元々無いけれど。手錠程度で縛られる私では無いので、気合で引きちぎる。

「手錠の意味イ！何でアンタアタシなのにそんな力強いのよ!?て言うか、何で大人しく拘束されてたのよ!!!」

「いつもの事だから、ねえ?」

「そうですね。最早愛情表現としてはマンネリ化してない事も無いくらいですわ」

その後は真エリちゃんのおツッコミのおツッコミによるおツッコミのためおツッコミがおツッコミしたから割愛させていただきます。

一言の感想を述べるとしたら「疲れない?」です。

だがしかし、仮にも私のオリジナルに当たる存在な訳で、エリちゃん歴の先輩でもあるのだ。それに「何度も出てきて恥ずかしくないんですか」で有名なこの娘。

——ぶっちゃけ次会った時のフォローが面倒なことこの上ない。

我ながら面倒な娘だ。

まあ、自分の事だからこそ分かるというものだから複雑だな。

「まあ、アレよ真エリちゃん私。要は姉妹みたいなもの!」

「…姉妹、ふうん。そうか、そう……」

地団駄を踏んでいた真エリちゃんは急に大人しくなり、うんうんと何かを確かめる様に首を縦に振る。

「じゃあ姉妹でユニットを組めるのね!」

「お断りします」

「何でよッ!？」

「方向性の違いです」

これは事実。紛れもない、揺るがし様もない事実なのよ!

真エリちゃんは純正のアイドル志望、私はファンタジックな勇者系アイドル。方向性が違うし、組んでも速攻で脱退する。

「それに、そう言うのはマネージャーを通しなさいよ。アンタこの世界何年目?」

「マネージャー!?!アンタ私の妹のクセに専属マネージャーなんか居るの?何処に?」

アホの姉が聞くので、私は隣で微笑む清姫の肩を両手でポンツと叩く。

「アンタア!!?」

「私ですわ」

清姫は何処からか取り出した眼鏡を装着し、スケジュール帳を取り

出す。このスケジュール帳、私の机の中に入れて、『人L O V E!』のロゴが入っていたりする。

エリちゃんよくわかんない!

「そういう訳で、もう行くわ」

「うゝ、納得いかないわ。別に今からでも改めて聴いてあげてもいいのよ?お姉ちゃん

怒ってないから怒ってないから!!」

いきなり姉ぶってくる英霊は放っておくとして、予定はどうなっているのか確かめな  
いといけない。まあ十中八九特異点修復の為に子ジカと合流か、直接聖杯回収かだろ  
うけれど。

だが、正直に言うとは私は自分の強さを測りきれていない。明らかに本家ブレリちゃ  
んを超えるスペック、変化しているエリちゃんの設定、何処からか供給される魔力。  
その上私は正史に存在しないイレギュラー。どの様な影響があるかが分からない。  
結論はどうしても、敵本陣の単独突破はリスクー、子ジカと合流がベターと出る。

我儘を言ったらそんな状況は「つまんない」と本能がぼやく。

「難しい事を考えるのね。正直意外よ…気持ち悪い」

「さらりと心読んだ上に罵倒なんて良い趣味ねステンノ。それにその罵倒も理不尽でい  
いセンスよ」

「私もそう思うわ、ありがとう」

今まで隠れていたステンノが現れた。この女神、アサシンだけあって気配遮断A+。  
偶像アイドルとは、隠れ忍ぶことと見つけたり。

清姫はアホ真エリちゃんの子改め、アホ姉の子の対応に忙しいようでコチラには気付かない。

「それで何?」

「あら、私が本題を切り出すのを待てないの? つくづく不敬ねアナタ。メドゥーサでさえ待てくらい出来るのよ?」

いい加減妹さんが不憫で泣きそうです。もう許したげて……

「さて、冗談はソコソコに本題ね。女神らしく加護でもあげようと思うのよ。ありがとう頂戴することね」

「其の心は……」

神が優しくする時は厄介事もセットだと言うことを決して忘れてはいけない。彼女達はいつでも娯楽に飢えているのだから。

「そつちの方が楽しい」

「これだから神は嫌——チュツ——い……」

「——ご馳走様。精々楽しませてね?」

今起こった事態を説明しよう。

ステンノがいきなり左の首筋にキスをした。恐らく加護的な儀式の簡略なのだろうが、私にその手の知識が無い為保証は出来ず、女神ステンノの気まぐれから生じたいたずらと言う線も捨てきれない。

だが、注視して頂きたい事象はステンノの意思でも真意でもない。私にキスしたと言う、ステンノが行使した手段だ。



彼女は聞き逃さない。彼女はこういう時だけは異常なまでの地獄耳を働かせる。

「フフ……さつそく浮気ですか？もう首輪でも繋がないと自制出来ないのでしょうか？心配なさらずとも私もお揃いの物を着けますわ。もう何処にも……」

私に首輪着けて誰が喜ぶのだろうか。いや、結構居そうで怖い……これ以上この事を考えるときつと立ち直れないから止めよう。明らかに精神衛生上宜しくない。

だが、それより怖いのが目の前の清姫サンなのだが……

さて、此処でどのようなようにして生存するか、下手な選択肢を選ぶと即刻道場行きだから慎重にクールにだ。慌てるな、真の勇者は狼狽えない。

候補一、死んだフリ。予想結果、喰われる。意味は各々で補完して欲しい。

候補二、挑み倒す。予想結果、相手は最早ティアマトの如く死の概念が欠如している可能性がありません。

候補三、冷めるまで逃げ切る。予想結果、全力を出しましょう。

取るべき行動は一つ、後方に全力疾走！

魔力放出を推進力として使用。リソースを何時もより多く引つ張り出し、体内を循環。原理が分からない魔術を併用し強化、補強。

道無き道は素手で切り拓く。林を裂き、木々を倒し、岩石は砕く。

背中から発せられる熱量はこれだけでも消えてくれない。愛の獣は今も尚、変態機

動をもつて迫る。

確かに目指すべき道は分からない。だが今は、首の熱いモノに導かれている。そこが敵地なのかも理解できないが、明らかに女神の企み事の上なのだろうと理解。

「■珍■ア■ーッツツ!!」

チヨロい、チヨロすぎるぞ清姫サン。スイツチがぶち壊れていたのは最初から知ってはいた。だが、だが大よ!たかだかキスだろう。それくらいは許せ!!

…ヤバいな、思考が完全にクズ男だ。体は美少女だけど。

バサカ狂戦士の正しい姿を晒す清姫は愛憎塗れる咆吼を止めない。時折火の渦が辺りを焦がすのだから愛も憎しみもかなりのモノだろう。

墓穴を掘ったら何故か地球を貫通したみたいだ。下手人は勿論ステンノ、全くこれだから神って奴は嫌いなんだ。

— 試しに少しだけ振り返る。

「安珍安珍安珍安珍安珍安珍——■珍安珍安■——アアア——ツツ」

「!!!!」  
「ビャー!?!」

手から時折火球を出して推進力を得、反り立つ岩や木々を足場に立体機動を実現。足場は清姫が踏み締め、蹴った瞬間に粉碎。だと言うのに、彼女の着物は乱れない。乱れ

ているのは顔だけである。顔に掛かる厚く漆黒の影に、三日月に割れる口に縦割れの瞳孔はいつにも増してギラギラと光っている。

防御デバフが掛かったな辛い。

「神なんて大ッ嫌いだアーーーーッ!!!」

最後に響く声は虚しく木霊する。

同時に女神がクスクス笑う声が聞こえた気がした。

## 勇者の必須スキルはトラブル体質である。

私は嫌いな事が多い人生だった。また、好きな事も多い人生でもあった。まあ言ってしまうえば凡庸の感性を持っていた。

だが、私にだって他と違う個性という物は存在した…はずだ。

私の信念。と言うより理解し難い内容が周りの者にとつて違和感だったらしい。らしいとはつまり、私は今でも理解できないのだ。

——悪役は何で悪役であるのか…

え？何で自分語りを始めたか？

勇者にバックストーリー無しはどうかかなと思って。

「お待ちになつて下さい。然もなくばどんな事をしてでも、どんな事を、してでも…フフ、フフフフ。どんな事も、どんな事でも、何をしても、何をしても…捕まえに行きますね？」

あと、今のうちに言っておかないと一生語る機会が無さそうだから。もちろん、現在進行形で限界を超えて失踪中なのだけれど。所謂、遺書的な何かだと思つて欲しい。

清姫は定められたステータスを超越している。魔力放出で筋力と速力を得た私には

んの少しだけだが迫っているのだから。

擬音を付けるのならば、私は『シュツシュツ』、清姫は『ズズズズ』という具合だろう。正直、明らかに可笑しい上に正気を失いそうな音だ。

本のページを高速で捲っていくように景色は移り変わり、やがて、人工的建造物が建てられた場所に移る。

「砦？城？良く分かんないけど鐘よりは圧倒的にマシよね！」

剣を地面に突き刺し無理矢理方向転換。その際に、軽く地鳴りが起こったが、最早気にしていられる余裕など無かった。清姫は私の動きを機敏に感じ取り直線的に迫って来ることよって距離を縮めて来た。

地を裂き、空を裂き、時空をも裂く勢いで走る。目指すべき場所は定めた。あとは一心不乱に走り続けるだけでいい猪突猛進で何も省みるな。脇目も振らず進まなければ色々失うだろう。

——主に貞操とか尊厳とか!!

私は走り、そしてぶつかつた。

「わぶっ!？」

「グヌツ…」

目を瞑っていても分かる。いや、分かってしまった方が適当だろう。ソレはま

さしく筋肉だ。

頼りになる壁だと、私は合理的に考えてしまった。

「助けて！」

私は全力で媚びた。上目遣いに涙を浮かべ、小さい背を活かして可愛らしく跳ねる。恥も外聞も最早関係ない。私は安珍愛じんあいより逃走中であるからだ。

だがしかし、私は更なる衝撃を受けることになる。

「落ちて着け童女ローマよ。そして安堵の息を漏らせ。慌てる必要は無い。私が居る」

浅黒く彫りの深い顔、男らしい顔には薄い笑みがある。持つ得物は棒にも見えるが槍、それも神秘を感じるとなれば宝具。宝具となれば英霊。

ここまで情報が揃えば、弾き出される答えは簡単だった。

——ローマである。

「ローマア!？」

「然り。私はローマである。故に大海の如く広い器を持つてお前を受け入れよう。全てはローマから生じ、ローマに還るのだから」

いや、敵だよね。普通は即刻討ち捕えられる所だよね？

呉越同舟だなんて熟語があるが、本当に起こり得るかは疑問だった。だが、ローマは喜んで助けてくれる…

——ローマは素晴らしいのだわ！  
チヨロイ？どうとでも言うがいい。

私は賢いアイドルなのだよ。と言うか、助けを求めなければやられるのはコチラなのだから当然。

勇者としてどうなのか？

いや、勇者はプライベートまで勇者では無い筈、きつと日々修羅場から生き残るので一杯一杯だろう。

それに私はアイドル系勇者なのか、勇者系アイドルなのか曖昧であり、つまり何が言いたいのかと言うと…

——もう放つて置いてよ!!

故に私は己が本能に従い、ローマのマントに身を隠すのだ。

「友達が狂戦士らしくバーサーカーバーサーカーしてるのよ。止めたいけど私じゃ無理で！それでそれで——」

「もう良い童女ローマよ。狂気もまたローマ。愛もまたローマなのだ。さあ来るがいい！——ローマ！である！」

ロムルスは槍を強く地面に突き立てる。

迫る清姫はその行動を訝しむ事なく、正面切つて駆け抜けようとする。否、最早彼女

には訝しむ事が出来ないのだ。今の彼女は狂戦士<sup>ハイサーカー</sup>。目的に狂氣的な愚直さを持って突き進むのみだ。

だが、その歩みは強制的に止められる。

清姫の眼前に森が現れた。それは紛れも無いローマだ。放たれる気は宝具による物だと激しく主張する。

驚くべきは規模だ。こちら側からは清姫が確認出来ず、ただ其処の居るのだという気配があるのみ。槍から扇形に広がる木々は今も尚成長を続け、更に更にとうねりながら主張を止めない。

「…腕飯振る舞いね」

正直に言う。

ここまでしなくてもいいのでは!?

目の前には最早木しか映らない惨状。これを一騎のサーヴァントが一騎のサーヴァントにしていると考えたら白目を剥いてしまいそうだ。

「ほお、突き進んで来るか！それもまた愛ゆえに<sup>ロイヤ</sup>！」

「え？」

感じるのは圧倒的な熱量と焦げた臭い。覗くのは白い鱗に爆炎。巨木に囲まれていても更なる巨大を持って塗り変えるストークキングが得意な竜。



眼には眼を歯には歯を——宝具には宝具を……

彼女は躊躇いもなく少女の姿を竜に転身させ、木に含まれる水分を干上がらせ、燃やし尽くし、絡まる太い枝も硬化した身体を用いて粉碎す。

「マツナ・ウオルイツセ・マツヌム全ては我が槍に通ずる！」

ロムルスは号令を掛ける。木々をはソレに呼応し清姫を呑み込もうとする。

だが、その度に碎かれ、その度に燃やし尽くされる。

周りの者にとつてはまさしく厄災以外の何物でもない。潜んでいた連合軍の兵たちは紙吹雪のように散っていく。

場は荒れながらも膠着状態に陥っていると思われた。

「せ、先輩！またです。また来ます！」

「何でそうなるのお!? ヒイ！燃える燃えるツ!!」

「何がどうなっているのだコレは!? 竜? 神祖ロムルス!? 派手好きな余でもここまで来ると手に負えんぞ！」

悲しい事にこの世界の主人公も太刀打ちできないらしい。マシユは燃える大木を退け、自らのマスターを守っている。

ネロも便乗して守られているが、どう見ても隠れて切れていない。

「アレがローマの子を率いる皇帝か、美しいな。嗚呼実に！さあお前も来るといい！我

が袂に飛び込み、ローマと共に在ろう…」

「バック！アンタそんな言ってる場合じゃないでしょ!?狂化されてんの?」

「おお、神祖よ。余は、余は如何様にすれば!」

ネロはロムルスをキチンと認識した事により迷う。彼女からすればロムルスとは正しく神。彼女は神に逆らうか否かの選択を迫られている。

でも、私としてはどうでもいい。至極どうでもいい!ただ、迷う時間等無い中でオロオロする皇帝には腹が立つ。

「アンタも迷ってんじゃないわよ!」

「エ、エリザ!?何故神祖の股座に?」

「安全だからよ!!」

コチラには流れ弾は来ない。と言うか来ても弾かれる。私安全。まさに計画通り!!

何処と無く私は胸を張る。え?張る胸は無い?逆に有ったらエリちゃんじゃあ無い気がするんだ……

「そんな事より何迷ってんのよ?」

「しかし、神祖だぞ?建国王ロムルスその人が余の前に居るのだぞ?それだけは無いと、首魁は神祖である筈はないと信じたくとも現状がそれを否定しているのだ!正直に言おう!余は直ぐにでも平伏したい!」

「じゃあ何で直ぐにでもそうしないの？迷ってる時間が無い事くらい分かるでしょ！もうフィナーレはまだかなの!!アイドルが歌詞と振り付けを忘れたからって終わっていない訳ないじゃない。アドリブでも何でもして輝くのよ！アンタがアイドルなら魅せなさい！プロデューサーにアンタの皇帝としての在り方を！」

「――」

ネロは俯いた。そして同時に剣を取った。

「余は第5代皇帝ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクス！神祖よ！余は貴方に挑戦する!!」

ロムルスは小刻みに震える。それすなわち股間も震えているので止めて欲しい。

そして笑みを噛み殺し、ロムルスは言い放つ。

「何故に私の言葉を拒むのか？」

「ローマが為に！」

「――見事ッ!!」

それ以外の言葉は不要なようで、ローマという言葉の万能さを思い知った。

だが、そのような隙を晒せばどうなるかまでは思い至っていない。

どうなるか？彼女が動くのさ。

――嫉妬の竜が！

ネロのターゲット集中はロムルスにとって圧倒的な効果を発揮した。其処で生まれる大きな隙は私にとって致命的で、清姫とっては絶好の機会である。いや正直、清姫が機会等という空気が読める状態では無いのだがソレはソレ。

そう、結論だけ述べるなら：

「コツチ来たアアアー!!」

私はロムルス戦線を放棄。砦内部に後退し弾幕を張り、耐久戦を挑む。作戦はこれしか無い！

あれだけの出力だ。恐らく魔力消費量は相当な物のハズ……

覆い被さっているマントを振り払い、クラウチングスタートからの全力疾走。ロムルスをデコイにするべく音は軽微に抑える。

高鳴る心音。

碎かれる大地。

響く警戒音――

――いやこの音は私の音ではない。

「居るって言うの？其処に!？」

巨大な白を瞳に捉えるその瞬間、身体全体を襲う衝撃と熱気。ぶつかっているのだ、あの竜の頭部が。

私の矮軀はその様な質量に耐えられる訳も無く持つて行かれる。地面から遠のいたこの身では踏ん張りもきかず、密かにあつたりする翼を展開しても無意味だろう。

「グググッ!!体当たりとか、そんな初期技で倒せるとでmーグハツ!」

あえなく目指した砦に激突。当たり前のようにエリちゃん型の穴が空き、追撃をする様に清姫の頭部が更なる大きな穴を空ける。

受け身など取れないので無様に転がる。

最終的には石の柱に強く打ち付けられ止まる。

しかし、何時までも倒れている場合では無い。未だ清姫は乱心清姫サンモードだ。リーチ大回転は確定していない。へべれけの方が安牌とは恐れ入った。

「いやはや全く、何事にも例外は存在するモノだが。些かやり過ぎたな可愛らしい勇者くん」

響くのはCV杉〇。とてもでは無いが、私や清姫には出せないその声。場所から鑑みるに候補は一人。

モスグリーンのタキシードにシルクハットを被り、赤みが混じる髪色の青年。

そう――

――フラウロス  
節穴さんだ!!

少々派手に動き過ぎたらしい。この男が動くには速すぎる。いや、ネロとロムルスがぶつかり合うのを早めてしまったのだから節穴さんが動くのも道理かもしれない。

何はともあれ魔神柱：

狩らねば全国のFGOユーザーに鼻で笑われるというもの。

「一狩り行くーキヤー!？」

最近は何故か味方に有り、理由は襲われたからと言う意味不明さ。

今回も勿論味方からの強襲。

私は清姫に馬乗りになられている。

汗と唾液が混じり合った粘液が私の顔にポタポタと降りかかり、噎せ返る程の甘ったるい吐息が私の鼻を刺激する。

「…つと捕まえました。捕まえましたよお！煮るなり焼くなり私の自由。捕まえた褒美位、せがんでも構いませんよね？いいえ構うものですか！私の自由ですもの!!——アハア……」

恍惚の表情を浮かべる清姫。男なら喜ぶ所だが、時と場所を弁えるべきと考える私である。

「フンツ、所詮自滅の道を歩む愚者に過ぎないか。私が手を下す価値さえない……いや、元より人如き淘汰されるだけの存在。王も何故……これ以上は不敬か……」

すると彼は徐ろに金色の杯を取り出した。

「どちらにしても出る杭は打たれるもの。ここで退場するといいい。なに、良い経験だ。愚者は愚者らしく経験から学びたまえ——無駄な事だがな！」

高まり吹き荒れる魔力、虹の光球は激しく回転、乱れる清姫、収束し形作られるエーテルの身体、ペロリスト化する清姫、轟音響かせるこの空間はまさに混沌。

「此処に顕現するは神の鞭。貴様らに勝てる道理もないな！ではまた会うこともないが、さらばだ。崇高な理想を実現する為に忙しいのでね」

そう言つて立ち去つて行く。

彼が立ち去つた後に残る者は、軍神の剣の切っ先を私たちに向ける少女だけ。その目には感情の光が射しているのかさえ微妙で、ただ分かるのは破壊すると言う一種の使命感<sup>敬</sup>だけだ。

「我が名はアルテラ。これより貴様らを破壊する」

息つく間も与えず繰り出される変幻自在の剣。鞭の様に撓り襲い掛かるソレは恐ろしく速く、読み難い。

だが、其処にばかり気を取られてかコチラ側の行動に思考が割けなかった。

彼女は狂戦士<sup>バーサーカー</sup>。愛に生きる少女。清姫サンにとってはアルテラさえ意識の外にある存在。いや、正しくは邪魔者とカテゴライズされるだけか。

触れた。

柔らかい何かを。

唇に…

咥内に……

生理現象から涙が漏れ、息苦しい。時折漏れる嬌声はどちらのモノか…

「スキル発動」

「——焰色の接吻」

彼女は恐ろしく熱かった。



## 愛ドル♡ドラゴンズ

唇を飛ばされ、唾内を蹂躪された。

今までの鬱憤を全て晴らそうと必死に貪られ、軋む音が響く程抱き締められる。身体が緊張し、弛緩する。身体は疎か、腕まで垂れ下がっている。指先もピクピクと動くのみ。感覚が若干麻痺しているようだが尻尾は常にピンツと張り詰めているのが分かる。

自分では分からないが、口はだらしなく開け放たれ、唾液や涙が顔を無茶苦茶にしている事だろう。アイドルらしからぬ状態は恥じ入るばかりだ。

鼓動が内側から鼓膜を強く打つ。激しく上下する胸を見るに、私の心臓はそれなりに忙しいと見える。私の中のモノがゴツソリ持つていかれたが為にこの様な醜態を晒している訳だが元凶である清姫も現在では忙しいらしく私を抱えて抗戦中だ。

相手はフンヌの王、軍神マルスの剣をブンブン振り回す破壊の徒アルテラ。対して清姫、炎のオーラと言うべき纏い。触れても―私は―熱くないが、アルテラはどうやら違いうで、清姫が接近する度に後方に大きく飛び、中距離戦を維持しようとする。

「くう——ッ!!」

中距離戦を挑もうともアルテラはセイバー、近距離こそ本領を発揮する。だが、清姫

は純粹の武など無く、元より中距離戦が主だと言える。故に、アルテラは術中に嵌らざるを得ない状況の様だった。

「燃えなさいー！」

アルテラが中距離戦において不得手であると察した清姫は即座に炎で陣を組む。言うなれば炎の檻、逃げ場を徹底して潰し、高威力のブレスを吐き出すつもりなのだろう。

『軍神の剣』——ツ!!』

剣先を中心に螺旋を描き、炎を割いた。

檻にもポツカリと穴が空き、晴れていく。

そして、勢いをそのままアルテラは清姫に最大限の攻撃を放つ。

このままでは清姫に当たり消滅するだろう。私はソレを許容出来ない。してはいけない。彼女は友達なのだから助けなければならぬ。私にはソレを許容出来ない。してはいけない。彼女は友達なのだから助けなければならぬ。

なけなしの魔力を喉に注ごう。身体は動かずとも喉は止まらない。——さあエリザ! 心往くまで歌おう。それが彼女の力になると信じて!!

『——、——、——ツツ!!』

歌ったのはローマへ今日までの気持ちだ。今回で大きくローマへの印象は変わった。それも何度も何度もグルグルと、そして気が付いた——

『——アイドルもまたローマなのよ!』

ならば曲に乗せて綴り囀らなければならない。アイドル故に。

最早形も残されていない砦、火に焼かれレーザー的なモノで残骸にモデルチェンジ。劇的なビフォーアフターを遂げている。

アルテラが一切合切を薙ぎ払い突き進んで来る。

—— 5 m ::

サビには入らない。

だが、紙にインクを一滴、また一滴と垂らされ滲む様に、魔力が大気に満ちていく様な不思議な感覚がある。

—— 4 m ::

サビには入らない。

私の薄く開かれた瞳には黄金に輝く粒子が見える。フワフワと浮いているソレは周りを侵食し、景色を荘厳に変えていく。

—— 3 m ::

サビに入る。

私に黄金の粒子が触れる。すると、スーッと溶けていき、満たされる。そう、満たされる。内にある容器が黄金で満たされるイメージで、容器さえも黄金に点滅する。

溢れる。最早黄金に染まりきった器では無尽蔵に湧き出る黄金を収めきれない。



私が勇者であり続ける限り守る事を放棄しない。

「何故…何故破壊されない!？」

何故か、と来たか。私は明確な答えを用意してある。だが—

「生まれえ—!!!」

言つてやる暇なぞ皆無である。格好付けたい、目立ちたい、ファンサービスも上等。

だが待たれよ親愛なる子ブタ諸君。

「格好つけたわりに余裕ですわね…」

「言うんじゃ、無いわ…よおお!!」

清姫は汗でダラダラの背中を撫でる。

いや撫でてるよね? 舐めて無いよね? そこんところは信用も信頼も無いからねアン

タ。て言うか手伝つてよツ!!

ついでに歌は歌い切りました。アイドルだからね、当然よね! え? アンコール? 現状

を見てものを言いやがれです!?

既に若は更地に成っているが、好都合だったかも知れない。この衝撃では足場から崩

壊し生き埋めは確実だったはず、今でも地面陥没で危うい状態なのだから笑えない冗談

だ。

「クッ—!？」

アルテラがよろけた。当然だと言えるが…

なんせ長時間持続して宝具を解放しているのだから。正直ここまで耐久して無理でしたは鬼畜ゲーも真つ青なレベル。私だったら運営に抗議の連絡を入れてしまおうね。

「私の―ゼエゼエ、勝―ゼエ―ち、よ」

「バテバテじゃないですか…」

「ほつときなさいよー!」

アルテラは聖杯（まがたま）無しの無茶な宝具使用で消滅寸前。勇ましく立てているのが不思議なレベルである。

「我が軍神（マルス）の剣でも破壊出来ない存在があるとはな。フフ、何処か―嬉しい…私は嬉しい」

「だが、やはり分からない。何故私はお前達を破壊出来なかった?」

アルテラは真つ直ぐな視線を私へと向ける。真剣なソレを受けた私は文字通り温めておいた言葉を投げかける。

「―勇者系アイドルだからよ!!」

「アイ、ドル? そうか、アイドルか…それは良い、文明だな…」

アルテラはそう言い残し消滅した。

「未来でも潰えないジャンルなんだから、当然でしょ?」

「そうですね、私たちの愛は永遠ですもの」

「ハア…アンタ何時まで赤いのよ？」

「永遠です！」

清姫は今なお轟々とトランザムモード続行。本人曰く『永遠』だとかなんとか。バスター強化がどの程度なのか分からないが、状態異常付与攻撃とか、与ダメージも増えていそうだ。

「でも不便…正直やりづらいわよソレ。どうにかなんないの？」

「一発大技が撃てれば収まるかと…たぶん」

たぶんとか聞こえたが手掛かりもないので採用。取り敢えず的を探す。

「的、的はつと…んん？」

肉の柱が一本立っていた。

「的だわ……」

「絶好の的ですね…」

フラウロス節穴は身体を巨大化させた上に死角なしの筈な視界を全て主人公勢へと向けている。敵の動作を見逃さんとしているのだからそれがそれ以外が御座なり。奇襲の対策を他に取つてあるのか慢心なのかは不明だが、どっちにしろ私たちは眼中に無いかのような振る舞いはカチンと来る。

「清姫。炭にしましようアレ！すっごい気に障るんですけど!!」

「はあい、了解致しました。火急速やかに灰燼へと変えましょう」

軽いノリで全力の火炎を吐き出す清姫。私も便乗して吐き出す。距離はそれほど離れていない為難無く直撃した。

「ぐうううわあああああああああああああああああああああああ……ッッッ  
!!!??」  
「ウツプ……」

炎を吐き出す感覚に酔いながら、節穴さんを見る。

それは見事に炎上している。

「むう、エリザ。まだ収まらないようです…」

「じゃあもう一発行つとく？」

まだ赤い清姫に焦げた節穴さんを勧める。

「貴様、また貴様か!? 何度も何度も…ただの英霊風情が、魔神たる私に何をs!!!——ぐうあああああああああああああああああああ……ッッ!!!」

「目が焼け、水分が蒸発する感覚を常人の数倍で味わえるなんて、凄いのね?! えっと、

魔神さん？」

最早嫌味への返答は無かった。

「終わったの？」



「魔神柱の沈黙を確認。ドクター、そっちの反応はどうでしょう?」

『こつちでも確認出来ているよ!おめでとう皆!!』

カルデアでは歓声が上がっているらしく騒がしい声がホログラフィーから漏れている。

「終わった、か」

「神祖!余は、余は良きローマ皇帝であつたらうか?」

「ウム、<sup>ローマ</sup>私が認めよう。ネロ・クラウディウスは良きローマ皇帝であると」

ローマは何故か神祖がパーティに入つて戦闘をしていたらしい。

そして私たちはと言うと…

「これが聖杯?何か小さくない?」

「持ち運びやすい様に改良したのでは?近代では小型化が流行っていると情報があります。何でも小さくしたくなるお年頃だったのでしよう」

「王様自称する割にミーハーね…いや、だからこそ王様なのかしら?」

死体漁りを早々に済ませた私たち勇者一行は、聖杯を片手に談笑する。綺麗な杯片手に談笑つて優雅で素敵ネ!

私たち手柄泥棒していた様な気もするけれど、咎められる雰囲気でも無いみたい。まあ、小競り合いを繰り返していた様に見えたから案外助力を感謝されているかもしれない。

ない。

そんな事を考えていたら子ジカが走り寄ってくー

「エリちゃーん！！」

「キャアーーーーッツツ??」

「ありがとうエリちゃーん！！」

「分かったから降ろしなさいよお！！」

子ジカは私の脇に手を突っ込み、持ち上げ、グルングルン回り出す。少々ワイルド過ぎる彼女は喜びをカラダいっぱいに表示したいらしい。

「あ、清姫さん聖杯ありがとうございます」

「私は何も、エリザが見つけたのでお礼ならエリザにどうぞ」

「ありがとうございますエリザベートさん」

「分かったからコイツ止めなさい…ウツプ」

炎吐いた時の酔いがぶり返し始めた。このままではアイドルに相応しくない表現がオンラインしてしまう。何としてでも耐えなければならぬ。てかこの子ジカ止めろ

!!

「ア…」

「ア？」

諸君、脇とは何処にある？いや、馬鹿にしているのではない、これは確認だ。脇とは粗野な言い方をすれば肩の下あたりにある訳だけれど、私の肩には某野菜人の様な肩パットがある。そして、心許ない胸当て的なビキニが吊り下げられているわけだよ。

まあ――

――ずり落ちるよネ!!

「こんの……馬鹿子ジカアアアツツ!!!」

「ラッキースケープツフェー!!!?」

私の尖った蹴りが子ジカの鳩尾辺りを穿つ。本気出したら下半身と上半身がさよならバイバイするので抑えたが、正直良く我慢したなと思った。

そして、私はビキニを元に戻す。なお、子ジカは脇から手を引かない。彼女は一体何に突き動かされているのだろう。

「お茶の間の皆のために……ガクリ」

「先輩……!!?」

などと訳の分からない供述をしており、余罪がないか調査中です。

「清姫。帰るわよ！」

「ハイ、今晩は何になさいます？」

時間の概念がフワフワなのだから朝昼晩も何もあつたものではないが、まあ気持ちの問題だから私としては重要なことだ。

「赤いモノ」

「分かりました一緒に作りましょう！」

「何作つても赤くなるならいいけれど……」

「エリザと作つたものならば何でも愛せます。ですから子供は何人？男の子と女の子の比率は？一姫二太郎が良いとは聞きますが私としてはエリザ似の女の子が欲しい……でも男の子でものーぷろぶれむですわね！和服洋服えとせとら、色々な服を作りませんと！こうしては居られませんね早速帰らなければ!!」

「いや、女同士……」

子供なんて出来る訳でもなく、正直興奮もあつたものではない年齢固定。それと英霊が子供なんて産める筈も無い。出来るのは魔力供給だけなのであしからず。

「実はちよつとしたコネがありまして……尋ねたところ呪術なら可能との事です。何も問題はありせんね！」

「問題だらけというか、問題だけと言うか……取り敢えず落ち着いて清姫。目が据わつていて怖いんですけど!？」

「天井のシミを数えている間に終わりますよ! えつとお、まずは何から始めるべきなのでしょう……」

懐から電子機器の様な紙を取り出す清姫。コイツメル友に尋ねる気満々である。

その辺から強制退去が始まる。指先から色が抜け始めキラキラと魔力に還元され始める。清姫が早まる前に終わって欲しいものだ。

「むう、返信が来ませんね……通話に切り替えましょうか?」

「待つて清姫! 別に焦ることも無いでしょうし、子供はズツと先で、いやもう要らないままで有るんじゃない?」

「そんな訳にも……あ、繋がりました。——タマモさんいきなり連絡してしまいました申し訳ありませんね。この間の件で……ええええ、旦那様からも許可が——」

——して無いわよ!

言葉は出ない。先に座に退去してしまったからだ。

そこからの行動は速い。窓を締切、扉に鍵を掛けた上に家具で塞ぐ。清姫対策は万全の耐火付与。

「フウ、これで大丈夫でしょ」

「お疲れ様です。お茶を入れましたよ」  
「ありがとう清姫。……清姫？」

「はあい。アナタの清姫です！」

## 諦めは時に試合開始になる

? 私の名前は勇者エリザベート・バートリー。流麗な詩を歓喜呼ぶ歌声を持って豚共ファンに届けるアイドルでありながら、可憐で鮮やかに美しく世界を救う真紅の勇者。

? 斯くして、その真実の姿とは――

? ――ただの美少女である。

「急にキメ顔…どうなさいました?」

「二期だところこういうのが要るのよ!」

「二期?」

? お茶を注ぎ足す清姫は困惑していた。だが思い出したかのようにビデオカメラを取り出して来る彼女は狂愛者だからなのか、それとも慣れてしまったからなのか…

? 注がれた緑ロビンフットでは無い茶を一口。

? 「ふう……」

? 前回で私は学んだ。特異点への営業は強制であり、どのような手段を講じても無駄

無駄。最終的に特異点の修正を果たさなければならぬ。

？私が居なくとも子ジカが何とかしてくれるとは思わない。恐らく私が居てこそ廻る世界線なのだろう。私中心に廻る世界と考えたら悪い気はしないでも無いが、ちよつぱり怖い。

？

？そして、私は案外強いのかも知れない。

？これが今までで一番の収穫であるだろう。と言つても、力だけならばと言う形容詞が入る。

？その力を扱う技量などエリザベ<sup>ア</sup>ト<sup>シ</sup>に、ましてや私にも無い。

？カタログだけでは読み取りきれない事柄もあるけれど、そのカタログさえあれば最大限と最低限は予想できるとも言える。

？だが、カタログをも消失している私ではどうする事もできない。

？それ即ち、自分で自分が何を出来るのかが曖昧という事である。今思えば、私の生命線である二種類の魔力放出も勢いで発動していたのを思い出す。なお、カタログが消失したと発言するに至る起因はこの二種類の魔力放出によるものだ。

？結論を短く纏めるならば――



?—力は声は良あるが扱いう技が量は拙歌く脆はいものである音痴。

?そして—

?—時々歌が上手い時があり結局よく分かんない。その力もどこまでの物なのかが測りきれない。

? コレに危機感を持たない程楽道家では無いつもりだ。第一特異点は歌でデストロイ、第二特異点はローマでローマした。

?だが、所詮運が良かっただけだ。選択肢を一つ違えば死ぬのが型月、今までよく生き残ったものだと言沁沁思う…

「…ねえ清姫」

「夜伽のお誘いでしたら直ぐにでも用意致しますよ?」

? セプテム終了からこの感じだ。淫乱狐は許せんよな。

「しないわよそんなのツ! ってそうじゃなくてね。日記とかって付けてるのかなっていきなり可笑しな質問して悪いけど、必要だから答えて欲しいのよ」

? 清姫は「本当にいきなりですね」と言ったが「まあ隠す事でも無いですし」と言つて懐からノートに取り出した。

「エリザは時々どうしようも無くだらしないので、此処に留めて居るんですよ」

? そう言うって取り出したノートにはジャプニカと書かれていた。

「読み上げましょうか?」

「…いえ、結構です」

? そう言うとうと清姫はアイアン・メイデンに入れられ俯いた私がプリントされているノートを懐に戻した。

? ふくしゅうと記載された下、名前の欄に清姫と丸っこい字で書かれていたので本当に彼女が所有しているのだろう。

? 共通点が一つ有ったから聞いた。

? しかし、知らなくとも良かったかもしれないと後悔の念が頭の中で高速スピニングしている。

? サーヴァントじゃなかったら確実に殺られていた。衛宮士郎の様な逸般人でなくて良かった。

? 『―勇者よ海だ海に行くのだ。』

? 頭に直接声が響く。声は善悪老若男女入り交じった声だ。

? 心做しかノイズが多い気がしたが今はお仕事に集中した方がいいだろうと切り替

えた。

「清姫。次の営業先は海らしいわよ！水着撮影とかあるかも!!」

「海…夏の魔物に夫婦のアレやソレ。タマモさんの言ったシチュエーションですね!」

? ——淫乱狐え!!?

? 心の叫びが薄い胸の中を木霊する。

? 実は案外純真だった清姫が、経験豊富な良妻希望の狐に色々吹き込まれている事実に辟易とする。

? 『—さあ世界をまた救—』 『—デュフツ』

? 声が変わった。怖気が身体を走り、強い嫌悪感を呼ぶ声だった。

? 『—デュフフフ…』

? 引つ張られる。何時もとは違うねっとりした風が私の身体を舐める。気持ちが悪くて気持ちが悪くて頭が痛くなりそうだ。

? これは召喚による現象だと理解できてはいるが、受け入れ難いと脳では考えているらしい。それも仕方無し、それだけ嫌なのだから。

「清姫?」

? 清姫は私の手をそつと握った。嫌悪感を慈愛で拭われていく気がした。やはり私は彼女に絆されているのかもかもしれないと握り返しながら思った。

「何処までも私は付いて行きます」

「本当にアンタって馬鹿…この先は地獄よ?」

「いずれは一人で行く所だと思つていましたのよ? 貴女と行けるのならばきつと素晴らしい場所に成りますわ。ええ、きつとそう…」

? この先は間違い無く地獄。だがしかし、身体は軽かった。

「狂つてるわ…アンタも私も」

「あら、お揃いですね?」

? 彼女は嬉しそうに笑った。本当に嬉しそうだ。

? 覚悟は決まった。

? 私は引力に従つて召喚されてやる事にした。と言ってもあの声を遮つて召喚されようとしているので拒んでも無理だ。

? ただ盾は用意しておこう。

?



? 魔力の暴風吹き荒れ、潮の香りが鼻を衝く。

? もう慣れ始めた召喚の瞬間。ネバネバネットと粘性が付与された視線が向いている事以外は概ね今までと同じ。

「デュフフ。潮風に運ばれて馨しいか・ほ・り。くうーたまんねえ! さあさあプリチーなお顔をプリーズでござる!!」

? 思わず尻尾を強く甲板に打ち付けた。マナーの守れない豚も居るだろう。だがこれは厄介なソレと比較にならない。握手会で会ったが最期、シヨック死を覚悟する程の嫌悪感を呼び覚ます。

? まさに天災。

? 彼が最も有名な大海賊と恐れられる所以とはソコにあるのかもしれないと本気で思う。

「モン娘キターーッ!! しかもビキニアーマーとは担当者分かってますなあ。ア、ア、ア、尻尾舐め回したいでござるう!」

「ヒッ!」

? 間違い無く変態だ。アレは変態だ! 変態だア!?

「変態?! 変態よ! 変態が居るわア!!? 助けて監禁されちゃうー! 躰り寄り来ないで謎の物体X——ッ!!」

? 黒髭謎の物体Xは両手を広げ、四股を踏んで寄ってくる。顔は下品に歪み、これから悪い事をしますと自己表明しているようだ。

? 火柱が立った。

? 轟々と激しく燃える焰は黒髭の開かれた股を中心に展開する。

? それが数メートルの柱を立てたのだ。

「ぬうわっー!!?」

「無断のお触りは禁止されています。握手が精々でしょう…その握手権もCDを購入し、抽選会に参加して、当選者のみが見られるものです。それも無く触れよう等と、あまつさえ尾を舐め回したいとまで宣いましたね?—合法的に舐め回せる道理が私以外にある訳が無いでしょう!!」

「アンタにも無いわ——ツツツ!!!」

? 火を鎮火しようと局部を手で払う黒髭。

? 真面目に巫山戯た事を言い出す清姫。

? ツツコミを入れる私。

? 黒髭の奥には船員とアンにメアリー、ヘクトールがいた。血斧王けっふおうは居なかった。

? 取り敢えず黒髭と距離を置くために奥に駆け込む。

「やあ不幸何て言葉じゃ抑えられないくらい災難だったね。僕はメアリー、こっちはア

んだ。よろしく新人さん。アイツは見ての通り汚物だから適当な罵詈雑言を投げ付けてやってくれ」

「あらメアリー。あんなのどの様な罵詈雑言を浴びせたって最終的に浴びせた罵詈雑言が可哀想になるだけですわ。だからもう黒髭と言う固有名詞を罵倒の言葉にしましょ？」

「そうだね。じゃあ改めて、アイツにはこの世全ての嫌悪を込めて黒髭と言ってやってくれ」

？ 小柄の少女と色々大きい女性がそう言った。スマホを通して見てた分には黒髭に辛辣すぎると思っていたが、妥当を通り越して足りないと今では思う。

？ 『会ったら思ったよりイケメンでした』の逆バージョン、『会ったら思ったよりキモかった』というわけだ。

？ 恙無く自己紹介を終えると清姫がやって来た。後方には人型の炭があったが私は木炭だろうと見切りをつけ、清姫を紹介した。

？ 特に盛り上がりも無い簡素な紹介だったが、今までが濃口過ぎたと思う。

「それで、私たちは何すればいいの？ 海上ライブならセットを組み上げないといけないんだけど」

「私たちは聖杯を狙っているの。だけど既に他所が持つて行ったみたいだから、それは

それ、海賊らしく奪っちゃいましょうって寸法よ」

「黒髭は女神様の方がお気に召してる様だけどね」

「その時は私たちだけで聖杯を使っちゃえば良いんじゃないかしら？」

「？私は聖杯にこれといった願望を持ち合わせていない。言ってみてビキニアーマーの呪いを解き、自由気ままに服を選び着ると言った感じだ。

「？いや、正直それが叶ったらどれ程いいか…」

「別にオジサンは必要無いけどねえ〜」

「？ヘクトールは槍を肩に預けてそう言ってくる。

「？私はそつと後ろに回っておく。

「ん？なにしてんの嬢ちゃん…」

「黒髭が起き上がった時の盾にしようかと…」

「えげつないなあ。まあ良いけどね、守る事にやあ一家言持つてるし」

「？ヘクトールは皮肉げに笑った。

「？木炭が跳ねるように動いた。まるで魚が陸に揚げられてしまった様に甲板を叩いた。

「？そして、次の瞬間には尺取虫や芋虫の様に地を這って接近してくる。真っ直ぐこちらに…」



「死んだかと思つたア！拙者ウエルダンよりレア派ですぞ！」  
「チツ」

？起き上がり、人語を用いた発声をしだした木炭に対して舌打ちをしたのは誰だつたらうか。アンだつた様な、メアリーだつた様な気もするし、もしかしたら、齒を恐怖で鳴らしながら舌打ちをすると云う高等技術を天才な私がしてしまったのかもしれない。

？ただ言える事がある。

？清姫は舌打ちをしていないという事だ。

「フフフ…」

？

？清姫サンが御降臨なされているからである。

「デュフフ。おにやの子の微笑み、もうそれだけで百年は生きていけるでござる。あ、ちよつ待つて！早まらないで！じっくりねつとり話せば分かり合えるでござる——うわらばっ!!」

？怒りに燃えた清姫の拳が黒髭を穿つ。

？身体のあるあらゆる部位に的確に拳は嵌り、空気の弾かれる破裂音と衝撃が海賊船の外まで響き渡っているだろう。

「アレ大丈夫なの？」

「無駄に耐久高いし、問題無いと思うよ……たぶん。そこん所どうなのエリザベート」  
「補正が入るからセーフだと思う。サーヴァント以外にもやってたけど生きてたし、しばらくしたら収まる発作だと思えばいいわ」

？

「いい加減オジサン盾にするの止めない？」

？私は必死に顔を横に振る。油断は出来ない。

？黒髭が一匹居たら百匹以上は居ると思ったほうがいい。黒髭百匹とか洒落にもならない。まさに地獄絵図だ。

？そう言えばヘクトールも苦笑しながら容認してくれた。敵だけ癒し梓かもしれないと思った。

？その後一方的な攻撃は割と長めに続いた。



？甲板に立っているのは二人。

？巨躯の男性と非力そうな少女だ。

？片や殴られ、片や殴るだけの関係であった。だが、彼等は確かな絆を互いに感じて

いた。

？ 溢れんばかりの憎悪を向けていた少女は、倒れても立ち上がり、正面から拳を受ける男性に対して好感を持ったのだ。

『彼は死ぬ気で萌えている』と

？ 熱い情熱は拳を通して伝わって来ていた。

？ 少女は嘘に敏感であつた故に、冷静を取り戻した今では違える事無く分かつた。

？ 彼は欲望に嘘を吐かない。どの様な後ろめたい性癖を持っていても偽らない。逸れず真つ直ぐ欲望に従う様は彼女にとってどのように映つたのかは分かりかねるが、負の感情では無いと断言出来る。

？ どちらとも無く距離を詰めた。そして強く握手を交わした。

「清姫です」

「エドワード・ティーチ。黒髭でいいでござるよ」

？ 黒髭の口調は依然ロジカルだが、表情は何時に無く真面目だった。彼の身体は焦げ、打撲痕も多く残っていた。数十発の弾丸を受けても戦い続けた彼にとってはへっちゃらなのかもしれないが、第三者から見れば痛々しい事この上ないものだ。

？ と言つても、彼を労る者はこの船には居ないだろうが…

？ 清姫は手を引いた。

? 黒髭も引いたが、彼の掌には金に輝く板があった。

「会員証ですわ。渡すべきと思つた方には渡しておりますの…」

? 黒髭は膝をついた。そして咽び泣いた。

「家宝に、しゆるでござるう——」

? 黒髭はこうして正式なエリちゃんファンの一員となった。

? 爛々と煌めく会員証に水滴が落ちた。

「——デユッフ……」

# ジヨブチエンジは必要だろうか？

？世の中にはハロワでは紹介されない職業ジョブが存在する。所謂一般的では無い職。闊的なモノも含まれる、そんなモノ達だ。斯く言う勇者もハロワでは引つかからないが—  
「そんな事はどうでもいいのよ！私は海賊王になるわ!!」

「ちよつとソレ僕のカットラス、アンのマスケツト銃まで…」

「無邪気で可愛らしいじゃないかしらメアリー。それに同じ女海賊が増えるのは喜ばしい」とよ—」

「むうーそれで良いのかなあ…」

？帽子をコスプレグッズから引つ張り出した今の私は女海賊。

？アイドルで勇者で女海賊。夢とロマンが詰まったジャンルの数々。右手にカトラスを、左手にピストルを、背中にマスケツト銃を、頭に髑髏の入った帽子を。そして、それで身を包んだ私。

？時と場所に合った装いには痺れる事間違いない。

「次のジャケ写はこれで決まりね！」

？時折ポーズを撮ってやれば焚かれるシャッター。清姫の指揮で黒髭の部下を十二

分に使った撮影が行われているのだ。場所も名の知れたエドワード・テイーチ、黒髭の船。

？ 臨場感は段違い。見たものを惹き付けて離さない写真の出来上がりだ。

「良いですぞ良いですぞ、エリザベート氏！ヒップをもっと上げて、尻尾を突き出してツ  
!!顔も挑発的にツ!!——そうソレエ  
」

「うわっ…」

!!!!!!

「引くわー、ですわ」

？ シャッター音は止むことを知らず。

？ 踊る様に取りられるポージングは私をより魅力的にしている。

「ハーンお疲れちゃん。後はこっちでやつちやうからエリザベート氏は休憩入っておく  
でござる」

「ハイ、お疲れ様 death!」

「ん？ニユアンス違うによ!？」

？ 身体に走る悪寒が耐えられず、つい黒髭に口が滑った私は休憩に入る為、パラソルの下に入り、マットにうつむけで寝転がる。

？ 右に左に身体を転がす。こういう日常を特異点で味わえる事に感謝をしつつ、尻尾も右に左に傾ける。

「キャプテン、例の海賊船が島から出てきました!」

「どれどれ……あるえ、BBAの船直ってない?」

? 何やら騒がしい。だがマツトは私を離してはくれないようで、身体は弛緩しており微睡へと誘うのだ。船上の阿鼻叫喚など私にとっては子守唄に等しいと思つて欲しい。

「総員対シヨック体勢ツ!!」

「あ、良いなあ! 拙者もソレ言いたかつたですぞ。と言うか此処拙者の船なんだが!」

? はて、対シヨック体勢とは何ぞや?

? 意識が飛びそうな私にはどの様な言葉を言われたとて理解できない。

? 私を起こしたくば清姫サンを呼んでこいと言いたい。清姫サンを呼び出した瞬間呼び出した者は葬られる運命だが、死に目を美少女に看取つて貰えるのだから幸福でしよう?

? 直後響く轟音と衝撃。

? 弾かれるように甲板を飛ぶ私。フワフワとした曖昧な意識が一変して緊張状態に変わる。

? そして、ハッキリした意識で認識した。

? ——作戦開始だわ!

? カットラスとマスケット銃をアンとメアリーに投げ渡し、被っていたコスプレグッ

ズも仕舞い込む。変わりに出したのは何時もの勇者装備。

「野郎共、略奪のお時間よ。使えそうな物は一切合切奪って奪って奪い尽くしなさい！主に私の為に！！」

？黒髭の部下に檄を飛ばせば野太い声と掲げられた武器で返してくる。全員が一丸となつているのは元からなのか、私がいるからなのかは知らない。別に知って得はない、寧ろ黒髭の日常を垣間見る結果となりマイナスを天元突破だろう。

？既に敵は乗り込んで来ている。開戦の狼煙も済んだようだ。砲台から白煙が登っている。

？清姫にアイコンタクトを飛ばした。即座に行動を開始した所を見て理解したようだ。

？目で語るのは楽でいい。手間が省けるし、何より情報の漏れが無い。この分なら子ジカにもそれとなく伝えられるかもしれない。

「もう軍師エリザベートでもやっていけるんじゃないかしら… 溢れ出る才能が私を更なる高みに押し上げちゃうのね！」

「言ってる場合じゃないよエリザベート。こんの、執拗いなあの弓兵！」

？恋愛脳な月の女神様が放つ矢を、メアリーはカットラスで軌道を逸らし続けている。



「アン！まだアレ撃ち落とせないの!？」

「弾幕が濃すぎて隙が殆ど無いのよ。隙間を縫って撃ち込んでも避けられる。全くもつて割に合いませんわ!」

「チイ、エリザベート。火薬庫をやられて移動が儘ならない中じゃ逃げられない。そうになると船上で白兵戦になる。いくらヘクトールでも苦しいだろうからそつちに回つて直ぐに帰つてきて!」

「?私は何も言わず駆け出した。目指すのは子ジカの所。黒髭やヘクトールも居るだろうから戦線の維持自体は可能だろう。」

「?当初の目的通りに事が進めばそれで良し、駄目ならプランB…考えて無いけどね。」

「あ、エリザベート氏!助太刀に来てくれたんでござるね!ついでに夜の助太刀も!」

「——清姫に言うわよ」

「んん〜辛辣!?! でもそれが良い。あ、ごめんなさいごめんなさい、清姫氏に報告は止めて!! 愛が重いのおお!!」

「?黒髭は青ざめた顔で懇願してくる。正直あれだけ念入りに燃やされたらこうなるのも頷ける。」

「?あれをまだ愛と形容できる黒髭には呆れを通り越して尊敬してしまいそうだ。」

「え、エリちゃん!?! 何でそつちに居るのさ? ついさつきまで居なかったのに…!」

？子ジカはこの世の終わりの様な顔をしていた。確かに現状では刻々と終わりが進んでいるが、私を見てその顔はシヨックだ。私可愛いのに…

「また会ったわね子ジカ。まあこういう事だからよろしくね」

？ウインクを一つ。

？これで子ジカにも伝わった筈だ。演技に徹してくれば嬉しいが、完璧を求めるのは酷だろうと考えて私から話し掛ける。

「じゃあ行くわよ子ジカ。構えなさい！」

「うん。何処からでも来ていいよ！」

？子ジカは構えた。「私の胸に飛び込んでおいで！」と言わんばかりに両腕を広げて

：

「エリザベート・バートリー、戦闘態勢です。先輩、腕を広げていないで私の後ろに下がっててください！」

「いやだつてエリちゃんが抱きとめてつて…」

？駄目だこのマスター、全く別の意味でサインを受け止めてしまっている。大きな問題とはなり得ないが、グダグダになる可能性は急上昇だ。

？腕を広げて不動な子ジカに、その子ジカを庇おうと前に入るマシユ。完全にコントだ。

「なんだい、アンタら知り合いかい？」

「ゲエ、BBA!？」

「…余つ程海の藻屑に成りたいらしいね！」

？なし崩し的に戦闘開始。銃弾が飛び交い、時に拳や蹴りが飛ぶ。ついでに罵声や煽りもセット。まさにトリガーハッピーセット。

「…じゃあ此方も早いところ始めちゃおうか」

「遅かったじゃない！」

？見当たらなかったオジサンが今になって現れた。咎めるように話し掛ければ、手をヒラヒラとさせて遇ってくる。

？そして、彼は槍をマシユに突き出した。

「ぐっ—重い」

「おうおう、硬いこと硬いこと。これだから盾持ちは厄介だよなあ」

「ちよつとお、話は終わってないわよ！」

「状況見ろつて… 戦いはもう始まっちゃってるんだよ？ 細かい事抜きにして仕事はしなきゃ、さー！」

？軽い会話を挟みながら猛烈な槍さばきでマシユを翻弄していく。明らかに状況はこちらに傾いている。

？子ジカの周りにはマシユ以外のサーヴァントが居ない、ガラ空きと言っても過言じゃない。

？私はこの時に気付いた。ゲームと現実の大きな違い。それはマシユ以外のカルデア産のサーヴァントが存在しない事。次に――

？――フレンドサンが居ない事だ！

？オケアノスではマシユの経験値は乏しい。彼女にとつての本領とはギヤラハツドをキチンと認識し、宝具を解放できた時を言うのだと私は思う。

？つまり、彼女達は初心者だ。故にフレンドサン達がいらない状態でコレを撃破するのは必死である。マシユと現地サーヴァントだけで全特異点を踏破すると言う強制縛りプレイを実行させられている彼女等には涙が出そうだ。

――エリちゃん可愛い閑話休題――

？何はともあれ、彼女等を失う訳にもいかない。それとなく事態の收拾を図りつつ、それとなく頑張つて働いているアピールをしなければならぬのだ。

？よつて私は――

? ——子ジカを攫います!

? 魔力放出を並列解放。常人が認識する段階を超えた疾走。ヘクトールを相手取っているマシユでは追い付けない。私は難無く子ジカの前に現れることになる。

? だが、ここで私の予想外が起こった。

「エリちゃん捕まえた!」

「ニギヤア——!?!」

? この一般人は私を抱き締めている。私が子ジカの前で一時停止したとほぼ同時に広げていた両腕でホールドを掛けてきた。正直言つてありえない。常人が認識出来ない速度で近付いたという事は、子ジカから見たら瞬間移動にも等しい現象という事であるわけだ。つまり、破裂音しか移動した証拠を確認出来ない。その破裂音も銃弾飛び交う中では紛れて認識が阻害されるだろう。

? ——なら何故彼女は私を抱き締めている?

?

「まさか……まさかまさかまさか! アンタ最初から!!」

「そのまさかだよ。——私は前しか見てない!!」

? 子ジカは目の前に現れるだろう私しか認識しようとしていなかった。そこに私が

一瞬で現れた。だから抱き留めた。彼女の行動に移すまでの脳内で積んだプロセスが極小だったが故に引き起こされた事態だ。

「いや、それ以上かもしれない。」

「つまり彼女は『考えるより早く動いた』と言うのだ。」

「あんたバカア!?!」

「ハツハツハツ! きよひーが居ない今が私の独壇場。此処でやらす何処でやる? 女藤丸立香、決める時は決めるんです!」

「バカだったかあ!」

「頭を抱えたい気分だ。いや子ジカには抱えられて居るが…」

「あ、アンとメアリーが離脱した。」

「? 戦線は崩壊。黒髭にもこれには焦る焦る。そしてヘクトールは無表情に黒髭を…打ち取れない。」

「? 私は動いていない。動いたら子ジカが粉碎骨折間違い無し、即刻バッドエンドだ。だが事実黒髭は死んでいない。」

「? 私がカボチャを召喚して槍の軌道をコンマ数センチズラしたからだ。お陰で黒髭の身体中カボチャ塗れになっている。」

「嬢ちゃん案外腹芸が出来たんだな。オジサンちよつと関心しちゃったよ!」

「よく言うわよ、ちやつかり聖杯だけ搔つ攫つてる癖に！」

「ハハツ、そいつア大人故の余裕だよ。嬢ちゃんもそのうち分かるさ」

? さり気なく煽つてくる。いやさり気な過ぎて本当に煽つて来てるのか分からないくらい自然だ。

「だがまあ、大人だからやらなきやいけない事もあるもんでな」

? ヘクトールは『ゴールデン・ハインド黄金の鹿号』目掛け跳躍。ポカーン顔で固定された一同は置いてけぼりの模様。

? 寧ろ適応する者達が異常な道程を歩んだ事がハッキリ分かる場面と言える。

? だが、私はコレを黙認しよう。私の手の平に乗っている間は余計な行動を取るべきではない。策士エリちゃんは賢い!

? 周りはエウリユアレが攫われた事に目が行く。私は釣れたことにほくそ笑む。

? 別にエウリユアレがステンノに思った以上に似てるからって仕返ししようとか思った訳では無い。無いったら無い!!

「子ジカ。離して、落ち着いて、私の声に耳を傾けて」

?

「でででも! エウリユアレが持つてかれちゃった。早く追わないと! ドレイク、直ぐに此処を離脱して追跡しないと! エウリユアレも聖杯も持つてかれる訳にはい

かない!!」

「分かつてる! 女神様エウリユアレも私の船員クルーだからね。キツチり返してもらうさ」

? 切り替えが早い。彼女の成長が浮き彫りになった一場面だと思つた。狼狽えたと思つたら次の瞬間から追う算段に思考を割くなんて若干高校生に出来るわけない。いや『魔術に關係が無い』と形容詞が入るが。

「私は別ルートから追うから先に行つて!」

「——分かつた!」

? 子ジカは眩しい笑顔でそう言う。馬鹿正直に私を信頼しているからそう言う顔が出来るのだと思う。二つの特異点を私たちと解決し、次は三つ目、せめてアイドル私が彼女の心を潤いで守れていればとは思うが、心配だわ。

? 子ジカが離れた事を確認してから作戦の要であるカボチャ塗れの汚物髒に近づく。

「船貫うから」

「え?」

「船貫うから。清姫出てきて良いわよ」

「はあい」

? 船室から待機していた清姫が——

? ——私目掛けて飛び出して来る



? 予想通りだったので躲す。何度も捕まるとは思わないで欲しい。

「残像ですわ」

「なん…だと——!?!」

? 直線的に突き進んで来ていた清姫が残像だけ残し、私の後ろを捕らえていた。高速移動とか瞬間移動とかそんなチャチなもんじゃあ断じて無い。それより恐ろしい清姫のストリーキング技術を見たわ。

「寂しかった」

「いやほんの数十分…」

「一分一秒が私にとって何度の四季を乗り越えたか…嗚呼エリザ。もう離れないで」

? 蛇の様に私の身体中に巻きついてくる。清姫の四肢が私の身体を愛撫する。力強いように繊細なタッチにムズムズする。

「エリザニウムで満たされていきそう。いえ全然足りません。もつと欲しい。もつとあげたい」

「ちよつと何処舐めーヒツ?!」

? エリザニウムなる謎元素は皮膚間の接触や、口内摂取で賄う物らしい。清姫はコレさえ有れば二十四時間三百六十五日ぶつ通しで動けるとの事だ。私が発生源なのだから私の中に永久機関でもあるのかもしれない。

「ちよつとメアリー！ アン！」

「諦めてくれよエリザベート。彼女、中でもこんな状態だったんだからさ」

「取り押さえるのに苦労しましたわ…」

？ そう言つて出てくるのはアンとメアリー。細工がキチンと機能していて安堵する。

「続きは中で…ね？」

「いや、結構、です。本当に要らな—いやあああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああつ!!!」

？ 清姫はエリザニウム欠乏症になるとゲームオーバー。この言葉は私の魂に刻まれる事だろう。

？ じたばたと身体を捻らせてもブレない。清姫の超<sup>ハイパー</sup>清姫サンモードの恐ろしさが此  
処で極まった。

「助け—」

？ 無慈悲に扉はしまった…

「拙者空気じゃね？」

## 反英雄、半英雄、大英雄

? 私は現在椅子に座っている。正しくは座る事を強制されている。毎度飽きもなく拘束されている訳だが、私としてはテンプレ化する前に止めたい所だ。

「さて、答えてくれますよね?」

「何を?」

? いや、確かに彼女の性格や性質を理解している私ならば、聞かれている内容も予想できる。できるが、私は敢えて問うてみる。

? 間違えたら恥ずかしいからとかそういうのではない。

「私たちが会えなかった空白の時間についてです。誰にあったか、何を話し、何をされて何をしたかを一語一句違えず、私に教えてください。それだけでいいですよ。さあ、嘘を吐かず話せたらご褒美を差し上げましょう」

? やけに強調されたご褒美とやらが非常に気になる。果たして誰にとつてご褒美なのか分かったものでは無い。

「子ジカたちが来て、交戦して、ちよつとお喋りしたわ。あと、ヘクトールが離反したくらいね」

「…カルデアの方々と話したのは大目に見るとしても、ヘクトールさんの事を、ついでのように扱うのは無理があると思うのですが…」

？ 清姫の指摘にハツとする。予想通りだったとはいえ何気に裏切られた事実を鑑みるとついでの扱いは相応しくないかもしれない。

？ 慢心はいけないと金ピカを思い出しながら念じた。

「それで、まだ終わってないですよね？」

「ほえ？」

？ 清姫は私の目を見定めたまま投げ掛けてくる。蛇を連想させる瞳は私と言う獲物を離すつもりが無いようだ。

「さあ、立香さんとは具体的には何をしたのです？」

？ 清姫の囁く声が私のエリちゃん耳イミを擦る。妙に艶っぽい声に居心地が悪い私は身体をよじって抵抗を試みる。

「ご褒美、欲しくないんですか？」

？ ——だから誰にとつてのご褒美!?

？ 内心叫ばざるを得ない。

？ 勿論私は正直に話そう。清姫相手に嘘を吐くとか安珍で十分だからね。私は焼き殺されるのは嫌だ。

? いや、私ならば案外耐えられる気もするけれど!

「うーん、ハグ?」

? そう口にしたら清姫が凍り付いたように停止した。持っていた扇子を落としてしまう程に衝撃的だった様だ。

「…ハグ? それはアレですよ、所謂その、抱擁と言う事ですよ? う、浮気ですか? 妾を取ることには理解があるからと言っても悲しいものは悲しい。それが分からないのですか? あれほど私を見てと言っていたのにも関わらず: エリザは意地が悪いのですね。私が悲しむと理解した上でそのような行動をなさるのでしよう? 至らない所がお有りでしたら仰ってください、必ず直しますから、それでも考え直してくださいらないと仰るのであれば腹さえ斬ります。ですから——どうかお考え直し下さい!」

? 徐々に語調を強くしてアドリブとは思えない長台詞を読み上げていく彼女の顔は先程から強気だった少女とは思えない程弱弱しいものだった。

「馬鹿ね、ただのファンサービスに決まってるじゃない。そもそも私結婚何て考えられないし」

「本当ですか?」

? 鷹揚に頷けば、清姫は薄く微笑んだ。

? 本当に良かった。ドラゴンステークとか冗談でも聞きたくないし、成りたくない。

「じゃあ証明を…」

？ そう言つたつきり彼女は俯いてしまった。

「ちよつ近いんですけど…」

？ 強引な感じでは無いが、無言の圧力と、じわじわ迫つてこられるのは少々怖い。

「誓いをする時には接吻をすると聞きます…ちゅー」

「海外文化の履き違い方が可笑しいわ！ 離せエ！ キス顔やめろオ！」

？ 「ガオオー」と吼えてみても吹き飛ぶだけ、綺麗な着地を見せたあとでテケテケの如く迫るホラー付き。今ならキス顔と言うオプシヨン迄付いちやうスペシャルプライス。

「デユフフ。聞こえますぞオ…」

？ 扉の外から不気味な声が響いた。彼女から舌打ちが漏れる。その直後に不意をついた口付けを彼女は繰り出した。ソレは舌を絡めようとして来るのでもなく、舐め回してくるのでも無い。ただただ優しい口付けだった。

？ その後、猛々しい赤いオーラを纏つた清姫は声のした扉目掛けて着物とは思えない速度で飛蹴りを放ち、ダイナミック退出をした。

？ 取り残された私は深呼吸を繰り返すのみ。

「結局キスして行つたじゃない…」

？彼女はキス以上をしてこない。知らない訳では無いだろう、寧ろ何処ぞの巫女狐のおかげで其の手の知識を溜め込んでいる節がある。

？恐らく、キスをすると言う行為に慣れ始めた。彼女とて純粋な乙女だ。愛や嘘で暴走するだけで、それだけは確かなのだ。

？故に、彼女が次のステップを跨ぎかけていると私は推測する。

？つまりこれは拙い事態というのは確かだろう。

「わ、私はアイドルに成るって決めたのだし。思い切って拒否してみるのも有り、よね？」

？いや、正直不安しかない。別段嫌という訳でもないのに拒否するのは嘘だと判断されても可笑しくないからだ。

「千日手なのだわ……」

？という事で私は考えるのをやめた。

？船室から出た私は生き残ったアンとメアリーに駆け寄った。二人とも目立った外傷も見られず、問題も無いように見える。

「ねえエリザベート。結局私たちは何で生きてるの？ 殺られそうになったと思つたら船内にいたのだけれど……」



? アンが小首を傾げて問うて来た。

? 私は満面の笑みを湛えてアンのマスカット銃を指差した。そこには薄い光が灯っている。

「あれ、さつきは無かった筈よねコレ?」

「僕のものにも付いてたよ」

「借りた時に仕組んでおいたのよ! こつそり陣地を作つてショートワープさせたの、  
凄いでしょ?」

? 「おおー」と二人は拍手を贈つてくれた。実は原理などさつぱりだったりするので、  
が、何となくで出来てしまったので結果オーライだと思う。

「でももつと凄いのはこのからよ!」

? マイクスタンド箱を取り出し、船首近くに突き刺す。更に魔力を注ぐ。マントがたゆ  
たう程に魔力を捻出すれば、徐々に船が変状していく。

? それはまるで城のようだ。と言うか巨大船に城を置いただけに見えるのはきつと  
気のせいではない。

「私のチエイテ号よ!」

「重くて進めないんじゃない?」

「飛ぶから良いのよ」

「え？」

「と言うわけで、船出の歌を歌っていきましよう！ カリブっぽいのね！——ミュージックスタートオ!!」

? 海のパワーをマイクスタンド箱に注ぎ続ける。するとどうだろう、船が徐々に浮遊しているではないか。

?

? 高度を加速度的に上昇させて行き、空を掻き分けて前進する。歌が歌い終わる頃には魔力供給も安定化しており、落ちる心配はしなくともいいだろう。

「それでヘクトールは追えるの？」

「マントにマーキングしてあるから何処に居たって無駄よ。空から追跡して首魁諸共倒してやるわ」

? アルゴー船に居るメディアアならば直ぐにでもマーキングに気付き、消してしまうだろう。だが、その時には私たちは上空に待機中、勝ったも同然だ。

?

? そもそもこのような回りくどい方法を採用したのはメディアアが行使しているだろう隠蔽系統の魔術を考慮しているからだ。黒髭とドレイクの鬼ごっこ中に察知されずにひっそりスタンバって居られるのは、目視不可や認識障害の魔術でも無ければ説明が

つかない。

？ 神代の魔術師である彼女なら時間を数分与えただけで現代魔術師が血反吐を吐く程の完璧な術式を構築する事だろう。

？ 現在はこれらを考慮して作戦実行中なのだ。

「フフフ、自分の無限の可能性が恐ろしいわあ。軍師なんて名乗ったら過労死の未来が見えてくるから自称する事は躊躇うけれどね！」

「随分と御機嫌のようですねエリザ」

「パズルのピースが過不足なく用意出来た感じよ。後は全部嵌めれば終了！ 清姫も気を引き締め……」

？ 振り向いて見たら居るのは清姫と黒髭、だった物。時折跳ねる炭は恐らくきつとたぶん黒髭。

「生きてるの？」

「表面を焦がしただけですので、きつと大丈夫でしょう」

？ 体表面を満遍なく焦がされるのはソレなんて拷問なのだろうと私は思う。私の性質上拷問は得意なのだが、正直趣味とかそう言う範疇に収まっていいものではない。

？ 清姫のその後が心配でたまりません。

「つと、そろそろ敵上空よ！」

? マーキングの反応はこれより真下を示した。やがてその反応さえ途切れたが、それもこの場所を示していた。

? さて、奇襲は完全な不意打ちでなくては意味は無い。何度も同じ手は通用しないし、在り来りな作戦の結果も芳しいものでは無いだろう。

? なればこそ、私の様な奇策を立案する者が必要だと考える。何事にも驚きサブライクは尊重されるべき事柄なのだよ。

「船ごと突貫! これがベストな回答よ!!」

「何もベストじゃないと思うなあ!」

「もう遅いわメアリー」

「え?」

「——もう落ち始めてるもの」

? 船首を下へと傾け、気分を取り付けた両翼から魔力を放出してブースト。自由落下以外のエネルギーを得たチエイテ号はまさにステラ。

「落ちろオオツ——チエイテエエ!!!」

「自分の城を落とすなア!」

? 最もな意見過ぎて私の心が軋んだ、気がした。

? 派手な登場こそ正義の味方の特権。船ごと落ちてくる勇者が居るかって? 詳し

い人にも聞いてみたらいいんじゃない!

「おいおいおい、おいしい!? もう既にいるつて上だったのか? どんな無能が指揮官になればあんな馬鹿な真似ができるんだ」

? そう言っているのは殴りたい英雄筆頭候補のイアソんだ。殴りたい、具体的にグーで腕を振り抜きたい。

「言っている場合では無いのでは? このままではイアソン様だけが海の藻屑ですよ?

大人しくワカメにでも成るのでしょうか?」

「未来の旦那に対して辛辣過ぎイ。いや待て、元はと言えば逆探知をもっと手早く済ませておけばいいものを見逃したお前が悪いんだろ!」

「ええそうでしょうとも。イアソン様がそう仰られるのならそれが真実なのでしょう。

…それとも対処不可の様ですが?」

? チェイテ号の船首はアルゴ船のマストをへし折って突き刺さる。重さゆえに船体も大きく揺れ、イアソンだけがゴロゴロ転がっている。彼はメディアに助けを求めているが、完全に見て見ぬ振りをされているようだ。夫婦生活の闇が深過ぎるのが悪い。

? それと幼いメディアに「愛しい」だとか「私の」とか言うとロリコンのソレにしか見えないので事情を知っている者の前でしかやらない方がいいと思う。

「うう…酷い目あった。メディア、メディア!」

「ハイハイ此処に居ますよ」

? 呼び戻されたメディアはイアソンに助けなかった理由や、チェイテ号の対応の不満を撒き散らしている。

? あれでケイローンの教え子だと言うのだから世の中分らない。

? あ、言い負かされて泣いてる。

「うるさいうるさい、うるさい!! 全て打ちのめせヘラクレスウ!!」

? イアソンの手より赤が弾けた。

? …え、アレって令呪よね? 令呪と言う事は、詰まるところ「やつちやえバーサー

カー」って事でいいのだろうか?

「――■■■■■■■■ーッ!!!」

? いいみたい。

「つて夢想してる場合じゃ無いわア!」

?

? 呆気にとられて機能が停止していたわ。ヘラクレス何て子ジカに丸投げして、鬼ごっこして、アークにインして倒してもらおう気満々だった。と言うか、その前にイアソンを退場させる気しか無かった。

? 前に私 T U E E E E と言ったわね。アレはヘラクレスには通用しないからね。攻

撃に耐性を持った上に何度も倒すとか無理だから、そもそも技量で負ける予感しか無いから。

？アレなの、邪眼に目覚めて邪王炎殺黒龍波でも打ち込めば良いのかしら？ 個人的に次元刀の方が好きだわ!!

？野獣の様なけたたましい咆哮が迫る。鉛色の巨人の圧力は距離が近付くにつれて増してゆく様だ。

「清姫ー」

「何時でもどござい」

？ヘラクレス相手に攻めは死を意味する。レトロニアで弾き、エイティーンで逸らし、危なくなったら清姫の援護でバックステップ!!

？これを繰り返して、子ジカに助けて貰うしかない。大丈夫よエリザ、アツチにはヘクトールと竜牙兵しか行ってないはずだもの。直ぐにでも子ジカが助けて、くれる…

？斧剣と大剣の切り結びは私の腕には重すぎた。体重や身長を比べても倍以上ある。相手がそのアドバンテージを手放す訳もなく、全身を使って私を押さえ込み、子供が蟻を踏み潰す様に地面に叩きつけようとして来る。

「離しなさいー」

？接吻の残り香でオーラを纏った清姫は二ト口の匂いを撒きながら、ヘラクレスの背

後より上半身を焼いた。

「そりゃあア!!」

? 意識が清姫に逸れている間に刀身を滑らせて抜け出す。これには私も安堵の息を漏らす他ない。

? その束の間だ。私の眼前に足が映ったのは。

「おぼわア!?!」

? スキルによる頑健さに助けられた為に死にはしない。だが、派手に甲板に転がされる。起き上がるのにはかなりの隙を生む。

? つまりヘラクレスは跳躍から振り下ろして私を一刀両断しにかかる事実は致し方

ないね。

「撃<sup>テー</sup>てえー!」

? 着弾。

? 顎あたりから煙が登っているあたり、アンが撃って、メアリーと黒髭が砲弾を詰めているのだろうと何となしに理解した。

? そして、ヘラクレスの凄まじさも理解した。

「令呪込みでも頑丈過ぎるでしょ。まるでゾンビみたいなタフさ! 少しくらい怯みな

さいよ!!」



?

? 悪態を吐いたところで状況が好転するわけもない。

? マジ辛い! 取り敢えず――

「――早く来てよオ子ジカア!!!」

## 常識をかなぐり捨てて勇者になれ（レッツフリーダム）！

？私はエリザベート・バートリー。今を輝く勇者でアイドルよ。そんなベリーキュートな私の最近夢中な趣味は――

？――命懸けのテニスよ！！

？唸る肉体に迸る血流の熱量は常に循環し滾り続ける。沸騰したポットの様に口から吐き出されるのは甘い蒸気か。斯くしてその頑健でありながら矮軀と言う矛盾を抱えた肉体から放たれるエネルギーはどれ程か本人でさえ図りえないだろう。

？筋肉が脈動し奏でる協奏曲ハーモニーは強烈にして熱烈な一撃を生んだ、自身の猛る咆哮と共に。

「どおりやあああああ！！」

？彼女の持つ愛剣ラケットは確かにエリちゃん玉ボールを捉えた。球体を大きく歪ませる程の圧倒的なパワーから繰り出されるストロークは相手選手であるヘラクレスの胸元に直進する。

？私は避けられたならば失点になると理解した上でこの戦法を取った。だがそれは、ヘラクレスが避けずに打ち返すだろうと確信した上で実行に移したのだ。

「■■■■■■■■■■ ツツ——!!」

?やはりと言うべきか、ヘラクレスは打ち返す構えを取った。

?ヘラクレスは半回転を加えて打つポイントをずらした。更に回転のエネルギーを逃がさずそのまま臂力に乗せした上で私の顔面に返して来る。

「舐めんじやないわよオ!!」

?迫るエリちゃん玉を前に全く引かず、あまつさえ私は走り出した。

——一時停止——

?さて世の豚やリスは頭にクエスチョンマークを乗せている事だろう。そんな憐れな者共に私から囁かな状況説明をしようと思う。私もまとめていなければ脳が爆発四散してしまいそうだからしようがなくよ。

?では前回から現在に掛けての道程を説明しよう。

?あれからもヘラクレスと死闘を繰り広げた。しかし、このままでは一步も進めないと思いつた私は当初の予定通り海賊二人組と塵一盛りを子ジカに加勢させる事にした。

?勿論援護が減る分の皺寄せが此方に来る。それは身を以て理解している。だがそれも致し方ないこと、清姫も付いているのだからと無理矢理納得した。

?だが私も自己犠牲を進んでする程愚かではない。あわよくば、倒してしまっても構

わんのだろう、の精神で受けて立った。

？と言つても真つ向勝負では分が悪い。そこでエリちゃん玉を作り出したのだ。

「説明しよう。エリちゃん玉とはエリザニウムの集合体であり、変幻自在でありながらなんやかんや素晴らしい物質である！」

？誰だ今の……まあ合っているとは思うけれど。

？要は直接攻撃を避けながらも逃げられないようにその場に拘束するためにテニスの様な形態を取つたというわけよ。

？あ、清姫は一人だけ置いてきぼりでアワアワとしてる。ラケット持っていないし仕方がないのよね。流石に扇子じゃあ細すぎ脆すぎと三拍子揃っている訳だし、何より危険だから審判でも務めていて欲しい所。

以上

—再生—

？エリちゃん玉との距離を自ら縮める際に仕舞い込んだ愛盾を右手に召喚する。

？力強く握りしめ、感触をしつかり確かめた。

「吹き飛びなさいイイ——！！」

? 限界まで引き絞った腕を一気に前へと突き出す。右腕が引き千切れないように許容限界まで魔力を通した為か激突時に押し返される事はなかった。

? 盾から腕に伝わる痺れから未だに盾の面に光弾はあるらしい。

? 私は気合いで腕を振り切った。

? 空気が裂ける音と共に光弾は弾かれた。いや、弾かれるなんて陳腐な表現では収まらない。対城宝具を受け止めた時と同じ様な衝撃が私の細腕に伝わって来ている。

? 距離は短い。私がそう仕組んだからだ。ヘラクレスは避けると言う選択肢を除外されている。私がそう仕向けたからである。

? 頭部に着弾を確認。ヘラクレスは尚も倒れない。

「何の為に打ち合ってたと思ってるのよ!」

? エリちゃん玉に蓄積されたエネルギーが外殻から漏れ出した。ヘラクレスとのラリーで加速度的に上昇していった熱量は確かにヘラクレスにダメージを与えた。

? 膨張と縮小を繰り返す光弾は彼の頭部を丸々吹き飛ばし、胸に亀裂を入れる程の威力を生んだ。

「本当に規格外ねあの宝具…」

? 失われた頭部が蒸気と赤い発光と共に形を取り戻していく。それは時間を巻き戻している様にも感じる。通常のサーヴァントであればこの時点で消滅するところだが、

ヘラクレスは規格外<sup>E</sup>、理不尽の権化である。

「ここままで来て、ただ再生されるなんて――」

「たまったもんじゃないわよオ！」

「即座に拘束系拷問器具を幾つか召喚した。」

「鎖で四肢を拘束。その上から釘を打ち込み固定する。そこから大中小の様々な大きさを持つ鉄の処女をマトリョーシカのように重ねていく。一番小さな物で二メートルを超えるため、数十も重ねれば驚くほど巨大になった。」

「処女の抱擁、漏れ出すのは嬌声か流血か。貴方を捉えて離さない血色の棺<sup>ブラッド・コフィン</sup>。豚の悲鳴を聞かせてちょうだい！」

「詩に乗せて閉じられていく鉄の処女は激しい金属音と共にヘラクレスを閉じ込める。」

「息も絶え絶えな私は鍵を閉めた瞬間倒れ込む。甲板とキスするのはもうこれつきり御免だわ。」

「エリザ！」

「可愛らしい足音をたてて清姫がやってくる。」

「仰向けになる為に寝返りを打つことにした。だが、途中で引つかかった。首痛い……」

「角あつたの忘れてたわ」

「エリザ!!」

「ああ清姫。ごきげんよう」

「あつはい、ごきげんよう」

「?ちゃんと答えるのねこの娘。しかも礼儀正しく背筋を伸ばして扇子で口元を隠すんだから律儀と言うか天然と言うか。」

「可愛くて変な子…」

「?思わず口から零れた本音はすっかり彼女の鼓膜を振動してしまったようだ。頬を染めているのが分かる。どうやら思った以上に私はヘラクレス戦で疲労しているみたい、清姫がこうも可憐に見える。」

「可愛いなんて。ほ、褒めても何も出ませんからね…何か食べたいものは?」

「寿司」

「握らせて貰います!」

「?握れるんだ…」

「それよりお怪我はありませんか?! 痛い所は? 外傷確認、脚、腕、顔、胸…は元よりありませんでしたね。一応私自ら触診を」

「おい、胸だけ意味が違ってたでしょ? 目を逸らすなコラ!」

「触診を始めます——ツ!!」

？ そう言うってグツタリした肢体に手を伸ばす清姫の息は何処と無く荒い。褒めた傍から変態行為とは、やっぱり清姫は清姫だなあ。

？ いや変態行為をするのが普通みたいになってるけれど大丈夫だろうか？ 元々こんな娘じゃなかった気がする。

「アンタってそんなキャラじゃ無かった気がするんだけど…」

「玉藻さんが言っていました。想い人を射止めるのであれば、日頃からボディタッチを増やすべきだと！」

？ と、清姫は熱弁する。

？ その狐巫女は本当に許さん。会ったら絶対に殴るんだと心に決めている。

？ どう殴るか思案中の間も清姫は忙しくなく私の身体に指を這わせる。時々ねつとりとした視線を顔とか下腹部に感じる気がしないでもないが、至って真面目に取り組んでいる気がする。飽くまでも気がするだけだ。

？ だって清姫は医療知識なんて無いもの。

「結局無茶、しましたね？」

「…ごめん」

「でもやめる気は無いのでしょうか？」

「それも…ごめん」



? 顔を逸らす。ばつが悪いから。

「良いんですよ別に」

「え?」

? 顔を戻す。清姫の顔が見えた。

? 笑顔だった、と思う。

「その隣に私が居れば、ですがね」

? 適わないって言うのかしら、言い負かせる気がしないって感じだわ。結婚したら速攻で尻に敷かれる。

「ごめんね清姫」

「…良いんですよ。ええ良いんですよ」

? 彼女は私の謝罪の意味を理解しているのだろうか。勘のいい彼女なら気付いても不思議では無い。

? 普段見せない奥ゆかしさが胸に沁みた。

? それでも私は顔を逸らす。やっぱりばつが悪い。

「■■■■■■■■——ツツツツ!!!」

? 棺が激しく震える。籠った絶叫がさつきまでの雰囲気吹き飛ばす。

「もう休ませてよね!」

？ダルい身体をゆっくりと持ち上げる。

？と言つても閉じ込めてしまった物を再び出すなんて阿呆な事は出来るわけもなく、ぶつちやけ立つたはいいが何すればいいか手を拱いているのが現状である。

「海に落とす？ 窒息とか水圧とかメガロドンとか…死ななそうだわ。寧ろ新たな力に目覚めて帰ってきそそうで怖いわね」

？顎を摩りながら考える。

？拘束した後の事を全くもって考えてなかった。何をしても帰ってくる要らない安心感が私を悩ませる。

「では常に手元に置く他無いのでは？」

？取り敢えずそうしよう。棺を肩に預け、子ジカの所に急ぐ。

？—エリザベートは？<sup>ハラクレス</sup>棺桶を？装備した。



？場は戦場とは掛け離れた静寂に支配されていた。

？皆呆然と一方向に視線を集めている。

？地獄だ。地獄がそこに広がっている。

? かしながらそこは喧騒で溢れていた。世界でそこだけは動き続けている様な錯覚がこの場の誰もが感じているだろう。

「ああ、メデイアたーん待つて〜!!」

「何なんですかこの男は、こつち来ないでください! 早く起きてくださいイアソン様ア!!」

? 地獄だ。

? 誰もが目を背けたくなる血腥い現実リアルが今まさに繰り広げられている。

? カルデアのマスターとそのサーヴァントは元凶に改めて畏怖の念を感じ、幾多の嵐を越えた女海賊達は頭部に激痛を訴える。牛の男は女神を奴に見せまいと屈んで壁となり、その女神は当然とばかりにただじつと護られる。

「ヘクトール!」

「それはちよつと無理な相談だアな。見ての通りオジサンは首しか動かせねえよ、イツツ…」

? 伸びている大将イアソンのおかげでフルボッコにされたヘクトールは「トホホ」と声を漏らす。一番の苦勞人ポジは彼で間違い無いだろう。

「そんなあ…」

「さあ聖杯を渡して拙者と楽しい事をするでござる。メデイアたーん」

「キヤーツ!!」

？パニツクで上手く魔術を行使できないメディアは生娘の様に悲鳴と恐怖を抱いて逃げ回る他ない。魔術に置いてメディアほどの逸材は少ない。そんな彼女に此れ程のトラウマを植え付け始めようとしている不審者<sup>黒髭</sup>は稀代の変態<sup>髭</sup>と言えるだろう。

？私はそつと——ヘラクレス入りの棺を担いだまま——アステリオスの影に——ヘラクレスの棺を担いだまま——隠れる。

「なにそれ……」

「ヘラクレス」

「……馬鹿なの？」

「いいえエリザはアホです」

「あつそう、もうどつちでもいいわ」

？いきなりの罵倒にステンノとの共通点を見つけた私は蟬谷に血管が浮き出そうになるのを耐えつつ状況を聞くことにした。

？女神エウリュアレ曰く、ヘラクレスが消えたと思ったらイアソンたちが来て、それを追うように黒髭たちがやって来た。

？自分たちでヘクトールを相手をしている間にイアソンが気絶しており、黒髭がメディアを追いかけた。

?との事らしい。

?いや、イアソンは何故気絶したのかが聞きたいんだけど。

「知らないわよそんなの。興味も無いわ。それより貴女!」

「何よ……」

?嫌な予感を感じながら聞き返した。

?エウリュアレは思った以上に真剣味を帯びた目で私の瞳を覗いてきた。無言で見てくるので居心地が悪い。

「目を逸らすな」

?急に高圧的になったエウリュアレは首筋と瞳を交互に見る。

「何だつてんのよ!」

?私はあまり気が長くない。

?口を閉ざしたままのエウリュアレに怒気をぶつける。アステリオスはビクリと震えたが当人は何故か悲しそうに私を見てくる。本当になんだつて言うのよ。

「珍しいこともあると思つて見てみたら、可哀想な娘ね貴女。私達神々からしたら面白いと世話を焼かれるでしょうけれど。事実、ステッ私がそうしてる様に……」

「……訳分かんない」

?彼女の言葉は独り言のように要領を得ない。

？ 何で偉ぶってる輩はこう毎回遠回しにしか話せないんでしょう。私の理解力が乏しい訳では無いわよね！

「ぐう!!」 流石の私も頭に来ました！ 聖杯からの魔力さえあればこういう事も出来るんですよ」

？ どうやらアツチも動きがあったようだ。いや常に動き回っていたとかそういうツツコミは要らないからね。

？ メディアは聖杯から魔力を汲み上げている様だ。彼女の周りには循環する魔力が有り、徐々に取り込んでいる。

『<sup>ル</sup>破<sup>ル</sup>戒<sup>ス</sup>べき<sup>ブ</sup>全<sup>レ</sup>て<sup>イ</sup>の<sup>カ</sup>符』!!」

「にやにい!？」

？ 奇妙な形の短剣がメディアの手に握られ、にじり寄って来る黒髭の肩に刺した。

「ああくなーんか心が澄み渡っている様なあ……」

「黒髭が浄化された!？」

「浄化されても変わらずキモいですわあ……」

？ 胸を広げてフワフワし出した黒髭は浄化されても変わらず不憫だという結果だけが残った。是非も無いよネ！

「いつまで寝てるんですかイアソン様!」

? そう言ってメディアは聖杯を伸びたイアソンに全力投球。漏れなく彼の頭部を捉えた。そして――

? ―聖杯はイアソンに取り込まれた。

? いや、取り込まれたと言うよりも聖杯に侵食されたと形容したほうが正しいのかもしれない。

? 人型はドロドロと崩れ始め膨張を始めた。どこかのワカメポジション何だろう…ただ違うのは最終的に魔神柱に変わるという完成系を用意されているくらいだ。

? 序列三十、魔神フォルネウスが勢いで顕現した瞬間である。

? メディアもこれには「やっっちゃいました…テヘ」と可愛さアピールをしてしまうくらいだ。

『いや、固まってる場合じゃ無いよみんな?!』

「はっ?!」 そうでした、先輩指示を!!」

? 各自戦闘態勢を取る中、私は浄化されている黒髭の肩に刺さったままの破戒<sup>ル</sup>す<sup>ル</sup>べき<sup>ブ</sup>全ての符<sup>レ</sup>とヘラクレス入りの棺を交互に見ていた。

？私の口は弧を描いた。



他力本願は勇者に有るまじき行為だろうか？

？魔神フォルネウスは奇声を上げながら脈動する。イアソンなど最早居ないと言わんばかりの攻撃性を秘めた目力を私たちに向ける。

？アイドルの私に視線が集まるのは当然だと言えるが、血走った目を幾つも向けてくるファンは正直嬉しくない。人外でも節度を守ったファン活動に従事して欲しいものよな。

？兎にも角にも勝手に始まった魔神柱との戦闘。

？節穴さんフラウロスとの戦いを鑑みると如何してもヘラクレスと比べてシヨボい。

？二、三発程清姫が打ち込めば終わった前例があるのだからどうしようもないが、FGOプレイヤーとしても魔神柱Ⅱ素材と繋がるが為にどうしようもないだろう。哀れかな魔神柱諸君。

？だが、今回はどうやら奴さんもやる気らしい。目線だけで起きる爆発やら広範囲に攻撃される火砕流。お前は火山かと言わんばかりの活火山ぶりで泣きたい。暑さに強いのが救いだわ。

？ただ手を拱いているだけの私ではないのだ。未だにフワフワしている黒髭に向

かつてダツシユ。

「ウボアー!!」

?そして回転を掛けた蹴りで目を覚まさせる。

「又オ!!」 なんてござる、なんてござるかア!! 拙者がルルブレされてる間に何が。この醜きバベルの塔は何ぞや? と言うかルルブレ刺さったとこ痛いんだが!!」

? 取り敢えず黒髭が復帰。すかさず破戒すべき全ての符を回収。付属品はバツチイので魔神柱にポイしておいた。

「なんででござるかア——!!」

? 断末魔と共に魔神柱に特攻した黒髭に敬礼。

? 矢張りと言うべきか黒髭という存在は不可解極まり無い。

? あろうことかあの男は魔神柱の攻撃を見事避け、目玉イクラを穿った。

? 可笑しな軌道を描いた彼は因果逆転でもしているのではないかと疑ってしまいそうだ。ただ後を引くのは赤い軌跡ではなく涙の痕だったが…

? この場合は投げた私を褒めるべきか、黒髭の溢れんばかりの変態性を指摘すればいいの非常に迷う。

? だが黒髭への注目が集まっている今が好機だ。

? ヘラクレスの拘束はそのまま、棺アリアン・メイテンと鉄アリアン・メイテンの処女アリアン・メイテンから上半身だけ露出させる。

「今だ。『破戒すべき全ての符』ツ!!」

? 私はジャンピング&ルブレを発動。

? 宝具、破戒すべき全ての符はヘラクレスの厚い胸筋の筋を確かに突き立てることの出来る軌道を得ている。加えて、私を阻むものなど既に居ない。

? 唯一メディアは視線を寄越している。だが、手遅れだ。私の対魔力はAランクを誇っているのだから止める手立てなど元より存在もしない。

? —これが詰みというものよ!

? 私は勝利への確信に笑みを浮かべる。間違い無く勝てると言う自信がヘラクレスには持てる。このままこの歪な短剣を突き立てるだけでイアソンとの契約は切れる。その後私は強制的に契約してしまえばいいのだ。やって出来ないことは無いネ。

? そうなれば、この怪物退治のエキスパートであるヘラクレスが魔神柱をナマス切りにするだろう。目には目を怪物には怪物を、という訳よ!

? 今まさに、短剣がヘラクレスを突き貫—かなった!

? 金属同士が打ち付けあったような音がするだけである。

? 虚しい音だった。思わず唇を尖らせて「アレ?」っと首を傾げる。あ、今の私可愛い。  
い。

? —って違う、話が違う!

「何で刺さんないの！　ねえヘラクレス何でえ?！」

「■■■■…」

? ヘラクレスくんもこれにはたじたじの様だった。

? まあ彼からしたら復活して、捕まって、拉致されて、刃物を突き立てられた挙句に刺さらない事に対する反応が涙目で訳が分からない状態だ。混沌としたシチュエーションに狂戦士としての在り方を改めそうになるのも当然と言える。

「当然です。ヘラクレスには低ランクの宝具なんて通用しませんからね…正直すつごく焦りました」

「おーい本音本音」

「な、なんの事やらわわわ、分かりませんね」

? この場の誰もがメディアに対し「分かりやすい娘」と評価した瞬間である。魔神柱もこの間は攻撃していないので間違い無い。

? 忘れていた物はどうしようもない。不幸中の幸いにもヘラクレスの使役する方法はまだある。

? それは—

? —契約者である魔神柱イアッソに刺すことだ。

? 足を肩幅に広げ、短剣を右手に収める。

? 魔力を身体中や体表面に循環させ続ける。

? 高める。高める。高める!!

「破戒すべき」――

? 大きく振りかぶる。

――「『全ての符』ッ!!」

? 高まった魔力で全力投球。

? 深紅の軌跡を描いた短剣が音を置き去りにして魔神柱に直進する。誰も止める事は出来ない。私の突飛なアイディアに対応出来る者など居ない。

? 何で出来ているのかさえ不明なブヨブヨとした魔神柱の皮膚を短剣は容易く貫いた。雷のような轟音を響かせたその攻撃力は目に見えて凶悪だ。ぶっちゃけフォルネウスくんは瀕死である。

? そんなフォルネウスくんは悲報である。

? 私は彼がこの私の言葉にどの様な感情を抱くのかとても興味がある。絶望か、或いは憎悪か、イアソンならば改めて畏怖と憧憬の念を覚えたかもしれない。

「じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー……」

？ 言いたかったただけである。

？ 私の台詞に応えるようにけたたましい咆哮が開いた棺から溢れ出す。演出めいた登場シーンの様に一つずつ拘束具がパーズされる。

？ 言っておくと鉄アイアン・メイデンの処女の針や釘は全く刺さっていなかった。凹んでいただけと言  
う微妙な出来栄えだ。

？ 全ての拘束が解放された。鉛色の巨人は直立不動にそこに有るのみ。

？ だが、彼のターンは未だに終わってはいない。淡い光に包まれたのだ。

「おや、ヘラクレスの様子が…」

？ 携帯出来る怪物が進化する時のBGMを脳内再生している私は余裕綽々。もう何も怖くない。

？ 光が止めばそこには獅子の意匠を凝らしたアクセサリーに腰巻を纏い、私の身の丈より大きい斧を持った大英雄が巨木の様な二本足で直立しているではないか。アレ、髪伸びた？

？ —誰がそこまでしろと言った!?

？ 霊基再臨。それが光の正体だった。

？ 走り出すモーションを見せるヘラクレス。二歩目から既にフォルネウスの眼前に迫り、叩き切っていた。その先は目にも捉えきれない乱打。魔神柱が不思議な肉塊の山

と化するの、そう時間を要さない。

？ 跳ねるだけの肉の山は血液で起こる水音を出すだけの物体に成り下がった。流石の子ジカたちも口を押さえている。吐かないだけ正直可笑しいメンタルだ。私は少し吐いた。鮮血魔嬢とは何だったのか…

？ 魔神柱がミンチになった頃には黒髭は自力で脱出していた。よく生きてるなゴキブリよりしぶとい耐久力だ。あと清姫、あれで料理したら承知しないからね。もう出禁だからね！

「張り切って料理いたしますねー！」

？ いや違う、そうじゃない…

？ カランコロンと私の足元に聖杯が転がってくる。何処と無く赤黒くてヌメつていそう。フォルネウス汁付き聖杯とか誰得なのだろう。私はそつと洗浄した。

？ 水気を拭き取った聖杯を子ジカに届ける。

「はいコレ今回の分ね」

「あ、いつもありがとうございますエリザベートさん」

「毎回エリちゃん経由な気がしないでもない。アレ、私いらぬ子？」

？ 何処と無く悲壮感漂う彼女にはそつとエリちゃんブロマイドを渡しておいた。エリザベートはクールに去る。

？尚、後ろから雄叫びを上げる先輩とそれを止めようと躍起になっている後輩の音が聞こえたが関わりたくないのので足早にクールに去る。

？海賊組にも労いの言葉を掛け、黒髭には罵声を浴びせておいた。喜んでいたので立派なご褒美になったのだと思う。エリザもう気にしない。

？女神にも同じくお疲れ様の一言くらい言ってやろうと近付いて見ると先程まで後ろで這いつくばっていたはずの黒髭が次はアステリオスの足元で這いつくばっていた。

？後ろを向いても黒髭は居なかったので分身では無いようだ。瞬間移動とは変態性も極まったら恐ろしいものだと恐怖する。

「うう、えうりゆあれ、これどうする？」

「海に捨てなさい。自然に還る事を祈りましょう」

「うっ……」

？アステリオスのジャイアントスイングがスタン中の黒髭に襲い掛かる。高い筋力は数十メートル先まで黒髭を飛ばし、音も届かない距離で水柱を生んだ。顔面から入水した様だ、南無三。

「あら居たの？」

？あいも変わらず愛想が無い女神だわ。だが所詮旧き偶像アイドルと言ったところ。男の欲望が詰まったと言ったものの当時の男性がどれほど異常アブノーマルかが分かるな。つまりギリ



シャ男児は皆マゾという事だね分からない。

「今失礼極まりない事を考えていなかった？」

「うえ!?! んん、別に」

「アステリオス」

「すみませんでした!」

「あら、別に彼の名前を呼んだだけよ？」

「? 嵌められた!?!」

「? 本当に女神って嫌い。と言うか神が嫌い。性格が悪いと言うかただただゲスいと  
言うか!」

「取り敢えずお疲れ様。もう消えそうだからそれだけ、じゃあね!」

「待ちなさい」

「何よもう!」

「? 右の首筋に柔らかい感触がある。」

「? エウリュアレは「ご褒美」と言った後にはに cand様な笑みを浮かべる。腹黒い女神の事だ、どうせこの後の出来事でも楽しみにしているのだろう。正直既に背後から漂う熱気を感じるのだ。寒気がするのに暑い

「き、清姫、話せば分かるわ」

「何を慌てているのですか？」

？ 顔は闇で覆われていた。表情が読めないが声は慈母の様に優しい。果たして彼女は笑っているのだろうか、いやそんな訳は無い。違和感の塊と化した彼女は私の精神をゴリゴリと音を立てて削っていく。

「清姫、近い…」

「いいえ寧ろ遠く感じますわ」

？ そんな訳は無い。彼女と私の距離は肌と肌が触れ合って居ても可笑しくない程の距離だ。これを目と鼻の先と言う。

「あのね清姫、そろそろテンプレ化が過ぎると思うの。ファンたちが飽きる頃合いだと思おうのよ私」

「…つまり？」

「お家帰ろ？」

？ 暫し沈黙。

「察しました。帰りましょう！」

？ 私の手を自分の胸に当てるという慣れて欲しくない動作をし出す清姫。完全に落とし掛かっているなと落ち着いた思考をしつつ、落ち着いた清姫に安心する。

？ 舌打ち聞こえてんだからな駄女神！

?いつものように退去する際に、メデイアに襲い掛かる黒髭や「出遅れた」と嘆く弓兵二騎が居たりしたが、まあ問題無いでしょう。

? 黒髭に関しては何も言うまい…



?いつもの部屋。小市民出身の私としては落ち着かなかった広々空間もそろそろ慣れ始めてきた。正直身体は慣れているのにも関わらず心だけが追いついていないと言うチグハグとした状態だった為、肩肘張らずに居られる空間になって来た事にホッとする私である。

? 過労死の勢いで仕事場に強制的に送り込まれる日々には身体が悲鳴を上げない。英霊故にそれなりに丈夫らしい。賢王は過労死したが、それ程凄まじい雑事をこなしていたという事だね。彼は生身故にそこら辺がネックなのかもしれない。

「取り敢えず寝たい。疲れた」

? いつも通りに寝る態勢だが、彼女は今回もそれを阻むんだらうなというある種の諦めの境地。

「これはあすなろ抱きと言うのだそうです。今回は趣向を変えてみました」

？背中越しに聞こえる清姫の声は何処と無く明るい。角がある分抱きづらくは無いだろうかと呑気心配する。

「清姫、寝たい」

「夜伽のお誘いですか!? どうしまししょう私まだ心の準備など…お、女は度胸ですぬ!」  
？次に彼女を唆したメル友が誰か特定出来たな。あの引き籠もりはどうしてくれようか。

？続々とブラックリストに書かれ始める日本系サーヴァントは何時か絶対に泣かしてやる。ウチの清姫を誑かす輩は一人残らず泣かすことにしている。

？何か私の立ち位置が友達とかパートナーから飛び越えて親視点な気がする。完全に保護者だね。

「えつと、ベッドが良いですか？ それともマット…」

「おい待て。それ教えたのは誰だ？」

「その方から『絶対に教えないでくれワン』と仰せつかっているのでお教え出来ないのです。申し訳ございません…」

？オーケー把握。最優先で処す事にしよう。

？タマモナインは皆倒しておこう。彼女たちタマモシリーズは危険過ぎる。悪影響しか及ぼさない。故に排除！  
デリート

「そ、それでどちらが…」

「寝る。そのままの意味で!!」

？ 順番通りならば次はロンドン。殴る機会は十分ある。ボツコボコのけちよんけちよんにしてくれるわ。

？ ほくそ笑みながらベッドイン。今は英気を養おう。奴らを殴るまで私は絶対に諦めない!

「据え膳食わずは?」

「<sup>エリザ</sup>安珍の恥ですよ?」

「何それ知らな―」  
「？そこから記憶がありません。」

## 胸と胸と胸と筋肉

? うつむけで寝ることが習慣付いた今日この頃、私の朝は早い。と言つても朝と言う概念がこの場に存在するの未だに不明なのだが気持ちの問題だ。

? つまり私が今、『朝早く起きた。』と思うのであれば現在は早朝なのである。そういう事にして置いた方が私の精神衛生上良いはずだ。

? 私のパッチリお目目が半開きに収まっているのは決して私が悪い訳では無い。私に包くまった毛布が離れてくれないのだ。感情の無いはずの毛布まで魅了してしまうとは私は私が恐ろしい。

「朝から何に思考を割いてんのよ私は…」

? 無性に馬鹿らしく思えてきた為身体を起こすことにした。が、右腕が全くと言つていい程動かない。左腕を立て、引つ張り出そうと試みたがどうにも動いてくれない。

「んあ…」

? 引いてダメなら押してみる。柔らかい感触が手の平に伝わり、高級なクツションを想起させる。手触りはスベスベ、シルクのカバーでも付けているんだらうか。

「はふう…ああ、エリ、ザアア!」

? うんいい加減くどいと思う。ここまで腕を引いても押ししても離さない彼女にはお灸を据えた方がいいだろう。

「えい」

? 腕力で彼女を天に突き上げる。この際にも可愛いアピールを忘れることが無いアイドルの鏡はここに居た。

「―キャン!!」

? 犬の様な断末魔が響き、同時に腕に残った圧迫感は消え去った。

? 天井には美少女型のオブジェが変わりに突き刺さっていたがこれもまた日常。破壊されても直ぐに修繕される為お金の心配をする必要が無い。幸せである。

「ふう…まあ今の私にとってはごくごく普通の日常ね。清姫朝御飯食べたい」

「清姫朝御飯…清姫朝御飯食べたい、清姫は朝御飯、朝御飯食べたい。朝御飯は清姫…清姫を食べたい、私を食べたい!? あ、朝からだなんて、心の準備がまだ! ですがエリザがどうしてもと仰るのであれば女清姫喜んで御一緒致します!」

? 天井から降ってきた清姫は満面の笑みでそう言つてのけた。どうやら頭に強い衝撃を与え過ぎたらしい脳内のリミッターが解除されている。

? くつ、お願いだからお淑やかだった清姫を返して。

「落ち着くのを清姫、深呼吸して」



「ヒツヒツフー」

「違う、そうじゃない。てかまたあの駄狐の仕業ね！ いい加減しろよ天照大神！！」

？私の生活を乱すのはたいてい神だな。こちらに来てからというもの特に女神関係の出来事が悲惨過ぎる。龍安珍伝と追説いかけつ追体験こしたり、シンプルに貞操の危機に陥ったり。

？神に対する怒りで拳を強く握っている際にも清姫の暴走は止まらない。と言うか脱ぎ出そうとしている。もちろん腕を掴んで止めますとも。

「何故止めるのですか、もしや」脱がせたい」と言う事でしょうか？」

「違うから。普通に朝御飯が食べたいだけだから！」

「さ、さささ、流石にその、”あぶのーまる”が過ぎるのでは無いかと。いえ、エリザが誠に望むのであれば受け止めますとも。ただ、困惑してしまったというか……」

？すっかり脳内がピンク色に染まっている。ヤンデレはいいけど淫乱にはならないで下さいお願いします。寧ろほら焼きに来いよ！

？手を帯に導こうとするな。掴ませようとするな。引かせようとするな。そして私は悪代官ではない！

「ああ……これは盲点でした。ベッドではお代官ごっこは出来ませんよね！ やはり敷布団でなければ！」

？と言つては布団を何処から取り出した。ダミ声で取り出す必要性がよくわから

ない。なぜベストを尽くしたのか。

「ご心配なさらず、丁度良い塩梅に仕立てました。密着せざるを得ないと言うよりも、触れるか触れないかの瀬戸際を再現した大きさ。ありとあらゆる態勢を想定した生地 of 伸縮性や強度は信頼に値すると自負しております。さあ何処からでも来てください求めてください頂いてしまってください。もちろん私からでも、その：構いませんよ?」

? 駄目だこの娘。完全に毒されてやがります。何が『構いませんよ?』、何ですかね。私は先程から朝御飯食べたいとしか言っていない。何をどう間違えたら yes 枕を抱き締める事態に発展するのか理解不能出来ませんでしたくもありません。

? それに作る物の質が向上して行くことに連れて断つていくのが心苦しくなっていくのです。どう見ても手間暇掛けていらつしやる。

「この程度の手間、貴方様の為ならば惜しくはありません」

? 知ってる。

? よつぽど頑張ったのか彼女は発育の良い胸を張って答えた。歳の近い英霊たちと比べたら悲惨、圧倒的よね。これが胸囲の格差社会。現実って残酷だわ。極東では一体何を食べればこうなるのかしら…

? 私? 私はこれが完成形だから、均整の取れた美ボディとはこのこと言うのよ。つ

まり貧乳はステータス。

「どうしました?」

?

「…なんでもない」

? 拙いな、つい視線が胸元に向いてしまう。微妙に着崩れた着物は艶かしいと言うかフエチズムを刺激される。

? いや私にとつてはその手の欲は微妙な範囲か。視線の先を胸に固定してしまった私の心中は果たして姿貌への憧れか妬みか…

「何処を見ていらつしやるんですか?」

? 女の視線対する察知能力の異常さを垣間見た。

「いや何処つて、アンタをよ…」

「いえ、そうではなく…質問を変えましょう。私の何処を凝視していらつしやったんですか?」

? 何故だ。何故私が責め立てられている。条件反射だろうか? 誰が私を責められると言うんだろうか。いやこれはこれで変質者の言い訳に聞こえる。そうだ正直に言おう、謝ろう。不躰な視線をすみませんで終わりだ。さあ心は決まったなエリザ、胸を見ていたと言う告白を羞恥を隠しつつも言い切るんだ。

「…胸を、見てました。なんかごめん」

「私は一向に構いませんー!」

? 私は良くない。想像以上の恥ずかしさだ。

? 同性の友人に「胸を凝視していた」やら「股間に凝視していた」なんて話があつてみる。何処と無く微妙な羞恥心がずつと胸を燻るよ。

「寧ろどうぞ顔を埋めてしまつても構いません。そう言うのもあると聞き及んでおります」

「アブノーマル過ぎんだろぅが!」

? いや弁明しておくが、私は決して清姫にバブみを感じる様な特殊性癖など持ち合わせて居ないからね。相手はほぼ同年代鯖だもん。

? おっと”清姫に”と言う部分に反応した優秀者は後で生歌披露をしてあげるわ。喜んで、私の為だから!」

「理性などかなぐり捨ててる覚悟は宜しいですか? 私の敏捷からは逃げおおせても既成事実からは逃げられ無いと心得て下さい。私、逃がしませんので…」

「いやいやいや、英霊にそういうの無いから! 私たち反英霊にも無いから! ちよつと手を引つ張るの止めなさーヒイ!」

? 清姫の瞳には最早私しか映っていない。本気と書いてマジと読む、そんなヤバイ目をしている。ギリギリ保たれていたボーダーラインを踏み越えようと躍起だよこの娘。

ちよつと必死過ぎないだろうか、正直ドン引きです。

?—勇者よ:

? 蛇は獲物を締め殺さんと巻き付く。清姫は私を逃がさんと組み付いてくる。

? だが、脱出法はあちらからやつて来た。地方営業だろうが、人類悪を殴り倒す簡単な作業だろうが何でもいい。一時だけでもこの場から逃げ遂せるならばおつかい感覚で救つちやいます。エリちゃん世界救つちやいます!

? 貞操の危機を乗り越える為に強く念じる。—速く飛ばせえ!!

?—言質取つたり!

? やけに嬉しそうな声と後、いつもの浮遊感が訪れる。

? 清姫は舌打ちのあとで「焼いておくか…」と謎の言葉を零した。彼女は一体何と戦つておられるのか、エリザは頭が痛いです。



? 竜の感覚器官を大きく刺激する過多な魔素を感じた。視界はほぼ白く塗り潰す濃霧。身体を撫でる水気は異常を存分に意識させる。

? 場所はロンドン、この地は霧が出ることで有名であったがそれにしても異常だ。一

般人が外に出ては死んでいく魔霧が常時発生している様が普通なのであれば観光には向かないし行きたくはないでしょう。

「取り敢えず拠点を置く事にしましょう。闇雲に突っ込むにしても危険だし、突っ込むのにも準備が必要でしょうしね」

「では六畳一間の物件を探しましょうか」

「あるわけ無いでしょうが。ここロンドンよ?」

? 本気なのか冗談なのか真顔なので全く分からないが何処と無く楽しそうだ。

「みこーん、みこーん。みこつと感じます。類稀に見ないイケ魂反応です!」

? 周りには何も居ない。と言うか視認できないだけだろう。居るのか、そこに!

? 私はそつと、だが力強く拳を握った。

「おい待てフォックス。てかなんだよその魂…」

「ちよつと付いて来ないで下さい金時さん。毛がビッリビリバツチバチするんですよ。それに男連れなんて心象最悪です!」

? —既に最悪だよ!

? 奴から見ても私は—魂的に—イケてるらしい。不意打ちに期待出来そうだ。全力全開を持って攻撃しても避けられては無意味である。確実に当てる行きたい。これまで私が味わった恥辱を単純なエネルギーに変えて黄金の右腕でもってけちよんけちよ

んにしてくれるわ。

？「みこーん、みこーん」と言う謎のサーチ音が徐々に大きくなつて来ているのが分かる。緊張しきつた私の尻尾が警鐘を轟かせている。―近いっ！

「それでイケ魂とやらは味方なのかよ？」

「イケモンだったら私は全力で逃げます。金時さんを置いて！」

「そいつアゴールデンじゃねえな……」

？くだらない問答している今がチャンスだ。私は音もなく駆け、右腕にキャスターでも死なない”めっちゃ痛い”くらいの魔力を込める。

？濃霧の先に標的を確認した。

？必殺技を叫びたい所だが出来ることならギリギリまでバレたくはない。心で叫ぼう。

(我が怒りによつて磨かれた憎悪の鉄拳。鮮血を撒き散らしながら果てるがいい！)

？――鮮血鉄拳魔嬢ツ!!

パトリック・アインフイスト・エルジュエーベト

？標的もコチラを視認したようだが既に遅い。―勝った！

？―と思つた……

? 突如浮遊感に襲われる。小学生の時にハイテンションになっては同じ経験をした事がある。親にもよく注意をされる事だったのにも関わらず。親には決まってこう言われていた――

? ―はしやぎ過ぎると転んじやうゾ、と。

? 道には窪みがあった。私は棘のついた靴を履いている。つまり引つかかる。注意していればどうつてことのない窪みであった。

? 無駄に脚力が有るだけに勢いは止まらない。ベタなポーズで浮遊する私は何とヒロインをしているのだろう。エリザベート・バートリーはドジっ娘ヒロインであったか!?

? 結果、私は標的の胸部装甲にダイブする事となった。

「おう!」

? ふんわり柔らかかである。

「ちよつとストツプ、動かないで下さい! 刺さります。角が顔を突き刺さりますからア!」

? そう言われてもこのままと言うのは私の体裁を考えてどうだろう。いきなり胸に飛び付いた美少女は果たしてどのように見えるだろう? 簡単だ、美少女である。

? 閑話休題。



? 出オチと言う悲しい結果となったタマモシリーズ殲滅計画。登場シーンとしては最低最悪であり、涙目は不可避だ。事実目頭がじんわり熱を帯びている気がする。

? 清姫が駆けつけた後で一悶着有ったりしたが、些細な事だろう。結果、道が焦げ付くだけなのだから、タマモを倒せなかった事に比べれば本当に瑣末な出来事であると思は思う。

「こんなにも焦燥した姿は初めて見ました。清姫の胸であれば何時でもお貸しいたしますよ」

「下心しか出てきてきませんよ清姫さん」

「む、元とは言えばタマモさんが原因らしいじゃないですか? どう責任取って下さるんですか!? 胸に飛び込まれたからって調子に乗らないで下さい!」

「最後の方が本音ですよねえ? いえまあ確か役得と言いますか、ご馳走様と言いますか:とにかく楽しんでいないと言えば嘘になりますか、私としても不可抗力ですしい! 正直アレだけアドバイスして何ですけれど、まだ落とせていないなんて脈無しなんじゃありません? フリーなら私が貰って行っていいですよね?」

「:言つてはならない事を言いましたね?」

? キャットファイトとはこう言う様を表すんだったか、いやファイティングしているのは猫ではなく狐と蛇だけだ。

? 正直バーサーカーの中でも筋力の低い清姫とキャスターと言う直接戦闘に向かない玉藻の前が争つても目に見えて泥試合なのだが…

? この後互いに燃え尽きるまで戦いは続いたらしい。

「取り敢えず俺たちの上着着とけよ。寒いだろそのカツコ」

? アンタが一番イケ魂に見えるよゴールデン。

## 不遇な少女達を保護せよ！

？ 前回のお話。 ゴールデン<sup>ママ</sup>当<sup>マジ</sup>ゴールデン、以上。

？ 他のエピソードなんて何一つとして記憶しちやいないね。 と言うか思い出して良い記憶じゃないと本能で分かる。

？ ジメジメとした空気も彼のようなゴールデンなゴールデンと居れば苦じやない。 寧ろ楽しい。 流石は世のちびっ子たちの登竜門である金太郎だ。 だが私は金太郎を読んだことはない。

「ねえねえゴールデン！」

「ん、なんだよドラゴンガール」

？ 何そのアメコミヒーローみたいな名前…

「この服本当に借りていいの？」

「なんだそんな事か。 男が貸してやるつて差し出したもんを押し返されちゃカツコつかねえだろうが。 要らねえならその限りじやねえがよ」

？ なんだよこのゴールデン、イケメンかよ…

？ 大好きだと抱き着けば何も言わずに頭を撫でてくる。 これはもう癒し粹決定です

ね。頼れる兄貴分としては最高にゴールデンだ。

「ああ、うん。これが見た目相応の反応だよなあ」

? 誰のことを言ってるのか直ぐに分かるな。

「あんたはん、女の頭を不用意に撫でるんはアカンよ? ウチが鬼やつたら食べてしま

いそやわ…」

「YA・ME・RO!!」

? 揶揄いがいのあるゴールデンだ。嫌いじゃない。

「エ、エリザがあんなに楽しそうに…」

「いや、反応的に仲良しなクラスメイトな気がしますが」

「野性味溢れた方が好みなのでしょうか?」

「聞いちやいねえ!」

? 次の夜這いが一気に怖くなってきたわ。

? 閑話休題

? そんなこんなで私は拠点探しの旅にゴールデン一行を連れて行くことになった。

? 広いのでいい感じの場所を虱潰しで行く他無さそうだと行っても所によつては

生存者も居るため生存確認が優先になるだろうが。

? しばらく歩いて来たが、ふと既視感を覚える古本屋まで来ていた。正確な場所が分からないのでまだなんとも言えないが。取り敢えずみんなに了解を取って入ってみる。勿論こつそり。

? 紙の匂いが鼻を刺激する。いや埃臭いと言った方が適当かもしれない。なかなかお目に掛かれない蔵書量に目を瞬かせれば、ウチのはどうだろうかと思いついてみる。我が座はエリちゃん心の心象風景と言うか、とにかくチエイテを基点に広がる世界だったのでそれらしい場所が存在する。数だけならばこちらが多いかもしれない。魔改造チエイテに不可能はない。誇らしいネ。

? 改めて見渡せば皮肉屋の童話作家が黙々と本を読み耽っていた。時々苦々しい表情になったり、鼻を鳴らしては丁寧な次のページを捲って行く様子を見てこちらの存在には気付いていないように見える。

? 既に確信出来ているが彼に確認を試みよう。私は少年に問い掛ける。――が、返事は無い。

? と言うか一瞥もくれない。

? 少し大きめ、司書さんに目を付けられるくらいの声で問い掛けてみる。彼の読んでいた本のページがパラパラと飛ばされる。そこでやっとこさ少年はこちらを見た。

「やつとこつち見—」

「—本も黙って読めんのかヴァカめ」

? 若干眉間に皺を寄せ、少年ハンス・クリスチャン・アンデルセンは皮肉十割の声色で返して来た。

「アレだけ声を張り上げておいて聞こえていないとでも思ったか? 聞こえているに決まっているだろう」

「じゃあ返事くらい…」

「貴様本を読まんのか? キリがいい所まで読みたくなるのが読者として習性だろう」

「読むわよ本くらい。でもキリがいい所までつて言っておいて最後まで読んじやうのも読者としての習性よね!」

? ドヤ顔で「分かっているじゃないか」と言ってくるアンデルセンにイラつきながらも本題を聞くべくもう何度目かの問いを投げ掛ける。

「隣に魔本とやらは居るぞ。今さつき助けを呼んだ訳だが…察するにジキル氏からの救援では無さそうだな。彼の言ったサーヴァントの特徴に合致せず、何より速すぎるからな」

? 童話作家なのに探偵の真似事とは…

? 兎にも角にも彼の証言からしてここに誰かの為の物語が居ることは分かった。

？ふむ、よく考えてみたら彼女は倒される存在にしては悪を成していない気がする。マスターになれない者を眠らせただけだ。それを悪と断ずるには些か早計が過ぎるだろう。

「助かったわミスター。その子に用があるから失礼するわね？」

「言っておくが攻撃は奴に通らんぞ？」

「誰が戦うって言ったの？ 私は根っからの平和主義者よ！」

？まあキレたら暴走列車はおろか宇宙戦艦とまで言われた私ではあるが、元日本人としては平和主義者を言い張る私である。

「アポ取れたわよ」

？一応警戒されない様に外に待たせたゴルデンたちを呼ぶ。戦う気はないけれども念には念を、だ。

「なんか外までソニックブームが来てたんだが……」

「ですからエリザは既に私の料理に——」

「一胃袋掴めてもハートは掴めていないんじゃないやありませんか？ 一步は踏み出せている

様ですが、二歩目で躓いているようじゃ片思いと変わりありませんよ？ 何かと世話を

してくれる幼馴染程度で甘んじてんじゃねえですよ」

？ゴルデンのサングラスが「お前が行つてからずっとこんな感じだ」と言っている

のが分かる。すまないゴールデン、本当にすまない。

? 取り敢えずバチバチ始めた二人には鉄拳を落としておいた。二人ともこれはDVでは無いのだよ。

? 魔本の元まで向かう中途にアンデルセンに眉をひそめられ、鬱陶しそうな視線を向けられましたがガン無視決めて少女確保に掛かることにした。

? 問代わりになっていたモツプを取り払いいざ入室。

? 中にはさ迷うように、何処と無く寂しそうな本がふよふよと浮いていた。大きさは私が丁度抱え込める程だろうか、思ったより大きい。

? 第一印象は大事。と言う事でアイドルスマイルで話し掛けてみる。

「ハイ、アリス。貴方がみんなを困らせているって聞いて来たんだけど…お茶でもしながらお話ししない?」

? 自画自賛になるが完璧である。みんなを困らせていると聞いた云々は嘘であるが、ゴールデンもタママも魔本も私が嘘を付いている事実を知らないので一切問題ない。清姫は言わずもがなである。

? それと思わずアリスと言ったが、これもまた無駄な争いを避けるためだ。それにナーサリー・ライムってアンデルセンが付けたわけだし…

? 魔本は眩い光に包まれた。B連打はない。



? 光の中から現れるのは勿論想像通りの少女であるが、予想外なのはその表情である。――少女は涙目であった。

? 私は心の中で血を吹いた。よく分からないが小さい娘を泣かせてしまった。自分の何がいけなかったのか、本当に分からないのだが、意味が分からないが故にわたわたしているわけだ。

「アナタはあたしアリスと遊んでくれるの?」

? それが第一声だ。

? これ以上泣かれるのも嫌だと思い、勢い良く応える。勿論アイドルスマイル付きだ。贅沢なのだけ。

「喜んで!」

? 彼女の双眸から涙の雫が零れた。

? ―何故だア!!



? ソーサーに乗せられたカップからは馨しい茶葉の香りと共に湯気が昇っている。中には透き通った紅の液体が湛えられており、色は濁っている様で鮮やかと言う矛盾を

抱えているものの、味を舌に覚えさせる事があるならば間違いない無く美味の二文字で完結されるだろう。

？尚ここままで紅茶を持ち上げてみたが、私はブレる事ない緑茶派である。だが、身体が違うので紅茶でも一向に構わない。そんな事よりマカロン食べましょう。

「すごいのだわすごいのだわ。エリザベートつたら本当にすごいのだわ！ あつと言う間にティーパーティーが開けるなんて、きつと帽子屋もびっくりよ」

「私は帽子屋よりもチェシヤ猫の方が好きなんだけれどね。ほら口元にクリーム付いてるからじつとしていて」

？ 諸君、これが癒しという者だ。隣で恋愛とは何かと言う血腥い問答が繰り広げられるようが、圧倒的な癒し力を持つてすれば造作も無く中和する。最早侵食していると言っても過言ではない。

「でよオ、いつまでここに居るんだ？」

？ まあ至極真つ当な問いだろう。私たちはアリスを宥めてお茶会を開き、そのまま古本屋に留まって居るのだから。

？ 正直落ち着かせたアリスが不意に店主に掛けた催眠を解くんじや無いかと心配であった。結果として助けたのに不法侵入者として通報されたんじや堪ったものではない。

「そろそろ出て行きたいところね…」

? 思いもしない仲間が出来た以上ここでのイベントは消化した。あとは腰をゆつくり落ち着かせる場所を探さなければならぬ。今回はメインクエストを進めがてらサブクエストを終えたに過ぎないのだから。

? 私はアリスにお茶会中断を打診した。可愛らしい返事で了承された為、道具諸々を回収、撤収準備はものの数秒もかからず終えた。

? 扉を開け、玄関へと真つ直ぐ向かう最中、アンデルセンは口を開けつ放しで見送った。ドヤ顔をしながら出てやった。予想外の展開だっただろうちやな童話作家。

「ですからあのアリスと言う少女はきつとエリザと私の間で出来た―」

「話が飛躍し過ぎて最早ギャラクシーですよ。そんなお伽噺は刑部姫さんに描いてもらえばいいじゃありません? 現実見ましようよ。げ・ん・じ・つ!」

? 私のドヤ顔が一瞬で響めつ面になった瞬間である。無言で頭を撫でてくるゴールデンや、そのゴールデンを真似るように撫でてくるアリスの優しさが心に染み渡る。



? 道中のホムンクルスやヘルタースケルターを薙ぎ払いながら進んでいくと、ふと裏

路地が目に入った。特に意識しなければ極々普通の裏路地だ。

? だが違う。普通ではない。路地の元々の暗さと霧の濃さで近付かなければ分からない程に抑えられた違和感があった。見れば見る程に強まる違和感、背筋に薄ら寒いものを感じた。

? 後ろの二人でさえ黙るほどの強烈な違和感がやってきた辺りだろう。私は咄嗟に回避行動を取る。結果として私の腹に薄皮が切れる程度の過擦り傷が出来た。

「あれ、上手くいったと思つたのに」

? 幼い声が響いた。姿は未だに見えないが既に正体は分かつた。路地の違和感の正体もこの者の作業だろう。魔霧に紛れた不思議な霧や丁寧に解体されたホムンクルスに溶けたヘルタースケルターもまた彼女を証明する鍵だった。

? ——ジャック・ザ・リッパ夜霧の幻影殺人鬼

? それが彼女の、いや彼女たちの正体である。なお、私の言い回しが可笑しいことにツツコミを入れることは御法度である。情けない部分だけだとファンが減ると心配をしている訳では無いのである。勇者系アイドルはCOOLでなくては。

「アサシン——ッ!」

? 身構えるもあちらが攻撃してくる気配は無かつた。ジャックはこちらを観察するように目を細めるばかりである。特に私が凝視されている。もつと私を見て良いのよ。

「どなたか私たちのおかあさんは居ませんか？」

？ 極めつけはこのセリフである。完全に戦意が萎えて行くのが分かる。ゴールデンもこれにはサングラスを八の字に曲げるのみよ。

「私が貴女のお母さんです！　そしてこの方がお父さんです!!」

？ 極めつけはこのセリフである。清姫は嬉嬉としてジャックに返答した。タマモからの支援が受けられないと察して養子縁組で家族を構成するつもりなのかもしれない。殺人鬼の娘がいきなり出来るのは色々複雑だよお父さんは。

「そうなの？　じゃあおかあさんは解体。おとうさんは、おとうさんは…おとうさんも解体でいい？」

「良いわけではないでしょうが！」

「初めてのスキンシップですねお父さん！」<sup>エリザ</sup>

「今煽るのはデンジャーだろ」

「清姫さんがアップをすっ飛ばして走り出してますよ。これぞバーサーカーの鏡ですね」

？―言ってる場合かあ!?

？ 私は思わず角を押さえる。<sup>あたま</sup>いつも通り混沌としました。オケアノスでもそうだが、私が頭を捻って考えた戦略でスマートに特異点を解決する筈がいつの間にか180度可

笑しな方向へと向きが変わってしまふ。私の起源が『混沌』とでも言うのか!?

?ちよつとカツコイイと思つたのは内緒だ。

?やがて隣で大人しくしていたアリスが私のマントを引く。

「あたしも、エリザベートみたいな家族が欲しいな」  
アリス

?視線が合つては離し、視線が合つては離しと、チラチラ見てくるアリスの愛らしさとその言葉が合わさつて私の心の奥底に眠る父性を大いに刺激した。

「私お父さんになるわ!」

「しつかりしろオ! 飲まれんなア!」

「金時さん、残念ですが手遅れです。彼女は犠牲になつたんですよ、ギャグ時空と言う名のブラックホールの犠牲の犠牲に、ね」

? 拝啓? お父さんお母さん、私は様々な過程を吹っ飛ばしてお父さんになります。

これは確実にポジションを間違えている。

「壮絶な親子喧嘩、と言うよりもただの殺し愛。顔に浮かぶのは鬼の形相では無く、慈母の顔とそれに甘える子供の顔。全てが奇妙であり狂氣的。」

「たアー！」

ジャックの逆手に構えられたナイフが清姫の下腹部に突き立てられる。それは清姫の閉じられた扇子によつて弾かれるもジャックはめげずに身体を捻らせてラッシュする。

「解体するよー！」

顔に喜色の笑みを貼り付けながら家の外壁を蹴り立体機動に入るジャック。変則的な切り結びは紅い軌跡を描きながら飛び回る。霧で視界が優れないのにも関わらず全て扇子で流していく清姫の技量に顎が外れそうな私。

誰かいい加減にこの非常識な状況を解消すべきだと私は思うの。けれど私はコレをどうにかしろと言われても手が出せない。助けてゴールドン、いやそんなに全力で首振らないでも…

清姫の内に高魔力反応、明らかに宝具の前兆である。これにはジャックも距離を取つ



て構え直した。互いに緊張状態が保たれ、次の一手で勝負が決まる事を示唆した。  
「―つて、それはマズい!!」

こんな細っこい道で清姫の宝具何て使ったならばみんな仲良く焼け本、焼け狐、焼けゴールドン金時になってしまふ。なお私は大丈夫だと思われる。オルレアンでの実績がある。

「この、バツカモンがア―!!」

私の身体に纏われた魔力渦で霧は晴れていき、清姫へのルートを引いた。後はそれになぞつてドリルキックを叩き込む。

「はッ、これが新たな愛のかた―」

寸分狂い無く清姫の脇腹をゴリゴリと削り取るドリルキック。ピンと伸ばされた両足を屈む形で収めた後清姫を蹴つて反動を得る。そして着地した後ガッツポーズ。アイドルとして恥ずかしくない一連の動作だわ。

「まずアイドルはそんな事しないと思うわ…」

「俺はいかしてたと思うけどな」

「金時さん、タバコ逆さですよ?」

誰になんと言われようとアイドルっぽい行動です。文句があるなら生ライブに来ることを推奨するわ。死んじやうくらの感動をアナタにプレゼント出来る自信があるもの。

清姫の顔を踏み付けながら何故宝具を使おうとしたのか問いたです。苦しむと言うよりか何処と無く恍惚な顔を浮かべながら答えてくれた。この娘はもう末期だわ、知っていたけれど。

「そう言う愛の形もあると——ああもつと足蹴にして下さいませえ」

取り敢えず角を驚掴み無理矢理立たせ、首に腕を回して意識を刈る。最後まで「エリザの控えめな乳房が背中に——」などと幸せそうな悲鳴を上げていた。

「何か私の知っている清姫さん以上にアブノーマルに染まつちやつてるんですがソレはどういう」

「色々あったのよ……」

「いやいや安珍厨の清姫さんが他の英霊にここまでの影響を——」

「色々あったのよ……」

それを最後にタマモは小さく声を漏らし、察したように哀れみの視線を向けてくる。

私は好きで清姫をこんなピンク色に染めたわけでは断じてない。何か勝手に染まつて、勝手に言い寄って来ただけです。初対面でいきなり胸をまさぐってくるぐらいに最初からピンクしてたもん。私悪くない。

手に持ったピンクをそこらに投げ捨て、呆然としているジャックに向き直る。ナイフは構えたままだが話は出来そうだ。

「おかあさん寝ちやったの？」

「そうなのよ、困っちゃうわよねえ」

何処と無く不満顔なジャックは遊びはおしまいと思つたのかナイフをクルリと回して腰のホルスターに収納した。そしていつの間にか脱ぎ捨てた襦袢の外套を羽織つて路地に戻つていこうとする。

ここで逃すのはマズいと考えた私は呼び止める。あどけない表情を浮かべながら振り向いてくれたジャックと一緒に来ないかと勧誘を掛けてみた。結果は――

「ダメだよ」

拒絶だった。

ジャックの目的は母親を見つけ、中に帰る事だ。目的は既に半分達成されている筈、清姫と言う母親を得たジャックはここから離れる必要はない。だから一緒に居ていいと言つてやれば嬉々としてパーティに加わると予想していた。

だが、結果は拒絶だった。

母親を探しに行く必要など何処にも無いと言うのに細い路地に帰ろうとする。それがたまらなく違和感だった。そんな違和感を払拭する為に理由を聞いてみたが。

「…よくわかんない、何でダメなんだろう…ねえ何でおかあさん？ どうしてわたしたちは一緒に居ちゃダメなの？」

寧ろ聞いてくる始末。

無垢な瞳に疑問の霧を被せた状態。とぼけた様子も無く、本当に分からないと言った雰囲気であった。唸りながら考え込んでも結果は変わらないらしい。

「ふむどうやら簡単な思考誘導の魔術を掛けられている様ですね」

「分かるのタマモ?」

「いやあ何処と無く呪術っぽいですしい。となれば専門分野つて寸法なんですよ」

いやジャックに操られていた的な描写は無かったはずだけれど、その魔術を行使して  
いそうな人くらいは分かる。と言うか P パラケルスス でしょ間違いない。

となれば術者をしょっぴいてジャック仲間入りイベントを消化するしかない。数は多ければ多い程いいのです。質が良ければなお良し。

「じゃあ魔力を追跡したりして直接叩くわよ!」

「いえ、霧的な理由でインポッシブルです」

「アリスでも?」

胸の前で腕をクロスさせ、申し訳なさそうに顔を歪ませるアリス。正直心がジクジクするわ。

しかしどうしたものか、これでは手も足も出ないままジャックを逃す事になる。

「ではいつそこちらがジャックに同行してみるのはどうでしょう?」

いつの間にか復活を遂げていた清姫はツヤツヤした顔でそう言ってきた。脱皮でもしたのかしら…

「いやでも一緒に居ることには変わりないし流石に—」

「—それなら、うんいいよ」

「何でよ!?!」

ゆるい、ゆるすぎるぞ思考誘導。それでいいのか本当に、清姫の理性くらいゆるいわ。

でもまあ、<sup>トラップ</sup>罠だとしても踏み抜くだけ踏み抜いて行くのが勇者としての王道。正面からお邪魔しましょうそうしましょう。



何処に行つても霧ばかり、見える景色も一辺倒、清姫は今日も狂愛士<sup>バーサーカー</sup>。ひたすらに小さい女の子の後ろを追い掛けるのって勇者の前の人としてアウトと思うのは私だけかしら。

半分飽き始めていた私はゴールデンの肩にアリスと一緒に乗車してダラダラと過ごしている。

「視線が痛てえ」

恋する乙女の眼光は質量を持っているからね。特攻でダメージソースがすごいなの、きつと奴らは真の英雄なんだね。

「真の英雄は目で殺す…」

「なんだ、ビームでも出んのか？」

「あら鋭いじゃない」

そう言えば私の系譜にビームやらミサイルやら撃ちまくる娘が居たような気がする。もしかしてうちのチエイトにも居たりするのかしら、対軍宝具を個人に集中的に運用する鬼畜技を持っているのだし有用よね。コクピットに乗れば空中の高速移動とか出来るし、何より燃料って私だからエコで幸せいっぱい、地球に優しいからガイアもこれにはニッコリね。

二体で合体メカも展開的に美味しいわ！

「英霊でメカニック候補は大勢居るのだし、今後のメンテナンスや装備改修の為にスカウトとかした方が…」

「とつても楽しそうねエリザベート、アリスも混ぜて」

「男にしか分からない世界なのよ！」

「エリザベートは女の子なのだわ…」

「心に少年を飼っているの」

頬を膨らますアリスを横目にジャックを覗く。

会話には入って来ない。黙々と迷い無く進んでいるという事は目的地がしっかりあると言うことだろうか。

「ねえジャック、何処を目指して居るのか聞いて良い？」

「スコットランドヤード  
ロンドン警視庁だよ。たくさん殺すんだって」

「へ、へえその口振りじゃあ他にも来るみたいだけど……」

だがそこでジャックは首を傾げた。

「いよいよ罫の線が濃厚になってきた。相手に同行者がいるのにも関わらずに同行を許可させるなんて分かりやすい真似を魔術師の様な秘密主義な奴らがするわけが無い。まるで私が付いてくる前提で仕掛けられたみたいな気持ち悪さだわ。」

兎に角、第一目標は術者を倒してジャックの仲間入りイベントを消化する事ね。

それまでロンドン警察の人たちは警視庁内に隔離して安全を確保しないと。魔術の秘匿云々言っている場合じゃないし、彼等じゃあサーヴァント戦は不可能だし、持つても一分持つか分からない。漏れなく何も分からぬままに殺される。

まあその辺はキャスター組に任せよう。

「そろそろね」

霧でシルエットしか拝めないし魔力の反応も鈍いが、近付いてみたらサーヴァントの

反応をピンピン感じる。自分の索敵能力の高さに感謝ね。

門の前に人影を捕らえたと同時にゴールデンの上から下車する。一人を除いて臨戦態勢を取るが徐々に明らかになっていく人影に私は思考を停止せざるを得なかった。

「何でアンタがここに居るのよ？」

私が捉えた人物は白衣を着た錬金術師などでは無かった。私が見たのはモスグリーンのタキシードにシルクハットの魔術師だ。

温和そうな笑顔をこちらに向けている。だがその目の奥に秘める憎悪の炎は確かに私に向けられている。

「ポジションミスよ。何でそこにいるのフラウロス！」

「蜥蜴風情が私の名を気安く呼ぶな。全く吐き気がする。何故貴様なんぞの始末を請け負わなければならぬんだらうなア」

そう言って前回私たちに焼け魔神にされたフラウロスは手に持った聖杯を掲げた。濃密な魔力が周囲を輝きで満たしていく。私は何が来てもいいように構えを取ったまままだ。取ったままだった。その筈なのに…

—私の胸に槍が生えているのは何故だろう？

背後の者はサーヴァントで間違いなかった。アサシンならば納得も出来る。結果はランサーだが、果たして気取られずに私だけを奇襲出来る槍兵が居ただらうか？ 李書



文ならば出来そうな気もするが、槍の形状からして除外される。

いや、良く考えれば振り返れば一発で分かるじゃない。

馬だ。馬の顔がアップで見える。

いや違う、問題なのはその馬の騎乗者、私を突き刺してきた槍の持ち主のはずだ。馬何かに目を奪われている場合じゃない。

正体は闇色と言っているいいほど黒々とした鎧を装着した騎士だった。やけに胸部装甲だけ盛り上がっているので間違いない女だろう。と言うか普通に知っている英霊だったわね。

アルトリア・ペンドラゴンのオルタなランサーで相違ないでしょう。つまり現在進行形で私の骨をゴリゴリしているのはロンの槍という事ね。

「じゃあ何でいきなり背後なんか……」

「聖杯をただの目眩しだけに使ったとでも？」

なるほど令呪で出来るような転移やブーストが聖杯に出来ないはずも無かったわね。クソウ、呪い効果で傷口がジクジク痛む。こんな時に型月っぽさなんて要らなかつたわ。と言うか選択肢なんて何処に……ジャックに付いていくことが選択か。

「好感度、足りてなかったかな？」

「んな、呑気な事言ってる場合じゃないぜオイ！」

横に立っていたゴールドデンがアルトリアに向かって斧を振るう。アルトリアは槍に刺さった私を盾にそれを防ぐ。

「いけませんわ金時さん、エリザが」

「チイ…」

「ちよつとあんまり揺らさないでよ傷口抉れちゃうじゃない」

何処と無く意識がふわふわしてきた様な気がする。口内は血液で噎せ返るようなのに不思議ね。

「エリザ!？」

清姫が呼びながら向かって来てくれていているけれど、能面の様な顔になっているジャックに邪魔されている。どうやら来れそうに無いらしい。アリスやタマモではサポート位しか出来なそうだし、助けようにも当の本人は盾にされちゃってるわけで…あらやだ囚われのお姫様ポジションに抜擢なのかしら。

いや囚われのお姫様ならもつと丁重に扱って欲しいわね、切実に。何処に槍でプランプランさせられちゃうお姫様が居るって言うのよマジありえない。

全くこんな無様をプレゼントしてくれた人畜無害を装ったサディストはどんな顔をしているのやら、つて居ないじゃない!?

「殺り逃げとか…サイテー」

「言ってる場合ですか!? てかエリザベートさん結構元気ですらっしやいます?」

「何かお花畑が見えてきた。胡散臭い笑顔の爽やかお兄さん付きとは何とも豪華なおブシヨンよ…」

「手遅れっぽいじゃないですかヤダー」

「縁起の悪いことを言わないでください! エリザは私を置いて逝ったり致しません…」

案外喋れんじやない。

戦闘中に会話とかこれだからギャグ時空は困るわ。いやゴールデンは苦い顔しながら対峙してるし、アリスは泣いてるから、あの馬鹿二人だけギャグに生きてるのね。

あ、私はきつとギャグとシリアスハイブリッドです。それって所謂シリアル?

「ああ、何か道場と花畑がミックスしてきた…」

「エリザア——!!」

そう言えばフラウロスって嘯ませで、何回か出てきて、その度に情報を残して帰るわよね…アレこれって—

—つまりアイツってそういうポジションなの!?

私は勇者であって主人公では無い——である筈なのだ。

気付いたら何とも不可思議な空間にて棒立ちになっていた。酷く老朽化が目立つ武道場に花々が咲き誇り、外を見れば曇の無い群青色の空と錆びと苔で覆われたビル群が見える。

退廃的だ。

長い年月、人の手が入らなければこのような惨状を目の当たりにしても納得ではある。事実、人の気配も無ければ動物の気配すら感じ取れはしない。ここに居る存在が自分だけなのではないかと若干の恐怖感を覚えたが深呼吸をして要らぬ感情を押し止めさせた。

さて、私はどこに來たのか。

まさか今更未来の世界に飛ばされたなどとは考えない。私たちが救う未来がこの世界だとは思えないし思いたくは無い。

ここに来る前後の記憶は特に苦もなく取り出せた。そう確か私は戦闘中に背後に転移されたランサーに反応しきれずにロンの槍にぶつ刺された後に肉壁要因としてリサイクルされていたはずだ。

それから先は記憶に無い。座に帰還されない所を考えると――

「サーヴァントで夢……」

通常サーヴァントは夢を見ない。マスターが居るのならば魔力が通るレイラインを伝ってきた記憶を閲覧するという事象が起こり得る事を知っているが、生憎と私はマスターと言われる都合の良い存在は持ち合わせてはいない。

「貴様がそれだけ特殊だと言う証左だ」

誰も居ないと思われた世界に私以外の声が発せられた。

それは背後から、先程相對していた、忌々しい声だ。

「フラウロス……夢にまで来たの？ 追っかけもそこまで来るとストーカーね」

いつも不機嫌そうに歪めていた表情は形を潜め、一貫性を見せる無表情で私を見つめる魔神がいた。

謎の光が床に見える。円形で、綺麗に区切られていると感じた。そして魔神はその円のその中心に居り、出る気は無いのか何処からか出した装飾もない木製の椅子に座ってしまった。

いやそんなことよりも――

「何時もなら間髪入れずに暴言を吐く私がやけに大人しい……か？」

思っていた言葉の羅列を赤裸々にされ自分の表情が強ばるのが分かった。反応がい

つもと違う、と言うよりも最早真逆の位置に達している。どうしようもないやりにくさを感じてしまう。

「まず状況の説明をしよう。現在貴様は夢の世界に囚われている状態となっている。この夢の外では未だに戦闘が継続中だ——ついでに私を倒した所で夢から脱出する事は出来ない」

「次にこの状況を生み出したのは分かっているとは思いが私だ。魔神としての力に聖杯の力を乗算させることで可能とした」

「最後に目的と脱出方法…これについては簡単だな猿でも分かる単純明快な方法」

「私の質問に答えるだけでいい…」

個人的な質問は他のファンの反感を買って争いの種に成りかねないのでやんわりお断りするのがいいんだろうけど、夢の世界に来てまで聞きたい質問となるとファン第一主義の私が答えないわけにもいかない。

まさかこの答えざるを得ない状況を態と作ったというのかしら、なんて恐ろしい子!?  
くっ、答えるしかない!?

「いいわ特別に答えてあげる。スリーサイズでも聞きたいのかしら?」

「フツ」

「な、何に對して笑った貴様ア！」

「勿論、貴様の貧相な身体に對してだが？」

貧相：私の身体が貧相ですって!?

多くのブタとリスたちの羨望の眼差しを独り占めしてきたこのエリザボデイが貧相だと宣いやがりましたかこの「エリちゃん可愛い自主規制」野郎は!?

◆◆

ふう、落ち着いた。

「じゃあ何が知りたいって言うのよ、一応トップシークレットの情報はノーコメントだからね！」

「では一つ目、貴様にとって一番優先するべきは何か？」

「無視しないでよオ！」

可愛くあざとく両腕をオーバーに動かしつつ批難の声を上げるものの、この魔神は相も変わらず無表情を突き通して行く。眉のひとつも動かさず、じつと視線を私から逸らさない。そこまで見つめられると照れちゃうわ。

しかし一番優先するべきは何か、と言う質問の意図はさっぱりである。まず範囲は何



処にあるのか、アイドルや勇者とか人生とまで来ると色々答えが出てきてしまう。

「それは勇者として？ それともアイドル？」

「質問の通りだ。貴様にとつての最優先事項を問うている」

私にとつての最優先事項。

つまり、勇者やアイドルも含んだ私を意味する。であるならば私の答えは――

「――平和ね」

「その心は？」

「勇者が平和を求めるのは当たり前で、アイドルは笑顔を振りまいて幸せを押し売りするのが仕事。じゃあどちらも意味するのは平和というわけね！」

満足そうに首肯する私とは対照的に魔神は何処か苦々しい。無表情なのに苦々しいとは随分と器用なことを……

「では二つ目、一番幸福だった記憶は？」

「……はあ？」

質問の意図がさっぱりなんだが。私の内心は「なんだこいつ」の一言で埋まっちゃってるんだけれど。

当人の魔神さんは自分の臉の裏を見つめて返答待ちなスタイルだし、いや本当に人の夢ん中来てまで聞きたい事ってそれでいいの？

「ねえもつとマシな質問考えて来たら？ 次の特異点潰す前後まで待つから、○○診断みたいな本に影響された女子みたいよこの質問」

「貴様は黙って質問に答えていればいい。速くしないと眠りこけている間に戦闘が終わるぞ」

「そーいや清姫たちがまだ…」

うん忘れた。

いや本当ごめん、思ってたより現状に動揺してたみたい。制限時間がきつちり設けられてる当たり計画的犯行らしい。良く考えたらこれ誘拐よねハイ〇ースなんて乗った覚え無いんだけれど。というかハイ〇ースして来る候補に一番最初で上がるのが身内に居る時点でやばいのでは——

めっちゃ軌道修正  
閑話休題

そんなことよりも質問に答えない事には始まらないし終わらない。今すぐ起きて解決特異点をぶつ壊さなきゃ。

一番幸福だった記憶。

まあこれは今になって思えば単純明快にしてシンプルな答えだわ。と言うかももう私

にはこれしか考えられないまであるわ。

「きちんとした衣服が着れてる私ッ!!」

それはもう胸を張って言えるわ。痴女みたいな服装を強制され、動く度にチラリチラリとチラリズム、全世界のブタ共が股間を押さえて前屈みになること必至の私の毎日。

まさに普通の服を着衣出来ている時間こそ私のオアシスであり、救いであり、無償の愛である。ああなんと良き文明かな衣服。

「では最後だ——」

「無関心過ぎか!?!」

自分から聞いておいて反応が何一つ返ってこないなんて、そんな雑な進行が許される訳ないじゃない。エンターテインメントって知ってるのこの魔神!

なんなのこの魔神、TVとか見ないの? 若者のTV離れが原因なの?

——この魔神は若者じゃないんじゃない?

察してしまった。

これ気付かん方がよかったよね。魔神なんだから精神年齢人外とか良く考えたら当たり前だし: 見た目は若者、自主規制音頭脳は○○○○って言う事だし。若作りしてる人に向かって実年齢をネタにするのとか論外。いやこれは寧ろ——

「お若いですね!」

「……大丈夫か、ロマニを呼ぼうか？」

「おまいう!？」

人の世を垣間見て絶望したから世界を作りかえ隊に精神の心配されたんだが、私ってそんな酷い？

脱線ばかりするけど仕様だからしょうがないもん。文句言うなら毎日狂愛士バーサーカーに囲まれて過ごせ。君のステータスに狂化スキルと精神汚染スキルが付与される。

「改めて最後の質問だ」

「バッチコイー！」

「……貴様の名は？」

うん、もう突っ込まないわ。

「私はエリザベート・バートリー。職業は勇者とアイドル。趣味は世界を救うこと。願  
い事が叶うなら毎日マトモな服が着たい超絶可愛い美少女ツ！」

もうただの自己紹介である。

「質問で得た情報から考察も終了、既に情報局が管理するに値する事実がここで立証出  
来た。感謝するよ勇者エリザベート・バートリー」

魔神は立ち上がった。

「貴様の記憶をそのまま閲覧出来ればそれが一番手っ取り早く事が終えられた筈だった

んだがな、異常なまでのプロテクトに私も手が出せなかった」

魔神はここに来て初めて笑った。いや嗤った。

嗜虐的な嘲笑を浮かべ、可笑しくて仕方が無いと言った表情だ。私の困惑で濡れた精神を薄ら寒い風が否応なしに吹き抜けていく。

「良かったよ貴様が馬鹿で、いや馬鹿と言うより純粹過ぎたおかげだ。その身体が仇になつたな！」

腹を抱え、仰け反り、齒を剥き出し、大口を開け、彼は呵呵大笑と言わんばかりに笑い転げている。一見無邪気にも見える笑い方が私にはどうにも不気味に見えた。

「まあ結果は変わらん。貴様にはここでご退場願うよ」

「いやアンタ最初にここから出してくれるって——」

一文字に固く結ばれた唇からはそんな馬鹿な言葉しか出せなかった。どう考えても出してくれる可能性なんて無いのにも関わらず何処までも楽天家は変わらないのだと分かった。

「ああ出してやるとも——」

——廃人になつてからな

「どう言う……」

どういふ事なのとは最後まで言えなかった。

「不可解な言葉が先程あったから、確かに聞こえたのだ聞いたのだ『その身体が仇になった』と、つまりあちらは既に私が憑依者だと気付いた上で今までのやり取りをしてきた事になる。」

英霊に憑依だとかそんな突飛な発想なんてそうそうしないだろうと高を括って居たけれど……

「説明する義務は無いな！」

「いつも垂れ流しでしょうが。こういう時だけケチるんじゃないわよ！」

「聞こえんなあ」

都合の良い節穴しやがって。

先程からレトロニアもエイティーンも手元に出せない。攻撃して来た場合は逃げの一手しかない。更に逃げ場は無い上に時間を稼いだ所で事態が好転する可能性も低い。

いや茶番に付き合うくらい時間に関心を見せなかった所を考えれば幾ら時間を掛けようと構わないのかもしれない。

「教えてよお！」

「ちつ、煩い奴だ。要は比較だ——」

ウガウガ、ガオガオと駄々を捏ねてみればため息を吐きながらも今回の質問の真意を零した。やっぱり残念な魔神筆頭は一味違った。

長々と語られてしまったが要約するところだ。

私の初登場時、つまり第一特異点オルレアンから現在に掛けて徐々に変化をしているらしい。それが今回で確信できたとか何か。

「それと廃人がどう関係するのよ？」

「関係ないな」

いや無いんかい……

「結果は変わらんと言っただろう。単純に貴様の現界の仕組みを解き明かした上での効率的な貴様の排除方法が精神崩壊を引き起こす事だったと言うだけだ」

出るわ出るわ情報の数々、いや本当に味方なのでは？

「そろそろお開きにしよう。さてどれだけ惨たらしく殺され、何度繰り返し返せば勇者が堕ちるのか楽しんで貰おうか」

「急にゲームの対象年齢が跳ね上がったわね……」

そうかこれが本当の『私に乱暴する気でしょう？ エロ同人みたいにエロ同人みたいにし！』って奴なのか。

「私、初めてなので……そのお……ね？」

「大丈夫だ痛いと感じるのも最初だけだ」

これは事案ですよ。

と言う事で逃げます。

「魔力を全開だ！」

「対策済みだ」

魔力の流れが淀んでる。

ダムの放水の如く力強く吹き出した魔力が今では見る影もなく整備不良の蛇口の様にか弱い。かと思えばそんな微量な魔力も吸われて消えていく。

「随分情熱的なお誘いじゃない」

「溜まってるんだよ」

「ストレスの事よね？ 発言が全て怪しく聞こえ出したんだけど!? 変態…変態よう。

助けて私の貞操のピンチ——!!」?

今まで見せたことの無い爽やかな顔をして近付いてくる変質者ロリコンがそこには居た。ふうことなき犯罪者ペドフィリアです。黒髭より執念深い分恐ろしさが身体中をくすぐってくる。

カタカタと身体中震えてる。人はよく分からない、理解出来ない物に恐怖心を抱く。私も又何をして来るのか分からない魔神に恐怖している。

「た、助けて……」



「命乞いのつもりか？　まさか自分の夢の中に助けを求めているのか？　明晰夢のような都合の良い夢じゃないこれは悪夢だ」

「助けて清姫エ——!!」

目から涙が頬を伝い、乾いた木の床濡らした時に声が響いた。

『エリザの初めては——』

—私のものですツ!!

朽ちた天井を吸魔の結界（仮）と共にぶち破り、何処ぞのヒーロー宜しく三点着地を決め、ゆっくりと立ち上がってガイナ立ち。

ばさりと勢い良く開いたエリザLOVEとプリントされた扇子で口元を隠し、射殺さんとばかりに眼前の敵を睨み付けている。

ひらり半身を私の方に覗かせれば花のような雅さを感じさせる微笑みを浮かべた。「大丈夫ですよ、私 came ました」

アレ、  
主人公って  
清姫だっけ？

ギヤグ時空が世界の理を見敵必殺（さーちあんどですとろい）

場所は私の夢の中、相対するはロリコン疑惑が日に日に深まっている魔神<sup>ふしあなさん</sup>フラウロス。対するはエリちゃんファンクラブ筆頭狂愛戦士清姫。

二人の狭間には今確かに陽炎の如く揺らめくものがあつた。強者同士の死合い、譲れぬ者同士の問答の際に生じる威圧感のせめぎ合いこそこの現象の真実である所だが、故にこそ不可解な点がある。

「なして二人とも笑顔？」

「笑顔は乙女の最終兵器ですから！」

「表情筋が固まった…」

「そうですか……」

流石に数多な修羅場を掻い潜ってきた私でも困惑が隠せない。と言うか清姫はともかく魔神（笑）の方…表情筋が笑顔固定されたって明日は顔面筋肉痛間違いないよ。笑顔の練習しても本気笑顔なんて数十分持てばいい方なんだからね。

「顔にサ○ンパス処方しておきますねえ…」

一週間分のサ○ンパスを吸魔の結界（仮）が破壊されたおかげで使える原理謎魔術で召喚して処方せん袋に入れて、名前もふらうろすとも書いておく。

「毎日顔をよく揉みほぐして、大体三分一日朝昼晩で三セットずつね。指先を使ったり掌全体を使って筋繊維を傷付けないように気を付けつつ乳酸を外へ外へと出すように意識してください。肌を傷付くようなら保湿ローションを使ったり、アフターに乳液とか肌を労る事が大事よ！」

小道具の銀縁の若干釣り上がり気味なフレームを持った眼鏡をクイツと上げながら説明してから処方せん袋を浮かせて送ってやる。

きちんと手元のに送った所で眼鏡を外し、ナースキャップを被る。尚この切り替えの速さは常人では追えない。

「お値段の方500万QP頂きます!!」

「あらお安い！」

今ならあの天パもサラサラストレートヘアへと大変身出来る毛髪剤も付いてくる特別プライス。コストパフォーマンスに見合った私<sup>エリザ</sup>謹製の美容品の大容量パックまで付いてくる。

「この紳士用香水まで付いてきてきつかり500万QPよ！」

「そのガラス容器はエリザのデザインを参考に私が手作り致しました一点物で、火力調

節や彫刻が難しかった分美術品としての価値も高くなっています」  
「…カードで」

お買上げありがとうございました！

### 閑話休題

「ここからが本番。」

「それで？ 助けは来たがこの後はどうする？」

「貴方を灼き次第脱出ですが何か？」

そういつて業火を纏いバスターバフを掛ける清姫。焰色の接吻によって底上げされた火力でいつものごとく焼き尽くす算段らしい。

「アレ、それってセルフ発動出来たの？ 接吻は？」

「…してますよずっと」

え、いやした覚えはないんだけど！ てかずとつてなんですかね、まるで現在進行形で致してみたいな言い様だけれど。キスしてる所か手と手さえ触れ合って無いんだけど!?

「夢の外では今もなおエリザの……ふへへ——じゅるり」

「びゃー——!!?」

耳をすませば今も尚バフの効果音が高速で鳴り響いている。ええと焰色の接吻のバスターアップはLv10で30%くらいだったかなあ（遠い目）

「もうエリザつたらそういうのは同衾の際にでもしてくださいなば！」

と今更感が途轍もないいやんいやんタイムに入っているが、外の私は一体何をしているんだらうネ。アレかな、ハーレム王並の寝相の悪さを発揮してるのかな？

その様に私が何処か遠い世界を覗いている間も業火の勢いは増すばかりでまるで宇宙獣のラスボスが繰り出す熱線の様な有様だ。見ろよ奴さん、白目向いてるぜ？ 南

無三！

——こうして悪は去ったのだった。

「前回強キャラ感を醸し出していた敵が僅か一ページでワンパン退場とは……世の中世知辛いわねえ」

「愛は勝つんですよ」

まだバフが盛られ続けている清姫は誇らしげに有る胸を張る。あんたマジかと本気でツツコミたい。

「構いませんやってくださいい！」

「うん取り敢えずいつも通りで安心したわ！」

何故だろう安心したのに涙が出ちやう。私女の子だもん。

しかしあのロリコンの話だと自分が倒された所で私はこの空間から出ることが出来ないらしいけどどうやって帰ればいいんだろうか。そういえば清姫はどうやってここまで来たんだ？

「タマモさん曰く夢枕に近い現象をアリスさんの協力を得て起こしているらしいです。それと接吻は成功率を高める為の列記とした魔術行為です。つまり合法!!」

「合法の時だけ圧が強い……」

まず前提として誰が違法としてキスを罰するのかと問いたいんだが、ここでハッキリ言うておくけれど私は拒絶はしないから。ただそういうのは時と場所を弁えた上で行うべきだと思うわけで、そう所謂ムードが大事だと思う。

目と目が自然と合つて、ゆっくりと顔が近付いていく、周りは静かで二人つきり、お互いの姿が丁度見えるくらい小さな光源を頼りに寄り添っていく――

「――みたいな感じで!」

「今度から部屋の方を常にその様にすればいいのですね!」

いやそれはそれで私のチェイテがラブなホテルに改装リフォームされてしまう。この娘本当にやり出してしまふから困る。既にチェイテには茶室とか枯山水が眺望出来る縁側が入っている。このままではピラミッドやら姫路城やらが超融合されるのも近いかもしれない。

「それでどうやってここから出るの？ 王子様のキスでも必要……清姫サンその顔は修正が掛かるから」

「浮気を仄めかす発言は……メツですよ？」

「分かった、分かったから！ 取り敢えずここ出るわよ！」

うちの娘本当に狂愛士。パーサーカーでもここまで分かりやすく嫉妬されるのが当たり前に来て居る私が居るわ。寧ろ物足りないまである？

「あらやだ私ったら末期!?!」

『いつまでイチャコラしてるんですかあ?』

こいつ脳内に直接。

タマモのねっとりとした声が後頭部あたりから聞こえてきた。うん声で分かるがなんか不機嫌だ。

「チツ、もう迎えが来ましたか……」

『聞こえてますよ清姫さん。全く片道切符だけしか用意出来ていないのにも関わらず吶喊した貴方がなんでそんな態度で居られるんですか!?!』

清姫らしくなりふり構わず私を追ってきたらしい。

「相変わらずバカね……」

「愛ゆえです」



『じゃかあしいですよ!』

姦しいやり取りが頭と耳とを歩き来している間、清姫がぶち破つて来た穴から糸が吊り下がって来た。迎えてこの糸でいいの? ちぎれそう何だけど!?

『さあさあハリーアップ!』

取り敢えず急かされたので清姫を抱えて掴む。おい今舌打ちしたの聞こえてるから。もうこの良妻賢母(仮)は不機嫌さを一切隠さなくなってきたな!

「つて蜘蛛の糸じゃない。ちよつとベタつてしてて気持ち悪いんだけど……」

擬音で表すならば「ヌチャア」みたいな感じな糸を掴むと逆バンジーの様に一気に空へと引つ張られる。スリングショットの弾の気持ちが体験出来て全然嬉しくない。

そして私の意識は浮上する。



おめでとうございます。エリザの意識が回復しましたよ。

ファンファーレと共に頭に流れるログはきつと私がまだ寝惚けているからだろう。

だが口に今も尚伝わる柔らかさや温かさは寝惚けているからなのだろうか。優しい

花の匂いが鼻腔を擽り、口内はほんのり甘く、私の頭蓋の中を溶かしていくようだ。

そして閉じている目を開ければ目の前には可憐な美少女が――

――あ、いやコレ清姫だ。

そうと分かれば引き剥がしに掛かる、が残念な事にエリちゃんアームズは上に一括りに固定されている。動かそうにもびくともしない。此奴よく見たら左手だけでエリちゃんアームズを抑えてる。

そんな馬鹿な。私の筋力はE色々な意味で規格外 Xだぞ？

いや単純に力が入ってないのか。槍ぶつ刺されたし、脳は溶けてるし、ある意味当たり前。

顔を逸らそうにも目の前のキス魔によつて固定されているので全くとは言わないが動きそうも無い。そして何でこの馬鹿は私の角を無我夢中に擦っていらっしやる？

よく考えたらコレシニールな絵面だ。特に清姫の右手部分。そうかお前の右手は忙しいか。

ならば蹴り上げる。がまたまた残念。清姫は全身を使って固定して来る。オイオイオイ詰んだわコレ。ロリコン野郎に襲われそうになったと思つたら次は身内の狂愛士バースーカかよ。モテる私は罪作りなアイドルだわ。

でもあれコレってスキヤンダルなのだわ!?

見出しは『エリザ・清姫伝説』。いやこれだと私が燃えないアイドルだつて証明されるだけか、でも鐘の中で蒸し焼きはキツイな。あと私は萌えるアイドルだと一応明言します。

しかしずっとコレは私のいつ心臓がエクスプロードするか分かつたものじゃないわ。内心淡々としているけれど私自身の本当の精神パラメータは尻尾の先が如実に表現している。凄い勢いでピクピクしている。私が英霊じゃなければ尻尾の先部分だけ筋肉痛ね。

かくなる上は――

「ガブッ！」

嘔み付きや止めるはずだ。

「あ、もつと……」

私は知らなかった。清姫からは逃げられない。

噛まれても寧ろ喜び始める清姫は私の気持ちが一ミクロも分かつていない。と言うより拘束が日常化する今日この頃清姫が私の静止を聞いた事があつただろうか？ いや無い。

だがここで救いの手が私へと向けられた。

「チビツ子サーヴァントの教育上よろしくないのでもう打ち止めですよ清姫さん。あと

私のご機嫌メーカーも急降下中、金時さんの純情さにもオーバーキルです」

声の先を見ればタマモのそばにジャックとアリスが顔を胸部装甲に押し当てられる形で目隠しされている。何それ羨まけしからん。

「エリザ…」

「ひえ、ハイライトが息してない…」

では金時と言うとこちらに背を向ける形で遠くを見ながら煙草をふかしている。きつちりジャックたちから距離を空けている分エリちゃんポイントは高い。やはり金髪碧眼のイケメンはええなあ…今ビクリとした。

「エリザ…」

「清姫大好きー」

「グツハア——!?!」

不意打ち勝利、やり遂げたぜ。アイドルの本気の大好きを喰らえば常人は爆発する。不意打ちならクレーターが出来る。清姫が吐血と鼻血だけで済んでいるのは単純に耐性が付いているからに他ならない。本来なら高確率で即死である。

だが耐性が付いても今の清姫の状態を見ればどれ程の破壊力があつたのかが伺えるだろう。

「永続的魅了状態、これで清姫は私に攻撃できない。この戦い私の勝利だ！」

「いやいや、エリザベートさん永続的魅了状態は清姫さんにとつては最早常時スキルです。デバフが反転して最早バフですね。今ダウン取れているのは単に彼女のウィークポイントに刺さったからでしょう。うん我がメル友ながら謎過ぎる」  
「オツフウ…」

もしや清姫が高ステの鯖と殴り会えたり、頭おかしい技術力を持つてるのつてそういう理由があつたの？ 可笑しいとは思つてたし、特異点を潰して行くと共に異常性を見せてきたから否定出来ないんですけれど。

「おいドラゴン。寝起きで悪いんだが、どうにも雲行きが怪しいぜこりやあ。まさに世界の危機つてヤツだ」

ギャグ街道をひた走っていたらゴールデンが何やらシリアスを担いでやって来たよ  
うだ。

「雲行き所か霧で何も見えないけどね」

しかし霧が魔霧じゃないから魔力感知にピンピン警鐘がなっている。身震いする程の濃密にして邪悪な気配だわ。

「今洒落言う場面じゃねえよ。あっちみるあっち！」

ゴールデンが指さす先を見るとあら不思議。魔神柱を数体従え堂々とぶかぶか浮かぶソロモンが居るじゃないですか。威圧感とか目に見える魔力とかスゴい（小並感）。

「ラスボスだね分かるとも」

「ほおあれが元凶なんですね」

清姫復活。

あの瀕死から一気に快復とかやっぱり可笑しいよ。この時空を歪めているのは一体誰なんだろうな全く。許さんぞゲーティア！

兎にも角にも、私がシエスタしている間に子ジカが全てのお使いを終えたらしい。まあアリスとジャックのイベントは私が消化したし、私が回収されると言うことは騎士王は倒しただろうし、色々前倒しになっているとしても可笑しくない。

うんよく考えたら騎士王だけ倒してジャック回収なんてよく出来たな!?

「清姫さんが全て殺りました…」

悔しい、でも納得しちゃった。

「それよりどうすんだよ」

「見敵必殺、悪即斬、汚物は消毒よ!」

「はっ、ゴールデンな返答だ。じゃあいつちよ暴れるか」

ラスボスの3分クッキング。

ではさっそく調理を始めましょう。

ステップ1【よく焼きます。】

「清姫、無駄に重複したバスターバフで最大火力!」

「お任せあれ。宝具『転身火生三昧』——ッ!!」

無駄なく焼いていくのがコツですね。生焼けだと食あたりになるので念入りに、真っ黒になるまで焼きましょう。

ありやりや、よく見たら子ジカが居る。流星に調理場と言う戦場に立たせるには心許ない。危険だから回避させなければ。

ステツプ2「危険だと思ったら回避します。」

「ジャックは子ジカたちを回収してホットゾーンをエスケープ。タマモも一緒に行つてあげて」

「うん分かった」

「わ、私の見せ場少な過ぎ!?!」

ジャックの持ち前の高い敏捷性とタマモの支援によつて子ジカの元へ急行。アンデルセンは居ないがモードレッドは居た様なので生き残れるだろう。生きよそなたは美しい。

「エ、エリザベートさん!?!」

「またこういうパターンね。もう慣れたなあ…」

『今の今まで重要なシリアスシーンだったよね!?! ああもう頭がゴチャゴチャだ…』

カルデア組が何やら苦情の声を漏らしているが七面倒臭いので一切聞き入れません。シリアスは私に合わないので浄化するわ。

轟々と燃え上がっている火炎を裂き、冠位グラントに見合う光の奔流でもって私へと攻撃を加えてきた。よく見れば結構焦げてる…

ステツプ3「食材が噛んでくるので防ぎます。」

「アリス、トランプ兵とかジャバウオックとか何でも良いから壁を張って、止まんないなら私が止める！」

「エリザベートがあたしアリスを見つけてくれた。エリザベートがあたりありすのカタチを思い出させてくれた。—だから、守る！」

トランプ兵が40数体整列し、その一番後ろにはジャバウオックが立っていた。だが通常のサーヴァントを一瞬で葬る一撃はトランプ兵を尽く飲み込み、ジャバウオックを容易く侵食していく。

「私が折れない限りこの盾は砕けず、欠けず、染まらない。故に我が勝利は揺るがず、故に我は勇者。『古レ香トる勇者の名盾』——ッ!!」

この攻撃は止め切つてはいけない。止めれば次をすかさず打ってくるだろう。だから今が最大の好機。

ステツプ4「切り分け、盛り付け、ゴールデン」



「決めて、ゴールドデン!!」

「おうよー!」

ゴールドデンの筋力ランクは元々高い。そして可笑しい事に怪力やら天性の肉体やらと筋力ランクに上方補正を掛けるものも所有している。つまり脳筋パワーイズ正義ジャスティス。

ゴールドデンの鉞である黄金喰ゴールドデンイーターいは雷鳴という唸り声を上げ、放電という咆哮を起す。15個のカードリッジを消費する最大火力。これが坂田金時の今の全力。

『ゴールドデンスパーク  
黄金衝撃』

ゴールドデン本人の声さえ掻き消す衝撃が個人へと叩き付けられる。これを退ける存在は早々いないだろう。まあ敵が普通に収まる存在であればだが――

「今回も随分引つ掻き回した様だな勇者」

「化けの皮くらい剥がさせなさいよ魔術王」

清姫の攻撃で服が焦げる以外のダメージは見られず、ゴールドデンの攻撃なんて完全無効化してる。上手く偽っているけれどやはり人類悪としての権能は発動しているみたいね。ネガ・○○系は通常の英霊に対しては相性が悪すぎる。

「霊基が罅割れるくらいの一撃だつてえのに無傷かよ……」

「貴様ら凡百な英霊がどんなに身を切つても私には通らんさ」

清姫の攻撃は通るじゃん、とは言つてはいけない。

「私とエリザの愛の一撃は効いているようですけれど」

言っちゃだめだって。可哀想でしょ。

「しかし帰ろうとしたのも束の間、帰り道に思わぬ大穴を見つけてしまったな。埋めてしまうのも良いが、自然に塞がっていくのを眺めるのもまた一興。貴様には諦めろとは言わん、慈悲もくれてやる気も無い。足掻けよ勇者」

余りに一方的な言葉。会話を交わす気もない様で言いたいことは言い切ったと言わんばかりに微笑を浮かべて帰る体勢だ。

あと清姫の発言はどこかへ吹き飛ばしたようだ。そして帰ろうとすんな。

「ちよつと待ちなさいアンタ」

魔術王は待たない。

「待てて言ってるでしょうが！」

手頃な瓦礫を投げつけて無理矢理止めに掛かる。どうせ障壁みたいなのに阻まれるだろうが全力で投げつける。

けれど――

「――又グア!?!」

私の、そして恐らく魔術王の予想に大きく反して瓦礫は物の見事に後頭部に直撃した。ギャグみたいに大量の鮮血を撒き散らしながら痛みに悶える魔術王はそのまま

帰って行った。

ギャグ時空は人理を救うかもしれない。

## 地元民に愛される勇者がはにかむ姿を見て尊死する狂愛士の構図を斜めから傍観する同士諸君の図

第四特異点が気付けば終わり、チエイテに帰還して幾ばくかの時間が経った。私は朝昼晩の栄養バランスの整った食事とボディのメンテナンスを欠かさずこなし、ボイストレーニングで自分を酔わせる日々を送っている。

清姫も同様に家事全般から私のマネージメントまで甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる。

最近では暴走の機会も減って来てる様に思える為、お風呂で背中を洗いあったり、交換で耳かきを試したり、手を繋ぎあいながら同衾したりと仲の良い姉妹の様に過ごすのが通例だ。

「大浴場を増設して良かったわ。色合いが私エリちゃん故にラブなホテル感が否めないけど慣れればどうってこともないし」

件の黒とピンクのチェックのタイルが並ぶ浴場で大きく吐息を吐きながら私はくつろぐ。

お仕事のオフアールが来るのは大抵月単位で暇が多い。よって手持ち無沙汰な分様々

な事に挑戦しこの様な大浴場を作ってしまうことも多々ある。陣地作成と道具作成が職人エリザベートを作った。

今に始まったことではないけれど清姫ももの作りに精を出している。何故かヘルメットに大工道具が似合う女に日々近付いている彼女を見ると正気度が減るのよね：何でこうなるまで放っておいたんだ。

「ええ二人きりで大きな浴槽を独占出来る事は贅沢で素敵ですわ」

「アンタが背中のみならず前まで洗おうとしなければ私も素直に同意できるんだけどねえ」

「枕であびるしてどれほど経つか。反応を一切示してくださいさらないのならこの様にするしか：はうう、エリザのスベスベ肌に溶けてしまいたい」

撓垂れ掛かる彼女は小柄な私にとつては凶器だ。着痩せする清姫が狂愛士キャストオフしてる今、持つもの持たざるものでせめぎ合っているのだから。まあ柔らかいことけしからん！

「だってアンタが言うあの枕って表に『YES』、裏に『はい』じゃない」

「何時でも何処でも来いと言う声明ですから」

「言葉だけなら無駄に男前ね」

果たし状かな？

尻尾でぺちぺちと水面を叩き目を閉じる。指先で私の頬をつついて来る清姫を思考から追い出して数分、私は閃いた。

「領民の生活向上に務めるべきかしら」

「そう言えば居ましたね領民……」

私と領民の関係はあまり良くない。仲が悪い訳では無いだろうが、私が仕事して無いのがよろしくないという事。領民は私に食糧と税金を支払っているのに私は何一つ還元していない。これほつとくとメカな私が大激怒よ。

「溜め込んでいるだけの財力は経済にとつて毒でしか無いはず。ここは何処ぞの皇帝の様に散財してやるべきかしら」

「しかし具体的には？」

「家畜はPOPするし、穀物とかも目を離せば直ぐに収穫期。洞窟にはドラゴンが居るくらい日々刺激がある上、兵隊達が駐在してるから安全」

これももう私ごとやかくする必要がないのではないかと唸るばかりだ。作った魔具をバラ撒けばいいのか、コンサートや握手会でも開けばいいのか。新曲を出すにもインスピレーションが湧かないし。

いや待てよー

「デートしましよ清姫ー」

「……ひゃい？」

「変装して行かないとね。お忍びよお忍び！」

「お忍びでえと…」

サングラスと帽子は必須だとして、果たして庶民服で私の溢れ出るアイドルオーラが抑え切れるかどうか。流石エリザ何着てもラブリー&キュートに仕上がってしまう。

「何をもたもたしてるの清姫。アンタも着替えるの！」

「わ、私もですか？　これが一張羅何ですけれど」

「え、私の服あるじゃない。背丈も言う程変わらないう着れるでしょ？」

バリエーションに富んだ服飾の数々は私の執念を言葉にせずとも伝えるだろう。今ではチエイテの一層がショッピングモールのファッションコーナーと化した。哀れかなチエイテ城。

「いやエリザの服は流石に…」

「私と清姫の仲じゃない。遠慮しなくてもいいわ」

「いえそうではなく、えっと、その、あの胸がキツイのです…」

「この後めちやくちや採寸した。」



圧倒的胸囲格差により無い胸が痛んだ気がしたが別にそんなことはなかった。そもそも私のエリザボデイは完成系にして完全無敵鉄壁の極致に至っているから何の問題は無いのだ。貧乳はステータスでありその希少さと尊さは尊んで然るべきなんだよ。世のブタブタやリスリス共は私の姿を見ては手を組んで跪くのがお似合いなの。て言うか跪け、咽び泣け、悲鳴を上げろ、私を崇め奉れ。

「そもそも何で巨乳がプラスで貧乳がマイナスと言う概念が確立したのかしら。美麗であればどちらもプラスじゃないの。男性の大部分が巨乳派だからだとしても現代であれば女性の地位向上によって女性が自立して生きる道も大きく開けた。なのに昨今バストアップやヒップアップに務める文化が更なる躍進を見せている。やはり大は小を兼ねると言う言葉が生まれるほど固定概念化された巨乳正義は揺るがないのね」

よしアルテラ呼んでこよう。

「出ていけないナニカが漏れ出てます！」

「世界が、憎い……」

エリちゃん可愛いヤツター  
閑話休題！

頭には角を飾りに誤認させる為に髪と同色のカチューシャと目を隠す為の丸いサングラスを装着。後はローズピンクのシンプルなワンピースにカーキグリーンのジャ



ケツトボレロを羽織るだけ。足元もサンダルだけでいいでしょう。これで何処にでもいる一般美少女。

「角が隠せない時点で正体バレバレなのはアホ可愛いので黙っていきましょうか」

「なんか言った？」

「エリザ可愛いとしか言っていないませんよ」

何か馬鹿にされたと私のエリザセンスが感知したんだけど、まあ清姫さんは正直者なのできつと気の所為ね。うんそれにしても洋服の清姫も新鮮でいいわ。

「アンタも十分似合うじゃない。それでこそ私の相棒パートナーね！」

「もお、煽ってたって私しか出てきませんよ！」

たぶん今夜の夕飯に一品増える。あとどさくさに紛れたボディタッチが露骨になる。そういう所なんだよ清姫。

「じゃあデート兼視察に行くわよ」

門を開け放ち、互いに手を引き合つて和気藹々とチエイテを出た。道中スポンしたスケルトンやウェアアウルフ、ワイバーンはもれなく謎魔術により出現したカボチャの鎧になった。魔力放出は小枝でさえ弱者を容易く葬る凶器になる。カボチャなら投擲後に爆発炎上するので殺傷性に拍車がかかる。

大きめな多頭蛇も居たようだがカボチャには勝てなかつたよ。

石造りの道に大広間を中心としてレンガの建物が並んでいる。人通りもそれなり、店も活気に溢れた酒場からちよつと怪しい路地裏の古書店まで様々だ。

「まあ悪くないんじゃないかしら！」

悪くない。

それが私が下した第一印象から得た評価だ。強いて言うならばもう少し領主たる私の影を見せていた方が良いと思ったり思ったり、思ったりね。

「まずここの責任者の所ね」

「その後ででえとですね！」

清姫も乗り気な内に一気に店を回りたい所、とりあえずここの町長的なポジションを持つ人物に挨拶といこうか。

特にこれといったアクションも無く役所まで辿り着いた。通り過ぎて行く人がチラチラと見てきたけど、たぶん私のオーラが隠し切れなかったんだろう。やはり美少女は罪だわ。

「邪魔するわ！」

「最早お忍びでは無いですねコレ」

正体がバレなきや問題無いんですよ。

あと—

「—目立ちたい!」

「特異点では嫌という程目立っているじゃないですか」

「それはビキニアーマーのせいでしょう!」

そりゃ裸同然の恰好してたら目立つでしょうよ。でもそれは変態だとか痴女だとかそういう注目じゃない。実際初対面の清姫に痴女だと言われたし。

「確かに脱げばいいってモンじゃないという事は私にも理解出来ますよ。布を剥ぐ喜びを—」

「えっ…」

私の着替えの手伝いをしてると見せかけてこのバカ蛇は自身の情欲を満たしていた？ 最近大人しいと思つて居たのは単に私が気付かなかつただけ!?

ギリギリを見極めながら犯行に及ぶ知能犯にレベルアップしていたと言うの…

「今思えば脱衣所で清姫に脱がして貰うのが当たり前になつてたわね。なんて狡猾な蛇! 貞淑な振舞いや大和撫子ムーヴは何処に置いてきたの!?!」

「最近刑部さんに教材を送つてもらいました、同性特有の身体的精神的な近さを研究致しましたの。結果は文句無しの大成功でしたわ」

男の娘やら百合やら明らかに清姫にとって猛毒なサブカルチャーを教え込んだ奴が



特に狼狽えることも無く町長は私たちにそう言うてのけた。その手にはカメラがある。明らかに時代にそぐわないオーパーツだけど、書齋机の上に置かれたダンボールで全てを察した。ちよつと仕事早すぎんよアマゾネス。

何となく察していたけどギャグ時空その物の空間に住んでいる住民もギャグ深度が手遅れなのね。

「丁度此処に”ぶろまいど”が」

「言い値で買いますよう！」

「いえ、後でそれを分けて貰えればそれで」

清姫と町長は堅い握手と友情を育んだ。

「それで勇者様はどの様な御用向きでこちらへ？」

「流石町長ね私のパーフェクトな変装を見破るだなんて」

「その設定生きてたんですね…」

今回はありのままの領民の姿を見て、これからの税金の使い方を考えるんだから。勇者のエリザベートとしてアイドルのエリザベートとして行動してたら私に釘付けで平静じゃ居られないのは目に見えてる。

と言うか既に町長が一人私の魅力にシャッターが止まらない。ピキニアーマーだったら即死だった——っ!?

「ふにゃん!？」

明らかに下着の感触が消えた。その代わりに革とも金属とも取れる不思議な感触がひんやりと私の胸と股に残った。何処か慣れ親しんだ不快感だ。

間違ひなく私はお気に入りの下着をチョイスして着てたはずだ。断じて呪われた防具なんて装備して来ていない。そもそも帰ったら地下に秒で封印してる。

「遂に特異点以外でも干渉してくるかこの痴女装備が!」

「今の一瞬、撮れましたか?」

「もちろんですプロですから」

遂にビキニアーマーはフラグを感知し強制換装をして来るらしい。服の下だからセーフと言う嘲笑混じりの戯言がこの呪具から聞こえるようだ。んなわけないでしょうが、着てるだけで不快だわ。

だが幸いな事にここでは呪いの装備も脱げる。

「町長! この街にランジェリーショップは?」

「ございますとも。宜しければご案内致しますが?」

甘かったなビッチアーマー。私は貴様を脱ぎ捨て自由になる。

「行くわよ清姫、間に合わなくなっても知らないから!」

「ええ清姫は何処までもついて行きますわ」

「フィッティングルームの中までは入ってこないでね！」

小さい舌打ちが聞こえた。清姫の笑顔は少しも揺らがない。こわひ。

下着と言うのは個人個人で最適なサイズ存在する。ボディラインの維持はいつの世の女性にとつても最大の課題であり、使命だと言える。よつてそれらの助けとなる女性下着メーカーは素材を吟味しカップを研究しデザインに頭を悩ませる。

つまりそこまで研磨された下着を私も着るのだが、もちろん採寸をされる訳だ。

「私のエリザ私エリザ私のエリザ私の——」

「ひええ……」

流石に身体との距離が近くにならざるを得ない状況だと落ち着いてきた清姫とも言えどもジェラシーに身を焦がすらしい。比喻ではなく本当に身を焦がしているのが恐ろしすぎる。

「や、やはり私も試着室に入った方がいいと思うんです！」

「いやいや何がやはりなのか？ ミクロンも理解出来ないんですけど？」

「ほ、他の女性がエリザの着替えを覗かないように私が超至近距離で護衛を！」

「その状況だと清姫越しでも見られるでしょ？」

「私でお隠し致します。私が『最終防衛らいん』です！」

真面目な顔で何をアホな事言っているんだこの娘。

「心配はご無用です。私は熱感知が出来ますので泥に塗れるなどしない限り対象を逃がしません」

何で試着するだけでそこまで大事になるのか私には理解不能だが、清姫の使命感溢れる表情を曇らせるのもアレなので業腹だが縦に領いてやる。

「下着は私が受け取りますので、エリザはそこに立っただけで下さませ。脱がすのも、着せるのも、見るのも私だけで事足りるから！」

「それは私だけで事足りるわ！ 護衛って目的どこ行った!?!」



## メカエリ軍団始動

チエイテのとあるワンフロア。

そこはどう形容すればいいのか困る場所。

そう一言で言えばロボット工場だった。いやロボットと言うのは怒られるので言い直します。

そう一言で言えば——メカ工場!!

「ふっふっふっ、清姫くん見たまえよ素晴らしい数だ。具体的な数は把握してないけど、取り敢えず凄い数だわ!」

「ええ、右を見ても左を見ても何処を見てもエリザがいつぱいいます。いい景色ですわねえ」  
日がな一日ドラゴンやらバイコーンやらの討伐に明け暮れ、驚きのスピードで貯まる金と素材。さてどの様に消費すべきかと悩んだ。それはもう悩んだ。どれくらい悩んだか。言うなれば三日くらい清姫に介護されるくらいには悩んだ。あとその時の清姫はとても満足げだった。私は楽だった。

そして私は気付いたのだ。メカな私を量産すれば良いじゃない、と。統率機を2体、量産機を沢山、超弩級を1体。メイガス・エイジス・エリザベート・チャンネル略して

メカエリチャンの大量生産ラインを確保。物量作戦を可能にし、人海戦術を用いて特異点の修復を図る。

かがく(?)のちからってすげー!

これで私は世界を救う。一切血を――メカだから――流さず世界を救ってみせる。これはクレバーでスマートな作戦だ。更に燃料は『エリザ粒子』なる私から無意識で漏れ出る謎物質。

教授? いらないわそんな犯罪紳士。我がチエイテの科学力○で成したのだ。――

我がチエイテ城の科学力は世界一イイ!!!

「勝ちましたね」

「ええ」

この聖杯探索我々の勝利だ。

「ただ動力源がエリザである以上全力出撃は……」

「一度持てば良いのよ。それに現地で補給も出来るし案外どうにかなるかも」

ゲリラライブで相当量のエリザ粒子を捻出する事が可能だとココ最近の実証実験で分かっている。

統率機は既に本格稼働、問題は量産機が何処まで動くのか、そしてエリザ粒子の消費量。超弩級は量産機を射出・收容する母艦の役割が強いからそこまで気にしてない。あ

とミサイル打つ為の固定砲台としても有用。スゴいぞ、強いぞ、メカエリ軍団！」

「税金で国力の強化と技術の発展。まさに求められていたのはテクノロジーのエボリューションによるレボリューション！　ぶつちやけ宝物庫に死蔵するばかりのQPたちを解き放てて良かったツ!!」

「危うく宝物庫を増設に着手する所でしたものね。いえ、いつそ作ります?」

「まあ最悪空間を広げればいいし後回しで良いんじゃない?」

「言うことのレベルが可笑しい事にいい加減ツツコミを入れるべきですね。私たち以外が」

それはないものねだりって奴でしてよ。あと私の領域で常識の方が非常識だってこのエリザ人生で大いに学んだわ。たぶんやろうと思えばなんでも出来るんじゃない?」

——勇者よ……

「あ、プロデューサー?」

——フツ、出撃だ

「あ、うん勇者エリザベート・バートリー出撃しマース」

なんか今日はプロデューサーもノリノリだな。

「じゃあ行くわよ清姫!」

「はい!」



引つ張られる感覚と白い視界という最早慣れて特別感も完全に失われた召喚。晴れた光景は荒野であつた。そして黒き槍兵の王とピンクの女王。

この特異点のラスボスの姿である。

「こういう時のラスボス戦は負けイベントつて相場が決まつて居るのよ!」

「……なんだコイツは、敵か?」

「さあ、抑止力に召喚された野良でしよどうせ。クーちゃんの敵じゃないわ」

クー・フリーン「オルタ」に女王メイヴ。後者はチーズの弾丸を打ち続ければその内勝てるとして、問題は前者の方だ。正直バサクレスといい勝負でキツイ。スカサハを打倒する実力は生半可じゃあ勝てないつてよく分かる。あとギャグ時空に持つてくるのに苦勞しそう。

なんも小細工も無しに挑むのは無謀。なので私は清姫を抱き寄せてトンズラこく準備に入る。

「まあ敵かそうじゃないかなんて言うのは関係ねえか」

「ええそうね殺るなら思いつ切りがいい方が素敵。私の為に思う存分力を使つて。虫の

様に叩いて潰して。私たちの進む道に足を踏み入れたらそれはもう敵よ」

既に清姫は抱き上げた。魔力放出の準備も問題はない。逃げる算段はついている。

しかし唯一済んでいない事項を挙げるなら。

「飛ぶわよ清姫。舌噛まないでよね！」

「はあい」

清姫への確認くらいだったかしら。

「逃がすか」

「いいえ逃げるわー！」

能面の様な顔からは想像だにしない威圧感と濃密な死の気配を孕んだ槍の刺突は僅かに頬を掠め、猛追をもって私の心臓を穿たんと振るわれた。

けれど初撃で私を倒せない時点で私の逃走は阻止出来ない。

「この傷の礼は高くつくわよ」

脚力に回した魔力を一気に解放し、蜘蛛の巣上に砕かれた地面を残してその場を離脱する。現在は上空に吹っ飛んでいる。

このままではただの凄いや跳躍になる所だが私にはそろそろ忘れたか羽がある。飛行訓練したかいがあつたのが少し悲しい。逃走手段として使う事になるとは思わなかつた。

「取り敢えず拠点と服の確保が必要ね。特に服！」

「私はそのままで一向に構いません」

「私が構うのよ」

「寧ろ推奨致します」

うんいつも通り人の話を聞きゃくれない。清姫らしいのでこの際目はつむつちや  
いますが、小言のひとつでも効いてくれれば良いのに。

「——ッ!?!」

「……来ますね」

背後に高魔力反応。ドスの効いた朱色に輝く一条の光と言えば思い浮かぶのは単純  
な事。

「宝具の真名解放!?! 確殺しに来てる!!?」

「そういえば何処かのエリザが言っていましたね。こういう時に遭遇するらすぼすは負け  
いべんとだと」

「私が悪いの?」

いやごめんって、まさかアレが本当にフラグになるとは思わないって。というかアレ  
はアレだよな『抉<sup>ゲ</sup>り穿<sup>イ</sup>つ塵<sup>ホ</sup>殺<sup>ル</sup>の槍<sup>ク</sup>』ってやつですよ。心臓を穿ったという結果が定め  
られた呪槍。因果逆転の必中槍。心臓を穿てないゲイボルクじゃない実績のあるゲイ

ボルク。

いや逃げたら案外そのまま逃がすと予想していただけにこれは予想外。まさかいきなりクライマックス宝具ブツパだなんて。限凸のカレスコでも積んでるんですかね。

「まあ近距離だともっとエグいの来る可能性あったしマシかな」

「これはこれでピンチですが」

「この程度をピンチに数えてたらアイドルなんてやつてられないっての！」

答えは得た。大丈夫だよ清姫私もこれから、というか今から頑張つて行くから。

虚空から取り出したるは勇者の盾。その特性は持ち主である私の心が折れない限り破壊されない。欠けることや罅が入る事さえない。物足りなくなるほどシンプルだが、盾としてはこれ以上ない程に強力な我が宝具。

さあ穿けるものなら穿いてみる。私の心臓は此処にあるわよ。

「——『<sup>レ</sup>ト<sup>ロ</sup>ニア<sup>ニ</sup>ア<sup>ア</sup>の勇者の名盾』 ツ!!」

中空で翻り私は宝具の名を叫ぶ。金槌で鉄を叩く様な音が直後に響くと続いて耳に障る甲高い金属音が突き出したレトロニアから聞こえる。火花が散るたびに盾を握る手が震え、身体にくる衝撃が私に冷たい汗を流させにくる。

そういえばこの火花って盾が削れてるのか槍が削れてるのかどっちなんだろうか。私の盾は削れないっていうのが売り文句なはずだから槍だよねたぶん。もしかしてゲイボルクって脆いんかな。案外膝でポツキリ折れるのでは。よしもしも心臓を穿たれたら腹いせに絶対に折ろうしよう。というか頬に掠った時にスッパリ切れて血が出てるし問答無用で折りに掛かっても良いんじゃないか。だって私はアイドルで美少女。お顔は命。これはもう心臓を穿たれたも同然ですよ。よし折ろう。絶対折ろう。——て言うか折る！

「折れるオ!!!」

エリザの吼える。

ゲイボルクは逃走した。

180度綺麗にターンして全速力で担い手の元へと帰った。ゲイボルクは賢い槍だ。後でキャットにニンジンをやろう。……まずい思考がバーサーカーに乗っ取られそう  
だ。

「バーサーカーは使用容量を守って服用しましょう……」

何はともあれ逃げ切った。三点ヒーロー着地を決めきった私は片腕に収まる清姫を降ろして名剣エイティーンを地面へ突き刺す。使う機会がそこそ多い陣地作成のお時間だオラアン。



「媒介は私で十分。リソースはちよつと龍脈から拝借。いくわよ、いでよ我がチエイトの技術により完成した圧倒的武力!!」

剣を起点に現れた魔術陣は巨大なメカを構築する。私たちを覆うように作られているのはコックピットと言うには些か大き過ぎる機体内部。

その場所こそメカの中核である事は間違いない訳だが本当に大きい。某宇宙戦艦か此処はと言わんばかりの全容であり、嘘か誠かそれぞれの機器は全て正常に役割を果たすと言う。理由は製作者にも不明だ。

巨大さ、強さ、可愛さ。全てが世界水準を大きく超える。それこそが超弩級メイガス・エイジス・エリザベート・チャンネルである。震えるがいいこの圧倒的な力と驚愕的可愛さに。

「超弩級メカエリチャン。起動ツ——!!」

台座に収まるエイティーンにエリザ粒子を何となくで注ぎ込む。超弩級メカエリチャンの瞳は『キュピーン』と妖しい光を放ち、滑走路になる両腕を地面と平行になる様に左右へと伸ばす。これがこの機体の基本となる状態にある。

《システム・オールグリーン》

《エリザ粒子のエネルギー総量85%を維持》

《統率機2体の起動準備完了》

《量産機1620万7907体の起動準備完了まで約3分》

《起動してから3分間よ、エリザベート艦長》  
搭乗を確認しました。おかえりなさい

お湯を入れて3分間で出来上がる即席麺の様な手軽さで猛威を振るうメカエリチャ  
 ン軍団。ケルト？ 機械化歩兵？ 所詮奴らは『質』か『量』かの片方しか実現出来

なかつた敗北者よ。

質で勝り、量でも勝る。オイルブラッド 冷血冷酷を体現し、必ず対象を撃滅してみせましょう。

「メカエリチャン、メカエリチャンII号機を起動」

《両機の起動を確認。モニターに出すわ》

二つに並ぶモニターにはそれぞれのメカエリチャンの姿が映る。鮮やかな配色が施  
 された『メカエリチャン』、鈍色でメカメカしさを残す『メカエリチャンII号機』。

『予定の時間に幾らかの遅れが出てる件について勿論説明はありますね艦長？』

『無駄な雑談に興じる時間は無いわ。速やかに敵を排除しましょう。それで敵は何処な  
 の？』

『無駄とはなんなのII号機。空白の時間を知ることにおイル一滴足りとも意味は無いと  
 でも言うのかしら？』

『フツ（）』

『ムカつきました。やはり雌雄を決する必要があるのですねⅡ号機』

『巨大ロボの建造計画さえ話に出ないⅠ号機に勝ち目はないわ』

『構想から一步も進まない建造計画でマウントなんて恥ずかしくないのかしら、人心回路がショートしてるの？ 言っておくけど私たち姉妹機に性能差は無いわ』

根元は同じ統率機2体、けれど絶対に相容れない。起動してたった数秒で喧嘩する程姉妹仲はよろしくない。何故私をモデルに作られたのにここまで違ってしまったのか皆目見当がつかない。いやエリちゃんはエリちゃんだったと考えたら辻褄が合ってしまふな!?

まあ何はともあれこの2体は私である事に間違いない。故に――

「あらあら駄目ですよ二人とも。姉妹は仲良くです。あんまり聞き分けが悪いと私としてはとても困ったことになります。言いたいこと分かって頂けますか？」

『……はい』

――清姫に滅法弱い。

モニター越しの一睨みで鋼鉄の肌を青褪めさせるメカエリ姉妹。情けないメカたちだと言いつ捨てられたらどれ程楽か。残念ながら私もあの笑顔の裏から滲み出た黒い物を見たならば同じかそれ以上に酷い醜態を晒す自信がある。

《3分経過、量産機の全力出撃準備完了》

「じゃあ作戦準備も出来たって事でブリーフィングはササツと済ませるわよ。まず今回の勝利条件は言われるまでもなくメイヴの持つ聖杯の回収よ」

今はまだメイヴが聖杯を所持している。実際私のエリザベンスで確認もしたので間違いない。初っ端会えたのはある意味では運が良かったのかも。

「メイヴには常にクー・フリーンのオルタが張り付いてる。更にしぶといケルト兵と英霊までも居る。だからI号機は量産機を率いてケルト兵を撃滅し敵の力を削いで。削げば削ぐほど子ジカたちが動きやすい環境が作れるはずよ」

『了解よ』

「II号機は野良サーヴァントの搜索。アタシが間違いなく居るので即刻確保してちょうだい。居るであろう野良サーヴァントのリストは既にインプット済みだから移動中に閲覧して。再三言うけどアタシは確保よ！」

『……』

II号機の言いたいことは分かる。でもこればかりは仕方がないのよ。私はエリザベート・バートリー、アレもエリザベート・バートリー、大体同じ存在で理論上は今作戦のキーマンになり得る存在。まあ賭けではあるけれど。

「私はおっ！」

「清姫は私の横に居れば良いわ。と言うか下手に動かないでお願いだから！」  
「では遠慮なく」

「ピッタリくっ付けとは言っていない!!？」

## 私は私らしく世界を救う

?ドリル、ビーム、ミサイル、火炎放射、超音波。

今の戦場に於いて最も飛び交っている兵器はこれらだ。ドリルは鋼の肉体を貫き、ビームはあらゆるものを溶かす。ミサイルで人は飛び、火炎でステークにされ、超音波で爆ぜる。

メカエリチャンの量産機一体につきケルト兵が何人犠牲になると思う？  
たくさんだ。

ならば機械化歩兵は？

めっちゃたくさんだ。

そんな機体が空一面を埋めた。

太陽光に反射して鈍い金属の色が空色を染めた。

警告も無く、威嚇も無い。無機質な視線の数々はケルト兵や機械化歩兵などの区別を一切無くして前触れの無い絨毯爆撃を始めた。

超音波で敵の動きを鈍らせ、間髪入れずミサイルを発射する。驚く程にケルト兵が宙を舞った。隊列を組んだ量産機は交互にビームと火炎放射を放ちながら一帯を焼き尽

くし、難を逃れた者にも平等に急所をドリルで穿ち死を送った。

そんな凄惨な戦場を私はモニター越しに眺めている。

「えげつない……」

「戦場というものはいくら時代を跨ごうともこの様なものですよ」

『害虫駆除は徹底的にした方がいいわ。ケルトの兵は特に念入りに叩かないと死なないから』

戦場の指揮を執る I 号機は何処か楽しそうである。お母さんはそんな子にプログラム育てた覚えはありません。清姫からもなんとか言ってくださいよ！

「一匹見つけたら十匹はいるって聞きますものね！」

「駄目みたいですわね！」

どうやら清姫たちには目の前の地獄を黒光りした G 軍の駆除にしか見えならしい。いやそつちはそつちで地獄だわ。大量の G って私発狂しちゃう。

「まあ引き続き駆除をお願い」

『了解。そして遂に自分から駆除と言い出したわね艦長』

「火炎放射器を持ち出した時点でこの特異点は世紀末と化したわ。汚物は消毒、害虫は駆除。当然の結論ね」

もう一度考えたら G にしか見えないわあんな。無尽蔵でしぶといかもうほぼ G

じゃん。家庭の黒い悪魔だよ奴ら。紅い彗星で倒さなきゃ。

『Ⅱ号機からセントラルへ、Ⅱ号機からセントラルへ』

Ⅰ号機の連絡が終わったと思えば次は戦力増強の為にⅡ号機から連絡が来た。モニターも同時に出たので状況はよく分かる。

「こちらセントラル。Ⅱ号機、視覚情報から察するにトラブルね」

『ええ見ての通りよ』

モニターに映るのはライオンだった。

『アメリカ大統領王エジソンである!!』

『G a h o o o』と吠えるライオンは不思議な事に人語を返し首から下が人間だった。

合成獣種キメラかな？

『機械化歩兵にライオンとの面会に応じるように言われたからホワイトハウスまでひとつ飛びした、それでコレ』

「知らない人について行かないように言っておいたでしょ！」

『そんな事はプログラムされていない。そもそも知らない人では無く、知らないロボット。そして私は目標に従っただけよ』

確かにライオンエリオンヘッドとの接触も目標として登録してある。しかしかなり優先度は低いはずだ。飽くまでも第一目標はアタシエリちゃんだから。



「さてはアンタ……アタシエリちゃんとの接触を引き伸ばしてるわね！」  
『ぷい』

「あら分かりやすい。エリザにそっくりですわ」

「私はあんなあからさまに態度に出ないわよ！」

「無自覚と言うのは恐ろしいですね。まあそこがまた良いんですが……ぽんこつかわいくて」

「アンタねえ……」

久々に清姫に対して一発殴つてやりたいと思つたがどうにもモニターに映るライオンが凄い咳払いを شدしたのでまた後で締める事にする。このライオンなんで噎せてんだろ。

「はじめまして大統領トーマス・エジソン。私はエリザベート・バートリー。職業アイドル兼勇者兼超弩級メカエリチャンの艦長よ」

「私は清姫、エリザの恋人兼エリザの妻兼エリザの秘書ですわ」

『肩書き多くないかね!? あと恋人兼妻つてそれ矛盾してね?』

「誤差ですわ」

『なんだ誤差か』

「いや直流と交流くらい違うと思うけど」

『全ツ然誤差じゃない——ツ!!』

うむこのライオン打てば響く。ガオガオ響く。

「さて小粋なトークも結構だけどいい加減本題に入りましょう。私と話したい事って何かしら?」

まあ心当たりしかないが。

『率直に言おう。我々への攻撃をやめて頂きたい。敵は同じだろう?』

「言い掛かりよ。私は其方に攻撃は仕掛けていない」

『私の目にはケルト共々倒そうとしている様に見えるが?』

「偶々貴方のロボットがそこに居たのよ。コラテラル・ダメージ副次的被害、必要な犠牲だった」

『必要な犠牲? そんな理由で兵力を削がれる此方の身にもなつて頂きたいものですか?』

表面だけ見ればエジソンは笑顔だ。獣の顔は表情が読み取りにくいがにこやかなのは間違いない。しかし話してみればわかる。

——コイツめっちゃ怒ってる!

「結果的にこの特異点が修復できれば良いのではないかしら?」

『ハツハツハ、小さなお嬢さんは面白いことを言う。飽くまでこの特異点の事だろう？』

私から言わせてもらえばそれでは意味がない。アメリカは、救われないからだ！』

エジソンはアメリカだけはなんとか守り通そうと足掻いていたんでしよう。彼は利口だから配られたカードでは万人を救う事は不可能だと断じてしまった。この特異点が修復されても残り二つの特異点とラスボスとの戦いで敗れてしまえばアメリカ諸共消えるのだから。

『聖杯があれば改造する事でアメリカだけは難を逃れる。確証の無い勝利へ手を伸ばす位であれば安心安全懇切丁寧な未来を選ぶ。私はアメリカの代表として決断する義務と責任がある』

「その方法でアメリカを救っても世界は救われない。後味が悪いビターエンドよ」  
『承知の上だとも、どれほどの罵詈雑言を浴びせかけられるとしても私はアメリカを救う。——救わねばならない』

言葉尻に語気を強めるエジソンは毛を逆立たせ、力一杯に握る拳を振るう。さつきまでのギャグを払拭する程の迫力だ。

最初から説得は諦めてはいたけど想像以上にガチガチの脳みそになっている。一度交流電気を流し込まれない限り梃子でも動きそうにない。お互いに電気が滑らせる仲のいいライバルが彼には居ないのだろうか。

しかし祈っても野生の天才が現れることは無い。彼の出番はまだ先だから。よつてエジソンを救う手立て無し。

「ならエジソン、貴方は私の敵に他ならない。人理を救う英雄が人理の焼却を速める行為に手を染める。到底見逃す事能わず」

『ならばどうする！』

「ケルトを倒し、聖杯を先に奪わせてもらおう。貴方がアメリカ大統領としてアメリカを救う義務が有ると主張するならば、私は勇者として世界を救う義務が有る！」

互いの意見は衝突し議論は平行線を辿る以上話し合いには既に意味は無い。早々にII号機にはアタシ探<sup>エリちゃん</sup>しに戻つてもらおう。

幸運、いやエジソンの厚意でカルナたちは居ない。居たとしても拘束はされないだろう。実際そこに居るのはメカだし。

「そう言えば貴方に言うべき言葉があつたわ」

『何かな？』

「負けないでいてくれてありがとう」

『……』

私は呆気にとられたエジソンにウイंकだけでして通信を切った。ウイंकはファンサービスだ。きつと画面の向こうのブタたちは感動で泣いてるわ間違いない。事実清

姫は私を見てアホ面を晒している。アンタにウインクした訳じゃ無いってのに。

話し合いは残念ながら決裂した訳だが、別にやる事は変わらない。寧ろ気兼ねなく両成敗出来るので楽まである。カルナを喚けるなどされない限り私の負けはない。

《どうやらお客様が足下に来ていろいろわ》

「お客様？」

「まあ！ ではお茶を用意しますね」

《映像出すわね》

映し出されたのは予想外の人物。

『ムム、これは凄いな。余の彫刻に勝るとも劣らない。大きさと派手さだけならば大敗……クウ、だが余の至極の劇場の方が絶対すごいもん！』

『ちよつとスカートの下が無防備過ぎるんじゃない!?』

『大丈夫大丈夫誰も見ませんで、見ても面白くともなんともないから』

エリザベト嫁ネ ヤベー奴とヤベー奴と常識人が居た。

『面白いわよ!!』

『それはそれで問題があるでしょ！ オタク本当にめちやくちやだな!?』

頑張れ緑茶、諦めるな緑茶、お前だけが頼りだ常識人！  
ロレレフット

まあ幸か不幸かと言えば幸な巡り合わせ。即刻Ⅱ号機が目標リストを更新し、通信の

ミュートを外す。

「よく来たわね！」

『その声はアタシ!?』 という事は勇者妹なアタシね!』

いつか会った時に自分を妹と称していたがまさか覚えていたとはね。正直厄介、私じゃなくても分かる。絶対姉と言う立場に託けてマウントを取ってくる。ウザ絡みしてくる。

「そうよ久しぶり、と言えばいいのかしらアタシ」エリザベート

『何よ水臭いわねお姉様でいいのに!』

嫌味も無く言ってくるアタシ、これだから始末に負えない。純粹にそう呼んで欲しいって気持ちエリザベートが全面に出てる。しかも此処でお姉様と言わなかった場合拗ねるのが目に見えるのがエリザベートクオリティ。

「……ええそうだったわねお姉様」

『オタク妹に嫌われてない? すっごい気になる間があつた気がするんだけど。あと声エリザベートがビツクリするほどそっくり……』

『そんな訳ないでしょ! なんてつたつてアタシが姉よ、不満を漏らす要素なんてないんだから』

いやエリザベート属エリザベート科に分類される者からすれば割りと汚点。今なら

カーミラの気持ちがよく分かる。いや、カーミラからすれば私もアタシも特に変わりないかも……

『はいはいオタクに聞いたオレがバカでしたよつと。所でコチラの皇帝さんは何を黙り込んでいらつしやる?』

『む? いやちよつと記憶に妙な引つ掛かりがな……まあよいか』

何やら不穏な予感が、いや最早暴君の気配が嫁ネ口から発せられている。違はずだ、私に乱暴を働こうとした皇帝は英霊でもない生の皇帝だった。

いやしかし同一人物であることは確かだから要注意人物であるのは変わらない。此処は慎重に清姫を盾にしよう。助けて清姫、私を救いたまえ。

「取り敢えずタラップを出すからここまで登って来なさい。お茶くらい出すわ」

それだけ言つて通信を切る。

「あの三人を誘導しておいて」

《了解よ、艦長》

さて何故私があのかキャンキャン泣く愚姉を必要としたか説明せねばならない。

この超弩級メカエリチャンはエリザ粒子を動力源に稼働しているのはみんな周知している事でしょう。けれど予め注入しておいたエリザ粒子ではこの特異点修復を成す前にガス欠を起こす。如何に私でも特異点修復に必要なエリザ粒子を一人で捻出する

のは骨が折れるどころか粉碎骨折。

そこで我が愚姉が必要になる。

「来たわよー！」

一人で駄目なら二人でエリザ粒子を生み出せばいい。二人で歌えば相乗効果で数10倍に効率が高まる筈。そうすれば私たちを止めるものはこの特異点に居なくなる。いやインド勢二人が一斉に来たら流石にまづいけど。

「いやそつくりって言うか、完全に一致だろ。同一人物だろ……」

「ほほお、内装も中々……むむむー」

ただ大きな問題が一つだけある。この一つが致命的なのよ。寧ろこの問題の為だけに魔術的防音室を用意した。

「そりやそうよなんとたつて実際に同一人ぶツ——!?!」

「行くわよお姉様!!」

「何処に!?!」

——この愚姉、致命的な無自覚音痴である。

「レッスンスタジオ!!」



「へあ!?!」

アタシの負性エリザ粒子ではこの超弩級メカエリチャンの燃料にはならない。私が放つ陽性エリザ粒子ポジティブでなければ稼働しないのよ。それと私が幾ら陽性エリザ粒子ポジティブを放とうと、アタシが陰性エリザ粒子ネガティブを放つてしまえば中和してしまう。

だが幸運な事にエリザベートという存在は心構え一つで歌声が変わる。自分の為でなく、他の誰か、もつと言えば気になるあの人? の為に歌えば忽ち世界一の歌声へと昇華する。

「姉妹でユニットを組む時が来たわ!」

「えええええ!?! 遂にその気になったのね勇者なアタシイ!!」

渋々よ愚姉。

「清姫、残った二人をお願い! 後でエリクサーを差し入れて頂戴」

「はいエリザ、では御二方はこちらへどうぞ」

「うむ、ところでこの主は余と何処かであった事が?」

「存じませんね……ふふふ」

「助けて」

「頑張れ常識人!!」

第五特異点 北米神話大戦 イ・プルーリバス・ウナム にて、アイドルユニット：血濡れのドラクルシスターズを結成。

ゲリラライブ緊急決定。チケットはフリー、席はお好きにどうぞ。ルールは一つだけ守って欲しいのよね。

それは――

――死ぬまで楽しみなさい!!

## ドラシスのデビュー曲は『鋼鉄の鮮血姫』

? 私が思うエリザベートという少女は優秀である。

? 頭の回転は早く、教えられた事を直ぐに記憶し実践へと移り、完璧に熟してみせる素養があるのだ。一言で言えば彼女は天才肌なのだと言えよう。

? だが一方、エリザベートは純粹すぎるくらいがある。よく言えば純粹無垢で素直な綺麗な心の持ち主だと言えるが、悪く言えば単純で単細胞な自身の素養を生かしきれない可哀想な少女とも捉えられる。

? 物事を冷静に俯瞰し考えられる力があるのに、悪と断定される様な行為を一度善と思えば他に止められるまで悪だと認識出来ない。

? 故にエリザベート・バートリーを全肯定してはいけない。彼女は思い込みが激しいのだ。

? つまり、私が声を大にして言いたいことは――

「――アンタの歌下手過ぎなのよ!!」

? ?これに尽きる。

「ハア!? 何処がよ!」

「全部よ全部。私は一体お姉様の為に何回防音術式を補修しなきゃならないの?」

「アンタの魔術が貧弱なだけでしょ!」

「普通は歌で剥がれる様な魔術じゃないのよ。まず歌うだけでソニックブームなんて起らない!」

? 我が愚姉は歌が下手だ。最早下手と言う言葉さえ生温いくらいには音痴。しかも無自覚である所がより一層のたちの悪さを演出している。

? まあ音痴なのは私も人の事を言えたことではないけれど、自覚はあったし何より事前に対処法を心得ていたので愚姉より賢いのは確定的です。

「まずアイドルとは如何にしてアイドルたらしめるのか、お姉様は知ってるかしら?」

「アイドルの根底への問って事ね。それはキラキラして歌えて踊れて他を魅了するって事じゃない? つまりそれが出来ない者はアイドルじゃない。その点

beautiful & cute. 綺麗麗で可愛い アタシにはピッタリ」

「うんそうね」

? 確かに何も間違えてないな。

「じゃあステージに上がったアイドルはファンに向けてどう言う態度で接するべき?」

「態度？」

「アイドルがステージに上がったならファンは私たちに期待をするのよ。これからどんなパフォーマンスが目の前に行われるかってね。そんなファンにアンタはどう言う感情を抱くの？」

「いや当然の事でしょ。ファンはそういうもの……アタシがどう思うか？」

「？ 思わず頭を両手で覆った。やはりこの姉は圧倒的に足りない物がある。それは至って単純でパフォーマンス全てが持つて然るべき物。」

「？ それはファンを大事にする心だ。」

「私が思うアイドルはファン有りきなよ。ファンが居るからアイドルが居るの。オーディエンスの居ない孤独なステージにアイドルは似合わない」

「ステージに立てば子ブタたちが居るでしょ？」

「満員御礼なんてものが当たり前なはずないでしょう」

「？ 私はアタシの鼻先に指を突き付ける。」

「まず来てくれた事に感謝し、期待してくれた事に感謝し、愛してくれる事に感謝する。その思いを身体に乗せてオーディエンスに返すの」

「？ 誰かの為に歌い舞う事で私たちのアイドルとしての質は宇宙を跨ぐ。なんで愛され上手なのにそこだけが抜けるのか不思議でならないが、目の前の愚姉を見る限り理解

不能だと脳が回答しているらしい。

？顔を右往左往させてあーでもないこーでもないと解答を中空に求めているのを見て小休憩でも入れるかと思案するタイムミングでレッスルールの扉が開いた。

「どうですか進捗の程は？」

「見ての通りよ」

？あらあらと笑う清姫。

「先は長そうですね」

「他人の為に歌うって事がそんなに複雑かしら？」

？唇に扇子を押し付けた彼女は少しばかり困ったように笑っている。どうにも彼女たちにとってはこの間は難問らしい。精神が男性であるところの私では気付かない何かがあるのか？

「誰かのためになんて、そうそう出来るものじゃないですよ。いつだって人は自分の事で精一杯ですから」

「そういうものかしら？」

「そういうものです」

？手渡されるエリクサーで回復しつつ未だ四苦八苦する愚姉を見る。

「( . . . ? ? . . . ? )」

「ぶっさ」「あら可愛い」

「ん？」

「？こいつ最早エリザベートなら何でもいいのでは？」

「一番は勿論貴女ですよ。安心して下さいね」

「？なんでナチュラルに心を読んで来るのか。正直問い質したら最後、精神をゴリつと削り取られる予感がするので聞かないでおくがそれとは関係なく怖いのでやめて欲しい。」

「ところで答えは出たの？」

「うーん取り敢えずあれよねライブ開始時の『みんなー、今日はアタシの為に来てくれてありがとうー』みたいなものよね」

「当たらずとも遠からずってとこね。まあ及第点ってとこでしょ」

「？心構えさえしつかりとしていれば大丈夫だし。コツさえ掴んでしまえば普通に歌いきれる——と思いたい。」

「じゃあその思いを念頭にダンスレッスンよ！」

「？そこからはトントン拍子。元よりエリザベート同士互いの息は自然と揃うし歌以外はそこそこ優秀なアタシは覚えが早かった。サーヴァントとしてのスペックで魅せる超絶ダンスは他の追随を許さないものに仕上がった筈。」

？現にこのレッスンで発生したエリザ粒子の総量は私が一人で踊った時の10倍はあった。物理的なものに換算すれば超弩級メカエリチャンの武装であるミサイル150基（対城宝具相当）にあたる。勿論ちやっかり回収したので150のミサイルは既に運用可能です。

？これでライブを成功出来たならばこの特異点は修復したも同義。

「ぐへへへ」

「あら可愛い」

「妹の将来が不安だわ」

？おっと勇者らしからぬ悪どい笑いが漏れた。

？基礎が出来たならあととは走り抜けるだけ。まあ歌で合格の判を押しても地獄のりハを残しているから決して平坦な道程ではなかったけれど、と言うか何リテイクしたか忘れる程にはトライアンドエラーだった。

？歌のキーが外れたらリテイク。パートを分けた箇所を間違えて歌ってもリテイク。歌と踊りがズレてもリテイク。互いの息が合わなくてもリテイク。笑顔が絶えたらリテイク。喧嘩してもリテイク。清姫が茶々を入れてきてもリテイク。

「まずなんで『リテイク』なのよ！ これリハーサルよね!？」

「このモーションデータを加工してMV作るからに決まってるでしょうが。あとこれも



映像に残ってるから、初回ライブムービーコンプリートBOXを売り出す際に封入特典として使うから」

「マジか!?!」

「マジよ」

? 編集すんの私だからこれ以上回数を重ねないで欲しい。——切実に!

? だが虚しく響くりテイクの嵐。

? 演出が気に入らなくてもリメイクだし、細かい調整を入れる度にリメイクだから終わりが見えない。

? 仮に精根尽き果てて倒れようとも頭からエリクサーで強制的にリメイクである。つまり24時間働けますね。残念だったな愚姉よ、サーヴァントには労協やら労基はノータッチだ。

? ドツポにはまって来た微調整とリメイクの波濤の中にアラームが鳴る。これは敵が超弩級メカエリチャンの近くまで接近したという事。量産型メカエリチャンが哨戒してる中を突っ切って来たという事はただのケルト兵や改造ヘルタースケルターなんかじゃない。——つまりサーヴァント!

「アタシは休憩してなさい。清姫!」

「此処に」

? 霊体化して直ぐに駆け付けた清姫は緊張した顔で私を見た。それ程のサーヴァントという事か。アルジュナとかカルナだったら計画が丸潰れよ【自主規制】エリちゃんカワイイ ツ!!

「『どりる』でした」

? その言葉で思わず固まった。

「ドリルですって!?!」

「量産型が最後に情報を送信して来ましたが……殆どが一突きだったと記録に残っていません。一瞬だったとも」

? 私の口から短い悲鳴が漏れる。真に恐るはアルジュナやカルナ、クー・フリーンでも無かった事に今気付いた。

? 忘れていたのだあの男を。

? 時に子どもに恐怖の声を上げさせる歯医者。

? 時に監獄塔で現れた色欲の罪人。

? 時に山を割り島を砕くドリルを携えた戦士。

? その漢の名は――

「――フェルグス・マック・ロイ」

? よりにもよって奴の存在を寸前まで忘れていたなんて艦長失格だ。フェルグスの持つ剣はランクで言えばかの聖剣エクスカリバーに勝るとも劣らない破壊力を秘め

た宝具。

？その真名を虹霓劍。カラドボルグ 別名を螺旋劍という。つまりドリルだ。

「最悪だわ。まだステージ準備中だったのにゴジラが来た」

「ふえるぐすという英霊はそれほど厄介なのですか？　今までにも強大な英霊を相手取った気がしますが？」

「確かにアルテラやヘラクレスは強かった。でもどんなものでも相性つてものがあるのよ」

？ジークフリートと龍とか、信長に神とか、ジャックに女とか、スパルタクスに圧政者とか、黒ひげにドレイクとか。

「エリザとふえるぐすの相性が悪いと？」

「まあ女性を見たら直ぐに口説き出す気質は正直好かないけど、線引きした上での相性はそこそこよ。戦士としては実直だし、油断なく相手取れば辛勝つてとこでしょう」

「そんな軟派な方をエリザと会わせる？　それはちよつと私許せませんね」

「ああそこに反応しちゃうのね。でも大丈夫よあれは成人に満たない女性にまでは一定の節度を持つてるし」

？まあ節度を持つてるだけでその気なら部屋を予約してお持ち帰り準備をするんだけどね。私は勿論ノーです。清い体でいたいんだい！！

「それでもダメですよ！」

「いやでも——」

「ダメです!!」

「ええ……」

「? 何故そこまで意固地になるのか分からない。今までは不本意にも前線で戦ってきたし、相応の修羅場(○)を潜り抜けて来たという自負もある。

「なんでダメなの?」

「……襲われたら傷になります」

「いや私がそう易々と辱めを受けるとかナイナイ」

「? 事に及ぼうものなら去勢拳よ去勢拳。安心させようと華麗な蹴りを見せてやっても清姫の表情は依然芳しくない。明らかに不満ですって感じ。

「気付いていらっしやらないようなので、ハッキリきっちりちゃんと言わせて頂きます」

「あ、うん」

「私は知ってるんですこういう状況の事をお約束だと、そしてエリザの発言が『ふらぐ』なるものなんだと」

「?ん? 雲行きが怪しいな。既に誰かがウチの清姫に入れ知恵したって勘のいいエ

リザベートは分かっちゃうんだよ。」

?タマモ?

?キヤツト?

?おつきー?

?それとも他の日本英霊?

?会つたらきちんと罪を精算させてやると心に決めて清姫に先を促す。笑顔を貼り付けながら。私は冷静、私ハ冷静ダ。

「これによるとですね」

?そう言つて取り出したブツは薄い冊子。表紙にはビキニアーマーを着た女戦士が居る。ビキニアーマーと言つてもなんかいい感じにズレていて、女戦士の表情は羞恥とそれ以外の理由で頬が赤い。そして僅かに顔には反抗の色が残っている様に見える。

?それは紛うことなき破廉恥な本であった。それもかなり際どい内容とみた。そしてその手の本の入手経路を持ち、清姫と親交がある存在はあいつしか居ない。

「またなのおつきー」

?いや資料と称して幾つか漫画等を貸し出して居るとは聞いたけど、ここまで行き過ぎた内容とは思わなかったわ。

?あと真面目な顔で同人誌を読んでるあたり本当に資料だと思つていいのか、それとも慣れるほど読み込んだのか。

「いえいえこれはおつきーから借りたものではありませんよ」

「あれ、そうなの？」

「借りようと問いわせてみたんですが持っていないと即答されました」

「？流石にメル友とはいえ性癖公開するのはまあアレよね。それに清姫だし。現に鵜呑みにしてるし。おつきーナイスよ。減刑してあげましょう。」

「でも、じゃあ一体誰が？」

「くろひーです」

「あんの汚物がア!!」

「？彼奴は超えちゃいけないラインを超えた。タマモ並の大罪人へと駆け上がりやがった。」

「？良い笑顔でサムズアップをしやがる脳内のくろひーにエイティーンをぶっ刺し、如何わしいブツを清姫から取り上げるがそんな事は関係ないとばかりにもう一冊取り出す清姫を見て目眩がする。」

「何冊貸し出されてるのよ!?!」

「ベッドの下に丁度収まる程度です」

「それは私の？」

「そうですが？そこに仕舞うのが習わしだと聞き及んでいます。それと私たちの床で

すよ」

「私アイドル何ですけど!?!」

? 清纯派アイドルなのだけれど、清楚が売りの勇者系アイドルなのだけれど!

「とにかく! そんな物を鵜呑みにしない事よ清姫」

? なしてそこで不満顔なの?

「絶対に絶対対その手の本の知識を現実に流用しない事! いいわね!」

「私なりに努力してみたのですが……」

「う……」

閑話休題

「? ややツヤツヤした清姫が私に問いかけた。

「結局相性が悪いとはどう言った意味だったのでしょうか?」

「ドリルは『メカ特攻』だからよ」

「? 自分で思ったより疲れた声が超弩級メカエリチャンの巨体に溶けるように消えた。」



## ドリルを回せ 歌響かせ 敵を殲滅せよ

? 大剣を担ぎ、長年培ってきた戦闘勘を用いてやって来た巨漢。名をフェルグス・マック・ロイという。かのクー・フリーンの養父にして螺旋剣“カラドボルグ”の担い手。

? そんな男が今、超弩級メカエリチャンの前へと丸太のように太い2本の脚で立っている。

? その顔は1人敵地に来た者の顔とはかけ離れており、まるでピクニツクにでも来たかのように気楽なもの。だが彼が通った道には撃墜された残骸が幾つも残っている。

? 対する私も後ろに清姫を立たせ、すっかり手に馴染んだ名剣エイティーンと名盾レトロニアを油断なく握りこんでいる。

「聞く必要もないけれど一応聞いておくわ。こんな所まで1人で来て、一体どうしようって言うの?」

「当然敵本拠地に強襲を掛けるのさ」

「1人で?」

「人使いの荒い女王様に頼まれたからな」

? 眉間によるシワを見るにメイヴの奔放さに呆れてるのがひしひしと伝わってくる。クー・フリーン「オルタ」と言う一番欲しかった宝石を手に入れたメイヴの心中を察せばウキウキなのは一目瞭然なので当然だけど。

「じゃあ鞍替えでもしない? 世界を救う為に東奔西走の大立ち回りを演じるアツトホームな職場よ!」

「魅力的な誘いに乗りたいたいのはやまやまなんだがな。こちらこそ面白いかな、それに中身はアレでも身体は最高なんだなコレが」

「最後のセリフで全て台無しよ!!」

「ハツハツハ!!」

? 流石に精力絶倫の男と歴史に残るだけはある。隙あらば直ぐに脳内ピンクだ。清姫の教育上よろしくないので早めに処理しよう。ただでさえその手の知識が偏りつつあるのにこんな爆弾放っておいたらどんな化学変化が起こるか分かったものじゃない。「さて死合前の語らいは十分だろう。そろそろ……」

? 互いに構えをとる。

「そうねこれ以上は剣を持って語らいましょう」

「応よ!」

? 初撃はこちらから、大振りの一撃を叩き込みに掛かる。勿論魔力放出をフルパワー

にして筋力と敏捷爆上げのゴリラ殺法。

「ほほお、随分と重い剣だ」

？ 矮躯に似つかわしくない一撃に関心を抱きつつも受け止めたフェルグス。だが余りにも容易く受け止めてみせた。

？ 直ぐにその余裕は打ち崩されるけど。

「ボエ〜」

？ 超近距離による防御不可のスーパーソニックブレス。竜族の肺活量による威力は最早殺人兵器。つまりフェルグスの鼓膜は死んだ。予備の鼓膜はアマゾネス・ドットコムに売ってるから買うことを勧める。

？ よろめいた隙を見て後方に飛び清姫を呼ぶ。

「灰燼と化せ」

「竜の焰よ」

—— 【双竜双火紅蓮奏】 ツ!!

？ 清姫と私で行うコンビネーション技。必殺技っぽい名前を付けたものの同時にファイアブレスを対象にぶつけ即殺を狙うだけと言う華の無い技だ。悪ノリが過ぎるところなる。

「ぬうん!!」

?轟々と燃え盛る炎はドリルの回転に絡め取られ、一振りによつて掻き消える。耳から出血があるがそれ以外の目立った外傷はなし、寧ろニコニコ顔突っ込んでくる。

「生粋の戦士つてこれだから嫌!」

?レトロニアでドリルを受け止め、清姫の焰で反撃。

「もう焰は通らん!」

「焰を喰らった後でドリルの回転で巻きとつた!? なんてゴリ押し……」

?絡めとつた焰はドリルを受け止めているレトロニアを越えて私に打ち返される。あの邪竜の炎をほぼ無傷で切り抜けた私にはそよかぜの様なものだが目眩しにはなつた。

「セイア!!」

?ならばフェルグスはその隙を逃さず私へ脳天直撃を狙うのは当然の事。苦し紛れにエイティーンを振ることで受け止めたけれど防げなければ間違いなくお陀仏。たんこぶじや済まなかつたでしょう。良くて私の頭は地面にめり込む。

?しかしこの攻撃を防いだのは幸運だった。フェルグスの腕は清姫の焰を受け止めた事で火傷を負っている。彼にとつてこの奇策は捨て身の一撃に他ならないはず、はず!

?だがフェルグスは笑っている。

?この男、余りにタフ過ぎる。

? 脳筋っぷりに呆気を取られている間にフェルグスは大きく後ろに飛んだ。間合いを取るにも少し大きい。遠中距離の間合いならいざ知らずフェルグスは超近距離型。

? 来るとしたら宝具。

「流石に盾持ちのサーヴァントは硬いな。ならそろそろ——真の虹霓をご覧に入れようか」

「清姫私の後ろに来て、宝具よ」

「はい」

? 魔力の高まりと共に虹の波動に回転の音が響いてくる。鳴動するドリルが一際輝きを放った時、フェルグスは思いつきり地面へと突き刺した。

「地を割ろうが空へ逃げれば関係ない!」

「敵を倒すだけが勝利じゃない。——『カレドヴァールフ・カラドボルグ極・虹霓剣』 ツ!!」

? この螺旋剣は丘を3つほど雑に叩き切れる。ならば担い手がその力を正しく引き出し、行使した時の結果はどうなるか——

? ——島程度なら地盤ごと破砕する。

? フェルグスは私の問いに『敵本拠地に強襲を掛ける』と言った。その意味が、その対象が、私たちがなく拠点にあるのだとしたら。

「私は致命的な思い違いを……」

? 皮肉な事に宙に浮いてるからこそよく理解出来た。亀裂が秒読みで深く、広く、切り開かれていくのが。

? 間に合わない。防ぎ切れない。

? 私の頭の中では既に超弩級メカエリチャンがクレバスに吞まれている。逃れられない結末が脳裏に過ぎり続ける。量産機は自動生産が進んでいるからまだ補填を考えることが出来る。

? しかし実は超弩級メカエリチャンは私の手ずからコツコツ作った特別な機体。アマズネス・ドットコムから少しずつパーツを買い入れて作ったのよ。ディア○スティーニほどお手軽でもないのよ!

「わ、た、し、の、メ、カ、が!!」

? 私には泣きながら責めて修理可能な状態で残るように祈る他ない。ここでありふり構わず突撃する程の阿呆じゃない。いやしたいけど!!

「諦めるのは少しばかり早いんじゃない?」

? 声のした方へ顔を傾ける。丁度矢らしき物が眼前を通過した。その軌道の先は

フェルグスだった。

「グウア——アーチャーのサーヴァントか!？」

? 着弾点はフェルグスの肩、僅かに急所を外している。サーヴァントにとってそれはまだまだ活動可能な状態にある。

「主役は遅れて登場するものよな」

「ッ!？」

? 瞬きの間にフェルグスの背後を取るセイバーが居るらしい。更に巫山戯たことに恰好がウエディングドレスに似た何かを着ているセイバーらしい。

? 嫁ネロは宝具を発動している無防備な背中に原<sup>アエストウス・エストウス</sup>初の火を突き入れた。

「ゴフツ——また暗殺か。まあ戦場で果てるのなら本望、よ」

? 分解された光を確認した後すぐさま背後を確認した。亀裂は超弩級メカエリチャンの手前で止まっており、機体の左目付近には構えを解いたロビンフットが手を振っている。

「助かったあ……」

? マジで危なかった危うく天才軍師エリザの作戦が破綻するところだった。メカ特攻ホント怖い。

? 安心したら身体の力抜けてきた。

「なんだエリザ腰が抜けたのか？　しょうがないやつめ、うむしょうがないから余が背負って帰ってやろう」

？ 何がしょうがないのか分かんないです。

「いや別に清姫が居るから」

「そう遠慮するな——おりよ？」

？ 抱き上げようと手を伸ばした嫁ネロだったがすんでのところで清姫にかつ攫われる。清姫サン締め付けがきついですわよ。

？ 顔は角度的に見えないけど予想だと暗黒微笑なんだろう。

？ 玉藻は此処で引くけど、ネロは引かないのよなあ。

「おお恋する乙女とはかくも美しい。なんだったら2人同時でも余は一向に構わんぞ！」

？ あれ、フェルグスの幻影が見える。

「旦那様の面倒を見るのは妻である私の仕事です。ねろさんこそ是非ご遠慮してくださいませ」

「余的には我慢とかしたくないのだが、まあ良いか。コンサートもあるしな！」

？ サラツと恐ろしいこと言った？

？ 言葉のニュアンス的に自分がオンステージするみたいだに聞こえたんですけど!?



「アンタはステージに上がることも歌うことも許す気は無いわよ。それに歌も踊りもアンタのパートを振り分ける余裕無いし」

「え？」

「? 如何にも信じられないと言った風体だ。口はポカーンとアホ丸出しだし、目も見開いている。この皇帝本当に参加する気だったようで。」

「? いや絶対に皆さんが？」

「? 意地でも皆さんが!!」

「出たい出たい! 余も出たいー!!」

「? 本当に出す気が無いのを理解したのか嫁ネロは子供のように愚図りだした。ええい鬱陶しい、出さないと言ったら出さないっての。」

「? 取り敢えず適当に対応しようと無難な案を捻り出そうとしたが、どうにも超弩級メカエリチャンの方が騒がしい。」

「ええ!!?」

「……ああやつちやつてますね、これ」

「凄いなアレ! 余も作つちやおうかな」

「? 元々ライブ会場は超弩級メカエリチャンを使うつもりだった。胸部にあるラウンジの下、つまりアンダーバスト辺りから舞台ステージがせり出し、展開された魔術式に

従い機材を召喚、装飾はより煌びやかで豪華絢爛となる。

?それが超弩級メカエリチャンの真の姿。

?である筈なのだが――

?――なんで起動しちやつてるんです?

?まるで目標まで貯まった貯金を勝手に使い込まれた気分なんですけど。しかも明らかに犯人が知り合いつて言う最悪なパターン。顔が私と同じじゃなかったら顔をクレーターだらけにしてやったものを、可愛さは時に最強の盾になるのね。

「清姫!」

「承りましたわ」

「あれ、余より敏捷高くね?」

?もう私たちのステなんて微塵も宛にもならない、最早詐欺だもの。

?帰還して直ぐに超弩級メカエリチャンに起動した人物を尋ねる。分かりきった答えが帰って来るだろうけど。

《オリジナル・エリザベートです艦長》

「なんで許可したのよ!?!」

《現在オリジナル・エリザベートはゲスト扱いです。そしてゲストには現在一時的な命令権が認められます》

? なんの為に人心回路と疑似人格を積んでると思ってるの。アイツには絶対渡しちや駄目でしようよ命令権なんて、最初からロック掛けときなさいってえ。

? 別に同じエリザベートモデルだからってアホっぽい所は似なくて良いのに。

「今すぐロック。同時にアタシの所在をサーチして」

《オリジナル・エリザベートは現在ステージに居ます。撃ちますか? 焼きますか?

それとも爆破?》

「笑えないジョークね。量産機に拘束させて」

? 警備員役として配置した量産機はアタシに殺到する。自分が立つステージの豪華さに浮き足立っていたアタシ、あつという間に囲まれ一斉に掛かれたなら。

『キャーーーーーッ?!!』

? まあそうなるよね、うん知ってた。

「逆さで運ばないでよ。頭に血が昇って……ううう」

? 雑に連行されたらしいお目目グルグルしてるし。

「ごきげんようお姉様」

「ちよっ、勇者なアタシ早く降ろし、気持ち悪うー」

「ライブ迄にはまだ時間があるんだけど、どうしてアレを起動したの？ 打ち合わせの時に色々丁寧に教えたわよね？ ねえ!？」

? 露骨に目を逸らす。

「いやでも、ほら所謂好奇心？ 一時の気の迷いって言うか?」

「アタシのクセに口答えしてんじゃないわよ!」

「すみませんでした」

? 頬をぐにやぐにやとこねくり回す。いや流石アタシ、もっちもちである。

「まあまあおしおきはその辺でいいんじゃないっすか? 別に引つ込めれない訳でもな

いでしょ」

「出来るけどね。出来るんだけど……」

「出来るけど、何すか?」

「初出しでサブライブしたかったのに、一回引つ込めてもつかい出したら終わりじゃない! 驚き半分になっちゃうじゃない!!」

? つまり引つ込みがつかない。

「え、じゃあどうするの?」

「どうしよう!?!」

「知らねえよ!」

? そりやそうだ。

しかし超弩級メカエリチャンは兵装含めコスパが超絶悪い。現状稼働しているだけの今でさえエリザベートが2騎居る状態でおマイナス。ステージの起動をしてからまた戻してまた起動で無駄な燃料を使うのはサプライズ抜きに御免被りたい。

となると取れる行動は決まってくる。予定は前倒しになるが贅沢は言えない。時間との勝負だ。

「清姫準備なさい!」

「良いんですか?」

「是非も無し、よ」

量産機にアタシを解放させる。頭から落下して涙目の所悪いけれど自分でやらかしたツケはキツチリストージで返して貰いましょう。

「二度でもミスしたら鼻から紅茶を飲ませる」

「ひゃい」

鼻の頭に指を突き付け脅しを入れておくのは忘れない。熱々のお紅茶をぶち込むわ。ポットで丁寧だね。

緊急ミーティング



ライブの内容は変わらず予定だけをずらして、超弩級メカエリチャンをワシントンへ移動させながら踊り歌う事になった。

ルートは統率機2体の情報から叩き出したから問題なくワシントンに到達出来るでしょう。定期報告から子ジカが既にエジソンの目を覚まさせたのが分かってるから上手く被れば同時に進軍するかも。前線は上げたし、野良サーヴァントは子ジカに回したのはこつちだけどアメリカ横断するの早すぎじやない？

まあ思わぬ成長があつたんだと思つときましようか。いやまさか子ジカもこつち側ギャグ時空に呑まれたんじや……

「まさかあ……」

だとしたらシャレになんないもの、人類悪顕現しちゃう。

『音響、照明問題無し。何時でも行けますわエリザ』

「カウント」

3

準備はしてもしてもし足りなかった。

2

けど……

後悔だけはしたくない。

「最高にして最強にして最凶のライブでイかせて挙げる！ 泣きなさい！ 鳴きなさい！ 泣きなさい！ 全米の子ブタたち!!」

両サイドから中央に飛ぶ。私とアタシは同時に着地して背中を合わせ、マイクを口許に添える。

「超弩級メカエリチャン発進！」

《ピカーン！》

なんだその棒読みの効果音!?

超弩級メカエリチャンの飛行ユニットが無事機能した事に安堵した心に喝を入れ、同時にミュージックスタート。

作詞作曲全部私の『鋼鉄の鮮血姫』。

その内容は滾るリアクターよりも熱く。鋼鉄の研ぎ澄まされたボディよりも妖艶で、放たれるミサイルの雨よりド迫力のアメイジングソング。

普通に人間じゃサビを聞くだけで心臓が止まる。いや決して物理的威力は伴わない。本当に！

呼吸を忘れて気絶する人間は続出するでしょうけど。

見事なハーモニーと共に魅せるダンスはサーヴァントという身体が活かされた人間に不可能な超絶技巧。ステータスの全力全開で身体を動かす、時に霊体化を利用したパートスイッチで見えるものを惹きつける。

そして何を隠そう。

この映像は全米に散らばる子ブタに生中継している。量産型メカエリチャンに映像投射と音に拘ったスピーカーによる圧巻のLIVE配信を皆様にお届けしているのだ。

お代はいらない、ただひたすら一心不乱に私たちに魅了されたらしい。

『無事エリザ粒子は予測値に届き、現在も上昇中です』

イヤカフから聞こえる清姫の声によれば順調らしい。

「子ブタたちはどうやら生で私たちに会いたいようね」

「いいじゃない派手に出迎えてあげましょう勇者なアタシ」

これだけアピールしていればケルト側も寄ってくるでしょう。なんせ自分たちから場所を知らせてるわけだし。幸いな事にエジソン側の機械兵は来ていないから子ジカが上手くやったって言うのは間違いないらしい。

ワラワラと何処からか湧いて出たケルト兵は焼却よとばかりに爆発に巻き込まれていく。ミサイルは超弩級メカエリチャンから無尽蔵に吐き出され、轟音が聞こえない時間が無い。



『あららマジでボタン1つであの大軍が吹き飛んだわ』

『しかし敵軍の数が凄まじいな。打っても打っても湧くぞ』

ロビンフッドと嫁ネロにはボタンをポチポチするだけの簡単作業をやってもらつて。装填が終われば敵軍にターゲットを絞ってボタンをポチるだけと説明してるので今もドンドンミサイルの雨が降っている。気分は地球防衛軍。

ミサイルもエリザ粒子から精製されるので私たちが歌い続ける限り無限。勝つたな！

『前方に極大の熱源反応を検知。恐らく魔神柱です！』

「思った以上に速い……」

メイヴの宝具、『クラン・カラティン二十八人の戦士』。

ラスボス謹製の聖杯から引き出した力で28体もの魔神柱を召喚するキモイ・汚い・ケルトの3K揃つたやべー代物である。

魔神柱一体につき特級のサーヴァントが1〜2体以上必要と考えたらそのヤバさも分かるだろう。必要数1体だとしてもバサクレス28体分である。全国のマスター連れて来い、ここに素材がいるぞ！

だがそんな相手に対策も無いなんてありえないでしょ勇者なら。なんのための超弩級メカエリチャンだと思つてるの！

量産型とは違うのよ量産型とは！

「宝具開帳！」

「誰の!？」

超弩級メカエリチャンの。

《了解よ艦長》

これより行われるのはただの蹂躪。ただの火力による暴力。

全兵装の一斉砲火。つまり超弩級メカエリチャンによる『鋼鉄<sup>フレステセロ・エリクサー</sup>天空魔嬢』ミサイル、

ビーム、ナパーム、マシンガン、騒音などを1人へと放つ狂気の対軍個人宝具。

今回は相手が28体、対軍での使用となるがこれまた放つ存在も超弩級ゆえに破壊力

は大魔王級。

「覚悟なさいアタシ、余波が凄いから……」

「じゃあ一時避難」

「バカなのライブは続行よ!？」

「!？」

お忘れだろうか、超弩級メカエリチャンは燃費がすこぶる悪い！

「死ぬ気で踊って、死ぬ気で歌いなさい！」

「聞いてないわア!？」

「アンタのせいよこのアホ姉！」

途中でエネルギー切れになりかねない勢いでエリザ粒子は減るのよこの宝具。チエイトを長時間稼動する方が遥かに燃費が良い。

いや今のチエイトはダメ、正確には従来のチエイトね。今はほら、ね？

まあチエイトのことはもういいわ。

「問題はあの触手群がしぶとって事ね」

「ゼエ、ハア……なんで息キレてないの、よお」

「勇者なら当然」

これはもう一押し必要ね。『破壊神の手翳』に届かないのはしょうがないわだってインドだもの。

「清姫、プランBよ！」

『ではろびんさんを最上階に連れていきます』

『へあ!』

こんなこともあろうかと策は練ってあったのよね。天才軍師なので！

『オレに何をしろって言うの!?! 正面切つてとか無理無理、オレそういうサーヴァントじゃねえから!』

「知ってるわ。大丈夫よただ彼処に宝具を連発してくればいいから」

『正気かオタク！ オレの魔力が持たないっての！』

在庫ならまだあるからノープロブレムね。

『どうぞ！』

『何この薬……！』

「エリクサー」

ゲームで馴染みのあるエリクサー。HPとMPを全回復させるスペシャルアイテム。まあ化粧水を作ろうとしたら出来ちゃったただけだけど。

「という事で、お願いね」

『やるよ、やればいいんでしょ!!』

不憫だなあ緑茶。でもラスボス系後輩よりマシだと思つて頑張つて。

『祈りの弓』

速射されていく『祈りの弓』。乱立する猛毒の木。最早『すべては我が槍に通ずる』が

如き木々の隆起に魔神柱は吞まれ、猛毒は爆発的に殺傷力を上げる。

さらにそこにミサイルが環境破壊は気持ちいぞいとばかりに爆破爆破爆破。これは果たして特異点を修復したとして正史に戻るのだろうか、とかは一切考えてはいけな

い。『これは酷い』

『いつもこんなものですが……そんなに酷いでしょうか？』

『正直ドン引きですわ。はいはいイー・バウイー・バウ』

解せぬ。

そうして抵抗も一切許さず私以外ドン引きの作戦で魔神柱はハメ殺された。最後の方は命乞いがあった気がしなくても無かったが、恐らく気の所為だろう。素材が喋る筈ない。

《艦長、エネルギー残量が》

「え、なんでつてああ……」

隣りを見たら納得の事実。

「燃え尽きたわ、真っ白に……」

アタシ、燃え尽きる。

最後までマイクを手放さず満足気に座り込んでいた。人間だったら即死コース。完全にノビてるわ。なんか全部出し尽くしたって感じ」

《このままじゃホワイトハウスに打ち込める程のエリザ粒子は捻出出来なそうね》

「目と鼻の先なんだけど」

『一応言っとくけどオレも無理。疲れた色々……』

ロビンフッドも燃え尽きたと。

『余も無理!』

嫁ネロはボタン連打で爪が逝ったと。

『私は余裕ですわ』

「生き残りは2人だけと」

あれ、もしかしてボスダンジョン直前で詰んだ？

何処で計算を間違えたの!?(困惑)

《オリジナルの起用は立派なミスなのでは?》

「うーんそれはそう……」

エリちゃん可愛いやったー

― 閑話休題 ―

なんとラスボスを前にして2人にまで減った勇者一行。

限界まで身体と喉を酷使した本家本元元祖エリザベート・バートリー。

限界まで道具をぶっぱなし続け、エリクサーでお腹をいっぱいにした苦勞人常識人

ロビンフッド。

限界まで指と爪をボタンで削った連射名人ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグ

ストウス・ゲルマニクス「ブライド」、これに関しては何で手動にしたのか!

残ったのはたったの2人。果たして勇者一行はラスボスを倒し人理を守りきれのか。次回「ぶちかませ鉄拳」アイアンフイスト 仲間の想いを込めて」

「こんな感じ行くわよ!」

《いや全く分らないわ》

「肝心の残った私たちには言及しないのですね」

「まあそういう訳で超弩級メカエリチャンの最後の見せ場よ。派手にほら拳を打ち込みなさいよ!」

《被害総額をみればどちらが敵なのかパンチ!!》

果てしなく緩く長い技名のパンチは映画なら賞を貰える迫力と威力をもつて異界化したホワイトハウスに襲い掛かる。

匠によってホワイトハウスが開放的にリフォームされました。

「行くわよ清姫」

「いよいよ決着ですねエリザ」

突撃隣りのホワイトハウス。

そしてそこにはキングサイズの天蓋付きベッド。その上では裸の女が半裸の男に馬乗りに――

「つてなんじゃこりやー!」

「いやこつちのセリフなんだけど。これからクーちゃんとお楽しみタイムだったのに」

「いやしねえつての」

「あーん、クーちゃんのいけずう。でもそこも好き!」

片手で顔を掴み押しつけられるメイヴは嬉しそうに身体を抱きしめクネクネ。これにはオルタニキも溜め息が隠せない。なんかとても親近感が湧いた。

「? なにか?」

「いやなんでも」

あんまりにもしつこかったのか何処ぞのワカメみたいに裏拳で吹き飛ばされてる。壁にめり込んだけどメイヴは元気なもよう。やっぱり親近感が湧く。

「で、ここに来たつてことは殺りあいに来たんだろ」

「勿論よ、決着つく「駄目です!」て、は?」

「初めての相手は私がつ!」

隣りに居たピンクも無事壁にめり込む。

「お互い相方運がなかったみてえだな」

「……うん」



「んじやあまあ、そろそろ死合うか。邪魔はするなよメイヴ」

「んもうクーちゃん楽しんでるのに水なんて差さないわよ」

「楽しむ、ねえ」

オルタニキは無感情に魔槍を一回転させて穂先をこちらに晒す。まるで楽しそうに見えるのはきつと気の所為じゃない、その目には愉悅の色なぞ皆無だから。

対して私もここでふぎける事はしない。だつて治癒不可の呪いとか因果逆転の秘術とかそんな屁理屈捏ねても殺しにくるのはちよつと困る。なんか理論武装されて論破されてる気分になる。

あとイジリにくい！

「そうイジりにくいのはよアンタ！」

「ああ？」

「なにその顔、ムスツとしちゃってさ。目の前に誰がいると思ってるの！ 勇者エリザ

ベートよー！」

普通は握手なりサインなり求めて挙句の果てに会った瞬間に泣き落ちるのが常識でしょうよ。ましてや無表情無感情ノーリアクションってなに？

「何言ってるんだお前？」

「だから！」

左手に持つレトロニアを前へ、右手に持つエイティーンを後ろに。重心を前へ移し魔力を内と外へと放出。爆発的な推進力。剣を振り上げ――

「その仏頂面の頬をぶん掴んで無理矢理にでも笑わせるって言うてるのよ！」

「ハッ、上等だ！」

力任せの一振はにべもなく打ち払われる。それを皮切りに得物同士の応酬が行われ、キンキンと高く鋭い音が場を支配する。その間隔は一合毎に短くなっていき、間を与えなくなっていく。

打ち合えてはいる。

だけど余裕が一切ない。だって穂先は勿論、槍を振るう腕も、細やかな自重移動を行う脚でさえ視認が難しいから。

攻勢に出れないのは予想通り、ヘラクレスと並ぶような大英雄なんだからこうなるでしょうよ。ランサーの時でさえギルガメッシュと半日死闘を演じ消耗させるとかどっかで聞いた気がするし、ステルにも上でスカサハ師匠を再起不能にさせたりゲイボルクが心臓に当たったりするし。

――チートでは!?

「こんのオ!!」

力で押そうと流され、技で隙を作ろうとすればより一層堅固に守られてしまう。浮き上がる瓦礫を弾丸にして放とうと、火を吐きつけようと、フェルグスへの有効打だったスーパースニックを放つても流される、若しくはルーンによって治癒される。

継戦能力の高さとはどんな事態にも対応が出来るのと同義なのだと身を持って味わっている。

「なかなか悪くなかったぜ」

威圧感が増す。

脈動し紅黒いオーラが魔槍から漏れ出すのを見て私の本能がけたたましく警鐘を鳴らした。

——「放たれば待つのは死だ」と

『抉り穿つ!』

即座に名盾レトロニアを正面に構え魔力を注ぎ込む。

「これなる盾は勇者の心の在り方、不屈の闘志の形。光の御子クー・フリーンよ貴様が破るのは盾ではないと知れ!」

『鏖殺の槍』——ツ!!

『古<sup>レ</sup>香<sup>ト</sup>る勇<sup>ロ</sup>者の名<sup>ニ</sup>盾<sup>ア</sup>』——ッ!!

初邂逅にも同じ技を受けたと思っていた。でも全然違った。あの時に放たれたゲイ・ボルクとは威力が段違いに高い。

「押され……グ、オオオオオオオ!!」

『軍<sup>フ</sup>神<sup>ト</sup>の劍<sup>レイ</sup>』の様に熱量が凄まじいわけではないけれど、盾の向こう側から主張してくる殺気は気を抜けばお前を殺すとずっと囁いてくる。

踏ん張りが効かない、地面を抉りながら後退させられる。魔力放出込みでこれだ、きつと素のステータスじゃ対応出来ないどころか速攻で潰される。

「ガハッ——!!」

まさか私まで壁にめり込むことになるとは。脳内ピンクになった覚えはないんだけど。

「けど防いだわ!」

魔槍の魔力が尽きるまで耐え切った。既に盾に掛かる圧力は消えている。ならこつちもやつと攻勢に——

『抉<sup>ゲ</sup>り穿<sup>イ</sup>つ塵<sup>ホ</sup>殺<sup>ル</sup>の槍<sup>ク</sup>』

余りに平坦な声だった。まるで死刑宣告を突きつけられたようなそんな背中が汗ばむ感触。

まず腕が引きちぎれるまで過剰な強化をして放つ道具を連発ってそんな非常識が許されるはずない。

「クーちゃんがんばえー！」

そんなはずあつたわ！

あの女、聖杯を令呪代わりにしてブーストしてる。魔力供給に留めておけよ。何ちゃっかり再臨してかっこいいローブ着てるんだ。いいよね再臨して衣装替えするサーヴアントは！

「言ってる場合じゃないっての」

「エリザ！」

「アンタはNPでも稼いでなさい！」

清姫にはああ言ったものの、どうしよ。

受けてもあつちは何度も宝具を使用してくるし、そもそも防御間に合わなそうだし、だったらライフで受けるしかないし、でも受けたら受けたで心臓が吹き飛ぶか臓器8割

以上は持っていかれる。

詰みなのでは？

「やれやれ、私が一番槍と思っていたのだが」

深紫色の影が落ちた。

「まあ良しとしよう」

何この人怖い。超涼しい顔で私がヒーヒー言ってた宝具止めてる。これだから原初のルーンは頭おかしい。

「そのような雑なルーンは教えた覚えがないぞクー・フリーン」

「スカサハか……」

「それにしても随分とイメチェンしたな。似合わんぞ」

「あ、それ私の趣味！」

「いつもの防具で良いだろう」

さりげなく命を救われそれとなく空気にされた。

「あとお前の歌、私の耳にも入ったぞ勇者とやら」

「あ、どうだった？」

「うむ、不思議と力が湧いたな。具体的に攻撃力と宝具威力が20%程！」

どうやら私の歌に感動してこつち側に吞まれかけている感じが、どこことなくコハエ

……いやなんでもない。

「スカサハだろうと勇者だろうと、道を阻むんなら殺すだけだ」

「つまらん男に成り下がりがおつて」

吐き捨てる様に言葉を零すスカサハは眉を八の字に曲げる。その心情は弟子の現状に少々の同情や憐憫の色が見える。

「して、お主はまだやれるのか？」

「余裕よ余裕！」

「ならば立て。勇者の名は伊達ではないと私に見せろ」

どうやら一緒に戦ってくれるらしい。正直助かるが少しばかり意外でもある、てつきり自分一人で始末を付けたいと言い出すと思っていたけど。

「業腹だが、私一人では手に余る」

「それ2本とも打ち込めばいいんじゃないの？ あっち1本だし」

「こちら2本があちらにとつての1本と同じ計算だ。お主もあの馬鹿弟子の技を受けて威力を感じただろう？」

やっぱりあの過剰強化分は大きいと。いや刺しと投げボルクをほぼ同時に放つのも十分大きいと思うけど。

でもそれなら私の作戦は役立つかもしれない。

「考えがあるわ」

「ほう」

「天才策略家エリザベートに任せなさい！」

少しばかり無理矢理だけど見た目は同じに見えたし、スカサハならその無理矢理も通る気がする。

「随分と面白い事を考える。思いついてもやらんだろうに」

「じゃあやらない？」

「いややろう。興味もある」

「終わったか？」

完全に傷を癒し、最終再臨を迎えたオルタニキが魔槍を突き立てながら睨めつけてくる。ラスボスかな？

「ああでは行くぞ！」

スカサハは二槍のゲイ・ボルクを握りしめ疾走、私も後に続き翔ける。先程まで防戦一方だった戦いとは違い私は護り、スカサハが攻めと役割りを分けたことで打ち合いはこちらに分がある。

ならばオルタニキが打つ手は宝具に限定される。

「チッ、『抉り穿つ塵殺の槍』——ッ!!」



「それを待つていたぞ！」

ゲイ・ボルク、オルタナティブ  
『突き穿つ死翔の槍』——ツ!!』

魔槍同士のぶつかり合いは同じ軌道の中で起こり、互いに宿る魔力を喰らい合いやがて相殺される。本来そこで終わり、再びぶつかり合うだろう。

だが此処には私がいる。

「受け取れえ!!」

筋繊維がブチリと弾ける音を聞きながら私は気合いの雄叫びと共にソレをスカサハ目掛け投擲する。——何をつて？

ゲイ・ボルクを。

相殺された後で拾ったのかって？ 違うそれじゃ遅すぎるし、スカサハがルーンで回収した方が速い。かと言ってオルタニキの宝具を強奪した訳でもない。そんなバサロットみたいな事はしない。

ルールブレイカー？ 知らない子ですね。

あるでしょこの異界化したホワイトハウスにはもう一本ゲイ・ボルクほいのがあるが。全国のマスターも見たことがあるはずだ。

ホワイトハウスの前に刺さってるどデカイ槍を。

無理矢理で無茶苦茶？

だからどうした私はエリザベートよ！（天下無敵）

「その心臓貫い受ける！『刺し穿つ死棘の槍』——ッ!!」

巨大なゲイ・ボルク似の槍を重さなど無いかのように振るうスカサハは渾身の一撃を見舞う。その顔には汗一つ無く、緊張も無く、完璧に役割りを果たした結果を見せる。

「ッ!? ……宝具封印、全呪開放

『クリード・コイン・ヘン  
噛み砕く死牙の獣』」

獣の咆哮をあげ、両腕の爪を胸の前で重ね防御姿勢。あの一撃を受けるようだ。傍から見れば勝負が直ぐにつくと思われるだろうがああ形態はオルタニキの切り札、スカサハも知らない、獣の姿。容易に破れることはない。

事実受け止めている。筋力パラメータEXはやっぱり凄かった。

「けどそれも本命じゃない！」

「流石の私も我慢の限界です。久しぶりにキレてしまいました！『転身火生三昧』——

!!」

私には一級サーヴァントを倒しきる高火力はない。いつだって何かしら自分以外の場所から力を持ってきていた。

けど別に私が倒す必要はないのよ。火力なら相棒に頼ればいい。

清姫の宝具ランクはEX。規格外。全て燃やして勝つ、それが私の答え。

何かにキレて居たらしい清姫は童に転身し燃え盛る焰そのものとなってオルタニキを包み、噛み付き、爆ぜる。

「今日はより一層激しいわね」

残ったのは爪を砕かれ、兜を半壊させたクー・フリーン「オルタ」の姿。その様子だとともにルーンも使えず治癒も不可、あとは消滅を待つのみといったところ。

「ボロボロになっちゃったわね」

「……メイヴ」

「砕かれた霊核もここまでだと修復は無理か。どうだった楽しかった？」

オルタニキはメイヴの質問に悪どいが笑顔で答えた。

「かもな」

クー・フリーン「オルタ」は立ったまま消滅。

「私も楽しかった。私だけのクーちゃん……」

メイヴもそれに応えるように笑う。

「勝負ありだと思っただけど、聖杯渡してもらえる？」

「うーん、正直クーちゃんがいらないんじゃないかこの聖杯持つてる意味も無いんだけど。それはそれだと思っただけよねえ」

「じゃあ戦う？」

「戦わないわよ。私は、だけど！」

メイヴは手に持つ聖杯を胸へと宛てがう。すると姿は輪郭を失い、ドロドロとした液体へと変貌する。そして再構成される時、その姿は柱を形成した。

「七十二柱の魔神が一柱。序列三十八。軍魔ハルフアス。」

この世から戦いが消えることはない。

この世から武器が消えることはない。

定命の者は螺旋の如く戦い続けることが定められている」

魔神柱が現れた。けどさつき腐るほど見た。

「嫌がらせだけはキツチリしていったな」

「ここにきて魔神柱は面倒だわ」

そう飽くまで気分的に乗らない。こちとらラスボス倒してスタツフロール流れてるんだけど。

次の瞬間私の視界が白く染った。

『ワールド・フェイス・ドミネーション  
W・F・D』

『人類神話・雷電降臨』

『金星神・火炎天主』

『ヴァサヴィ・シヤクテイ  
日輪よ、死に随え』

『破壊神の手翳』

『仮想宝具・疑似展開／人理の礎』

魔神柱は出オチって決まってるのかな。

あとホワイトハウス消滅……危うく味方の宝具で蒸発しそうだった。ありがとうマシユ。

いや本当にえげつない。最低ランクAの宝具祭りだよ。そんな酷いこと私でもしない。うわ、クレーターの表面ガラスになってるよ。

「おつかれ清姫。悪いんだけどマシユと一緒に聖杯探しに行つてあげて」  
「……帰つたらお話ですよ」

ひえ、まだキレてる。

「随分おかしな星の元で生まれたようだな」

「おつかれスカサハ。つてかどういう意味？」

「いや抑止が仕立てる勇者にしてはと思つてな。どういう人選か」

そんな心底謎だと首を傾げられても困る。と言うかそれあんまり周りに聞かれたくないんだけど。

「大丈夫だ音を絶っている。周りには聞こえんよ」

「お気遣いどうも。でもわかるものなのね抑止云々とか」

「まあな、特に未完の勇者となれば私の鼻が効かんわけが無い」

「未完つて……」

どういふことなのプロデューサー！

「まあこれはちよつとした老婆心。ラッキー程度に受け取るといい」

そう肩に手を乗せた後、何処へやら走つていった。これといった変化はない。

「エリちゃんー！」

「子ジカ!？」

「どうしてなのエリちゃん!!」

「せ、先輩落ち着いてください。エリザベートさんの目が回ってしまいます!」

もう回ってるっての。なんで此奴がいつもいつも会った途端振り回し始めるんだ。何処その鬼いちゃんと蝸牛か!

「下ろせっての!」

「あいたー!」

加減しながら本気でツッコむの難しいんだぞこの。

頭擦りながらえへへと笑う子ジカに私は苦笑する。特に外傷もなく元気みたいで安心だ。

「それで、何がどうしてなの?」

「そ、そうだよ! なんでエリちゃんは私たちと合流してくれないの! なんで一緒に行動しないのさー!」

ガオーと吠える子ジカ。

いやこればかりは特に理由はない。一刻も早く特異点修復を行う為に最短を目指した結果だし。必要だったら必要で合流はするつもりではあった。

「いやでもエジソンの件とか、ハルファスの件とか二手の方が優位なこともあったし、ね?」

「うう、そうだけどさあ。寂しかったんだよ?」

本当に泣かなくてもいいのには口が裂けても言えない。あんな宝具飽和攻撃仕掛けたマスターには見えないな。

ああよしよし、ごめんねえ。私が悪かったよー(棒)

《聖杯の回収確認終わったよ。直ぐに修復が行われるからレイシフトするからね》

ロマニの発言の通り空間が不安定になってきた。

「清姫帰るわよ」

「はい」

「じゃあまたね子ジカ」

「エリちゃん」

泣くな泣くな。

このマスターこんなメンタル弱かったかな。



慣れた空間へと戻った私はスカサハに言われた言葉を思い返す。

「未完……受け取るって何を——」



「……エリザ」

背後の気配にゾクリと思わずつんのめる。

「今回は一段と危なかったですね」

「そ、そうね。でも最後は快勝よ！」

ニコニコと微笑む清姫の顔がピシリと歪む。

「何が、何処がとは言えませんが嘘の香りがします」

「え？」

そんなタブー侵した覚えはない。いや本当に！

「逃がしませんわ。私に対して嘘を吐いたのですから。キリキリ話して頂きます！」

壁に追いやられる私。

追いやる清姫。

「戦闘中にあんなに我慢したのですから」

「もう我慢しなくても、良いですよね？」  
本当に身に覚えがない！

神王（ファラオ）に会って一番欲するものは何？——ただし自分がブレエリちゃんだとする！

砂塵舞う大地、高温低湿で水分など望めない不毛の地に私たちは立っている。今回はチエイテスタートではなく、すぐに現場入りさせて貰った。誤差ではあるが子ジカ達より速くに到着しておきたかったからだ。

「砂嵐がうざったいわ」

「視界が悪いうえにこの気温ですからね。人間では迷って飢えて死んでしまうでしょう」

おまけにここにはヒト喰いの魔獣まで居るので入り込んだらほぼ確定で死ぬという。魔術の適正が無ければ魔力濃度だけでグロッキーだし。

この様子では人理は既にお亡くなりかもね。まあ太陽王も獅子王も倒せば何とかなるとは思うけど。言うは易し、やるは難しって感じ。どっちも超級宝具をバカスカ撃ってくる奴らだから。こっちは硬いだけが取り柄の剣と盾なんだけど！

「さて折角の砂漠スタートだし、要領良く行きましようか」

「でも本当にこんな場所に人が住める環境が？」

「それが有るのよね……」

そりや信じられないだろう。こんな水も食料も無くて果てしない砂だらけの場所に居を構えるなんて。チエイテ召喚すれば私たちは住めるけど普通は無理よ。

ぐるりと辺り一体を確認して見れば矢張り見えるのはどこも同じ、時折謎の骨が落ちてたりするくらい。凶骨落ちてたら垂涎ものなんだけどなあ。

「取り敢えず空から俯瞰してみようかしら」

「エリザ」

「ん？」

呼び掛けてきた清姫に意識を移せば此方を、と言うより私の頭上を飛び越えた所に指と視線を集めている。いや今しがた周りを確認したばかり、目立ったものも無かった。

その筈——

「おう、ふ」

そこには私の身長なんて遥かに超える魔獣がThe鎮座。星空の様に光が明滅し闇色を映えさせている身体はネコ科動物に似ている。黄金の装飾はエジプト感が満載で何処か馴染みがあるフォルムだ。そしてその顔は存在しなかった。

無貌の神獣である。

「コスモスフィンクス!？」

コスモスフィンクスとは正式名称『スフィンクス・ウエハムメスウト』。通常のスフィンクスの統率個体にあたる幻獣種だ。通常のスフィンクスでサーヴァント一体とそう変わらない計算、此奴は果たしてどれ程強いのかなんて最早わかんないっす。やっぱりプロト勢って頭おかしい。

「エイティーン！ レトロニア！」

即座に武器を呼び出し臨戦態勢。

「出来ればやり合いたくなかったわ」

「前回といい今回といい召喚場所可笑しくありません？」

実は最初から可笑的い！

「アレは運命ですのー！」

どう考えても作為的なんだよなあ。

何時も通りギヤアギヤしながら前衛後衛に別れるもコスモスフィンクスに動きは無い。顔がないからどこを見てるのかも分からない。やがて見るものは見たとばかりに踵を返す。

「ええ？」

しばらく歩を進めるコスモスフィンクスだったが着いてこようとしないからか途中で停止し顔だけ此方に向けて来た。どうやら待つてくれている様だ。

構えていた武器をゆっくり下ろして清姫と顔を見合わせる。

「どうしましょう?」

「虎穴に入らずんば虎子を得ずよ。元より会いに行く予定だったし渡りに船つてやつね  
！」

出迎えがあるとは思わなかったけどこの劣悪な環境下で闇雲に探すより楽に着けるなら万々歳。巡回してるスフィンクスともやり合わずに済むだろうし良いこと尽くめ。

清姫の手を引き後を追えばコスモスフィンクスはもう振り返ることは無かった。

変化は一瞬だった。

最初から無かったかのように砂嵐は止み、青空と白雲が挑める。正面に見える風景は混沌と調和が奇跡的に成立したエジプト神殿のオンパレード。

『ラムセウム・テンテイルス光輝の大複合神殿』

攻防どちらにおいても最強と言っても過言ではないインチキ宝具である。そしてこれから会うのはその所有者だ。あっちが殺る気なら一瞬で塵と化す可能性があったりなかったり。

「混沌具合でなら張り合えるのでは?」

「チエイテに姫路城とピラミッドが合体する世界線が存在する以上分類は同じかも」

「増設しますか?」

「するか！」

然しもの私とて自分からピラミッドはぶつ刺さないし丁度いい平面だからと言って姫路城を設置したりしないしさせない。清姫が私の座に来れるから油断出来ないのよね。来んなよニート姫とくぎゅフアラオ！

観光気分でうろちよろしていると思われたのかコスモスフィンクスが器用に私たちを指に挟んで連行。

「もうちよつと見せなさいよ！」

ブンブン顔を振っている。ダメみたい。

「今後の参考にもう少しダメですか？」

ブンブン顔を振っている。ダメですって。

「ところで参考って何処を？」

「閨」

「やめてもろて」

まず神殿ってそういう場所あんの？

時代を遡つたらありそうだけでも、イシユタルの神殿とかそういう場所でしょ絶対。

ずんずん奥へ進んで行くと無駄に多い階段のある玉座の間へと投げ入れられた。勿

論此処も神殿である。

そして階段の先には2人の青年の姿がある。1人は玉座にふんぞり返る褐色の美丈夫、1人はその傍らに控える褐色の美少女。前者が太陽王オジマンディアス、この神殿の主にしてスフィンクスの召喚者だ。後者はお節介焼きポンコツンであるニトクリス、布面積は私と競つてゐる。

敵か味方か分からない者を真つ直ぐ自身の側まで連れてこさせたファラオたちの真意は分からないが、どうにもニトクリスは不満だと言わんばかりに眉を八の字にさせている。

太陽の如き瞳は未だ揺らぎを見せず、ただ私たちを見ている。手に持つ錫杖を弄びながらオジマンディアスはやがて興味深い者を見た喉を鳴らす。その様は高貴な猫を思わせる。

「お前たちが5つの特異点を修復した事、まずその功績は称賛しよう。余の想定を越えて成果を上げたとあつては辛口評価に定評のある余も手放して褒めること、やぶさかではない」

褒めると言う割にその顔は笑みを浮かべることも無く、ひたすら感情のバラメータは平坦である。オジマンディアスは笑っていない。

「だが余りに遅かつたぞ勇者とやら。既に風前の灯どころか灰の山となつたこの時代の人理、如何にして救うと宣う？」



予想通りこの特異点は獅子王の蹂躪にあつてしまつた様だ。既に十字軍は過去の彼方。となると聖拔なる選定も聖罰なる虐殺も行われた、いや進行中か。

ファラオの中のファラオは遅遅として来なかつた勇者私に不満があるのだろう。ヒーローは遅れてくるとは言うが、既に事が終わつている所に来たら「何こいつ？」となつて当然なのだから。

「取り敢えず獅子王は止める。邪智暴虐の魔王と化したのなら其れを討つのは私の仕事」

「ならば行け、余の言いたいことは全て言つた！」

「ただのクレームじゃない!? その為だけにスフィックス駆り出すんじゃないわよ！」

マジで会つて早々に「はじめまして、じゃあ死ぬ」と理不尽に攻撃されると思つたわ。王様のサーヴァントは普通にそういうことしそう、偏見だらうけど。

しかしはいそうですかと獅子王戦に向かうと無理ゲーが過ぎるのである。つまりまだ帰れない。

「そつちの要件は以上? じゃあ次はこつちよね?」

ニトクリスの眉間にシワが寄る。此処で叫び出さないのはまだ彼女が冷静だから、隣にオジマンが居なかつたら今頃メジエド神の冥府にぶらり途中下車の旅が始まつたところ。

「案ずるな余とて此方が招いた客人に何も施さず砂漠には放り出さん。こういう時は無駄にケチくさく少ない路銀に木の棒を渡せば良いのだろうか？」

「違うそうじゃない」

「貴様が次なる位階に達する情報もやろう」

「それはそれで欲しい!!」

出来るのか、いやファラオは地上に在って不可能なし万物万象我が掌中にありと常日頃長つたらしいセリフを吐いているし出来るかもしれない。

「つて違う違う。確かに物資や情報の提供は有難いけど違うのよ!」

相手はギフトと呼ばれるマジモンの聖ホーリーグレイル杯の加護を受けた円卓の騎士。真つ向からやり合っても袋にされるのが目に見える。

確実に勝つには戦力を集中させる必要がある。纏まらなきやキャメロットを落とすのは不可能だと私は考える。

だからこのカードは無理にでも確保したい。

「私、勇者エリザベート・バートリーはファラオ・オジマンデアスを仲間にしに来たわ」  
「私は別にいらな思っています」

清姫さんは是非空気をお読みになつて。私は裏拳で清姫をぶつ叩きつつオジマンに指を突き付ける。

「フム……」

「な、ななななっ——!?!」

池の鯉の様に口を開閉するニトクリスは遂に我慢の限界を突破したようで手に持つ杖をガツンと床で突き鳴らす。目尻を痙攣させて彼女は激昂する。

「不敬、余りに不敬！ 貴女が口にした全てが許され難いと理解していますか！」

「理解した上で言っているわ。当然でしょ？」

「なっ!?!」

この身は元々貴婦人。教養は幼い頃より植え付けられ本能にまで根付くもの。私の身体の記憶は今もその記録に基づいている。まあそういうの抜きにしてみても十分にやっちゃいけないラインは超えてるでしょうけれど。

ニトクリスは泰然とした私に暫し言葉を失いやがて鋭い視線をくべる。

「ならば私から言うこともありません。冥府で悪霊たちとでも語らっていなさい！」

魔力の進りと共に今までとは違う雰囲気杖を突き鳴らそうとニトクリスは腕に力を込めた。ガツンと音がなる頃には私の周りにミイラとメジエドの集団が召喚され四肢を搦めとり地に引きずり下ろそうとするだろう。

「杖を引けニトクリス」

流麗な音でその行為は静止させられた。有無を言わさぬ庄と一緒に。

「し、しかしファラオ……」

「二度言わすな。余は引けと云った」

「——ッ!? 差し出がましいまねを致しました。如何様にも罰を」

「特に赦す！ 余は機嫌がいい。実に、実に！」

「ここまで気だるげに見えたオジマンの顔は喜色を見せている。山の天候並みに不安定な機嫌だ。」

「寛大な御心に感謝致します」

「ハハッ、よもや余を仲間にと嘯くその口と肝の座りよう。なかなか目を見張る、誇れ今貴様は余の興味を引いたぞ？」

「物珍しいって事ですかね？」

「珍獣のような扱いはごめんだわ」

見世物とアイドルはなんか違うでしょ。

「だが余もこの地に召喚された民を護らねばならん。故に迂闊には動けん。今も獅子王との決着を図る為に大局を見ているほどだ」

「常であればゴリ押しするって聞こえるんだけど」

「そう言っているのでは？」

「まっさかあ……」

「あつさり灼き尽くされれば良いものを、業腹なことに白亜の宮殿は容易くは灼け落ちん」

うんゴリ押しだね。

互いに護りが得意なだけあつて無理やり籠城戦に持ち込むのは厳しいし、攻城戦に切り替えるしかないよね。時間は敵みたいだし。何時かの聖杯戦争みたいに都市まるごとを人質とか出来ればもつと楽だっただろう。

いやだとしてもゴリ押しだな!?

「別に私の後ろに続けなんて言う気は無いわ。ここからでも援護可能でしょ?」

スフィックスの派遣や物資搬入、空飛ぶ舟の破壊光線にデンデラ大電球の雷撃、最終手段は大質量で直接攻撃。それらを任意に呼べるって言うのはチートだと思うの。スフィックスと物資だけでも本来えげつない。

「それにその首も私ならちやちやつと繋げてあげるわよ。エリクサー1個で事足りるでしょ」

「……」

「その首、繋がってないでしょ? デュラハンみたいに」

何処ぞの初代山の翁に断たれた首は概念的な死を刻み込んでいる。恐らく死のルーンに近しいかその上位互換。呪いとも近い。

どうあっても死ぬ運命にあるのに今もこうして元気でいるのはこの神殿のおかげ、チートもここまで来ると清々しい。

だがどちらにしても状態異常。私のエリクサーの効能に掛かればチオイチオイつと。病気にまで効く仙豆だと考えて欲しい。

「今ならなんともう1本付いてくる！」

「この2本組本来の所2000万QP。ですが1本はさあびすですので1000万QPでの提供です」

「有料ですか!？」

「ええい100セット買おう！」

「オジマンディアス様!？」

目の前に積み上がるエリクサー。それでも在庫はまだ余裕という謎の生産力である。チエイトは一晩でやってくれます。

オジマンは迷い無く首に吹き掛けるとあら不思議お肌に潤いとハリが生まれる。ついでに首も綺麗に跡形もなく治る。

「フム、余の首は何とも無かったよいな？」

もう既に遅いとか言っつてはいけない。

「じゃあ予定を詰めていきましょつか！」

支援の内容やら作戦やら、これから来るであろうカルデア陣営の対応までお願いしてみた。誘導する意味はあるかどうか分からないが、予定が狂うと困るので一応。まあ原作通りなんだけど。

終始ノリノリなオジマンとは違い、渋い顔をしたニトクリスが印象的だった。スフィンクス便とかデリバリーメジエドとか聞けばそらそうなるか。逆になんでオジマンは笑っていられるのか。

「獣」の1匹や2匹貸し与えたとして余にとつて問題では無い。勿論相応しき者とそうでない者との問題が生じるが。瑣末な事よ」

本当にその通りだからなんにも言えない。量産型メカエリチャンをグレードアップすれば張り合えるかな？

「あ、一番大事な事忘れてたわ！」

「ああ……今更別にいいのでは？」

「イヤー！」

「？」

フアラオたちが首を傾げる中、私は変わらぬ第一優先事項を思い出す。最近ネタにしてなかつたから忘れていたでしょうけど。別に慣れたとかそういう事は有り得ないから！

388 神王（ファラオ）に会って一番欲するものは何？ ——ただし自分がブレエリちゃする！

「取り敢えず服ちようだい！」



## 勇者は騎士じゃないよ!!

そこは地獄の少し手前の世界。

飢餓が蔓延し、身重の女性の頬は瘦けていて腹の子が無事かも定かではない。スラムのように人が寄せ集まっているこの場は目の前の白亜の壁を越えれば幸福が待っていると藁にもすがる思いで形作られている。

確かにこの荒れ果てた大地には希望など無い。緑は死滅して、獣に墮ちた亡者が徘徊しかつての隣人を食ろうとするこの地には。

だがあの白亜の城へ入城出来たとて希望はそこにあるかどうか。

私は断言しよう。

決してありはしない。

当然だ。白亜の城の玉座に座る王は人の心が分からない。既に人ではなくなった王は人類の生命維持装置の役割しか果たさず統治はしない。あるのは管理と保管。フィギュアをガラスケースへ入れる様に人の魂を保存するだけだ。

最早そこにヒトの営みは無い。かつての理想は彼方へ、ヒトを助けなければと言うカラダに染み付いた存在意義だけが居座っている。これより行われる聖抜を見た騎士王

は喉を引き裂くように怒号を鳴らし民を救う為剣を振るうだろう。  
だがそうはならない。

この特異点には騎士王なんて居ないから。  
ならば勇者たる私が成そう。

「はい食料の配給よ！ 順番は守ってねえ、皆の分あるから！」

「汗物からゆつくり嚙下してくださいませ。胃に障りますからね」

まずは炊き出しから!!

「……あつたかい」「ああ美味しい飯なんて久方振りだア」「でも何入れたらこんな紅くなるんだ？」

知らん着色料無使用でソレだ。

「なんで俺たちまで……」

「追い剥ぎなんてしようとするから」

「そんな展開は許しませんし許しませんし、絶対許しません」

「どんだけ許せないんだよ!! 分かった、分かったからその目止めてくれ！ 蛇か何かよアンタ!?!」

こつちの小汚い野盗は少しお話したら喜んでボランティアに参加してくれました。  
いやあ小汚いですね。

「ヒイ、アンタもか!? 勘弁してくれえ!」

私から衣服を剥ごうなんて許しませんし許しませんし、絶対許せない。命が残っただけマシなのである。

「お姉ちゃん、ボクにも食べ物頂戴!」

「ええどうぞ。水もあるから持つて行つてね。あとこれも持つて行きなさい」

「なにこれ?」

「御守りよ」

少年に渡したのは道具作成で作つた護石。ガラス玉に術式を刻んでデコつただけの急造品だが性能はまあまあでしょう。見た目はビー玉に見えるけど着色した塗料は……内緒である。

衣食住全て用意してあげたかつたけど直ぐにこの場から離れる事になる。身軽にするに越したことはないかと納得しよう。まあテントくらい直ぐに作れるし。

「マシユ見てエリちゃん居る! この列なんだろ、握手会?」

「炊き出しではないでしょうか? 仄かにいい香りがしますし」

「エリちゃんの手料理、だと?」

「ちよつと料理の成分が気になるなあ。見た目が毒々しい割に香る匂いは絶対美味しいって脳に直接語りかけてくる」

カルデア陣営も無事ここまで到達か。そしてちやつかり並ぶのね。

「ラーメン一丁!」

「はいラーメン一丁入りましたあ」

「あるんだ」

「入りませんよエリザ」

「ないんだ……」

「即席なら」

「あるんだ!」

お湯を入れて3分でらくらくクツキンッ!

「あのエリザベートさん。この特異点の事はどれくらいご存知ですか?」

タイマーをガン見するマスターはさて置いてマシユと何気に初対面なダ・ヴィンチちゃんにはスープとパンを渡す。味は良いぞ、味は……

「誰を倒すべきかは分かっているわ。まあ足踏みしてるのが今の現状だけど」

「じゃあここで何が行われるかも?」

「まあね。それがなきや今頃此処はライブ会場よ」

「キミ特異点一つにつき一回はライブし出すよね」

「アイドルだもの」

歌で世界を救える勇者つて素敵やん？

「エリちゃんがライブを敢行しない程の理由かあ」

「ん？ ああ、子ジカたちは知らないのね」

「差し支えなければ教えて頂きたいのですが」

「此処じゃ言い難いわ。このテントには遮音機能無いし」

下手を打てば一歩手前だった地獄に百歩は踏み入る。パニックを起こされたらそれこそ助けられる命も限られてしまう。

「ちよつと冷えて来たかしら？」

「夜風侵入し放題だからねえ」

気温が高めとは言え流石に夜は寒い。少し風が吹けば先端や節々に堪えるだろう。ブランケットやひざ掛けくらい用意してあげた方がいいかも。

「おや？」

急激に空が白み始めた。まだ日の出には遠いと言うのに。夜は白昼夢の様に消え去り、天には燦々と輝く太陽が辺りを照らしている。ざわざわと雑多に響く人の声はやがて一つの言葉に収束した。

「円卓の騎士様だ！」

アイドルを差し置いて衆目を奪っている男が一人、ぞろぞろと騎士を連れて門から出

てきた。

「今宵はお集まり頂きありがとうございます。これより聖都の門は開かれ皆さんを楽園へと誘いましょう」

観衆は歓喜した。熱に浮かされたように皆一様に騎士たちへ歩み寄ろうとする。

「ですが残念ながら誰もがこの門を潜ることは叶いません。選ばれた者だけが通る事を許される。厳正にして公正な審査を我が王、獅子王によつて執り行われる」

熱は冷め始めそんなことは聞いてないと野次が飛び出す。だが騎士たちはそれに対し意も介さない。ただ自分に課された命を遂行するだけだと隊列を一切乱さず。

「ではこれより聖拔を開始します」

「うわ、人が光出したぞー」「わあお母さんキレイ！ピカピカだあ！」

少ないが辺りにポツポツと光の柱が建った。

分かりやすい方式だ。光っている者は選ばれた者、それ以外は選ばれない者。

「3人ですか。喜ばしい事です。貴女方は我が主に選ばれました。そして同時に残念な事です。それがそれ以外の方は——」

人好きのする笑みを浮かべていた円卓の騎士は表情を消した。太陽の騎士に似合わない冷えきつた貌で冷酷に判断を下したのだ。もう主を裏切る事が無いように、ガウエイン卿は己が聖剣を抜剣した。

「——肅清を、と。これも人の世存続のため、恨み辛みはどうかこの身だけに……」

柄に宿る太陽の複写体は火を灯す。難民は今までに感じたことの無い殺意を浴びた事で腰を抜かす者や震える者も出だしている。

ガウエインの後方に待機していた肅清騎士も抜剣し選ばれた者とそれ以外をより分け、無辜の民を害そうと陣を敷くだろう。

「だけどそんな事は私がさせないわ!」

魔力放出で空を駆りガウエインの元へエイティーンを振り下ろす。

「何者ですか!?!」

「その問い掛け、答える必要なし!」

今のガウエインは聖杯より『不夜』のギフトが与えられた常時3倍バスターゴリラ(ターン無限、即宝具チャージ)の皆のトラウマだ。私は何処その下姉様じゃないからまともに取り合わず悪即斬である。

『魔力放出』機能拡張術式起動、穢れなき勇者の剣を全身で体感しなさい!

——『遙<sup>エ</sup>か彼方<sup>イ</sup>へ紡ぐ勇者の名剣』!!」

エイティーンは何処その聖剣、魔剣の様にビームは出ない。ただどんなに粗雑に扱おうと壊れないと言うだけだ。故に攻撃に転じるには変わったアプローチが必要になった。

それが『魔力放出』によるかさ増し。私がレトロニアを広い受けの盾へと変えた手法と同じである。

今までレトロニアは敗れたことは無い。魔力放出で補完した部分を含めて罅さえなかった筈だ。故に私はこう推測した。

——これ不壊属性付与してね？

つまり今のエイティーンは鋭さや硬さをそのままバカでかくなってる。超巨大剣、それが私の答えだ。

パワーゴリラは質量。パワーで捻り潰す！

「ぶっ潰れるオー！」

「ぐっ！ おおオオオー！」

剣の押し合いに入った状態では逃げ場無く、真上からの強襲だから剣の重心全てと臂力を身体で支えなければならぬ。たとえガウエインの両足が耐えられても、その両足を支える地面は彼を押し上げることが無い。

「まだまだアー！」

エリクサーを召喚！



瓶を頭上に掲げ握力で砕いて盛大に自分にぶつ掛ける。体力魔力状態異常を完全回復。

——そして魔力放出ツ!!

鼻血が出てても、毛細血管ブチ切れても、血涙が流れようとガウエインには一時的であつても動いてもらいたくは無い。私は今のコイツが大嫌いだから。

当時のカルデアには星5アーチャーが居なかった。なんだつたら孔明もジャンヌも居なかった! マーリンなんて実装もしてない時期だ!

正直無理ゲーだと思った。確か星4もアタランテくらいしか居なかったし、スカスカ? 影も形もないです、と言うかあつてもキツイですが何か。そして星3以下だとしても限界があつた。聖杯転臨? だからねえつて言つてんでしょ!

結果どうなったか、令呪と石を砕きました。

ガチャ以外で石を使ったのはその時が初めて。

この気持ちか理解出来るか……

「ガウエイン……!!!」

「何故か身に覚えが無い憎悪がこの身を襲っている!!?」

心を乱したことで(自爆)隙を得たガウエインはどうか私の剣の影を不格好ながら脱する。だけど私のバトルフェイズは終了しちやいないわ。

デカくなったエイティーンを一時放棄、魔力放出でロケットタツクル。浮いたガウエインを――

「ステラア!」

一時放棄したエイティーンを握り直してフルスイング。ガウエインは城壁の星になった。多分これでも生きてる……

「が、ガウエイン卿……!!?」

粛清騎士共はと言うと難民をグルリと囲むように陣を組み、逃げ道を塞いでいる。難民もここまで来ると危険を察知して逃げ出そうとするも粛清騎士の凶刃によって阻まれる。

だが未だに死人はおろか怪我人も出ていない。

「なんだこの障壁はア!」

上手く御守りが機能したようだ。道具作成で作った物がただのアクセなわけないでしょう。ただ一回ぼつきりだからこれ以上放置はまずい。

「道を作って清姫!」

「承知しました」

「子ジカは難民引き連れて離脱しなさい。商人崩れも手伝いなさいよね!」

「うん分かった!」

「ゲエ……」

そして私の役回りはと云えば。

「やっつけてくれましたね」

「何であの一撃をモロに受けて立ってられるのよ?」

「円卓の騎士ならば当然のこと、と言いたい所ですが。我が主によつて下賜された祝福ギフト無くして耐える事が叶わないかと」

「あら嫌に弱気なのね円卓の騎士って」

笑つてるけど全然笑つてないガウエイン。

煽りまくる私。

相手は元より剣技に長け、聖剣を解放すれば辺り一帯を焦熱地獄へと変えることが出来る猛者。元パンピーが背伸びしてる私じゃ分が悪い。

「じゃあどうするかと言うと、こつちも手札を増やせばいいのよ!」

難民の中から飛び出す影がある。清姫では無い。あの娘は今先陣を切つてる。いやなんで先陣なのあの娘!?

では誰か。

「何故、貴方が……」

同じ円卓の騎士にしてアーサー王の最期を看取った者、とされる英傑。実際はもつと

特殊な存在だが詳しくは実際に君が見極めてくれ。

「ベディヴィエール卿……」

「何故？ それを貴方が問うのですねガウエイン卿……ではこちらからも問いますよ。何故守るべきヒトに刃を振るうのか？」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるガウエインはだがしかし毅然に答える。

「我が主が望まれたこと。私はただ王の騎士として忠を尽くしています」

「これがアーサー王の望まれたことだと、そういうのですか!? あの方は誰よりも国とヒトに心砕いたお方だ！」

「今のアーサー王はかつてのアーサー王とは違うのです。でなければ獅子王とは名乗らない陛下自身も気付いておいでだ」

「そんな……」

揺らぐ目はベディヴィエールの脚を重くさせた。己が罪の重さを今ここで改めて痛感している。

いや私を空気にしないで欲しい。

「右腕を握り締めなさいベディヴィエール。元より貴方がする事は変わらないでしょう！」

「……彼が言った通りの方なのですなレディ」

え、グランドクソ野郎がなんだって？

「ガウエイン卿、私はどうやらどうあつても再び王に会わなければならない様だ」

「それは轡を並べると言う意味では、ないのでしょね……」

騎士が戦場で会えば殺し合い。たとえ嘗ての友であろうと、仲間であろうと対立するならば切り結ぶほかない。

「いざ尋常に！」

「勝負！」

ギアラハツド曰くベデイヴィエルはそこまで強くないらしい。けれどそれは言葉がやや足りない。円卓の騎士の中ではそこまで強くないのであつて実の所騎士の中では強いのだ。

隻腕と言うハンディキャップを背負つて尚その実力は一般の騎士を圧倒する。であれば剣を振るうのに申し分無い義手を持った場合はどうなのか、そら強いはず。

一つ気になる点があるとすれば、彼が槍使いに長けた騎士という点。義手の特性上仕方ないのか、史実とは異なり剣使いなのか。

『スィッチ・オン・アガートラム  
銀色の腕』——ツ!!」

「やっぱり義手つてカッコイイ！」

魂を燃やすベデイヴィエルにエリクサーをぶつ掛けながら私は武器義手のカッコ

良さを嘸み締めていた。

「れ、レディ……」

今私は不意打ちで謎の液体をぶっ掛けてしまったわけで、ついさっきまで騎士として正々堂々口上を述べたわけで。甘ったるいフレーバーを髪から醸し出しているわけがある。

うん台無しよね。

「いやごめんて」

だってこの後適当に逃げるし。

もしも運転は必要だけど、殺るべきだと思つた時は既に轢いてるものだ！

猛る紅きラインを軌道に置き去りにし、見晴らし最高の青天井を駆け抜ける鉄の処女。その様はまるでかの有名なスーパーカーの様だった。気分マシマシにユーロビートでも流して見せようか。

だがそれは決してスーパーカーなどではない。最高速度音速だからね！ 防護魔術がないと首がグキるから気を付けよう。

そして素知らぬ顔で走るこの車、実は先程人を轢いている。

被害者はガウエインと言う円卓の騎士、かつての仲間ベデイヴィエールと劇的な再会のあといざ尋常に勝負しようとしたその時に事件は起こりました。

容疑者であるエリザベートがベデイヴィエールに対して謎の液体を頭から掛け、訳の分からない言葉を投げかけました。

そして悪びれもせずエリザベートはガウエインにこう言い放ち、そして指を指します。「あ、絶世の巨乳美人がー」と。ガウエインも思わず、最早本能的に戦場だと言うことさえ忘れ、振り向いてしまいました。結果彼の振り向いた先に美女は居らず、騙さ

れた事に気付いた時には既に横合いから突如として現れた赤い車に轢き飛ばされていったのです。

ああなんて可哀想なガウエイン。

「れ、レディエリザベート。それを行ったのは全て貴女なのですが……」

「ガウエインは勇敢で優秀な騎士でした。まさか彼にあんな事が起こるだなんて、残念です」

「彼は死んでません！　　と言うか残念ってどの口が言ってるんですか!?!」

可愛いこの口。

「さてそんなどうでもいい事は置いておくとして」

「聞く耳を持ちませんかさうですか……」

観念して革のカバーに包まれた座席に身を任せるベディヴェイエルに冷えたドリンク（エリクサー）を振る舞い機嫌を取っておく。あ、それはアメリカライブの幻の限定ドリンク。

私もホルダーに刺さってるドリンクをチューチュー吸いながらカーナビを立ち上げる。清姫を指定すれば村まで辿り着くはず。ベディヴェイエルはそこで下ろして、清姫を拾って――

「ちよつ、前、前向いて下さい!」



「ん?」

いやこんな荒野のど真ん中で障害物なんてないでしょ。岩程度だったら粉碎、魔獣も玉砕、子ブタたちが居ても大喝采。仮に円卓の騎士が居たとしてもなんと——

「な、い……い……い!?!」

『我が麗クラレしき父レントへの叛逆』——ツ!!」

聖剣の煌々と輝く光は邪剣に転じ赤雷の苛烈な波濤が視界を覆う。触れれば最期、只人程度なら瞬間的に消し飛ばす光が王権の象徴『燦然クラと輝く王剣レント』から放たれる。そしてその担い手、と言うか勝手に武器庫から篡奪されたのだが、この赤雷を放つのは円卓の騎士の中でもただ一人。

叛逆の騎士モードレッド。

「先手必勝は私の専売特許だつてのに! いいわよ受けて立つわ!」

「は?」

「口閉じてなさいよベディヴィエール。舌噛んでもエリクサーで解決だけど痛いからね!」

「なんで速度をあげるんですか?なんで放たれた宝具に真っ直ぐ進んでいるんですか? 避けますよね、避けてくださいレディ!!」

アクセルをベタ踏みにして突っ込む。チキンレースも真っ青なデスゲームのはじま

りははじまり、なんてったって私のブレーキは既にぶっ壊れてる!

一步音越え、二歩無間、三步絶刀。いや車だから一步も二歩もないけれど!

『テスタロックス・メイデン夜闇を駆ける鉄処女』唸れ私のドラテク!!」

「テクニツクも何も真っ直ぐ進んで、ひゃあああ!!!」

あざとい悲鳴が隣から響くがそんなことは関係ない。魔力で編まれた鎧を鉄処女に装着させて、ダメ押しに魔力で二トロを代用し再加速。走破性ならシャドウボーダーにも負けない! 虚数潜航は無理だけど、それはそれ。力で振じ伏せ走破すればヨシ!

これでいつサマーレースが開催されても負けはない!!

トップスピードで誰の目からも鉄処女が掻き消える。赤雷との衝突はそのすぐあとに起こった。

「幻想の鉄処女を焼き消そうとか傲慢ね! やりたきや最大狂化の清姫でも呼んでこいってえの!」

赤雷の中を駆ける、夜闇を駆けるはずの鉄処女は最高ランクの宝具の一撃をもとせずに食い破って行く。何処ぞの神牛が引くチャリオットのように真っ直ぐ蹂躪していく。

そしてその赤雷を越えてその先へ。

「おわああああ!」

その先にいるモードレッドを悠々と轢いていく。これで円卓の騎士を轢くのはお前で2人目だ。A+とA++では大きく差があるのだ、悔しかったら次からエクスカリバー持ってこい！ エクスカリバーなら私の隣で寝てる（気絶）けどねハッハッハッ!! おまけとばかりに肅清騎士を塵殺。真っ直ぐ轢いたり、ドリフトで回転しながら轢いたり、ソニックブームで消し飛ばしたり、バックファイアでこんがりさせる。上手に焼きました！

「デメエふざけた事を——わぶぶ!？」

どうにか起き上がったモードレッドにお化けかぼちやを喰らわせ、煙巻いて逃げる。そして最高速度で射程圏内を脱出する。これ一方的見えてあと数分もすれば対応してくるから逃げるが吉よ。不意打ちだから有効だっただけ。

ベディヴィエールに相手をさせるにも、互いに煽りあって時間が掛かり過ぎちやうのはいただけなのよ。目指せ仲間集めルート世界最速レコード。

「どうよベディヴィエール、私自前の騎乗スキルはって伸びてらっしゃる」  
その後ポロロンしてた後ろ姿美人も背中から轢いた。お前で3人目だ。



山の翁たちが守護する村は山間に位置する。本来見つかりにくい山と山の間にあるその村だが鉄処女に載せたカーナビなら一発で辿り着く。ただ清姫に渡した発信機無しだとただの置物なので過信はいけなかつたりする。清姫の持つストーリーキングスキルの応用だからねしようがないね。

発信機を渡した時の清姫の反応は、いや止めておきましょう。普通はこんなもの渡しても喜ばないし頬を赤らめない。発信機は絆にならないのよ清姫。寧ろ不信感の塊なんだからね。

言っても聞きやしないだろうけど。

明らかに山向けのフォルムから掛け離れている鉄処女でヒルクライムとダウンヒルを繰り返し、山道を開拓していく。

今度から空飛べるようにしようかしら。まるでチキチキでバンバンの感じに、いややっつてることはバックでトゥなフューチャーか。最終的に列車にでも手を出して電王とか銀河鉄道。

私の境遇を加味すればマジで必要になるのが世知辛いわよねえ。

見えてくるのは正直言つて見窄らしい住宅群。

強度も見た目も可愛くないそれは息をひと吹きすれば飛んでいってしまいうさだ。

サーヴァント反応からしてここら辺に清姫が居るはず。

「お、居た。子ジカー無事イ？」

まあ見た感じ無事そうだし無事じゃなかったらロマニが騒いでるでしょうしあんまり心配はしていないんだけど、万が一の為にエリクサーパイセンを握りこんでおく。飲むタイプ、塗るタイプ、打つタイプ、吸うタイプ各種取り揃えてます。

「え、エリちゃん！」

「え、顔ぶつさ！ どうしたの？」

「ダ・ヴィンチちゃんが！」

…

……

……ああ、そういうえばそんな事もあったわ！

「カルデアのサーヴァントは霊基が記録されてるから時間経過で再召喚されるわよ」

「え？」

『あ』

「ドクター？」

『ち、違う！ 僕も忘れてたんだ。間違っても故意じゃない！』

「でも忘れてたんですよね？」

『いや、ホントごめん』

必死に弁解するロマニにブンブンするカルデア組は暫く置いておくとして、いや反省はしなさいロマニ。女の子を泣かせた罪は重い。

「今日は随分と客が多いですな。清姫殿の伴侶殿でよろしいか?」

「呪腕のハサンね。話は疾うに済ましてるみたいだけど、勇者エリザベートよ。清姫とは、もう自分でも何なのかわかんない」

「紛れもなく夫婦です」

「はわ!」

貴様いつの間に背後に!?

気配遮断も無しにどうやってんのこの娘。圏境でも会得した?

「清姫殿、けが人の治療はもう終わったのですかな?」

「はいお薬を手渡すだけです」

エリクサーですね分かります。

「じゃあ呪腕、こつちからは当分の食料とけが人に使用したエリクサーを渡すわ。代わりに情報を頂戴」

ついでにベディヴィエールの面倒もと付け加える。

「欲しい情報は2つ。静謐のハサンの場所」

捕まってるのは知ってる。けれど場所は知らない。雑魚狩りなら吐息一つで済む彼

女とは是非コンタクトを取りたい。毒のサンプルも欲しい。寧ろそつちが本音。

「静謐の場所については我々もついて行きましょう。それで、もう一つは？」

「初代の場所」

「……初代、ですか？ 申し訳ない、ピンと来ないのですが」

「初代ハサンの事よ」

「ぶおっふあ!!？」

この特異点最大戦力と言つて過言じゃないキングハサン。つまるところじょーじ、ではなくじいじ。ガウエインの当て役なんて勿体なさすぎるけれど、実質異次元の耐久してるガウエインには必要な相手だ。

あと此処で関わりを持たないと普通に次の特異点で詰むと思うの。

「我らの秘中の中の秘なのだが、いやそもそも初代様にお目通りが叶うかは分かりかねますが。確かに協力が取り付けられるならばこれに勝るものはないでしょう。ですが、しかし……絶対首がですぬ！」

早口でぶつくさ言う呪腕に合掌はしても容赦はしない。でえじようぶだエリクサーがある。首チョンパクくらい切れた瞬間エリクサーればギリ生きる、ソースはオジマン。ガッツ効果もおまけだ。

目の前でカタカタ震える骨仮面に肩ポンすると頭を抱えてしまった。往生際が悪い

ぞ呪腕の。心配するな百貌と静謐も一緒だ。

「何一つ安心できませんぞ!」

「じゃあもう廟の場所だけ教えなさいよ! 私が交渉するわ!」

「交渉材料があたりで?」

「ない!!」

我欲とかじいじにないし。狂信者だし。

「パンでも用意しとく?」

パンが全てを救う。なおウチのカルデアには来なかつた。

「……あい分かつた。ですがまずは同胞を救出しましょう」

「パンは?」

「もうお好きになさつて」

「じゃあチョココロネ用意しとくわ」

結局あれはどつちが頭なんでしょうね。

「じゃあ早速だけど、誰が行く?」

「一先ず身体を休めて明日にでも発ちましょう。西の頭目にも文を飛ばします」

私は直ぐにでも行けるけど。子ジカも同行するならそうなるのも分かる。只人なら無理はさせられない。ダ・ヴィンチの事で心身ともに疲弊しているはずだし。



「あ、ご飯の姉ちゃん！」

「おお、ルシユド。ご客人だ、迷惑を掛けてはいけないぞ」

「姉ちゃんは大丈夫だよ」

聖拔で選ばれてしまった母親を持つ子供。本来であれば母親を失っている。今回は誰一人として肅清させることは無かった。目に見えて救った人間が目の前に居ると、なんだか尻尾が落ち着かない。

「お母さんは無事？ お腹すいてない？」

「うん、大丈夫！」

「ならお菓子をおあげしましょうね。ほら飴ちゃんよ！」

「ありがとう！」

お礼が言えるいい子で良かった。助けた甲斐もあったってものよ。追加で飴ちゃんあげよ。お母さんと分け合いなさい。

「子供は何人でもいいですよね」

「そんな話は一切してない」

あと私たちもどちらかと言えば子供側よ。

「何か賑やかだな」

「お、最大戦力その3みつけ！」

私が思う最強メンバーはオジマン、じいじ、そしてアーラシユ。三蔵ちゃん？ 同族っぽくて相性悪そう。

「初対面の筈なんだが、随分買ってくれてんだな。妙な気分だぜ」

「目の届く範囲全て射程にする弓の腕は勿論、とっておきもあるでしょ？」

「本当に初対面？」

「勇者なので」

「勇者だからかあ」

実はお前もオジマンの扱いに勇者じゃない。

無理やりエリクサーを押し売りしとく。食前ならぬステラ前に飲用下さい。性能は保証します。今ご連絡頂ければサンプルをプレゼント。

後は大きな倉庫をドーン。

中に保存食と保存水と布教用ポスターをドーン。

たくあんとか食べられるかしら、ピクルスにしとこうか、いやアンチヨビもいいわね。いやもう全部入れとこうと、そんなこんなあつて。立派な倉庫が出来ました。

巨大すぎる内装を隠すため山に風穴を開け、思った以上に環境が良かったので、余計な機器を取り払い広々空間を全て有効利用。腐蝕防止の魔術を施した角鋼やH鋼で洞穴を補強しつつちやつかり陣地作成で異界化したので安全性も申し分無し。

あとこちらはプレカットなんで、顧客もにっこり。ありがとうメカな私たち！  
彼女たちなら半刻でやってくれます。我がチエイテに不可能は大体ない。

満足の仕上がりには自画自賛をしている所、横槍が入った。どうやら西の村から救援要請が掛かったらしい。道中の円卓は轆いたんだけどなあ。

「最終的に各村には結集して貰う必要があったわけだし。まあ悪いけれどもいいキツカケよね」

「行かれるんですねエリザ」

「勿論！ それに実は少し楽しみだったのよ！」

416 もしも運転は必要だけど、殺るべきだと思った時は既に轢いてるものだ!

「アーラシユの宴会芸！」  
いざ紐無し逆バンジー!!

大丈夫（でえじょうぶ）だエリクサーがある！いざつて時はかぼちや聖杯で生きけえられる！

安全バー無し、席なしの棒立ちに申し訳程度の手すりがあるだけのイカれたアトラクションがあるらしい。そうだね超高弾道超高速移動、アーラシユ十八番の宴会芸の逆バシジーだね。

「待つて、待て待てどう見ても安全性に難があるよね！」

「当たり前だろ、命懸けだからな。これに乗った屈強な男連中はこぞつて2度目は絶対に乗らないつて断言してたくらいだ」

マシユに子ジカをしつかり捕まえておくように念を押したあと、アーラシユは私達が乗る足場へと繋がれた矢を番えて弓を引いた。いやあやつぱりアーチャーつて頭が可笑しいですよコレ。なんでただの弓矢でこの足場を一山越えた先まで運べるんだ。

「ちよつ心の準備が！」

「大丈夫よいざつて時は拾つてあげるし」

「安全が保証されようと怖いものは怖い！」

「大丈夫です先輩！」

「マシユ……」

「怖いのは私も同じですから！」

「聞きたくなかった！」

そんな情けない人類最後のマスターの一言を最後に矢は射出された。ドウルドウルとロープが空に吸われるのを見て私は隣の清姫の腰を抱き寄せておく。滞空中は大丈夫でも着弾時は弾け飛ぶから一応ね。

「よつと、フジマルもう喋るのはやめとけ。舌嚙んじまうからな」

足場に乗り込んだアーラシユはそう言うと言子ジカもギユツと口を嚙んだ。まあ直ぐに口は開きっぱなしになるんだけど。

ロープが余さずピンと張った時、足場は翔んだ。矢の気持ち分かる。大気を切って進んでいく感覚だ。風の抵抗もえげつない。子ジカたちは案の定絶叫、口を開けっ広げ風で波打っている。

呑気に描写してる私ではあるけれど、決して余裕があるわけじゃない。絶賛恐怖に見舞われている。いやこの逆バンジーはちよつと刺激が強いアクティビティだ。

だがこの強風はだいたい問題だ。なんせ私の装束は身を覆うロープでその下はいつものビキニアーマー。これはビキニアーマーの呪いの特性上仕方ない。まあでも何が言いたいかわかるかね。つまりそうめっちゃ風に煽られる！

それこそロープが吹き飛ばんとする位には！

「ぬぐお！ 清姫ちよつと押さえて。片腕じゃやばい」

「いえこうすれば一石二鳥です」

「ああ、確かにロープの中に一緒に入れれば解決！ でも近過ぎだし、もう自分一人で立つてくれる!!」

密着し過ぎて着弾時の脱出のタイミングを見逃しそう。片腕を割いてた理由が無くなるので離れてもろて。身体さわさわするのもこしよばいのでやめてもろて。やめ、やっ、やめろつてんだろ！

「もう着く！ 脱出のタイミングは任せろ。そらカウントするぞー！」

アーラシユのお陰で遅れを取ることはなさそうで一安心。だつてこの娘マジで離さねえ。一先ず横抱きにしておく。いやだからもう着くから離してつて。

「3、2、1、今だ！」

無理やり抱き上げた清姫を頭突きして黙らせ足場から飛び出す。マシユもキッチンと子ジカと脱出できていたし問題ないでしょう。黙りこくつてた呪腕も気絶してた訳じゃなくて安心した。

勿論足場は爆発四散してた。もはや兵器。

「よし無事、無事だな？ 流石オレ、目標にドンピシャだ」

「手足が震えてますけど無事です！」

「此方も手が震えています。が戦闘に問題ありません」

うんうん、無事だね。下手すれば死ぬからねアレ。

「乗り心地は最悪だったけど移動手段としてはエコでいいわね」

「優秀な弓手が居ないと不可能なのが難点ですが」

「最悪私がエイティーンをぶん投げれば……」

「おっなんだ興味あんのか、なんだつたら後でコツを教えてやるよ」

なんか被害者が増える気がするんだけど。まあ教えて貰えるなら是非ともつてところね。なんせ講師はあのアーラシユ・カマンガー。この際弓も使えるようになると便利か。スーパースニックとかプレス系くらいしか遠距離対応出来ないし。まあチエイテをぶつけりや勝てるとは思うけどね。

村までは此処から少し先にある。足場は相変わらず舗装のされてないから悪い。この身体になって以降足場が原因で転んだことは無いけど。

「大丈夫子ジカ、走れる？」

「大丈夫大丈夫、余裕も余裕だよ」

プルップルの脚じゃ説得力に欠けるけど、まあ大丈夫って言うなら大丈夫でしょう。子ジカの場合素直だし、ダメって言う時が本当の限界なんだろうし。我慢強いって知っ



てるし。

「じゃあ行くわよ！ 呪腕案内して」

狼煙に真つ直ぐ最短の道をスイスイ進んで道中の魔物をかぼちやで吹き飛ばして進む。素材は子ジカに渡しておこう。霊基再臨、スキル上げとあつて困る代物じゃないからぬ。

そして見えてくるのはややボロい姿になったモードレッド卿だったとき、なんでボロいんでしょうね（すつとぼけ）

「デメエさっきのー！」

被害者と加害者、ここで再開。

此処が裁判所か。弁護人は清姫、証人はベデイヴィエール、裁判官は子ジカたちにして貰うとして、検察はどうしましょうか。焦げた粛清騎士？

「モードレッドさん!？」

『ロンドンのモードレッド卿とそこに居るモードレッド卿は別人だ。複雑かもしれないけど、彼女は敵である円卓の騎士モードレッドだ!』

「あん？ オレとどつかで会ったのかよ？ やり辛エ」

ロンドンは何処ぞの節穴のおかげでいい思い出もないし、モードレッド卿とも話せなかった。起きたらラスボス居たし。

「それよりお前だよお前!」

「言われてるわよ呪腕」

「いえどう見てもエリザベート殿を指してますぞ!」

だよね。

「テメエさつきはよくもコケにしてくれたな!」

「うん、ごめん!」

「ごめんで許されるかア死ねエ!!」

完全にブチ切れますね。クラレントくんも戦慄く馬の如くバチバチの赤雷を放出してる。しかも祝福<sup>キョウト</sup>有りの暴走状態ですよ。普通に尋常じゃない量の魔力放出。

「いやごめんって言ってるじゃない!」

全部レトロニアで防げるとは言えビリッビリする。スリッパダメージとか聞いてない。めっちゃ痒い!

「痒いって言ってるでしようがア!」

「ガハツ!」

「言ってた?」

「言ってなかったと思います」

『ボクも聞こえなかった』

手を竜種に変化し硬質化させ、さらに魔力放出を全開でぶん殴るのはいい組み合わせだわ。余つ程硬さに定評のある鎧でも無いと防ぎきれない。ヤコブ神拳とかオンラインで教導して貰えないかしら。

「ゴホッ、かひゆっ……」

やっぱり円卓の騎士だけあって頑丈頑丈。まああんなに念入りに轢いて汚れる程度だし納得だけれど。

「ねえモードレッド卿。どうか教えて、なんで獅子王に使われようとしてるの？」  
「テメエにやあ関係ねえ！」

字そのままの意味で身を焦がすように魔力を回し、絶えず打ち込んでくる。祝福ギフトと言いかもう呪いなよね。あとAランクの宝具を連発されると集落が吹き飛ぶんだけど。

「消し飛べッ！ 『我が麗クラレントしき父への叛逆』——!!」

「ああもう話くらい出来ないの！」  
「エリザが煽るからでは？」

ヒラリと避けて家屋が吹き飛ぶ。ヒラリと避けて山が削れる。この辺りが更地になるのもそう遠くない。そしてヒラリと避けるとモードレッドのフラストレーションがさらに高まる。

アーラシユは肅清騎士の処理、アサシン組は正面切って戦うのには向かない。ベディ

ヴィエールは寝てたから連れて来てない。マシユも防戦向け。となると私か清姫くらいしか攻勢に出れないのか。

「しようがない。やるわよ清姫！」

「何時でもどうぞ」

心強い相棒の返答を合図に間合いを一気に潰す。溜め時間が聖杯の力で無くなったとはいえ超近距離戦闘に於いて聖剣ビーム系統は振るい難くなる。下手すればただの自爆、いやモードレッドは自爆覚悟ではあるんだけど自爆するならもつと広範囲を巻き込む手段に出るだろうさ。

罅迫り合いに持ち込んで膂力でゴリ押しして崩す。さらにスーパーソニックでスタンを付与。さらにさらにヒールを使いメルトリリスの如く鋭い脚技で、拷問技術スキルを併用しながら眉間を穿つ。

如何に敵を無力化し続け一方的に殴り続けられるかなんてf g oプレイヤーならみんな知ってる。スタンとか魅了とか、無敵にも無敵貫通、回避にも必中で対応し殴って殴る。バフを山盛りで一発でゲージを飛ばすなんて事も基本だ（白目）

短期決戦でエネミーも単騎なら絶やさず毎ターン行動不能状態を付与すりゃ勝てるのよ。いや宝具連射で十分だけど。

「そらおまけで『やけど』と『延焼』も喰らいなさい」

清姫の火炎に加えて私の火炎もお見舞すればゴリツゴリ削れる。こんな特殊な高難度クエストくらいでしか使わないんじゃない？

「そろそろ鼓膜がナイナイしたでしょ？ 大丈夫大丈夫ちよつと点耳薬エリクサを付けければ元通りでまたスーパーソニックを喰らえるわ！」

『鬼だ鬼がいるぞ！』

「勇者様の戦い方じゃねえ！」

誉はオルレアンで死にました。

「グオ、オオオ！」

やつと膝を着いた。いや円卓の騎士硬すぎ。

「そこまでの根性があるなら叛逆の騎士らしく叛逆しなさいよ！ 叛逆三銃士の名が泣くわよ！」

「知んねえよなんだよ叛逆三銃士って!？」

「まだ叫ぶ元気があるの？ 私ドン引きなんだけど！」

「こっちはエリちゃんにドン引きなんだけど」

子ジカも何れ分かると言うか……あれ？ アメリカの最後私よりえげつないことしてた様な気がする。君素質あるよ。

「獅子王はアンタの敬愛した騎士王とは違う。こんな事くらい理解できてるでしょう」

「お前がアーサー王を語るな！　んな事分かってんだよ！」

そう叫び一層強く魔力を放つ。もう霊核がびび割れても可笑しくない出力。更に高めれば壊れた幻想もびつくりな爆弾に早変わりする。

「自爆するつもり？　もう叛逆は終わり？　ねえモードレッド、アンタ満足したの？」

このツングレ拗らせ反抗期野郎の琴線は基本的にアーサー王に関する事柄と自身の性別と言うか出生とかにある。そこをまずちよちよいと撥る。

「獅子王は最後までアンタを気にも留めない。役に立ったとか立たなかつたとかそういう話にもなりやしない。報告が拳がつつたつて『そうか』の一言で終わり」

明らかにモードレッドの扱いだけ酷いから特別と言えば特別だけど。流星に距離を置いて無関心を貫かれるオチだから嬉しくない最良よ。

アツくんがモードレッドを遠ざけてるっていうのも有るんだらうけど、ランスロットが通常営業な所を鑑みて獅子王の意味も織り込んだ上での扱いとみて間違いなさそう。

「満足できるのモードレッド！　モルガンとかブリテンとか関係無しにアンタの行動意義は最初からシンプルで、執るべき行動指針は明白で、その結果が今の人理に刻まれたアンタだった筈よ！」

メガホンで敵にエールを贈ってやるわ。行け行けモードレッド、やれやれモードレッド！

「今こそ反旗を掲げる時、打ち破るは自らの王にして父！ 我永久とこしえの圧政を滅ぼす者、我刹那の幸を慈しむ者！ 未だ己が歴史で胸を焼く騎士よ。嘆くならば吼えよ、飽かずならば名乗れ！ 高らかに!!」

バシバシとピンスポを当てて、静寂も演出してやる。完璧な舞台演出。私が前説してんだからはやく立ち上がりなさいってえの！

膝を付けさせたの私だけぞそれはそれ。

過去最高潮に高まったモードレッドの魔力は霊核を破壊すること無く、邪剣クラレントに流れ込んだ。すわ一大事かと思っただけ直ぐに否定される。

宝具は天高く打ち上げられたから。

それは反旗であると誰もが理解しただろう。

「我が名はモードレッド、叛逆の騎士モードレッドだツ——!!」

モードレッドが なかまに くわわった。

そう言つて白目を剥いて倒れちゃったけど。取り敢えずエリクサーをぶつ掛けてアカーにでも乗せとくわ。

「怒涛の展開が過ぎる。何時もながらに！」

「いや私もまさかあんなにノリノリで返つてくると思わなかつたわ。若干のチョロさを感じる」

ダメだったたらダメでスフィックスとメジエドでランチにするつもりだったし。まあ言わぬが花よね。

「と、取り敢えず戦闘終了、でしょうか？　　粛清騎士もアラシユさんが倒してしまつたみたいですし」

「お疲れ様マシユ」

「いえ私は何も、気付いたら終わりもとい仲間が増えました。……モードレッドさんを仲間と言つていいのかわからないのですが」

「そうねえ一応縛つとく？」

「それはあんまりじゃない？」

「私実は試してみたい縛法が！」

「やめなさいっての！」

絶対口クな縛り方じゃない。

取り敢えずここの住民は移住して一纏めにさせて貰おう。場所が割れた以上危険が増えるだけだし、纏めた方が管理が楽。一々アラシユの宴会芸に付き合う必要も無くなる。

百貌も呪腕からの説明でゴリ押し。静謐の件で好印象、初代の件で卒倒と喜んで協力



してくれるらしい。暗殺教団なのに優しい人々だなあ。

そんなこんなで山の民と百貌とモードレッドを持ち帰ってきましたとさ。

「何があったらそうなるのですかレディ!!?」

私もオルレアンの時から気になってる。